

〔「文庫」編集部注・ブラジル野球史は上巻のみ刊行されました〕

ブラジル野球史編集委員

委員長 西 功

委員 横田 守正

全 竹田 仙造

全 山下 寛人

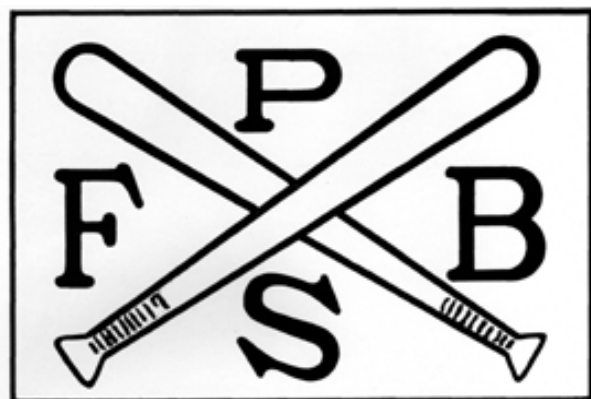
全 故 谷垣 正巳

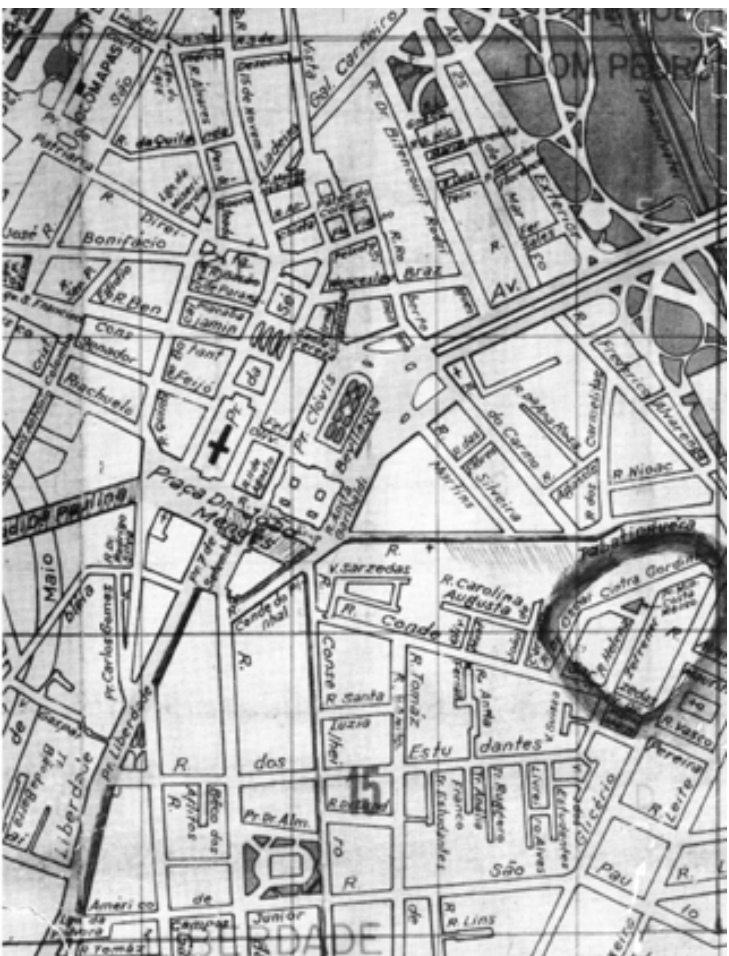
全 黒木 常彦

會計 田口 博一

監修 故 武本 由夫

監修 中林 昌夫





### 聖市中心附近の図

セー広場、大寺院前に標柱があり、聖市はこれを中心として東西南北に市街が広がっている。1908年、最初の日本契約移民の渡伯以前から、日系人は、セー広場の附近やや南部に住み、コンデ・デ・サルゼーダス街とその近辺に発展、商業に従事した。

コンデ街、タバチンゲラ街の坂下、オスカル、シントラ、ゴルジンニヨ街（旧、ライト配電会社）の湿低地にて、1916年、最初のバットを振ったのが伯国野球の始まりである。



1916年9月24日スダン球場の組に分けて試合する青柳郁太郎が始球式をする。(移民の年史香山六郎編より)

後列Ⅱ(左より三人目)熊坂清四郎、(二人おいて)川上末喜、  
(二人おいて)長谷川末記、星名謙一郎、(二人おいて)、多羅間鉄輔、(一人おいて)梅田久吉、田口実

前列Ⅱ菅平吉、長谷川庄太郎、(一人おいて) 斉藤龍雄、明穂  
(実)、矢崎節夫、森本(日本貿易)

この写真は、1922年アクリマソン公園にて、天長節の祝賀を行った折の記念撮影。





ブラジル野球最古の優勝旗

ブラジル野球界、最初の全伯大会に寄贈された、最初の優勝旗  
1924年、レヂストロチーム（代表 笹原憲次）が上聖し、聖市のミカド  
チーム（代表石原桂造）に挑戦、三連勝のレ軍が優勝したが、その時は  
この鮫島直哉（鹿児島県人）寄贈の優勝旗は製作中で間に合わず、翌1925  
年、第二回大会の始まる前にレ軍に渡した。第三回はミカド優勝。第四  
回から第六回までアリアンサチーム（代表 弓場勇）が三連勝し、以後  
ア軍が所蔵、1937年近代全伯第二回に聖市チームが獲得、石原が保管。  
戦中、本郷孝が隠蔵し、1975年10月、移民資料館に納入。左より、中  
沢、横田、半田。

## 優勝旗、移民資料保存館入り

### サンパウロ野球クラブが寄贈

いよいよ建設が具体化し来年六月移民の日を期して募金活動に入る「コロニア移民資料館」には、すでに多くの篤志家から古い移民の資料や、使用器具類が贈られている。今度サンパウロ野球クラブから一九二四年にサンパウロで行われたコロニア史上初の「全伯野球大会」で優勝チームに贈られた大優勝旗が資料保存館に寄贈の申し出があり一九七五年十月十五日午後五時半から、文協会長室で、サンパウロ野球クラブの横田守正さんと本郷孝さんの手から中沢文協会長に手渡された。

この優勝旗は、故鮫島直哉さん（鹿児島県出身）がコロニア初の野球大会が行われるというので、大会に花を添えるため贈ったもの。

その後、優勝旗はサンパウロ野球クラブの育ての親だった故石原桂造さんの手で長らく保管されていたが、亡くなる前、同クラブの本郷孝さんに保管を依頼、本郷さんがもっていた。

「移民資料保存館」建設を知った本郷さんは、同クラブの世話役・横田守正さんに相談、同優勝旗を寄贈することに決めた中沢会長は、

大変貴重な資料です。こうした資料を多くあつめ一日も早く開設したい。  
と、語っていた。



1923年レヂストロ植民地にて、最初の野球練習風景



1924年パウリスタ線コレゴリツコ駅、海興農場アニューマスチームがサンパウロ市ミカドチームとの優勝記念

1923年レヂストロ植民地にて、最初の野球練習風景

1924年パウリスタ線コレゴリツコ駅、海興農場アニューマスチームがサンパウロ市ミカドチームとの優勝記念



メッセージ  
西 功



## HISTORIA DO BEISEBOL BRASILEIRO

O Beisebol Brasileiro, introduzido pelos imigrantes japoneses, constitui hoje uma das modalidades esportivas mais intensamente praticadas no pais.

Com duas Federações, a Federação Paulista de Base Ball e Soft Ball e a Federação Paranaense de Base Ball e Soft Ball, devidamente oficializadas, e a Federação de hiato Grosso, hiato Grosso do Sul, Rio de Janeiro e Brasília, em vias de reconhecimento, esta integrado no sistema de organização desportiva do pais, subordinado a Confederação Brasileira de Desportos Terrestres.

Trazido pelas primeiras levadas de imigrantes japoneses e praticado como esporte referido da coletividade nipo brasileira, a sua historia se confunde com a propria epopeia da imigração japonesa ao Brasil.

A Federação Paulista de Base Ball e Soft Ball, no 30o aniversario de sua fundação (18 09 1976), como obra comemorativa, decidira editar em um documentario

a historia da evolucao do beisebol brasileiro.

A Comissao integrada por veteranos do beisebol brasileiro, desde entao e por longos anos, dedicou se a pesquisa, tendo por fonte informacoes pessoais, compilacao de documentos e publicacoes, e, recentemente, decorrido quase um decenio, possibilitou a edicao desse documentario "HISTORIA DO BEISEBOL BRASILEIRO (1o parte antes da 2o Guerra Mundial)", justamente ao findar da nossa 9o gestao consecutiva a, frente da Federacao Paulista de Base Ball e Soft Ball.

Integraram e colaboraram na confeccao desse documentario os senhores Morimassa Yokota, Senzo Takeda, Kanjim Yamashita, Massami Tanigaki e Yoshio Takemoto, dois ultimos ja falecidos, Tsunehiko Kuroki, Hirokazu Taguchi e Massao Nakabayashi, a quem tributamos os melhores agradecimentos pelo empenhado e dedicado trabalho desenvolvido.

Sao Paulo, Fevereiro de 1.985

ISSAO NISHI

Presidente da Federacao Paulista de  
Base Ball e Soft Ball e  
Diretor de Beisebol da Confederacao  
Brasileira de Desportos Terrestres.

序 文

竹 下 完 一



一千九百七十六年十二月二十一日、私が未だカラガタツバの美しいマサガスー海岸に住んで居た頃、聖州野球連盟の横田守正、竹田仙造、谷垣正巳三氏の突然の訪問を受けました。目的は連盟が計画中の日本人コロニヤの野球史編集のため、昔の野球関係者を訪ね取材中との事。日本人移民史の一端をなす面白い趣向と思い、一千九百二十五年から二十八年迄の三カ年間、私の属して居たミカド倶楽部、旭倶楽部の出来事や逸話、記憶に有る事を話しました。三氏は実によく調査して居て、余り参考にならなかつたと思います。併し、久しぶりに、五十年前を回顧して、本当に愉快な一時を過しました。

第一回笠戸丸移民の着伯以来、異国で慣れない珈琲園労働に従事した人達は、最初は仕事に追われ、娯楽や運動競技を考える余裕がありませんでした。一千九百十六年頃から、仕事になれ、娯楽の必要を感じ始め、日本で親しんだ野球を採択しました。組織立ったものではなく、単なるボール投げ遊びでした。それが漸次、組織化して、一千九百二十年頃には、聖市にミカド倶楽部、レヂストロやアンニユーマスにも野球チームが出来、時々対抗試合をする様になりました。聖市の野球は鮫島直哉、石原桂造両氏、レヂストロは海外興業会社

の笹原憲次氏、アンニューマスは矢崎節夫氏の尽力で出現しました。鮫島氏の如きは野球奨励の為の優勝旗迄寄賜されました。此頃の事は野球史に詳細に描写されて居ます。

漸次隆盛に向いつつあつた野球も第二次世界大戦の勃発によつて一頓挫。この空白時代を経過して、コロニアの再起と同時に、野球も急速に発展し、今日の盛大を見るに到りました。現在では聖市丈けでも、リーグ戦の出来る多数の球団が出来、聖州のみならず、バラナ州、リオ・デ・ジャネイロ、ブラジリヤ、アマゾン州に迄波及し、ブラジル野球選手権を争う様になりました。誠に慶賀の到りです。一朝一夕に達成されたものではなく、六十年の長年月の間の先輩諸氏の尽力、貢献、犠牲の賜物です。

只惜しい事には、柔道、唐手、の様に、伯人間に浸透して居ません。蹴球の好きなブラジル人には余り馴染めないのかも知れませんが、体力、運動神経の発達した彼等は、バスケットやバレーボールで世界的選手を出して居った如く、宣伝、指導によつては野球に逸材が輩出する事と信じます。その時に今迄達成出来なかつた南米野球選手権の獲得も夢ではないでしょう。日本人植民者、その子孫はブラジルに同化しつつあります。野球もブラジル化すべきです。

一千九百八十三年十二月二十一日、丁度七年後、聖市の私のアパートに横田守正氏の訪問を受けました。この長日月、同氏を始め編集員の方々は、遠近をとわず昔の野球関係者を訪問、古い新聞記事に眼を通し、不断の努力によつて、漸く野球史を完成したとの事、誠に目出度い事です。今後、印刷、発送、配布等の問題がありますが、主体は出来上つたので

す。快挙の一語につきます。連盟会長西功氏、横田氏、其他の編集員の方々へ、心から御祝い申し上げます。

この折、横田氏より野球史の序文を書いてくれとの依頼を受けました。此の様な立派な本の序文を書く資格も文才もありません。お断りしたのですが、現在生存して居る、半世紀前の野球関係者は殆んど他界し、生残って居るのは五指を以って数える程しか居ない事、遂に長生した為、序文を書く羽目になりました。拙文をお許し下さい。

今は故人となった、昔の先輩、球友達の冥福を心から祈り、野球史の大成功を願って、序文とします。

御祝いのことば

鈴木 威



横田君、竹田君と言え、誰も知る野球の神様だ。六年がかりで六十年の永い年、そして広いブラジルの野球史にとりくんで、いよいよ上梓する事となったと聞いて、ほんとうに頭が下がるばかりだ。

僕もアリアンサチームに一九二六年、右も左もわからぬ七才の時、弓場君の捕手をやり、又サンパウロに出ては安養寺、高野、横溝、竹下君その他の名選手の仲間に入れてもらって、ミカド倶楽部の一員となった。移民船が着くたびに

サントスで船員団と試合をしては、バットやボールを恵んでもらった時代であった。

今もあるアクリマソンの広場、パレストライタリアの蹴球場、それは米系電話会社の技師連の練習でもあった。シートン、ヒューズ、フーバーとかいったベテラン選手を思い出す。

コンデ街のペンソン「ときわ」がミカドクラブの本拠であった。

石原おやじのペンソンには、野村秀吉測量技師（丈吾連邦代議士の父君）や、後宮大地主などがゴロゴロして居、鮫島建築屋とか三浦日伯、黒石時報社長などが、いつも出入りしていたのを思い出す。

僕もマツケンジー大学に在学中だったのでアメリカ系、ブラジル系、日系でブラジルでは初めての大学チームを作った。アマデウ、ビンボー、僕の弟の厚等が中心となって活躍した。アマデウはアメリカ版の野球ルールをブラジル語に翻訳してほめたたえられた。

日伯新聞社が主催して、第三回全伯青年野球大会をスタンの広場で開催した。大会委員長の蜂谷氏が僕に「君はこの頃飛行機を操縦しているそうだが、飛行機から始球式のボールを投げて見ろ」などという無茶な提言をして来た。僕もヤンチャ坊を自任していた頃だから『よしやって見ましよう』と複葉機アブロで急直下飛行をやり、見事捕手が取ったのを思い出す。

大東亜戦がはじまり、ありとあらゆる邦人スポーツは消えてしまった。

数年たって国交回復し、廃墟の様な日系スポーツ界の中から、リンス界隈を中心とするノロエステ地方から、ヌクヌクと新しい勢力が湧き出て来た。

僕ももう現役となる年令ではなかった。ただ昔のよかった野球界を思い出し、邦人コロニアがブラジルスポーツに少しでも貢献できるため、わずかながら御手伝いするのみが念願であった。

蜂谷氏と共に毎日ボンレチーロの球場の案を煉り、メインスタンドの設計をして市役所に案を出し、現在の様な鉄筋コンクリート建築が出来た。

又ワセダチーム招聘のため、東京で大浜総長と会食したり、在日中の宮坂国人氏と日航事務所で重役と打合せして、来伯実現をなし得た事が思い浮ぶ。

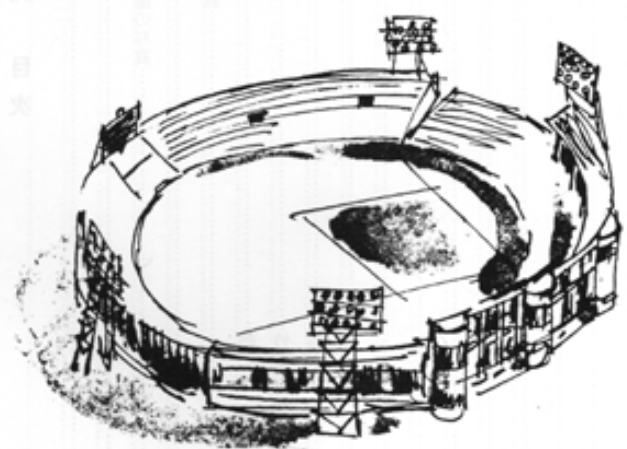
戦前のミカドチームの写真を見る。ずらりとならんだ面々、いい男どもである。右から一人一人指で数えて見た。今日生きているのは竹下君と僕だけだ。横田君から生きのこのりの君等二人で序文を書けとの事、有難いことである。半世紀以上も古い事、親しくしていた仲間一人一人が、ただなつかしく脳裏を去来する。

竹下君は当時の日系人でブラジル女性と結婚した数少ない青年であった。今日本文化協会のある土地に、大正小学校があった時代、御夫妻で日系子弟に教鞭をとられた方、現在政界財界で活躍中の多くの方々が、お世話になったのである。八十才を越えて未だ矍鑠とした存在である。コロニアスポーツ界あげて君の長命を祝ってほしいものである。

『それ娑婆電光の界』と、この世をさして言う古言がある

が、半世紀の刻々が世の移り変りであり、未来の要素がその中にふくまれていたのを知れば、一刻たりともおろそかに出来ない。この意味で本史編纂に当られた横田、竹田両君に、心からなる敬意を表すると同時に、両君をたすけてブラジル野球史を完成に導いた諸氏に、御礼の言葉をささげるものがある。

一九八三年十二月二十二日





# ブラジル野球史 目次

ブラジル野球発祥地々図	3
ブラジル野球最古の写真	4
アクリマソン公園の第二回天長節の写真	4
ブラジル野球最古の優勝旗	4
レジストロとアニューマスの写真	4
メッセージ	9
序文	11
御祝いのことば	11
ブラジル野球史 目次	17
はじめに	21
創草期	23
ミカド運動倶楽部の結成	28
1919〜1921	31
矢崎節夫の略歴	37
鮫島直哉の小歴	39
1922〜1923	42
石原桂造の略歴と野球	54
多羅間鉄輔の小伝	58
竹内秀一の略歴	59
横溝一男の略歴	60
1924	62
笹原憲次の略歴	79
菊地円平の略歴	80
竹下完一の略歴	82

1925	.....	85
1926	(ヒリップスの小歴	92
1927	.....	02
1928	.....	06
弓場勇論	はじめに、弓場の野球	13
弓場と進藤	.....	24
脇俊雄の語る弓場勇	.....	30
二面の弓場と進藤	.....	32
人間弓場	.....	34
金原友治の見た弓場勇	.....	37
座談会	弓場の印象	39
別派のアリアンサ、その一、その二	.....	41
聖州義塾球史	.....	44
浅見哲之助の略歴	.....	50
義塾、遠征の想い出	.....	52
1929	.....	54
渡部重の略歴	.....	56
野村忠三郎略歴	.....	59
高野富継小伝	.....	59
1930	.....	71
山岸清略歴	.....	76
進藤憲吉の略歴	.....	78
進藤憲吉	余談	.....
1931	.....	85
T女の場合	.....	92
大坪愛児略歴	.....	95

谷垣正巳小伝	1932	195
竹田一家	1933	196
江原政寿の略歴	1934	210
1933	216	
1934	217	
1935	224	
1936	235	
1937	241	
全伯組織のはじまり	244	
座談会”中林敏彦とその野球“	251	
1937	261	
1938	274	
蜂谷専一の思い出	323	
横沢至の略伝	378	
横沢太一の印象	381	
1939	396	
1940	367	
吉田光男小歴・本郷孝小伝・北原ネルソン小歴	411	
レジストロ地方の野球	412	
ノロエステ野球	447	
ノロエステ線の球人たち	448	
中島鷓郎略歴	452	
黒木常彦小歴	467	
ノロエステ編	468	
座談会、チエテ移住地の野球	471	
リンスの野球	478	

アラサツーバ球史	482
グアララツペス球史	484
グアララツペス野球の思い出	485
バストス野球の功労者たち	486
ポンペイア球史	495
パウリスタ線球人録	497
ソロカバナ地方球史	499
ソロカバナ地方の野球人	500
パラナの野球人	505
聖市近郊の野球	507
1941	507
鈴木威小伝	554
蜂谷栄の小歴	555
西功小歴・高柳清小伝	555
おわりに	556
編集後記	558
参考文献	559
発行所、印刷所	560

はじめに

ブラジル国において、野球競技が行われはじめたのは、十九世紀の初めである。

永い間、われわれ野球関係者の間では、*「当国の野球は、日本移民によつて持ち込まれ、その第一球は、彼らの手で投ぜられた、と思われていた。」*

このたび、この「ブラジル野球史」を編纂するに当つて、調べた諸種の文献や、創草期に実際に競技に携わり、未だ健在の先輩達の生きた証言などによつて、日本人が始める以前に、当時在聖の米国人達によつて、すでに行われていたことが判明したのである。

日本人が最初に始めたところは、いわゆるコンデ街で、彼らの間に設立された青年会の発会式、即ち一九一六年九月二十八日のことであつた。

一九一七年、元東京の慶応大学選手、笹原憲次の渡伯によつて、蓮華のそののように花開いた伯国野球は、自後幾變遷、今や伯国スポーツ界に、堂々その巨歩を踏むに至つたが、その過ぎたる六十有余年の星霜を、つぶさに書き残し、これを後世に伝え、限りなき未来の発展に資そうという運動が始められたのは、先覚者の一人、故竹内秀一が健在の一九七三年である。

一九七五年も残り少ないある日、前聖州野球連盟会長、法学士・西功は、翌七十六年が球連創立三十周年に当るので、その記念事業の一環として、当ブラジル国の野球史編纂を決定し、まず竹田仙造と横田守正の二人を、資料収集委員に任

命した。この委員会は後に編纂委と改称、山下寛人、黒木常彦と歌人の武本由夫を加え五名となり、別に会計委員として田口博一、中林昌夫が監修に参加した。

当初、前記二名は、この事業の重要性と、自らの非力を理由に辞退したが、先年来、石原桂造、進藤憲吉をはじめ、発案者たる竹内秀一など、大先輩が逝去するに及んで、も早一刻の猶余も許されずと、ただ全力を尽すことで発足した。その後、弓場勇の急逝、浅見哲之助、谷垣正己、大坪愛児など、重要人物をつぎつぎに失い、困難はいや増すばかり、前途多難を思わせる。

然し一方、球界諸友の励ましも数多く、横溝一男、森山泰、菅讓治、西村栄一、里見茂義、竹下完一など諸先輩が健在で、生の声を聞き得たうえ、一九一七年創刊号からの伯刺西爾時報紙、一九二〇年よりの日伯新聞、二十二年からの聖州新報など、貴重な文献が保存されており、その他諸種の刊行物を、より多く利用するとともに、アリアンサ移住地からは、阿部敬吾の調査原稿、バストスは、水野昌之著の二十五周年史、また十数名の寄稿のほか、鮫島直哉大優勝旗をはじめ、手製のバット、各方面から寄せられた数百枚の記録写真、延べ数千名の選手達が綴った汗と血の記録、それを後援激励した数十名の世話役や片手に鍬を、背なに嬰兒を負い、なお球場に声限りの声援を続けた移民妻のいとしい姿など、旅行、会見、録音で収集した資料は、実に厩大な数量であるが、これをもって完全とは言えず、又その全部を掲載するに紙数の限りもあり、多く割愛せざるを得なかったことは、一つに編者の劣とすると、漸愧である。

なお本書の刊行に、多大なる御協力を煩わした各地の先輩諸氏に、深甚の感謝を捧げるとともに、身に病いを蔵しつつ、自主協力し、途中他界された谷垣正己、その後神界に旅された横溝、西村の霊に、冥福を祈る次第である。



## 創草期

このブラジル国内で、野球というスポーツが、実際に始められたのは、一体何時のことであつたろうか、そしてそれは誰達によつてはじめられたのであろうか。

このことは私たち野球に関係する者の間に、非常に大きな関心を持たれていたのであるが、過去において、これを判然とさせる何らの動きもなされたことは無かつた。

本文の“まえがき”の中で触れているように、永い間一般には、日本移民が、彼らの祖国で習い覚えたものを、この国に来て、その生活の中で必要とするまま、彼らの初期の集団

地である、聖市内でも比較的中心に近い、コンデ・サルゼーダス街の下の方の広場で始めたのが、最初であると信じられていたのであるが、この野球史を編纂することが、本決まりとなり、委員会が、実際に活動をはじめ、あらゆる文献をありさり、また古い移民の健在な方達を尋ね歩いて、調査を進めた結果、この国での野球は、それ以前に在聖の米国人たちによつて、すでに行われていたことが明らかになったのである。

ではその最初にはじめていた米国人とは、どんな人達であつたかというところ、これも「まえがき」の中にあるとおり、当時在聖のライト電力配給会社や、伯国電話公社、米国民総領事館、あるいはアルモール屠殺会社などに勤めていた米国人たちである。そしてその場所は現在、パルメイラス体育クラブの、大蹴球場のあるところであつた。

ここが主に彼らが球場として使つたところであるが、これとは別に、もう一カ所、やはりアグア・ブランカ区の一画に、ポードロという馬に乗つて、白い球を打つて走るスポーツ用に、作られたところも利用していた。

このポードロ競技場は、一面に厚い芝に蔽われていて、まわりは高い立木にかこまれた、緑濃い清涼の気みちたところ、広さは大体、正式の蹴球場の三倍ぐらい、サントス・ジュンジアイ鉄道、アグア・ブランカ駅のすぐ北側で、何年頃からか、サンパウロ、ライルワイ社の蹴球場となり、またその後、このクラブの名前がナシオナルとなつて、現在施設の完備した正式蹴球場のほかに、三面の蹴球場が出来ているが、いまだに数本のユーカリ樹が残っていて、昔を偲ぶよすがと



なっている。

なお当初の米人たちの消息について、ライト社や、電話公社、総領事館などしらべたが、どこにも記録などはなく、僅かに一九二五年、第二回鮫島旗戦の折りの審判一人と、同旗戦第五回（一九二八年）に参加した米人チームの写真を残すのみである。

一方、日本人たちが聖市の一隅、コンデ・デ・サルゼーダス街の下の方、グリセリオ街に面した広い赤土の、スタン煙草工場敷地内で、野球らしき遊び（このような言い方が、実際に一番近いようだ）をしたのが、前掲の写真である。

この写真は、日本人が最初に祝った天長節と言いついて伝える者もあるが、天長節とは日付けが違うので、同日ではない。

横溝一男の話によると、第一回の天長節の祝典は、アグア・ブランカ区のアントルチカ・ビール会社の公園で行われ、その会場借用費は総領事館と藤崎商会で出し、百人足らずの邦人が総出で、山高帽子、燕尾服で徒歩競争、二人三脚などやり、と随想記に書いているが、写真の背景その他から見ても、その時のものとは思われない。

これは天長節と関係なく、別の日に青年会発会式が行われ、その場での余興の最後に、初めて野球をやったと推定されるのである。

この時には始球式も行われ、投げたのは青柳郁太郎、氏はブラジル柘植株式会社で、在聖中の名士であった。「二応型の整った儀式であった」と香山六郎著書中にある。

この写真は、一九四六年、聖州野球連盟が正式に創立さ

れ、その第二期からの会計主任だった故田中重夫が、誰からか寄贈され、後日遺族から球連に持込まれたので、八方探したが、いまだに寄贈者も判明しない。

青年会の結成には、南米新聞社長星名謙一郎、多羅間鉄輔、熊坂清八郎（藤崎商会代表）弘中強介、伊藤庄吉、矢崎節夫、長谷川庄太郎、栗山篤などの諸氏がおもな人物と書かれているが、この写真に見える、田口実、梅田久吉、長谷川末記、斉藤龍雄、菅平吉、明穂実、森本太郎（日本貿易）松隈秀義、小此木の諸氏も会員となっていたであろう。

これらの人の中には、母国日本にて勉学中に、野球に親しんだものが多く、中でも矢崎は、長野県諏訪市の、同名中学に学ぶ頃、野球が好きで、同中学チーム内で活躍した人。

在聖の米国人たちが、野球をしているのを聞いて、俺たち日本人だけでチームを作ろうというのが動機となり、松村貞雄初代総領事に相談したところ、氏は、いつそ青年会を組織してはと言われ、早速青年会作り奔走、前記の人々の賛同を得て、結成したのであった。このような経緯からも、前掲の写真の下部にある、野球部の始球式、とあるは、信憑性が極めて高いといつてよい。

なお翌一九一七年の十月三十一日に、アクリマソン公園にて、大々的に開催された天長節祝賀会も、この青年会が主催者となって活躍して居り、その後も邦人間に事あるごとに、青年会主催と新聞にあるのを見ると、後日、日本倶楽部が誕生するまで、この青年会が日本人間の中心的組織となって活躍した模様である。

さて、このようにして結成された野球チームであったが、

最初の一組の野球用具を購入したのは、松村総領事からの寄附五百ミルレイス。サン・ベント街のフックス運動具店から一揃いを調達、発会式に集った人達が、三組に別れて分けあつて使用した。当時の人々が、いかに懐しく、うれしさの中で打ち興じたかが想われ、ほほえましさを禁じ得ない。

野球用具も手に入れ、日曜ごとに赤土を浴びて練習にいそしんでいた青年達も、当時の事情から、いつも試合をするところまでは仲々いかない。それは選手たち個々の仕事の違いもあり、特に先頭に立っていた矢崎節夫が、海外興業社の重要職である関係上、在聖の期間が不定期であつたなどの理由もあつて、野球技そのものの発展は、余りはかばかしいものではなかつたが、時折り、ライト社などの米国人チームから招待があり、前記のアグア・ブランカ公園で、彼らと入り混つて楽しんだり、時には試合（勝敗は問題にならない）もしたようである。このような時には、ライト社が特別電車を差向けて迎え、終了後はシャワーを使わせ、ランチを御馳走し、また電車で送り届けたと、古老の話である。彼らの国民性が明るく、おおらかであるのと、娯楽の少い異国の中で、同じ趣味に生きる者同志の心易さが、このような好遇の形となつたであらうと思われるのである。

## ミカド運動倶楽部の結成



1920年ミカド倶楽部発会式、前右より神田、椎野、菅、松隈、里見、長谷川庄、竹内、高橋、森本、長谷川末、二段右より石原昌、小倉、山田、高岡、黒岩、小貫、大橋、三段右より四人おいて、田口、石原、笹原、岩淵、上段右より稲葉、田口実、実崎、山田、中矢

1920年ミカド倶楽部発会式、前右より神田、椎野、菅、松隈、里見、長谷川庄、竹内、高橋、森本、長谷川末、二段右より石原昌、小倉、山田、高岡、黒岩、小貫、大橋、三段右より四人おいて、田口、石原、笹原、岩淵、上段右より稲葉、田口実、実崎、山田、中矢

前述したように、聖市内の日本人集団地がコンデ・デ・サルゼーダスを中心に、ルア・ボニータ（後にトーマス・デ・リーマ）グリセリオ、コンセレイロ・フルタード、サンパウロ街に形成されて行ったのであるが、その多くは笠戸丸、旅順丸以後、引続いて導入された農業移民の中の、奥地の農業になじみ得ない人たちであった。

これとは別に、領事館関係、あるいは移民会社関係の、いわゆるホワイトカラー組も数多く、また稀には縁故者に呼び寄せられた単独移住の者もあり、いろいろな仕事を見付けて生活の道を切り拓いて行ったのである。

それらの人の中には、かなりの数の半インテリとも言える、旧制中学、あるいはその程度の学校卒業者が居て、これらの人たちは勿論農林の酷暑の中の重労働には適せず、とって定まった手に職なども無く、止むを得ず、馴れない建築業の手伝いや、大耕場主の邸宅の使用人、自家用車の運転手や、コペイロとなって働いた青年も沢山あり、このような豪邸の使用人は、多くは日本人の誠実さを賞でられて給料も割合いに多く、お休みなども特別な扱いを受け、他の職業の者からうらやましがられた程であったという。

これらの人たちは、日本人の多いコンデ街に遊びに出ることが、唯一つの楽しみであった。

特に昔覚えた野球が楽しめるとあっては、矢も盾もたまらず、チームに入り、活躍した者が多かったようである。

然し何といっても、このような雑然とした日本人集団地に生れた青年会の野球であるから、選手の集りも不確定で、

従って試合も定期的にというわけには行かない。

このような時に、笹原憲次が渡伯して来たのである。彼は初め米人チームで野球していたが、やがて日本人だけのチーム、それも本格的なものを作ろうと、同好の者と語り合い、遂に一九二〇年五月六日夜、コンデ街にあった大正小学校（日語、宮崎信造校長）において、運動倶楽部組織の相談会を聞いた。

その場で、規約の作成、役員を選出、「ミカド運動倶楽部」と命名する事を決め、十三日に発会式を行うことにした。選出された役員は、部長・笹原憲次、会計・岩淵彪夫、幹事・森本静太郎、竹内秀二、斉藤龍雄。

次いで予定通り十三日午後一時半、やはり大正小学校舎内にて発会式を行った。参会者は、来賓数名、青年十数名、笹原部長の開会宣言に続いて、来賓中の時報紙社長・黒石清作、山田隆次医師の祝辞の後、コンデ街近くのグラウンドにて、記念撮影、始球式もやり、また各種の運動もやって、盛会であったと報ぜられている。

要するに、一九一六年に結成された青年会は、体育をも含む日本人間の社交、連絡機関でもあったのが、一九一九年の初めに、日本倶楽部の組織を見て、社交面は一応解決したので、純然たる体育のみのクラブの発足となったようである。然しこの両者は、全然別個ではなく、むしろ互いに協力して、日本人間の諸問題に活躍したことは、その両方に同じ役員名があるを見ても明らかである。

伯西爾時報紙、日伯新聞（後、ブラジル朝日） 聖州新報に  
現れた野球記事（以下時、日、朝、聖と略す）

1919

◎野球争覇戦（時、百三十五及び百三十八号）

五月一日及び三日、ボンテ・グランデの  
チエテ俱樂部において、リオ市の米国人野球団対聖市米人  
チームの対抗試合があり、聖市野球団員笹原憲次（東京物  
産）が参加し、P或いはCとして活躍、結果は一勝一敗。  
なお決勝戦はリオ市にて行われ、十対九にてリオ勝つ。

1920

◎ミカド俱樂部野球チームの第一戦

（時、百四十五号）

善戦した日米野球戦

一三A対四、次の雪辱戦が見もの ミカド運動俱樂部対  
米国人の野球戦は、去る六月二十六日午後三時半、アンタル  
チカの運動場で行われた。吾方初陣の選手多く、善戦して敗  
北したが、今後の猛練習にて、次回の雪辱戦に期待した。

1921

◎ミカド俱樂部移転（時、七月三十日）

ミカド俱樂部は、今般コンデ街七三番に移転、明三十一日  
午後七時半より相談会茶話会、明後八月一日、コンデ街下で  
壮年組とマッチを行う。

◎アマチュアー対ミカド忘年野球試合

(時、百六十八号)

明後二十六日午後二時より、コンデ街下の広場にて、聖市アマチュアー野球団対ミカド運動倶楽部の野球大試合ある由、両団員は本年最終の腕を振うべく、大いに意気込みあり。

メンバー

第二回

第一回

クラブ	壮年組	クラブ	壮年組
長谷川	平良	長谷川兄	村上
齊藤	笹原	齊藤	笹原
松隈	伊東	松隈	森
神田	未定	竹内	明穂
長谷川兄	高橋	神田	梅原
上田	石原	上田	石原
森本	菅	森本	宮崎
竹内	田口	長谷川	山田
椎野	亀井	椎野	戸塚
		L	
		C	
		R	
		III	
		II	
		I	
		SS	
		P	

◎壮年組の野球熱

(時、百八十二号)

三月二十六日、コンデ街下の赤土球場、ミカド対壮年組、十八対十一(六回)前者勝。

◎ミカド大勝

(時、百八十九号) 五月二十日 ミカド対米



人野球団の試合は、去る十四日午後三時より、アンタルチカ公園にて挙行、六対三のスコアでミカド大勝し、大いに溜飲を下げたり。ミカドチームのバッテリーは、笹原、長谷川（兄）。

メンバー

壮年組                      ミカド

田中                      P                      長谷川庄

笹原                      C                      松隈

斉藤                      S S                      上田

松谷                      I                      明穂

宮本                      II                      大橋

村上                      III                      津田

田中                      R                      田口

遠藤                      C                      竹内

中島                      L                      横溝

1921

◎ミカド運動倶楽部総会

(時、百九十号、五月二十七日)

当地ミカド運動倶楽部にては、去る二十二日夜総会を開き、会規により役員改選を行いたる所、左の諸氏当選せり。

部長・笹原憲次、会計・岩淵彪夫

幹事・長谷川庄太郎、田口実、松隈秀義

◎野球

(時、百九十五号)

聖市米国人野球団と、リオ米人野球団の争覇戦は、七月二、三、四の三日間リオにて挙行の筈。聖市チームの重鎮笹原憲次君は、投手として出場すべく、尚ミカド対米人チームの第三回戦は、米人団帰聖後、七月中旬行う筈なりと。

結婚、ヴィラコスチーナの矢崎節夫監督は、アデリア・リマ嬢と結婚せり。

#### ◎サンパウロ対リオの野球試合

(時、百九十六号)

サンパウロ対リオ米人野球争覇戦は、去る四日リオ市クリストボン運動場で挙行、五対四でサンパウロ遂に勝利を得た。投手は二回とも笹原君、これより先聖市方は、二日リオ銀行団と試合し、十二対六で勝ち、三日は、ライト対コメルシオ(何れもリオの球団、結果は判らず)。

#### ◎ミカド又大敗

(時、二百四号)

去月二十七日のミカド対米人野球団の試合は、十八対三にてミカド又大敗せり。

#### ◎又敗ける(時、二百五号)

ミカドの対アルモール野球試合は、七日午後挙行、劣さ加減おつかつの好敵手だったが、一挙九点をせしめられ、成つておらず、十九対七で又大敗せり。

#### ◎壮年組対ミカド野球

(時、二百九号)

試合は去る二日午前、コンデ下のカンポで挙行、壮年組は

齊藤、笹原をバッテリーに、村上、渡辺、宮崎、股野のほか、出聖中の矢崎、鈴木などの古武者、二十三対二十二で壮年組の勝、ミカドのバッテリーは、田中、齊藤、試合後、記念写真、上地にて昼食。

### ◎笹原氏海興入り

(時、二百十一号、十月二十一日)

運動家として有名な、笹原意次氏は従来独立にて商業を営みしが、今般海興伯国支店職員となり、追ってサントス出張所詰の上、専ら同地の事務を担当する筈。

### ◎リオ方勝つ

(時、二百十三号)

聖市米人チームに対するオールリオの野球復讐戦は、三十一日を初日に、アンタルチカに於て挙行された。初日は三対四で聖市惜敗。二日目は最初から笹原投手を立てたが、リオ初回到六点を納め、結局十三対六でリオの復讐成る。然し笹原投手が二日間よくやり、態度が堂々としていたと、米人間に好評であった。二日目はミカド部員多数応援、石油缶を叩いての応援、外人等は驚いていた。

### ◎ラッパの運動場開き

(時、二百十五号、十一月十八日)

新たに生れたラッパ野球団は、去る十三日午後グラウンド開きにミカドチームを招き、最初の試合をやった。結果は十四対七でミカドの勝、ラ軍の杉野投手魔球にて初めはミカドの形勢非であった。内外野の守備仲々堅く、今は兄分だが、ミ

カド決して油断ならぬ。

試合終了後、杉野氏宅にて祝盃を挙げた。

尚二十日（日曜）午後はラツパ方から来てコンデ下で試合する。

◎ラツパ対ミカド二回戦一時、二百十七号）

去る二十七日午後、コンデ下でラツパ対ミカド第二回戦行い、十対五でミカドの勝、ラ軍杉野投手の肩最初から悪く、疲れて居た為か、彼の魔球に威力がなかった。ミカドのバッテリーは、長谷川（弟）、神田。

◎壮年組対ミカドの忘年野球

（時、二百二十号、十二月二十三日）

来る二十五日（日曜）コンデ下で忘年野球を行う。

メンバー

ミカド	壮年組
田中投	斉藤
神田捕	笹原
斉藤	股野
阿部	武石
上田	渡辺
長谷川	竹内
伊東	宮崎
横溝	清水
川上	山田

光 安 石 原  
渡 辺 中 島

## 矢崎節夫の略歴



一八八九年一月二十日長野県諏訪市に生れた。小学校時代、中村国穂に学び、海外事情を聞く、一九〇七年諏訪中学を卒え、翌一九〇八年单身笠戸丸にて渡伯、一九〇九年旧モツカ競馬場近くで鞍谷氏と野菜、花作りをした。後ア国ブエノス・アイレス市に行き、滝波商店に働き、ウルグアイ国に渡り、牧畜、齒科医で一年勤め、一九一〇年、聖市に戻り、リオ・デ・ジャネイロのサンタ・クルース島、ラージ造船所にて、第一回逃亡組二、三十名の通訳をした。のち佐久間重吉と米作りをしたり米国人とリオ市に齒科医を開業したこともある。

一九一四年森岡、大洋、南米の三移住会社が合併、移住組合が設立され、松村貞雄総領事と旅行、チエテ河畔。パラíba耕地にて茶栽培をする。その後、ヴィラコスチーナ耕地の

監督となり、後に同耕地にて知り合ったアデリア・パルカイロ・リマ嬢と結婚（一九二一年七月）一九一八年、ガルサ耕地を開拓、一九二一年十月海興に入り、アニューマス農場長となる。一九三〇年、ブラ拓事業部主任に転職、パラグアイ国に植民地を開拓する。後年。パラナ州ウライのピリアニットを売る（日伯産業）。

一九一六年九月二十四日、日系人が当ブラジルで初めて野球を始めたことは、創草期の稿にも詳しく書いたが、その時の中心人物は、ほかならぬ矢崎節夫であった。矢崎は特別親しかつた、時の総領事松村貞雄に相談して五百ミルレイスの寄贈をうけ、サン・ベント街のフックス運動具店より捕手用のミットとマスク、それに三本のバットを買い（以前から話し合っていたコンデ街の青年たちと）、野球（らしき遊び）をしたのである。相談をうけた松村総領事は、野球だけでなしに、いつそ青年会を組織するよう奨めたので、当時の有力者の後援を得て、青年会を組織し、その発会式に集った人たちを三組に分けて、野球をしたと伝えられている。当時の青年たちが、嬉々として楽しいひと時を過ぎた様子が、思い浮ばれ、ほほえましい風景のうちに、始められた日系人間の野球である。

一九二二年、海外興業社に入り、アニューマス農場の主任になると、早速野球チームを作り、二四年には聖市に遠征、ミカドチームと対戦、凱旋している。これが同年から始まった鮫島旗争奪戦の呼び水となったと見てよい。

矢崎は、一九二四年から始められた鮫島旗戦には、その第一回から、伯国野球リーグ協会代表として、常にその組織の

中心的存在となり、活躍している。球界が、中央も地方も一大発展期となった一九三六年、名実そなわった全伯大会が開催されて、一九四一年に第二次世界大戦の勃発で中断されるまで、矢崎はつねに球界の重鎮として、実行勢力の連中から心のよりどころと、親しまれ敬れていた。

大戦後の球界でも、元老として常に尊敬されたが、一九五四年三月一日、六十五年の輝かしい生涯の幕を閉じるまで、ブラジル球界が彼矢崎から受けた公私の恩恵は、まことに量り知れない程のものである。

もしも野球界に、功労賞あるいは恩人賞とでもいうものがあるなら、その第一号に推挙されねばなるまい。

## 鮫島直哉の小歴



ブラジル野球、創草期の功労者、鮫島直哉

1908年、第一回移民船、かさと、丸で渡伯、

40年後の1948年、同航会の記念撮影

鮫島は鹿児島県川辺郡東加世田万世町小港の出身。一八八四年九月の生れ、一九〇八年六月十八日着伯の笠戸丸で渡伯した。二十四才の意気盛んな薩摩男子であった。

同航者は、それぞれ移民収容所から各地に散っていったが、鮫島は同県人の鍛冶工、池上仁治郎一家と一緒に、グリセリ才街の平家に間借りして聖市に残った。部屋代は月五ミルだったが、セメント張りの上に日本伝来の布団をしいて寝た。低地なので雨期に大雨でも降ると、水びたしで夜も寝れないことがあった。あの界限は当時一面の沼地だったのである。池上氏の日給は五ミル五百、鮫島は五ミル、今の市立劇場の建築中で、その木工所に働いた。家政婦（アルマデイラ）や、コペイロに雇れた者は、月給二十ミルも貰っていたものもある。（香山六郎録より）

当時の聖市は、コーヒー景気のおおりで、爆発的な聖州経済興隆の時期であった。その為に鮫島たちの仕事の需要が多くなり、一介の大工が忽ちのうちに建築業者と成り上った。鮫島は、耕地に行った同航者の中で、仕事を嫌って出聖して来た者達を雇い入れた。勿論これらは皆経験などなく、金槌一つ打てはしなかったが、みな大工、左官として使われた。手に職もなく、それでいて奥地の生活の出来ない青年たちが、どれだけ助けられたか知れない。

仕事は普通の住宅、商店、工場の建築などと次々に拡大されたが、或る時期には、国境の兵営舎作りも請負ったという。

性来剛胆で、義侠心に強く、経済的な向上とともに、困っている者には積極的に手を貸し、物心の援助を惜しまない。邦人間の催し事には、いつも率先して寄附した。

一九一六年に、同航者の矢崎節夫が、時の総領事松村貞雄から五百ミル針の協力を得て、サン・ベント街のフックス運



動具店から四本のバットと、ミット、グローブ、捕手用マスクなどを買い求めて、青年会の運動会の終りに野球をしたのが、邦人間の野球の始まりとは、別の稿に詳しく書いたが、鮫島はこの時も多大の援助をしたし、笹原意次がミカド運動倶楽部を発足させた時も協力した。

一九二四年、ミカドとレヂストロとアニューマスの三者で、対抗試合という話がまとまると、直ちに大優勝旗の寄贈を申入れ、ミカドの森山泰会計を制作委員にし、その作制を急がせた。注文先は、聖市キンチーノ・ボカユーバ街と、ジョゼ・ボニファシオ街の角にあった洋裁店である。この店の女主人は、元英国のロンドン市で、金モール付きの礼服を縫った人。心よく引受けた。費用は一コント五百、現在ならどの位の値段であろうか。然しこの年はミカドとレヂストロだけの対戦で、レヂストロが二勝したが、優勝旗は出来上らず、その翌年の第二回対抗大会の前に出来上り、レヂストロは第一回の優勝者として受取ったが、第二回（一九二五年）の優勝者ミカドにすぐ渡している。一九二六年、弓場チームがミカドに挑戦して、三試合を戦い、二勝一敗でミカドが勝ったが、一九二七年第四回、一九二八年第五回、一九二九年第六回と、三連勝したアリアンサ弓場チームは、この大優勝旗をノロエステに持ち去っていた。一九三六年に再び始められた全伯大会の第二回目、一九三七年のポンテ・ペケナ大会に敗れたアリアンサチームは、この優勝旗を、石原桂造に戻して帰ったのである。自後、石原が保管していたが、この第二次全伯大会には、新しい優勝旗が出来ていて、この鮫島旗は使われていない。大戦の勃発で石原は危険を感じ、その

保管を本郷孝氏に依頼、サンパウロ野球倶楽部が獲得した数々の優勝杯などと一緒に、本郷が隠匿し、持ち廻って後、横田に引渡した。

一九七五年、移民資料館に納入された栄光の大優勝旗は、邦人野球界の最初の物として、鮫島直哉の名と共に、永く展示されている。

妻いとに五男あり、一九五五年亡、七十七才。

1922

◎野球戦 (時、二百二十七号、二月十日)

前々週の日曜、対ラツパ野球部に三点差で敗れたミカドは、来る十二日、コンデ下で雪辱戦を行うと。

◎ミカド、ラツパに辛勝 (時、二百三十三号)

十九日舉行されたミカド対ラツパ野球戦は、ラツパ方の元気なのに対し、ミカドは墮気満々、エラー続出、旗色悪く、業を煮した斉藤元老まで飛び出し、最終回に八点を収め、漸く三点差で勝ち、面目を施した。

◎運動界 (時、二百三十八号、四月二十八日)

去る二十三日のミカド対ラツパ野球試合は、五点差でミカドの勝利に帰した。

又来月三日、ミカド、ラツパ混合チーム

と北米団との第一試合は、午後三時から、コンデ街下の北米

団新球場にて挙行される筈。

◎日本側善戦し破れる

(時、二百三十九号、五月五日)

去る三日、伯国発見記念日にミカド、ラツパ混成チーム対米国人チームの試合が、米国人新球場で挙行され、敵味方の好プレーに、米美人団の黄色い声援あり、日本側七回まで七対四でリードしていたが、八回に米側九点を入れ、遂に十四対九で敗れた。

◎ミカド俱樂部總會

(時、二百四十号、五月十二日)

去る六日第四回總會を開き、幹部の改選を行う。部長、副部长は留任、会計の日本貿易の粟津金六、幹事は菅平吉、長谷川庄太郎、神田貢

◎対米人試合は零敗 (時、二百四十一号)

対米国人第二回戦は、十三日午後二時半開始、日本側振わず、斉藤捕手が指を負傷、試合続行出来ず、六回戦で中止、日本側零、米人側十点。

◎ミカド俱樂部二周年祝賀会

(時、二百四十二号、五月十九日)

十三日午後七時から、小川旅館大食堂で催されたミカド俱樂部二周年祝賀会は、来賓、難波寮東新報主幹、山田海興など十余名、歌、浪花節などで、コンデ街夜半まで賑う。

尚野球は、ミカド十一ラツパ九の接戦、(七回戦) 庭球も行う。

◎三日のミカド対ラツパ戦

(時、二百四十四号)

去る三日(日曜)のミカド対ラツパ戦は、二〇対四でミカドの勝。

明後十一日午前九時からの北米人との第三回戦の日本側のメンバーは、

投・笹原、捕・西郷、遊・斉藤龍、一塁

・佐藤(ラ)、二塁・阿部、三塁・田中、右

・河上(ラ)、中・杉野、左・神田、補欠・長谷川(弟)、河

田(ラ)、土井(ラ)

◎対米人野球白熱戦

(時、二百四十五号、六月十六日)

去る十一日挙行された、ミカド・ラツパ対北米人の第三回戦は、日本側に新たに西郷捕手が入り、日側初めより優勢なりしが、中頃より互角となり、九回表米軍一点を入れ、その裏西郷の強烈なるPゴロで同点、十一回延長まで両軍得点なく、引分けとなった。

日本側のメンバーは、

投・笹原、捕・西郷、遊・斉藤龍、一塁・佐藤(ラ)、二

塁・阿部、三塁・斉藤武、右・長谷川(弟)、中・杉野(ラ)

左・神田。

1922

◎対米人野球白熱戦

(時、二百五十号、七月二十一日)

去る十四日、ミカド・ラツパ対米人試合四回戦は、前半日本側優勢なりしが、六回六点を入れた米側同点となり、結局十対八で吾方惜敗した。然し笹原、斉藤(龍)のホームランが出、日本側も大いに振った。尚十六日のミカド対ラツパ戦は、十三対十三で引分けた。

◎ミカド、リオ遠征

(時、二百八十三号、三月九日)

ミカド運動倶楽部では、リオ日本人野球団の招きに応じ、博覧会见物かたがた、左の日割りにてリオへ遠征する。

十六日(金)午後八時サンパウロ発、十七日(土)午前中休憩、午後三時より北米入野球団と試合(リオ日本人野球団と混合)、十八日(日)午前八時、リオ日本人野球団と試合、午後博覧会见物、午後七時五十分リオ発、翌日曜午前八時サンパウロ着。

1923

◎ミカド遠征延びる

(時、二八四号、三月十六日)

ミカド運動倶楽部のリオ遠征は、今十六日出発の筈だったが、北米団の都合から、来週金曜即ち二十三日に延期され、試合は二十四日午後カンポ・クリストボンで行われる。

事項は広告の通り、尚リオ日本人野球団及び対北米団試合

の、リオ聖市合同邦人チームは下記の通り。

◎愈々今日、ミカドのリオ遠征

(時、二八五号、三月二十三日)

リオの北米人団の都合から、一週間延期になっていた、当市ミカド運動クラブ野球部のリオ遠征は、愈々今宵八時半の夜行列車で、選手の面々何れも武者振り甲斐々々しく、北上する事になった。フレーミカド。



ミカド軍、リオ遠征

尚ミカド選手は、下記の通り決定。

メンバー

合同	投手	リオ団
笹原	手塚	
西郷	捕手	武井
斉藤	遊撃	熊坂
諸(リオ)	一塁	諸
安部	二塁	飯田
栗津(リオ)	三塁	栗津
熊坂(リオ)	右	獅田
杉野	中	武石
神田	左	東
	補	川崎

◎七対十一で敗れたが、手に汗を握る大試合……不公平な米人審判

(時、二八六号、三月三十日)

雄々しくリオ遠征に立った、当市ミカド

供の野球団は、二十四日朝リオ着、すぐその後、既報の通り、リオ邦人団と組んで、カンポ・クリストボンで、米人団を向うに廻して陣立堂々と戦い、見るものをして思わず手に汗を握らしたのは、天気暑さばかりでなく、全く際どい大接戦の為だった。

然し結局味方の武運拙なく、邦人団七対米入団十一で負けたのは惜しかった。

然しこの勝負には、米国人側には、勝てば百弗の賞与があつた為か、審判は頗る不公平で、邦人選手連は大いに憤慨していた。

尚翌二十五日のミカド対リオ邦人団の試合は、三十何点対八という、お話にならないミカドの大勝利だった。

メンバー

投手	笹原
捕手	西郷
一塁	神田
二塁	安部
三塁	杉野(ラ)
遊撃	斉藤龍
右翼	佐藤(ラ)
中堅	渡辺
左翼	河上



リオ市100年祭記念野球試合、ミカド対米国人(1923年)

◎青年会発会式

(時、二八八号、四月十三日)

アニューマス農場の青年集合して、青年会を設立したるを



以って、去る八日発会式を挙行した、会員二十八名、会には  
野球部、夜学部、フットボール部などがある。

役員は選挙の結果左の通り

会 長	今 村 広
副会長	山 下 大 作
幹 事	上 田 大 作
〃	北 島 昇
会 計	村 田 親

場長、矢崎節夫の挨拶、発会式の後、各種運動競技あり、  
午後より野球試合。

### メンバー

守備

自 軍 位置 紅 軍

竹 内 投手 矢 崎 (秀)

村 田 捕手 北 原

武 川 遊撃 北 島

川 上 一 塁 平 島

山 下 二 塁 岡 嶋

田 中 三 塁 一 柵

宮 原 右 翼 川 中

今 村 中 堅 小 川

太 田 左 翼 長 尾

◎ミカド運動倶楽部の総会と記念祝賀会 ミカド運供では、

去る五日午後八時、部内に於いて定期総会を開き、事務、会計報告の後、重要事項を協議し、次いで役員改選を行えるが、其の結果は左の通り。

部長 齊藤 彪 夫（新選）

副部長 （廃止）

幹事 山田 隆 次

長谷川 末 記

高橋 忠 一

会計 対馬 健 吉

尚同俱では、明後十三日午後六時より上地旅館に於いて、三周年記念会を催す由にて、部員及び関係者に、それぞれ案内状を發した。又当日午前八時から、ライト・グラウンドに



ミカドチームの練習風景

於いて、ラッパ連合野球大会、午後二時からミカドコートで庭球大会を催す由。



1923年、西郷隆治の柔道道場（聖市ブリガデイロ、ルイス、アントニオ街、2列中央が西郷、僅か一年程で閉場した。）

1923

◎レヂストロ野球戦

（時、三〇七号、八月二十四日）

ボール界の寵児、笹原がレヂストロ入りすると共に、同地に野球熱は猛烈になり、去る十二日には牧場組とレヂストロ組の一回戦が行われ、正後から午後四時半迄奮戦、牧場ソルテイロ組十六点、レヂストロ組十一手で牧場組の大勝、観衆

山をなし、両軍の応援頗る熱烈だった。

メンバー

レ軍 牧場

馬場	投手	池田
笹原	捕手	唐沢
曲尾	I B	田中
田中	II B	柴野
尾上	III B	野村
滝沢	遊撃	今田
坂本	左投手	藤原
山本	中投手	栗津
右		長谷川

◎レヂストロ復讐戦

(時、三〇八号、八月三十一日)

前号所載の通り、十二日にあえなく打破られたレヂストロ組は、十九日日曜牧場組に逆襲、第二回戦は同日午後一時開始、審判は大坪、浅野の両君、牧場軍投手牛越の乱球、レ軍笹原の魔球、秘術を尽して戦い、遂に十六対十三でレ軍は見事雪辱した。

初夏の空よく晴れて、折柄の日曜に観衆山をなした。第三回戦は九月第二日曜に行われる。

1923

◎久し振りの野球戦

(時、三三二二号、九月二十八日)

明後日午前九時からラツパ野球部運動場で久し振り、ミカド対ラツパ野球戦がある。

メンバー

ミカド      ラツパ

田中	杉野
神田	捕火之口
対馬	遊上井
渡辺	孝一佐藤
安部	二岸波
上田	三佐藤害
森山	敬右中山
長谷川	中川田
横溝	左藤田
光安	補
森山	泰補

## 石原桂造の略歴と野球



石原桂造は一八九一年（明治三十四年）の十二月群馬県勢多郡下川淵村大字三公田に生れた。一九一二年（大正二年）五月十五日サントス港着の、第六回移民船、若狭丸のコックとして乗船、着港と同時に脱船し、モヂアナ線のミナス州コンキスタ駅ラジアード耕地内、マツタ分耕地にあつた三軒家というのに逃げ込んだ。当時の脱船は特別めずらしいことではなく、従つて誰も追いかけてくる者もない。この耕地は、新主が日本人好きで、それ以前にもその後も、日本人の仮住居となつたことがあり、海興から聖州の契約移民の特別配給もうけていた。

彼は間もなく、サントス市に移り住んだが一九一五年、ここで熊本県人清水某の息女みつえと結婚（このいきさつなど、今は知るよしもない）、翌年八月、長男の豊（ゆたか）が生れ、その後男の子二人生れたが、この二人は早く死んで、聖市に移ってから生れたのは四人目のマリ子と、末子のテルアキである。

一九一九年、聖市に日本倶楽部が開設されて、料理人として招かれ、一年余を勤めたが、一九二〇年、コンデ・デ・サルザーダス四一番に、常磐旅館を開業した。当時はすでにボ

ニータ街（現在のトーマス・デ・リーマ）に上地旅館、または末広旅館もあったが、石原夫婦の気さくなことと、無類の世話好き、ものわかりがよく、義侠にも富んでいたのも、たちまち人気を取り、泊り客はふえる一方、小川旅館その他の同業者が、続々開業したが、トキワ旅館の名はますます高まるばかり、開けびらきで飾りけがない、ことばは雑だが心が温かい、誰からでもかけられた相談や泣きごとは、親身になつて聞いてやる。誰いうとなく付けられた呼び名は、トキワの“パイ”というのであった。山田隆治医師とその弟忠治、木村清人などと組んで、病人の世話、官憲との交渉、領事館との連絡など、今の文協と援協を一つにしたようなもの、萬ず相談所というところ。

人侠の地関東の生え抜きっ子、の本性が出たというか、庶民の味方、コンデ街の、そしてコロニアの名物男となつていた。

野球との関係は、矢張り慶応ボーイの笹原憲次との出会いからであるが、竹下完一や西郷隆盛の孫、隆治の着聖が動機となつている。

コンデの日本人街で、矢崎節夫などを中心に、かなり以前から野球は楽しまれていたが、笹原憲次を首領とする、ミカド運動倶楽部の設立は、当時の大親方鮫島直哉や、この石原などのバックアップが大きな力となつたのであった。

一九二四年、矢崎節夫の率いるアニユーマスチームが来聖して、ミカドやラッパと一戦して勝つて帰つたあと、同じ年のうちに笹原憲次、菊地円平などのレヂストロ軍が来征して、ミカドと三戦三勝したが、これがその後六カ年続けて開

催された、有名な鮫島大優勝旗争奪野球大会の始まりである。彼はこの大会の、実質的な組織委員長であった。そればかりでなく、ミカドチーム十数名の選手たちの世話一切を引き受けて、その費用の大部分を、ほとんど一人で支払っていた。

その後ミカドクラブは、高野富継、アマデウ・リップ、安養寺頭三その他が活躍したが、余り華々しいこともなく、聖市にはラッパチーム、学生チーム、アサヒ、エメボーイ、聖州義塾、パレストラ・イタリア、ゼラフル・モーターズなど、幾つものチームが出来たり消えたりした中で、有ってないような存在を続けていたのであったが、この時期の石原は、野球の上からいえば、失意のドン底だったといえるようだ。

一九三六年、ノロエステを初め、ソロカバナ、北パラナなど、地方球界の活発化と同時に、聖市でも領事館を筆頭に、新聞社、商店など、続々チームが出来て、球界は一挙に“結集期”ともいえる情勢になったが、その機運の醸成とキャッチに、大きく動いたのは進藤である。進藤はその手ははじめとして、当時すでに球界の大親分と、自他ともに認められていた、この石原桂造と相談合意し、聖市球界を一丸とした、サンパウロ野球倶楽部の結成に成功したのである。

このサンパウロ野球倶楽部は、聖市内に散在する、十数チームを包含して、毎年リーグ戦を行うのが、一つの目的であったが、それと同時に、この倶楽部を主体として、広く聖州パラナ州などの、地方チーム全部を参加させた、全伯大会を開催するのが、大きな目的であった。

このような周到な準備ののちに、開催された全伯大会は、



その第一回を、聖市モツカのアントルチカ蹴球場で開催したが、一九四一年、第二次世界大戦の勃発で、第六回東山球場大会を最後に、中止のやむなきに到ったのである。

1922年

この間、一九三七年には日本から、元明治大学の名二塁手だった、横沢太一が移住して来たり、一九三八年にはスタン球場で、弓場と進藤の最後の決戦があったり、一九三七年から、蜂各専一を会長とした、聖市実業リーグ連盟の結成とか、石原は常に球界活動の後盾として、大きな力となっていた。

大戦の中頃からは、宮腰千葉太、渡辺マルガリーダ、高橋勝などと共に、日本人間の救済事業に身を投じ、一九七〇年、七十九歳の生涯を終るまで、多彩な、そして多端な、その上輝やかしい一生、憶えば他の常人の、仲々に過しえない、羨しいときえ思える充実した人生を送ったのである。

あの濃いヒゲと慈眼をはころばして、厚い口唇の間から、「どやっ」とバスの効いたひとこと、憶いおこすのは吾らのおやぢの顔。伯国球界の大恩人と、大書しておかねばならない。

それにしても、忘れてはならないのは、彼の妻みつえさんである。

他人にはトコトンまで良くするおやぢも、夫としてはどうであつたらうか。忙しい宿屋家業、沢山の客の出入りのほか

に、野球気狂いのおやぢが連れてくるどこかの若者がいつもゴロゴロ。使用人の数も多い。子供も育てる。朝から晩おそくまで、破れるような喧噪の中に、一言もなくニコニコしている。トキワのママイ。彼女は日本の明治の女であった。野球の蔭の人、ほんとうの功労者は彼女ではなかったかと思う。

### 多羅間鉄輔小伝



氏は、一八七九年三月、山口県山口市土日敷町に生れた長州人である。一九一四年リオ市の公使館に赴任、後パウルーの初代領事となる。

ノロエステ線最大の指導者として絶対的な存在だったが、大の野球狂で、一九二〇年に設立されたミカド運動倶楽部の有力な後援者だった。一九二四年アニューマスチームがミカド、ラツパの二チームに挑戦し、大勝して帰った時、大カップを寄贈した。また同年、レヂストロ軍が上聖して、ミカドに二勝した時も（鮫島直哉旗争奪戦第一回）美しい大杯を寄贈したが、この杯は現在、日本移民史料館に納まっている。おそらく邦人社会最古の優勝杯であろう。

リンスでは、耕地の隣接地にカンポ（球場）を作らせ、毎日曜青年たちに野球をやらせ、それを見物することを楽しみ

とした。大の慶応びいきで、早慶戦で慶応が敗れたりしたニュースがあると、大いに不機嫌を爆発させた。

多くの大会では総裁をつとめ、彼の挨拶があつて、大会が始まるのが慣例となっていた。一九一六年の現存する最古の野球に関する写真のなかにも、山高帽をかぶつて写っているが、永年のファンぶりを現したものだ。

### 竹内秀一の略歴



竹内秀一は、広島県呉市の産、一八九八年の生れ、一九一二年呉一中を卒業間もなく、兄、金一夫婦と三人で渡伯した。グアタパラ植民地に入植したが、軽い病を得て聖市に療養し、パウリスタ延長線のガルサで、植民地内の日本語学校に奉職、のち日伯新聞社の三浦鑿に請われて営業主任となった。伶俐明晰な頭脳と、冷徹な判断で、難しい社内外の諸事を、手際よく処理したばかりでなく、“反逆児三浦”といわれた社長に降りかかった幾度かの火の子を見事ふり払いながら、尚自社の主張を、あくまで堅持した副将として、コロニア史に残るその手腕は、永い間の畏敬のまゝであった。

一九二四年、同社内の松隈某の息女やす女と結婚、二男三女の父となる。次男の昭三を日本に留学させ、大戦後招び寄せて、日本音楽レコード販売業を継がせた。昭三は父に優る営業の才能、その名もアルタプレイ社として盛業中である。

彼の野球歴は古く、邦人間に野球の始った一九一六年の最初からの選手である。一九二〇年のミカド創立会員でもあり、一九三六年サンパウロ野球倶楽部設立に協力、球界に残した業績は多いが、中でも全伯大会の第三回、一九三八年のスタン大会を、日伯社主催としたことは大きい。当時社長三浦が「興業はいやだ」というのを説き伏せたのは彼である。戦後球連の組織、第一回青年大会の開催、第一回少年野球の発足など、進藤憲吾の後盾として活躍、一九四九年、中林敏彦と相携えて「センバツ」大会を創設するなど、球界での業績は数え切れない。

一九七六年五月、七十九歳で瞑目するまで社会的にもコロニアの威大な蔭の力であった。

一九七六年八月二十三日、日本政府より勲五等瑞宝章を追贈されたが、彼が邦字新聞界とブラジル野球界の両面に残した功績からではなかったかと思う。

### 横溝一男の略歴

横溝は福岡県浮羽郡出身、一九〇一年の九月生れである。一九一四年三月神戸出港の帝国丸で単独渡伯、五月にサントス港上陸、叔父に連れられてモジアナ線のセルトンジンニヨに入耕した。一年半後の一九一六年の八月には出聖。初めは弁当屋の配達などに働いた。

彼は後年に書いた「ブラジル移住と随想記」という自叙伝ともいえる本に、「一九一六年九月七日、ブラジル初の日系

人野球試合に出場した」とあるが、当時の記念写真には彼の姿は見えない。然しこの写真（3頁参照）の中の、大方の名前は記憶していた。一九二〇年に笹原憲次を中心に創立された日系人の運動倶楽部ミカドの創立会員である。

一九二二年から、マト・グロツソ州のカンポ・グランデ市を初めとして、奥地を漫遊している。一九二九年には母国を訪問、故郷で結婚、再渡航して今日に到っているが、六人の子女に沢山の孫を得て、現在は聖市近郊フェラス・デ・ヴァスコンセロス駅近くに、老後を楽しんでいたが、今は亡い。

一九三〇年頃、バストス移住地の製材所に行き、間もなく事務所にも働いたが、この間に野球、陸上などにも出場したという。既で百米を十二秒と書いているが、身体も大きいし速かったのであろう。

彼は若い時から、磁器の工場で瀬戸物の絵書きをしたので、後で絵を書いて売ったりしていた。

野球と彼との関係は、前述のようにミカド倶楽部の創立会員中、最近まで数少ない生存者だということのほか、一九二二年ブラジルの独立百年祭に、リオ市に遠征したミカドチームの一員だったということ、また一九三六年、戦前の全伯大会第一回が、モツカ区のアンタルチカ蹴球場で開かれたり、その翌年ポンテ・ペケナ区のカーマ・パテンテ球場を借りたり、第三回大会がスタン球場で開催された時も、彼がパルメイラス倶楽部の幹部と親交があり、やっと大スタンドのある会場を借り受けたのに、距離が遠いという理由で急き変更されたなど、当時の彼は葡語に馴れていて、その上伯人との交際上手だったので、大いに活躍した。いわゆる球界の便利屋

だったということである。

何しろ球界創草期からの者なので、色々な昔話を聞かしてくれて、この球史の編纂に大へん役立ったことを感謝している。ついでと云っては失礼だが、彼が世に稀な撞球の天才児だったこと、邦人間ではズバ抜けていて、相手になるものになかったし、しばしば伯国選手権候補だったことも書き加えておきたい。もつともこの球突きが、彼の前半生を“働き嫌い”という評価にもしたようだが、当人は案外充実した生活だったというかも知れない。

大戦を契機に、前記の地に祖城を築き、養鶏やイタリア・ブドウの先駆者として名を成したのも、若い頃の体験を活かした、先見の明と云ってよいであろう。

1924

### ◎レジストロ野球盛ん

九月十六日レジストロ軍に九対六で敗戦した植民地軍は、去る七日捲土重来、必勝を期して逆転、野村審判の下に、下記メンバーで力戦、遂に九対八で見事雪辱した。

尚同日午前にはレジストロ青年団混合試合もあった。

メンバー

植民地 レ軍

浅 沼 投 池 田

唐 沢 捕 笹 原

大 坪 遊 佐々木

曲尾(弟) 一 田 中

柴 野 二 前 田

曲尾(兄)三北島  
安田右藤原  
渡辺中松本  
吉川左坂元

◎野球初試合(時、三二六号一月十一日)

来る十三日(日曜)午前八時よりラツパ運動場でミカド対  
ラツパ、本年初試合が行われる。メンバーは

メンバー

ミカド                      ラツパ

今田投杉野

森山(敬)捕火之口

西村一土井

上田二佐藤(豊)

渡辺(孝)三岸波

野村遊中山

川上右川田

田中中佐藤(吉)

横溝左藤田

森山(泰)補

長谷川

尚ミカド運動倶楽部へ、和田正一から三

十ミル、山田隆次から二十ミル、瀬木四十逸から五十ミル、  
斎藤武雄三十九ミル。

◎リオ球団便り(時、三二七号一月十八日)

去る六月夜大谷団長（大使館一等通辞官）

私宅に於いて、邦人野球団の新年宴会が催された。当夜の御馳走は凡て大谷の好意で、団員の喜び一方ならず、大谷氏より辞任の申出あり、後任に森本丞（海軍中佐）を推し、満場賛成尚一月十五日夜、新団長の私宅にて総会を開き、新団別にてキャプテン赤尾、幹事若柳、会計武石が選ばれ、前途更に一層の希望をもつ事になった。

### ◎ミカド倶楽部の新役員

（時、三三三三号一月十五日）

去る一月八日の定期総会で役員の改選を行った処、被選役員中に事情あり辞任申し出があり、二月九日更に臨時総会を開き、再選挙を行った結果、今期は下記の通りとなった。

幹事 山田隆次 斎藤武雄 長谷川末記

会計 対馬健吾

尚、五反田貴巳氏より金三十ミル、寄附があつた。

### ◎レジストロ野球団便り

（時、三三三二日号一月二十二日）

田付大使及びその一行の旅情を慰める為、歓迎野球試合を三日（日曜）レジストロ野球グラウンドで挙行した。折柄の歓迎員や、後援隊や、見物人で人山を築き、レジストロ創つて以来の盛況であつた。結果はレジストロ側の勝利に帰したが、反軍克く防げるには称賛に値する。

### ◎アニューマス野球団来聖の報



(時、三三二号)

海興経営アニューマス農場では、矢崎主任が運動家なので、野球熱愈々盛んとなり、昨年栗山君が入って一層強味を加えたので、来月中旬に出聖、ミカド倶楽部に挑戦するというので、ミカドでは明後二十四日午後一時から、コンデ坂下で同供紅白試合の後、ラツパ軍と対抗戦を行う。メンバーは

メンバー

ラツパ

杉野

火之口

土井

佐藤(豊)

岸波

中山

佐藤(吾)

川田

藤田

1924

メンバー

ミカド(紅) ミカド(白)

田中投 長谷月

福田捕 森山(弟)

西村遊 今田

樋口一渡 逃

安 部 二 森山(兄)  
上 田 三 宮 崎  
川 上 左 封 馬  
伊 藤 中 光 安  
慎 溝 右 山 田

◎野球試合に鮫島氏優勝盃寄贈

(時、三三三三二号二月二十九日)

アニューマス野球団の来聖と共に来月中旬ミカド及びラツパが三つ巴になって争覇戦が開かれる事は既報に通りだが、これに対し、当市鮫島直哉は、見事なカップを寄贈したので、各軍選手は何れも勇み立って居る。

因に該カップは、当市トリアングロの一店頭に陳列される筈である。

◎アニューマス野球団来聖

(時、三三三四号三月七日)

既報のアニューマス野球団は、矢崎主任引卒の下に、来る二十一日(金曜)来聖と決定。

同球団のプログラムとして、ミカド倶楽部への来信に依れば、二十一日アニューマス農場を出発、汽車沿道の視察を兼ね、午後七時十分着聖、直ちに指定の宿に入る。

二十二日(土)午前聖市の一部見物、午後ラツパ野球団と試合。

二十三日(日)午前聖市の一部見物、午後ミカド倶楽部との試合、同午後九時半夜行にて出発。

尚一行は、矢崎主任以下、十名の由、メンバーは、

栗山 武井、高橋、北原、村田、宮尾、  
竹内、岡崎、矢崎（秀）

◎運動界（時、三三六号三月二十一日）

秋は初めの二十二日（土）と二十三日（日）

各午後二時から既報の通り、遠征して来たアニューマス野球団に対し、土曜カップ争奪の試合をする。尚今度の挙には、リ才軍の参加もある筈だったが、差支えが出来て参戦出来ず、好球家を落たんせしめた。二十三日のミカド軍は、  
メンバー

投	齋藤
捕	福田
遊	西村
一	神田
二	安部
三	野村
右	樋口
中	川上
左	長谷川
補	川田
	封島
	松山（弟）
	上田
	横溝

◎笹原憲次氏来聖

レジストロ植民地の同氏は、十四日出聖、十五日帰植した。

◎優勝カップはア軍へ

(時、三三七号三月二十八日)

既報の如く、二十二日アニューマス遠征軍がラツパ軍と戦い、十七点差で苦もなく勝ち翌二十三日ミカドと戦い、五点差でこれも平らげ、優勝カップを受けとつて凱歌をあげて帰つて行つた。

◎邦人野球戦

(日、三月二十八日)

去る二十一日采聖したアニューマス野球団はミカド、ラツパの部員に迎えられ、上地旅館に到着き翌二十二日午前中は市内見物をした。

ラツパ吹き飛ばさる

二十二日午後三時コンデ坂下広場でラツパ対アニューマスの試合が行われた。球審

斉藤武雄、塁審阿部。経過は一回||杉野投手の魔球よく敵の強打者を三振にとり両軍無為、二回||ア軍栗山左飛、村田三ゴロ一塁に生き二盗、三塁手、捕手共にパスボールに生還。ラ軍無為。三回||ア軍矢崎三振目を捕逸に生き栗山三振、村田四球、この間矢崎盗塁と捕逸に生還。五回||ア軍高橋一死後左前に安打、北原二塁打、矢崎四球、栗山の三旬で二点。村田、宮尾併殺、ラ軍、佐藤投安に出で岸波中前に安打、中

田死球で満塁となり川田死球官費で漸く一点。ア軍五点ラ軍一点。六回Ⅱア軍竹井二旬に生き二盗、岡崎三振、竹内三塁に安打、高橋三振、北原左翼に安打、この間盗敵失でまた二点。ラ軍無為。七回Ⅱ両軍無為。八回Ⅱア軍勢いに乗じて一挙五点を入れ、ラ軍潰滅。九回Ⅱア軍又もやすやす点を入れる。

ラ軍無為で結果は十八対一。試合はテンから角力にならず。夜はア球団を海興が日本倶楽部に大スキヤキ会に招待した。

### ◎ミカド善戦憤死

二日目も快晴。午後二時半、ミカド対アニューマス。鮫島直哉寄贈の大銀カップを争う事となった。この日ア軍は高橋投手をマウンドに矢崎は三塁を承った。球審斎藤、杉野塁審。ミカド先攻。一回Ⅱ神田右翼安打、二死後、西村の右側二塁打に神田生還。

ア軍は敵失に二点を拾い一点リードす。二回Ⅱミ軍一死後後樋口三盗成らず、福田二盗、球審アウトを宣し塁審セーフを宣す結局セーフ。そのドサクサに福田三盗、長谷川の右翼テサスに生還同点となる。ア軍岡崎一点を得て又一点リードす。三回Ⅱミ軍神田投安に出、安部、川田の二安打に生還。ア軍二死後、北原、栗山安打と敵失にて二点を奪う。四回Ⅱミ軍福田死球直ちに二盗、二死後、神田の左翼安打に一挙生還。神田三振、安部の安打性難球に本塁に進みしもア軍よく守り刺さる。ア軍総攻撃に移り宮尾先ず出、武居の死後、岡崎、竹内続いて安打、矢崎凡打せしも高橋遊撃左に、北原左翼に好打して岡崎、竹内を還し、栗山の遊左安打に又々二者

生還。村田の遊ゴロ栗山封殺に終ったが、打順一巡四点を奪い大勢決す。五回〓川田四球に出たが、西村凡飛、神田も二塁に刺され野村三振、六回〓ミ軍無為。ア軍また敵失と安打で二点を得る。七回〓ミ軍神田出塁、阿部の凡打矢に快走生還。野村四球に阿部押出しの一点を拾いなお満塁だったが樋口の投直、野村併殺に終る。ミ軍投手を代えて守る。ア軍岡崎右翼に安打、牽制失に還る。八回〓ミ軍無為。替るア軍の強打者速球に翻弄され、わずかに村田敵失と盗塁で生還。九回〓ミ軍一死後、川田死球に出て敵失に二点を得たが及ばず、十三対八でア軍の勝利に帰した。鮫島氏寄贈の大銀ツプは寄贈者から栗山篤キャプテンに、アニューマス秀才、ミカド秀才。終つて上地旅館で慰労茶話、同夜は本社主催ア軍祝勝スキヤキ会、二十四日勇ましく帰村した。因に両軍のメンバーは、

ラツパ                      ミ軍                      ア軍

右	中	左	遊	三	二	一	捕	投	右	中	左	遊	三	二	一	捕	投	右	中	左	遊	三	二	一	捕	投
山	川	中	土	佐	岸	佐	火	杉	川	樋	長谷川	西	野	阿	神	福	川	上	口		村	村	部	田	田	川
田	田	田	井	藤	波	藤	の	野	右	宮	岡	竹	矢	栗	竹	北	高	村	尾	崎	井	崎	山	内	原	橋
田									田									田								

## ネット裏から

△三チーム共善戦したが聖市両軍投手劣る。△殊にラ軍の捕手は素人。ア軍の捕手は素晴らしい。△ラ軍の杉野投手は伯製なるも堀出しもの。△ミ軍斎藤、ア軍栗山両投手は最早老化。△この両投手は秋田中学出と。△百度近い暑さにア軍選手は平気、中でも矢崎投手は投げ足らぬとか。

## ◎ミカド倶楽部記念会（日、五月十六日）

同俱では十三日夜常盤旅館で創立四周年記念会を催した。参集者二十五名、午後八時。斎藤幹事の挨拶後、大いに喰い歌い十一時散会、当日午前は野球、午後は庭球紅白マッチ。

## ◎ミカド倶楽部だより（日、六月二十七日）

明後二十九日の日曜は午後二時からコンデ坂下で故宮崎先生の追悼試合を催す筈、折柄レジストロの憲ちゃんも出聖中のこと、相当面白い対戦を見られるべしと。

## ◎レジストロ日の歓迎野球

（時、三三九号八月二十九日）

レジストロでは、去る十七日の日曜、同地運動場で、白鳥所長及び、菊地医師の歓迎野球試合が催され、壮年組対青年組で両軍共大元気、壮年組に投手として菊地医師を迎え、青年組を一蹴し、十四対五で大勝を得た。当日両軍のメンバーは、

メンバー

壮年組

青年組

菊地	投	河亦
笹原	捕	山本
田中	一	坂元
馬場	二	渡辺
竹田	三	牛越
滝沢	遊	佐々木
浅野	右	国沢
野村	中	杉山
日沖	左	柴野

◎邦人野球便り

(日、八月二十九日)

△アニューマスに破れたミカド倶楽部、一時緊張味を見せたが、革命戦争で折角の熱も何処かへ飛んで、この頃練習に集る人もない。

△リオ野球団、用具新調四ヶ月にもなるに筆下しも出来ないとか此奴も幽霊の部か。

△レジストロ野球団では、去る十七日、白鳥、菊地両氏の歓迎、壮軍対青年の試合ありしと。尚同球団では天長節祝賀会を利用して遠征の企とか盛んに猛練習中なりと。

◎運動便り

(日、九月五日)

ミカド倶楽部では来る七日、伯国独立記

念祭をトンコンデ坂下で紅白試合をすると。メンバーは投・田中、捕・西郷、遊・西村、一・中山、二・阿部、三・野村、右・黒坂、中・佐藤、左・松垣、補・長谷川へ山口、森山、



光安。

◎ミカド野球便り (日、九月十二日)

既報の通り七日午後コンデ坂下で矢崎審判の下に紅白試合をするが折柄猛烈なる旋風の中両軍奮戦十一対八にて紅軍勝利せり

◎野球紅白試合 (時報三六〇号九月五日)

来る七日午後二時から、久し振りでコンデ坂下に於いて、ミカド倶楽部紅白試合。

メンバー

白	田中	西郷	西村	中山	安部	野村	黒坂	佐藤	坂垣	長谷川	山口
紅	杉野	齋藤(龍)	川田	渡辺	土肥	齋藤(武)	上田	神田	川上	森山	
	投	捕	遊	一	二	三	右	中	左	補	

ミカド運動倶楽部へ寄附

五十ミル上田正二郎、中野秀雄

三十ミル土屋久司、天満隆行

二十三ミル山本里右衛門、笹原憲次、岩淵彪夫、武部繁。

◎レジストロ球信

(時、三六三号九月二十五日)

十年一日の如く、青柳重役を助けて、イグアツペ植民地に活躍した藤田克巳は、今回海興社を辞し、自己所有地にて農業を営む事になった。

また同地野球部では、新調の野球具が日本から到着したので、去る十四日、白鳥所長の始球式があつて、試合に移れるが、勇士揃いのゲームだけあつて、面白い結果であつた。

◎天長節祝日、多羅間カップ争奪野球

(時、三六四号十月三日)

来る天長節祝日には、レジストロとアニューマスの野球軍が来聖して来るので、争覇戦が行われる筈で、多羅間領事は之に対し、優勝カップを寄贈する。そして如何なる方法で此のカップを争奪するか未定だが、多分何れかの二軍に勝った優勝軍が、永久に寄贈される事になるらしい。そこで二、三選手も欠員となり、多少だれ気味だったミカド俱樂部も、このカップは是非共我が手にと、躍起となつて居るが、日曜日にも紅白試合で一汗しぼった。

◎ミカド野球俱樂部総会

(時、三六五号十月十日)

## リーグ戦延期か

ミカド運動倶楽部は九日夜総会を開いたが、来る天長節祝日には、既報の通りアニユーマス軍及びレジストロ軍と三巴の争覇戦が行われ、優勝軍には多羅間カップが寄贈される事になって居たのに、アニユーマスが、都合で来れない事になり、従ってリーグ戦も延期になるらしい。



1924年、レジストロチーム初上聖、ミカドに挑戦、三戦とも勝利、第一回鮫島旗争奪戦となる。前列右より二人目が菊地円平。(菊地未亡人提供) アクリマッソン公園にて。

## ◎リーグ戦はやる

(時、三三六号十月十七日)

前号本欄に、天長節祝日に野球リーグ戦が行われるかどうか判らないと書いたが、其の後レジストロ軍の来賓は確實

で、アニューマスも多分上聖する筈で、従ってリーグ戦は、華々しく挙行されるらしい。

1924

◎リーグ戦 (時、十月三十一日)

今日の佳き日から二日間アクリマソン公園で行われるリーグ戦の選手は左の通り。

メンバー

ミカド

レジストロ

原	投	菊	地
西郷	捕	笹	原
齊藤(龍)	遊	牛越	(今)
川田	一	牛越	(三)
西村	二	浅	沼
齊藤(武)	三	曲尾	(兄)
神田	右	唐	沢
杉野	中	河	亦
福田	左	竹	田
長谷川	補	曲尾	(弟)
渡辺		浅	野
土井			

三十一日は午後三時より、一、二日は午後二時半より。



1924年、レジストロチーム初上聖、ミカドに挑戦、三勝した時の練習風景。アクリマッソン公園にて。

## ◎優勝戦

兼ねて製作を急ぎつつあった鮫島直哉氏寄贈の優勝旗は布地の撰択凶案の研究等に意外に暇どり且つ店の方も刺繍には時日を要する所から、とても此の度のリーグ戦に間に合わせる事の事である。それを急いで粗雑なものを作るよりは、ゆっくりと立派なものを作ろうとのことになった。そこでこの試合の優勝者は目録だけを貰って実物は十数日遅れることにな

らんと。因に旗は赤の厚絹地に横九十センチ長さ一メートルの大ききで、縁に十センチ宛の金色の房がつき、中に羅馬の英雄シーザーの標語として名高い（VEN—VI—VI C—）の羅典語にて優勝の意味を表わし、バット二本を組合せしもの、中央にボールを置き、その周囲に月桂樹を配し、下に寄贈者鮫島氏の名を入れ、何れも銀色の刺繍にて成れるものにて、既に注文済みであると。この美麗な優勝旗の出来上った暁には、此頃沈滞しかけた青年の運動熱を鼓舞すると共に、運動界の一異彩を放つであらう。

#### レジストロ選手歓迎会

ミカド倶楽部では来る二日夜常盤旅館で別項広告にある通り、リーグ戦参加の為め出聖せるレジストロ野球団歓迎会を開く由。

#### ◎多羅間領事帰朝

（十一月七日）

ミカド倶楽部では、来る九日の日曜午前や折柄帰朝の為出聖中の、多羅間氏の送別野球試合をなす由。

#### ◎ミカド倶楽部刷新

（時、三七三三号十二月五日）

ミカド運動倶楽部にては、野球は青年に最も適した運動だというラゾンで、去月二十八日常盤ホテルで開かれた総会席上、野球部拡張と決し、キャプテンに西郷、マネジャーに福田スコアマンに久保を挙げ、又幹事に渡辺、石原、山田の三氏、会計に森山を選び今後大いにやるんだと力んでいる。

◎ミカド倶楽部総会（日、十二月五日）

ミカド野球クラブでは、先月二十八日夜総会を開き、役員  
の改選を行い、西郷隆治をキャプテンと決め、今後大いに野  
球をやることにして散会した。役員下記の如し、

幹事 渡辺孝 山田隆次 石原桂造

会計 森川泰

### 笹原憲次の略歴



笹原憲次は、一八八九年二月八日静岡県駿東郡静浦村の笹  
原善四郎三男に生れ、一九〇九年三月、同県立沼津中学を卒  
業、同年四月慶応大学予科に入学、一九一二年家業の都合で  
退学。一九一五年同郷の清水某と欧州經由着伯した。従つて  
移民でも呼び寄せでもない。

要するに青年にありがちな、幾分冒険的、世界を識る旅とで  
もいうようなものであつたかもしれない。着伯の日付なども  
判然とはしない。一時ドウラデンセ線にて煙草作りをした  
が、一九一七年出聖、その年の十月三十一日アクリマソン公  
園の天長節の余興運動会で長距離に出場、一等賞を得たと時  
報紙にあるのが、彼の名を見る最初のものである。

その頃、米国人と共同で農産物の売買などしながら、米国人の野球チームに入り、投手として活躍、リオの米人チームとの対抗戦で健斗していたが、一九二〇年同好の士と語り、日本人のみの野球チームを結成、ミカド運動倶楽部を発足させた。性温厚篤実、後輩の指導をよくした。一九二三年海興に入り、レジストロ植民地にて青年たちにスポーツ、文化など多方面に指導、師とアイドルを共有した。

この頃の青年が後に聖州各地で、スポーツその他の先達となったのである。一九二四年と二五年の二回、一軍を引いて上聖、自ら産み育てたミカド軍と対戦、一度は圧勝、一度は敗れてその健斗も称えた。一九二六年六月六日突如の病に天逝、彼の地に眠る。本文参照。

#### 菊地円平の略歴



円平の父菊地英造は岩手県盛岡市の産、明治の初期に長崎で医学を修め、東京で開業、息子四人は皆医師で、円平はその三男、一九〇〇年一月六日生れ、函館中学時代に野球を始めたという。当時はグローブ、ミットは無く、手袋を代用し、又スパイクもなく跣だった。

一九一四年十一月、東北帝大医科を卒業、函館市立病院外科で研究中に結婚した。彼が二十八歳、新妻ハルさんは十八



歳で、白百合の如き美人だったという。

彼は常から視野を海外に向けていたが、友人の白鳥堯助から、伯国の海興レジストロ支店に、医師を必要としていると知らされ、早速手続きをして白鳥一家と同船で、胸に大望を抱いて渡伯した。一九二四年七月三十一日かなだ丸でセントス港に着く。港には慶応ボーイの大的野球マン笹原憲次が出迎えた。

海興医としての社用の合い間に、すでに結成されていた笹原憲次、曲尾兄弟、川又、浅沼、牛島兄弟、唐沢、辻川、竹田などの野球チームに入り、早速主戦投手として活躍、一九二四年十月、聖市アクリマソン公園でミカドチームと対戦、三戦三勝して初の対抗戦の勝者となり、現在文協内の史料館に飾られている鮫島旗の第一回授賞者としてブラジル野球史に大型金字を書き込んだのである。

一九三〇年、サントスに移転、診療所を開き、一年あまりいたが、翌年の七月アラサツーバ市に移って医院を開業した。当時日本よりの単独移住で渡伯し、ノロエステ方面に来たが、もとより葡語は出来ず、働く気もない、従って金は無くなる、こういった連中が沢山いて、それらが皆親分肌で夫婦とも気前のよい菊地医院に転がり込んだ。

アラサツーバ学園の球場が完成してから、青年、少年チームを作り指導したが、一九四〇年の全伯少年ノロ予選に、優勝戦でピラツキ軍と対し、激戦の末惜しくも僅差で敗れた。彼は青年層の養成にも力を入れ、全アラサツーバ青年連盟を結成、初代理事長になる。

これらの凡てに支払った犠牲は、莫大な額であったと思

う。

またアラサツバ市のサンタ・カーザ院長も務める程の人格者であった。

一九四四年四月二十五日の夕方、テニスから帰宅夕食後、突然の心臓麻痺で倒れ、五十二歳の若さでみまかった。冥福を祈る。

### 竹下完一略歴



一九二四年五月十六日二十一歳の竹下はサントスに上陸した。彼は北米渡航の希望で、早稲田大学政経科に二年在学したが、方針を変え渡伯、最初グアタパラ耕地に入耕する。そこには、フランカ生れの美しい伯人女性、エルメンガールダ嬢が小学校の教鞭をとっていた。

この東京生れの新着美青年と、コロニアの若い娘さん達

は、誰も彼も近ずきになりたがったが、彼のハーモニカで奏でるセレナーデは、エルメン嬢のハートを結ぶこよない縦糸となつたのであつた。

二人は英語のみで語り合つた。彼は葡語を話さず、彼女は日本語を知らなかつたからである。

当時耕地から他に移ることは非常に難しかった。

中には脱耕を企てて殺された者さえあつたという。しかし彼は、種谷写真館のはからいで僅か五カ月で退耕出来た。

十月三十一日、出聖して来た彼は、ジレイタ街とキンゼ街の角で、日本人の現われるのを待っていた。丁度一人通りかかつたので日本人街の方角を聞くと、今日はアクリマソンという公園で野球の試合があつて、自分もこれから行くのだ。一緒に見物しないかという。

同行して観たのがミカド対レジストロ第一回鮫島旗争奪戦である。トキワ旅館主石原桂造の世話でミカド倶楽部に入部したのはその直後であつた。

コンデ街四九番にあつた大正小学校は、宮崎信造が初代校長、二代目は吉原千苗であつたが、彼が三代目となつたのはその翌二十五年。一九三三年大正校が現在の文協の地に新築移転するまでの八年間、数多くの日系子弟が彼の指導を受けたのである。

ミカドに入部した彼は一九二五年の第二回鮫島旗戦対レジストロに遊撃手として出場、九対八で勝ち、第二試合には彼が投手、西郷隆治が捕手で二十三対十一で大勝、以後ミカドの主戦投手として活躍した。一九二六年の第三回には、北原ネルソンとバッテリーを組み、弓場投手のアリアンサ軍と対

戦、第一戦を失ったが、第二、第三試合を二十対十、五対三で勝ち優勝した。この第三試合はコンデ街下の広場で行われ、前夜雨が降り、球場は泥どろ、プレー中の選手がすべて失策が多かった。

ミ軍はスパイクを履いていたが、ア軍は地下足袋か泥靴、それでアリアンサは敗けたと新聞も書いている。その通りであっただろうが、ア軍はこの試合に五回も満塁のチャンスがあった。そしてそのチャンスはその都度ものにも出来なかつた。試合経過をよく読むとピンチになる度に、ミ軍の竹下投手は、強打者に四球を与え満塁にして次の打者を捕る、つまり彼の作戦であつたようだ。そういう事の出来る選手だったのである。

一九二七年にはマウンドを高野富継にゆずり、一九二九年、ミカドがアリアンサに連敗した後、退部した。その後、彼を慕う青年たちと、アサヒチームをつくつたが、それも間もなく止めて、彼の得意とするテニスに専念した。

エルメンガールダ夫人との国際結婚は、当時の日系社会では真に珍らしく、周囲から奇異の目で見られたが、特に彼女の父母の反対はきびしかった。しかし二人の強い愛はそのすべてに打ち勝ち、岳父の信頼を得るに難はなかつた。

第二次大戦中の二人は経済的にも困難となり、カンポス・ド・ジヨルドンに移り住んで人参作り手伝もした。その間夫人は自分の才能を生かし、数冊の小説、コントなどを発表している。

一九五五年になると、松竹、東映、東宝など次々に日本映画が輸入され、コロニアに大きな娯楽を提供したが、竹下の

語学力はここでフルに活用されて、現在までに実に千三百本のファイルムの葡語訳をしたという。この面の功績もまた大きいといわなければならない。

金婚式を迎えた今でも彼の翻訳と夫人の創作は健やかに続けられている。

1925

### ◎レジスト野球戦

(時、二八二号、二月十三日)

元旦に発会式を挙げてから酷暑もものかわ猛練習を続けていたポカポカ倶楽部及び第十七区読書会の二球団は、本月一日ポカポカ倶楽部の運動場が完成したので、その祝いに、レジストロ及び読書会野球団を招いて野球戦を催し、二軍を向うに回して堂々奮戦し、レ軍には十三対十で負け、読書会には二点の差で勝った。当日の審判は笹原、菊地。福引、子供の遊戯、第五部の楽隊で賑った。

### ◎運動日より (日、二月十三日)

▽ミカド運動倶楽部では、古い選手の顔は見えないが、若い衆が毎日曜練習している由。

▽アニューマス野球団が、来る四月にレジストロに遠征するとか。

▽レジストロでは、元旦にポカポカ倶楽部および第十七区の二球団発足、ポカポカ供の運動場で、レジストロと第十七区を招き、球場開きの試合をし、レ軍には十三対十で破れ、十

七区には二点差で勝てりと。

◎野球界 (日、四月十七日)

▽レジストロにはチームが幾つもある為か、野球熱は盛んで、毎日曜練習は怠りなく、在伯邦人野球を背負って立つんだと力んでいる。

▽アニューマスは選手が減り、リオも火が消えたよう。ミカドは名ばかりで練習せずに他球団と試合をする剛の者揃い。

◎優勝旗出来上る (日、四月二十四日)

予て作製を急いでいた在伯邦人野球リーグ戦の鮫島優勝旗は、この程出来上り、一日旅館常盤のサーラで聖市のファンにお目見えののち、昨年の優勝者レジストロ野球団に渡されることとなった。

◎ミカド対かなだ丸野球試合 (日、五月一日)

予て申合せてあったミカド対かなだ丸野球試合は、去二十六日サントスの蹴球場で挙行。何せかなだ丸は船長以下野球狂、亜国ブエノス最強チームと戦い惜しくも敗れ、江戸の仇を長崎でと常敗のミカドと対戦、八回まで敗けず劣らず、沛然と来た雨で中止かと危ぶまれたが再開、十三対十二でミカドの勝、潮旅館、ヤマカ商会寄贈のカップを獲た。この日は内外人の観客多く、気持よい試合であった。

◎球は天空に舞う、糸仙人生 (日、五月八日)

前記のミカド対かなだ丸船員の野球試合について、詩のよ

うな美文で始まる両軍のメンバーと、試合経過あり。

メンバー

かなだ丸

ミカド

杉	本	投	竹	下
渡	辺	捕	杉	野
木	村	一	川	田
町	原	二	福	田
北	村	三	野	村
石	野	遊	樋	口
沢	口	左	川	上
西	脇	中	村	田
小	川	右	手	塚
		補	渡	辺

◎珍らしく勝ったミカド対かなだ丸戦

(時、二九四号、五月一日)

ミカド対かなだ丸野球戦は、去る四月二十六日サントス市のカンポ・ブラジルで午後二時から、日本綿花の喜羽主審、ミカドの上田壘審で開始された。ミ軍のバッテリーは、竹下、杉野。かなだ丸先攻。

カ	3	0	0	1	2	0	2	3	0	—	1	1	
ミ	1	2	0	1	2	1	2	3	×	—	1	2	×

伊藤陽三から潮旅館並びにヤマカ商会寄贈の銀のタツサ

は、ミ軍のキャプテンの手に渡された。かなだ丸チームは、高級船員ばかり、何れも昔とった杵柄、技量ははるかにミ軍を上回っていた。キャプテンは木村機関長、一塁は船長、二塁・捕手・投手いずれも慣れた者、三塁手の一塁への投球は見事なものであった。ミ軍は竹下投手、杉野捕手、福田二塁手など予想外の出来で、あった。

サントス市の上原直勝より、五十ミル、ミカド運動倶楽部へ寄附。

### ◎第二回鮫島旗戦、寄附要請の広告

(時、八月十四日)

球場アクリマソン公園、期日、十月三十一日から三日間、参加予定チーム、ミカド、レジストロ、アニューマス、出来ればこのあと米国人チームと日本人選抜の試合も。

また予算総額は三コント三百ミル、内訳を説明、最後に伯国野球団リーグ戦代表、笹原憲次、矢崎節夫、渡辺孝、会計・石原桂造、山田隆治、又この後、毎号の同紙に寄附累計を發表、

再度の広告にはアニューマスチームの選手に病氣多数で不参加、米国人チームも選手不足で日米戦不可能。今回はレジストロとミカドの二チームのみとしている。

### ◎攻め上ったレ軍を破り、優勝はミカド

狂気した応援団、西郷主将を胴上げ

先ず試合開始前の優勝旗返還式が厳粛に行われたと書き、レ軍先攻で始まる。第一回、レ軍一点、ミ軍二点、六回まで



レ軍七

点ミ軍四点、ミ軍は是が非でも勝たねばならぬと必死に奮戦、七回一点、八回一点、九回にも一点を入れ同点になり、意気益々振り、西郷二塁打して三塁にいる時、神田右翼に中飛安打したので西郷生還勝越の一点を得て九対八、ミ軍の勝利となるや「常盤の石原君が大将で旗を振り、石油缶を打ちたたき、メガホンで盛んに声援していた応援団は狂気して雀躍りし、西郷主将を胴上げして万歳を唱えた」試合時間二時間五十分。

メンバー及び成績は、

二塁打 竹下、西郷

三塁打 斎藤、西郷、原

レジストロ ミカド

遊 辻川 捕 斎藤

三 菊地 遊 竹下

投 笹原 二 福田

捕 曲尾 投 西郷

二 唐沢 左 神田

一 牛越 右 野村

左 松本 中 村田

右 牛越 三 原

中 竹田 一 川田

打数 37 打数 38

得点 8 得点 9

安打 10 安打 14

三振 13 三振 10

失策	四死
7	2
失策	四死
4	2

二塁打 笹原 2 三塁打 曲尾



1925年、アクリマツン公園にて、第一回鯨島旗争奪戦(1924)の覇者、記念撮影  
 前列左より、唐沢、一人おいて浅沼、曲尾(マコト)、川又、  
 後列左より、菊地、竹田、曲尾(タツオ)、笹原

二日目は、一日午後同じ場所で行われ、ミカドはバッテリーを西郷(捕)、竹下(投)に替え、他は前日同様、勝ち誇った意気益々上り、初めから優勢、レ軍は頗る振わず第一回到七点を占められ、五回までにミ軍十八点レ軍五点、結局二十三対十一でミカド大勝、試合時間

は三時間半、審判は両日とも米国人のフーバー、スミスの両氏。

この二連勝で本年度の優勝はミカドと決り、二日間の試合終了後、リーグ協会臨時会長鮫島より光栄ある優勝旗はミカドの主将西郷選手に授けられ、閉幕となった。二日夜常盤で茶話懇親会あり、両軍選手は楽しく興じ合った。

1925

モジアナ線最古の野球

時 一九二五年

場所 モジアナ線セラナ駅トランスバール耕地内(セラナ駅はリベイロン・プレットより東、僅か二十km)。

人員 耕地内の日本人移民六十家族の青年が二チームを作り試合した。

用具 移民の中の誰か、グローブ、ミット、ボール各一個を持っていたのと、聖市トキワ旅館の石原より借りたもう一組を使用した。

メンバー中には、

斎藤 辛、当時海興より監督、通訳として同耕地に居た。後チエテ移住地支配人、南米銀行重役、一九八〇年亡。

富田孝夫、東京都出身、後サンパウロ市にて富田屋(トンダヤ)料理屋を開業。

千田昌夫、勝夫の兄弟、一九二九年頃聖市にて東洋写真館を経営、弟勝夫はシネマの巡業などし、戦前日本に帰国。

内田長次郎、モジ市郊外にて養鶏、果樹栽培など。広島県出身、一九八一年亡。

阿鷹富夫、ノロ線プロミソン駅コレゴ・

アズール日語教師を勤む。プロミソン青年連盟第三期理事長、一九三一年全伯邦人陸上大会（於聖市）にノロ線主将、後マリリア市にて雑貨、農薬、農具、農産物仲買いの店を兄弟にて経営。

阿鷹喜久夫、父喜六、母ヒワ、兄富夫、

春三と共に一九二五年五月着伯、トラスバール耕地に配布さる（十二才）。セラーナ町のグルッポ・エスコラルに入学、一年後プロミソン駅コレゴ・アズールに移転、マリリア市に兄と転住。

以上の人達のほかに、同耕地の青年が混つて二チームで試合をした。一方の投手は

斎藤。他方は富田だった。一九二五年八月三十日天長節に芝居もした。リベイロン・プレットや近隣耕地からも見物が来た。（阿鷹喜久夫談）

1926

◎在伯同胞運動界の驍将、

笹原憲次君急死、運動家の典型的人物

（時、六月十一日）

在伯同胞球界の重鎮、海外興業会社レジストロ植民地の販売部長たる笹原憲次君が、五日夜中急死した旨白鳥主任から当市同社支店へ電報があつたが、同君の訃報につき同君と親交ある同社の渡辺孝氏は、笹原君が急死したという電報ほど最近私に大きなショックを与えたことはなかった。

死因はまだ報ぜられぬから、病気かデザストレか知る由もな

いが、全然予期せぬ長逝とて、うたた人生のはかなさを覚える。笹原君は大正三年頃、君の郷友清水君と共に欧州經由で渡伯されたという。清水君は柔道三段という笹原君より偉大な体格の所有者であった。当時この二人が並んでシダーデを散歩すると、日本人にもあんなデカイのがいるのかと外人からささやかれたものであった。君は一度ドウラデンセ線で煙草の栽培をやったことがあった。うまくいかなかったらしく、田舎生活はそれきりやめてしまった。煙草百姓時代、即ち大正五年頃、程遠からぬサンタ・エウドシアの米作地には日本人ソルテイロ約百人ほど米作をやっていた。その豊年祝いに相撲達者な君は飛び込んで来て、一等賞をさらって行ったので米作地パトロン御気嫌甚だ斜めだった事もあった。運動家の君はサンパウロではミカド倶楽部を創め、青年の元気を鼓舞した。レジストロ植民地が今日のように運動熱が旺盛になったのも、君が入植後からであった。運動はどんな方面にも趣味を持たれ、且つ達人であったことは、君が接した誰でもから尊敬された所以である。野球の練習をやり、テニスをやるにしても、自ら先頭に立ってラインを引き、バットをかつぎ、

ボールやネットを修理するという風で、他を責める事をしなかったもので、部員は絶対に君に心服していた。従って練習でも競技でもいつも愉快であった。運動家としての君の得意時代は、数年前米国人より成るサンパウロ野球クラブのバッテリーとして、リオ球団と戦って連戦連勝した頃であろうと思う。ミカドの盛大であったのもその頃であった。運動家として秀れた同君は、人間としてこれ以上温厚着実で友情に厚い

人はなかった。善人過ぎる程の善人であったことは、君を識る者一人として君の死を悲しみ惜しまぬ者のないのでも知る事が出来る。多忙なネゴシオを持つての君の出聖は

一寸来てすぐ帰るといふ風で、ゆるゆる話しする機会もない程であった。最近の出聖は先月末であつたと思う、丁度有名なソプラノ・ジャポネーザ、タバーレス嬢がオペラ「蝶々夫人」の第一夜をテアトロ、サンターナで演じた時であつた。レジストロにはないオペラだからと言って、切符一枚を進呈した君と、岡本君と妻と四人で見物して、その後何度も妻帯の必要を力説し、モツサのアラン ज्याを妻に繰り返していたというから、まだまだ死ぬつもりはなかつたらしい。まだまだ春秋に富んだ君の様な善人を失つたことは返すがえすも甚だ遺憾の極みである。と語つて憤然としていた。

なお死因は脳溢血で、葬儀は十日同地で行われたと。

#### ◎笹原憲次氏急逝 (日、六月十一日)

海興社員としてより、元気な運動家としてよく知られてゐる笹原憲次氏は、去五日朝レジストロの寓居で急死した。同居者が発見した時は、カーマの上に既に冷くなつていたそう  
で、菊地ドートルが駆けつけた時は、も早如何とも手の施しようなく、病氣の原因は脳溢血らしく、前夜も平素と違い頗る元気がなかつたと伝えられる。葬儀は昨日執行された、同氏が運動家としての名は内外人間に喧伝されたもので、殊に在聖中はアメリカ入野球団の投手として、リオ軍を破り名声を博したことあり、肥大な身体は頑健そのものの様で、鬼をもひしぐ慨があつたが、性質は極めて温良で、何人も彼に

好感を持たぬものはなかったもので、其の急死を聞いて驚くと同時に誰もが心からの哀悼を表しおれり。

◎笹原氏の追悼会（時、六月二十五日）

逝つて二週間目の二十日に、海外興業会社の山田揚之助は自宅に於て故人の親しき人二十余名を招き、追悼会を営んだ。

◎サントスに於ける故笹原氏追悼会

（時、七月二十日）

去月二十六日は故笹原憲次氏の三十七日相当するので、故人と県を同じくする人々や、親しい友達の主催で同日午後二時からサントス日本人会場にて、いとも厳肅に追悼会を営んだ。会する者三十余名、南谷の読経にて式が始まり、河野、与都嶺らの悼辞あつて後、記念撮影、茶話会に移れるが、話中故人の墓碑建立に一同賛意を表し、参会者より即時一コント余の寄附があつた。なお今後の寄附は、本月二十日迄に戸田善雄へ払い込むことに走つた。

◎笹原氏のふた七日（日、六月十八日）

明後二十日山田揚之助氏邸で故人のふた七日の法会を行う由。尚同氏の死が余りにおだやかに過ぎたのでイグアツペから態々警察医師を迎へて死体を検査せしめた所、まがふ方なき脳溢血と判明したと。

◎追悼野球試合

（日、七月二日）

ミカド倶楽部主催、故笹原憲次氏の追悼試合は四日午後二時よりコンデ下赤土ケ原で挙行さるるべく全軍对本社の対抗試合であり本社の新顔バッテリーは然も凄腕を見せる由、尚試合後トキワにて追悼茶話会を催す筈。

メンバー

高野	投手	塚
外波	捕曲	尾
田中	一山	田
樋口	二村	田
野村	三原	
福田	遊竹	下
宮崎	左川	上
山口	中神	田
高山		
高柳	右渡	辺

◎運動界

(日、七月九日)

アリアンサ植民地には数十名の猛者あり、此程日本から野球道具一切が到着したのでチームを作り、今年度のリーグ戦には花々しく打って出る由にて、其の力は仲々あなどり難きものありと。

▽故笹原氏追悼試合に本社対ミカドのマツチが去る四日行われたが、本社投手高野の肩のきまらぬ内に、ミ軍十二点を入れ、三回後スローカーブに悩み四点を入れたに反し、本社打撃振わず、樋口、宮崎の長打に七点を返しミカドに花を。

◎運動界

(日、七月十六日)



▽レジストロ軍 笹原主将の死亡で今年の出場は困難かと見られていたレ軍はミカドに対する復仇の要もあり新たに陣容を整へ非常に意気込んで練習との事。

◎故笹原意次君建碑寄附者芳名

(時、七月十六日)

第一回レジストロ倶楽部扱い

六十九名計八百三十一粒レース也

第二回ミカド倶楽部扱い (時、七月二十三日)

三十八名計八百九拾粒レース也

累計一コント七百二十一粒也

第八回ミカド倶楽部扱い (時、十月八日)

累計参コントス参百五十四粒也これを以つて締切りとす。

◎今年のリーグ戦 (日、九月二十四日)

笹原君が亡くなってどうかと思われたレジストロ野球部も出場、ミカドも新しく陣容を整へ優勝旗保持に努むる由なるが新チームにアリアンサ野球団あり、アリアンサは現に五チームあり毎日曜に猛練習を行いリーグ戦にはオールアリアンサを組織出場の予定なりと。

◎謹告、左の順序で天長節祝賀会

(時、十月二十二日)

会場アクリマソン公園運動会、一、二、三、四、五、六、七、レジストロ、ミカド、アリアンサ軍の優勝旗争奪戦午後

一時より。

別に、寄附金募集広告あり、伯国野球リーグ代表、菊池円平、渡辺孝、矢崎節夫、輪湖俊午郎

ヒリッピの小歴

ヒリッピは、アマデウと愛称されて、ビンボウという同僚と二人、日系二世以外の純伯人として、一九二七年頃から高野富継の指導をうけ、ミカド供に入部したが、後竹下完一のアサヒチームに所属活躍した。数少い非日系の選手中、投手では最初の選手である。

1926

◎新鋭アリアンサ出陣

野球リーグ戦アクリマソンで

(時、十月三十一日)

当地邦人間の年中行事となった伯国野球リーグ協会主催のリーグ戦は、本年もアクリマソン公園で、第一戦は三十日午後二時から第二戦は三十一日午前九時から、第三戦は明一日午後二時から挙行される。本年はレジストロ軍出場せぬ代り、アリアンサから遙々出征、大いに新鋭振りを見せると。尚ア軍とミカドの陣容は、

メンバー

ミカド

アリアンサ

竹 下 投 弓 場

山 田 捕 木 村 辰

野	宮	村	神	手	曲	北	川	原
村	崎	田	田	塚	尾	川	田	
				左	三	二	一	遊
	右	中		山	大	鎌	庭	渡
	木	瀬		田	山	田	瀬	辺
	村	戸						
	三							

◎運動界

(日、十一月五日)

五対三、アリアンサ惜散

アクリマソン球場に於ける鮫島優勝旗争奪戦はレジストロ、アニューマス不参加の為、新顔のアリアンサ対ミカドの間に於て挙行。第一回戦二十二対十、ア軍一勝、第二回戦二十対十、ミ軍一勝のあとをうけて去る二日午後二時よりコンデ坂下ライト球場に於て決勝戦が行われた。球審大森、塁審斎藤、例の如くア軍先攻。

ア 0 0 0 0 1 0 0 0 2 ー 3

ミ 1 1 0 1 1 0 0 1 × ー 5 ×

ア軍再三の好機に得点成らず、九回最後の攻撃は、渡辺二一の後長棍一打遠く中堅頭上を抜いて二塁打、鎌田二ゴロは一塁高投に渡辺一挙生還、鎌田二塁、山田四球、庭瀬の三葡に鎌田封殺、山田三盗、大山四球、一死満塁、捕逸に山田還りミの得点に迫る。ミ軍の非難され易き態度にあきたらざる、又遠来軍のため未知の人々応援声を喝らせば戦況は低迷

せる暗雲に和して凄惨の気場を圧すされど木村（三）衆望にそむき三振、弓場神に祈り仏陀にすがってボックスに立てど不運は彼に四球を与え、五度満塁となる。先頭打者瀬戸満身の力を以て一振すれば嗚呼如何せん投飛に終って遠来軍掉尾の勇も力及ばず五対三に長き恨みをのむ。力つき矢折れて不運に泣く彼等、遠来軍の敗戦をいたわる即席応援団も涙、感激のかもす劇的シーンは何のためとも知らぬ外人の子供さえ泣いていた。

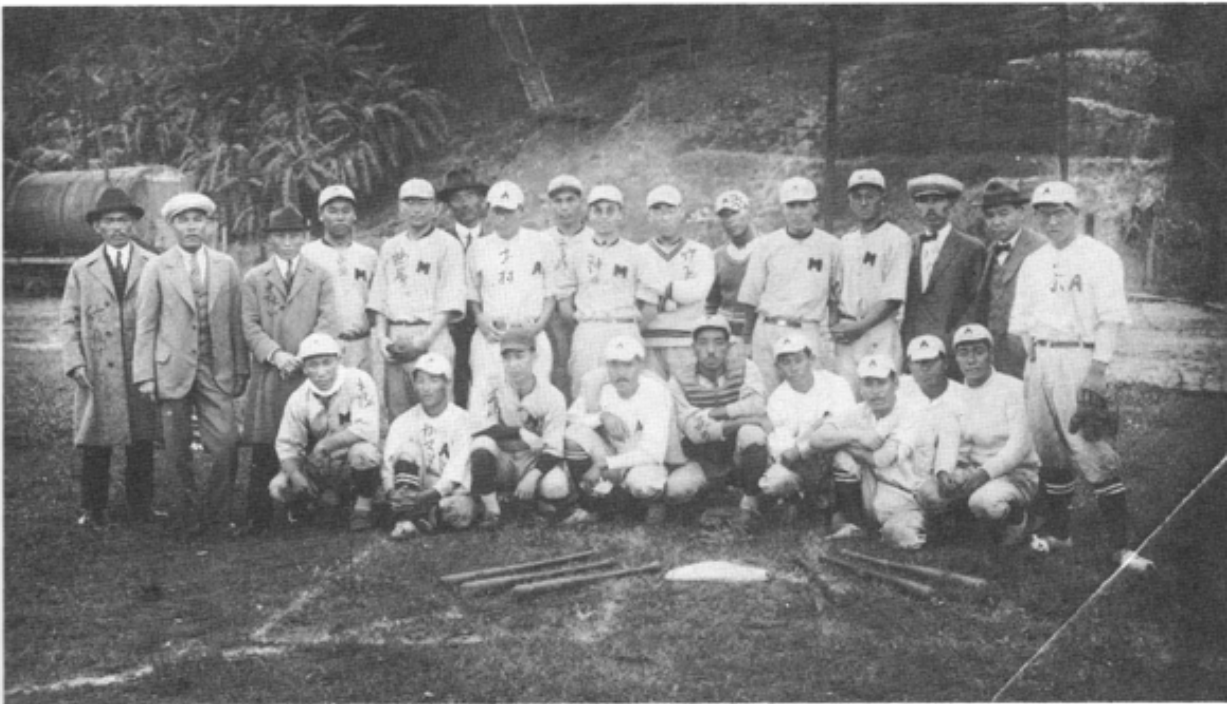
他方勝てるミカド軍は栄光に輝く大優勝旗を再度鮫島直哉氏の手より竹下主将の手に渡され喜びの声を挙ぐ。時に五時、笑うミカド、泣くアリアンサ、運命の神の裁きはこれか。唯一回の練習なき烏合の連合軍勝つ。それは技量の差か、否唯それはスパイクの有無である。

メンバー

アリアンサ

ミカド

中瀬戸	捕北原
捕木村	一山田
遊渡辺	投竹下
二鎌田	中曲尾
左山田	二野村
一庭瀬	遊原
三大山	右村田
右木村三	左神田
投弓場	三手塚



失策	盗塁	四球	三振	安打	打数
10	4	1	5	4	34

失策	盗塁	四球	三振	安打	打数
6	5	3	1	5	35

写真説明 M・ミカド  
A・アリアンサ

一九二六年、アリアンサチーム、初遠征、聖市ミカドチームと対戦、二日目、第三戦目にミカドの勝にて、ア軍惜敗、場所・コンデ坂下、後はタバチンゲラ街よりの下り土手。

聖市、ライト配電会社所有地。最終戦後の記念撮影。

前列右より四名ア軍選手、五人目北原捕手(M)、一人おいて原(M)、鎌田(A)、手塚(M)。

後列右より大山捕手(A)、村上真市郎(歯科医)、石原桂造、二名M選手、弓場勇(A投手)、竹下完一(M投手)、神田貢(M)、宮崎、木村(A)、一人おいて曲尾(M)、山田(M)、森山、一人おいて最後は鮫島直哉氏。

1926

◇どちらが本物

ミ軍の制服にスパイクをはいてシダドンになりすました元鋤鋤アニューマスの元気者ネルソン北原、ア軍に向って「やい百姓ツ」クラブ不要の掌ヒヤ汗流して「握手もとめられたらどうするつもりだい」。

◇大正の九太夫

レジストロから上府した一客人、ミ軍曲尾の三振を見て「ザマア見ろ罰当りメ」註日く「奴メはちよう落のレ軍を蹴つて故笹原君の霊にそむきレ軍不参加の大因を作ったよ」

◇稀代の迷投手

ミ軍から迎えの自動車にフンゾリかえって大聖した大投手ことカマラーダ職手塚君会う人ごとに「俺がいなくちやミカドは暗だ」と御托宣、投手板に立つこと前後たった二イニング許した得点僅か九点、成程ネ。

◇ボール報知器

バイブルと未来の伯国庭球王たる事と、コントロールを信じて疑わぬミ軍の御大竹下投手、ストライクでない一球毎に球審の宣告を考えるクセがある。或時社の記録子宣告を聞きもらして「今のは何でした」見物「投手が首を曲げたからボールです」。

1927

◎西郷隆治君一時帰国（日、七月二十二日）

田舎生活を体験中だった同氏は、大凡将来に対する目星もついたので、種々事業上の準備の為、十七日商船らぶらた丸でサントス発、再渡航は来年の今頃なるよし。

◎リオ野球团组织さる（日、七月二十二日）

数年来中絶していたリオ邦人野球団は優秀なる選手が揃い、この程復活し、来月リーグ戦にも出場する事に決定、毎日曜必勝を期して猛練習をしている。

◎故笹原憲次君建碑寄附金清算報告

（時、七月二十九日）

御賛同諸氏の御芳志に依り、イグアツペ植民地事務所に委託し、同地レジストロ植民地に建設中の処、去る六月六日故笹原憲次君一周忌の前日竣工仕り候に付、立に及御報告候也。昭和二年七月二十六日

ミカド運動倶楽部

レジストロ倶楽部

記

収入総額	三、五六四、〇〇〇円
支出総額	二、九二一、五〇〇円
差引剰余金	六四二、五〇〇円

右の通りに候

追て右剰余金は、静岡県に在る故人の実兄笹原朝吉氏へ贈呈のことに取計い可申候間、御諒承被下度候

◎野球リーグ協会の改造（日、八月十九日）

現在の野球リーグ協会を、もつとしつかりしたものにしたいとの議が先日の野球戦の際ミカド及びアリアンサ両軍の間に起つた。来年一月中にリオ、レジストロ、リンス、プロミソン等の運動部の代表をも招き、規約の改正を行うことに決定したと。

◎アリアンサとミカドの野球試合

(時、八月十二日)

別項の如く、来る十三、十四、十五の三日間、午後二時から当市アクリマソン公園の運動場に於て、アリアンサ軍とミカド倶楽部軍の野球試合が催されるので、邦人社会は煮えかえる様な騒ぎであるが、青年運動に好意と理解を持つ人々は家族同伴出場し、大いに声援して貰うとは世話人達の切なる希望である。

広告

左の日割を以つて、本年度野球リーグ(第四回鮫島旗争奪戦)を挙行致します。御家族御同伴で御見物下さい。出場チームは、アリアンサとミカドの両軍、レジストロは同地に運動会あり、本年度も参加致しません。

日時、八月十三、十四、十五日午後二時より、場所・アクリマソン公園、入場料を要しますが、毎日五十人分丈けの入場券を持ち合せておりますから、常盤ホテルの石原氏まで御申出の御方には進呈致します。

昭和二年八月十二日

在伯日本人野球リーグ協会



◎若葉薫るグラウンドに勇しき打球の響、

アリアンサ軍全勝 (時、八月十九日)

待ちに待ちたるミカド対アリアンサの野球試合は、去る十三、十四日の両日、斎藤武雄氏審判の下に、若葉香しきアクリマソン公園のグラウンドに於いて催された。初日は天健児に幸を与えず、朝より雨模様に加えて風強く、午後に至り小雨来りて歓を殺ぎ、黄昏の幕割合に早く切り落されたるに由り、予定の競技を重ねるを得ず、七回を以ってアリアンサ軍二十四対ミカド三の大差で打止めを余儀なくされた。

十四日は日曜日のこととて応援隊の人数も弥益し、參觀の人々も多く、歓呼の裡に愈々決勝の緊張振り勇ましく、第二回戦は開始された。この日ミカド軍は前日の部署を変更して、必勝を期したるものの如くなるも利あらずして、アリアンサ二十一対ミカド十一にてア軍の全勝となり、優勝旗はア軍の手に歸した。

メンバー

アリアンサ                      ミカド

弓	木	田	瀬	脇	鎌	山
場	村	中	戸		田	田
投	捕	一	二	三	遊	左
高	北	山	福	安善寺	竹	大
野	原	田	田		下	森

鈴木 中手塚  
手島 右樋口

1928

◎運動界

(時、五月十一日)

ミカド運動俱樂部では、創立八周年を記念する為、来る十三日カンブシーのポルトゲージ運動場で野球蹴球の試合を行う事に決した。

プログラムは下記の通り、

午後一時よりセカンドチーム蹴球

午後二時より野球試合(五回ゲーム)

終つてミカド・ファースト・チーム対フラメンゴチームの蹴球あり、優勝者にはカーザ・ミカド寄贈の大カップが贈呈される筈。

◎運動界

(時、七月六日)

去る一日ミカド野球部は、北米人を以つて組織されるパレストラ・イタリア俱樂部と定期二回戦をコンデ、ミカド俱樂部グラウンドにて挙行、第一回投手の悪投と失策にパ軍一挙三点を入れたるも、其の後高野の好投に健棒全く封じられたるに反し、ミカドは三回迄得点なきも、其の後好投に次ぐ好打に漸次得点を増し、十五対八のスコアを以つて、美事第一回戦の復讐成る。

此の日絶好の野球日和に加へて日曜の事とて、流石広きグラウンドも見物人に依り全く埋れるの盛況を呈した。第三回戦は来る十五日パ供グラウンドにて挙行の筈。



◎昭和三年八月十日 (588号) 運動界

ミカド対さんとす丸戦

ミカド対さんとす丸の野球戦は去る五日午後二時よりセントス運動クラブにて挙行、同市日本人会の電車内にビラを貼るやら新聞へ広告するやらの宣伝に内外人の観衆約五百、酒寄商社員の始球式型の如くあつて斎藤(球)、田中(塁)両氏の審判の下にてミ軍先攻、六回まで一進一退、四対三にて猛烈な白兵戦を想わせたが、七回ミ軍1三塁打、3二塁打、1単打に九点を加えた強襲あり遂に十五対六でミ軍の大勝、終つて同市日本入会主催の慰労会は潮旅館に開かれ両軍選手の自己紹介、ミ軍得意のオケサ踊等歓を尽した。因に此度サントス日本人会が色々と親切に幹施してくれたのには関係者一同喜んでいた。

◎ミカド対アリアンサの成績

(時、九月十三日)

予定の如く両軍リーグ戦第一日は、去る七日午前十時よりパレストラ球場(アンタルチカ公園内)に挙行、朝来の野球日和に、両軍入場、ア軍優勝旗返還式、ミカド先攻にて開始、第一回両軍得点あり、俄点実力伯仲を示す。第二回に至り、ア軍緊張一挙八点をあぐ。ミ軍の意気衰えず、回を重ねる毎に得点せしも第二回の差を補うに至らず、十六対十一にてア軍凱歌揚げる。

第二回戦は同じく同球場に挙行、必勝を期したミ軍も、メンバーの変更その他の事情で氣勢揚らず、ア軍のコンビネー

シヨンは前日より固く、十二対五にて再びア軍に凱歌揚り、優勝旗はア軍の手に帰す。今次の試合を通じ、ア軍の投手弓場の好投は賞すべく、同じア軍のシヨートと共に、伯国邦人野球の誇りであろう。不幸にして破れたミカドは自重一番、来年の雪辱を期すべきであろう。

◎第五回リーグ戦概評（日、九月十四日）

第二日

午後二時パレストラ・イタリア運動場に於て挙行、ミ軍今日こそは石に噛りついても勝たねばならぬ戦であり、今日こそは、と意気込み、ア軍は今日こそは思う存分自由に戦い、ア軍の真価を見せ呉れんとばかり、両軍各々若き血潮に胸とどろかせ、フ

アンは又前日の激戦に今日の激戦の素晴しからん事を予想し、午後一時頃よりスタンドは数千の内外人を以って埋めらる。二時ア軍先攻で開始。

ア 0 4 1 0 6 0 1 0 0 ー 1 2

ミ 0 0 0 0 1 1 1 0 2 ー 5

ア軍再び優勝の栄を勝ち得、鮫島優勝旗授与を終り、ここに第五回野球リーグ戦は目出度く閉ざさる。

最後に凸生をして両軍に評を許さるならばア軍に昨年及びの意気なく技術亦昨年にも勝るなく、此度の勝因ただ意気相投合せ有するのみ、ミ軍に於ては各自の技術ア軍に比し遜色なきも斗志全くなく意気に於ては更に殆んど語る

に足らず烏吉の集の罵りをまぬかれず甚しきは運動精神果してありやと吾人をして疑わしむだに見受けられしは、啻にミ軍の為のみならず、スポーツ界にとり嘆かはしき極みである。宜しく各自の自重と反省を望む。最後に諸君の今回の労を謝し今後益々スポーツマンのため奮斗せられんことを望む。

1928



一九二八年九月、第五回競島旗争奪野球大会、在釧路國人チームパレストライタリヤ蹴球場にて。(金原友治氏提供)



一九二八年九月、第五回競島旗争奪野球大会、優勝アリアンサチーム。(金原友治氏提供、パレストライタリヤ蹴球場にて。)  
後列左より、望月、芝原、神田、弓場、山田  
前列左より、相馬、堀、金原、鎌田、手島



一九二八年九月八日、第五回競島旗争奪戦はアリアンサに二敗した傷心のミカドチーム(パレストラ蹴球場にて)。  
左より安養寺、高野、高野、小栗、越智(後縁谷)栄、市川、竹下、完一、神田、貞、樋口、謙三、原藏風、神沢(神沢氏提供)。

◎昭和三年九月十五日 (593号)

ミカド倶楽部へ (日、九月十五日)

十三男

▼今年度の野球リーグ戦ではミカドが脆くも敗れた。勝敗は

時の運、それが惜敗であれ惨敗であれ敗けたことそれ自身に就いては、側からかれこれ言うぶき筋ではないが、其敗因に關する限りそこばくの批評は許さるべきだ。

▼今次の試合におけるミカド軍の敗因は、技術の劣等なるためではなく、一に団体精神の欠除によりそれは又先般俱樂部改革の際における役員選挙に萌ているのだと部員がいう。然らば今度のゴタゴタはすでに前から部員の間には予知されていたのだ。然るにも拘わらず伯国野球協会の代表者の如く触れ廻りアリアンサを招待し大きな広告を出して殊勝らしく寄附を募る。正に人もなげなる振舞ではないか。

▼今日世界いづこの国に於てもスポーツの全盛時代である。何が故に斯くも盛大になったか、それは運動精神が尊いからだ。虚心坦懐である。和衷協同である。浮世の凡ゆる邪念妄想を忘れ去り、純正無垢な心境に安住するところ、正に運動精神である。

走り、泳ぎ、投げ、蹴り、打つのも皆一様にこの境地に到達せんがための努力に外ならぬ此心掛をよそにしては如何に優秀な技術を有するとも運動家とはいえぬ。それだけなら山に海にもっと勝れた技術を持つ動物がたくさんおる。

▼真の運動家とは運動精神を把持するものに限り与えられるべき称呼であらねばならない。倶楽部内一役員の席を争い己の顧られざるを遺憾としてツムジを曲げ更に試合の当日に臨んでグヅつき一軍の士気を阻喪させて愧ぢない徒輩の如き若し彼が運動家を以て自ら任ずるならば、寔に神聖なるべき我が運動会を毒するものである。

▼ミカド俱樂部がバガブンドの寄り合のように世間から取沙汰されることのある理由は其部員中に斯かる腐傷漢の何時もながら一、二存在するが為であろう。然らずして運動精神に終始する団体であつたなら誰人かよく之を非難し得よう。ミカド自身を生かす為には斯かる鼠輩を駆逐して仕舞わねばならぬ。その意思其勇氣がないなれば、在伯同胞の名誉の為、一時もはやく消えてなくなつてくれ。

▼リーグ戦のある毎に寄附金の募集に苦勞するとつぶやくミカドの幹部も少し此点顧るところがなければならぬ。分配下の団体も充分統一し得ずに伯国野球協会世話人は笑わせる。今後かかる子供だましお座なりの興業に寄附金を出すものは余程の酔興者であろう。

▼世間は正直に運動精神に尊敬し又熱愛するミカド俱樂部員中一片の誠意を有するものあらば、部内に真の運動精神を充滿させよ。そして速かに新生のよろこびに浸れ。ミカド俱樂部更生の為に一言を呈する。

#### ◎運動界 御大典祝賀会（時、十一月十日）

ミカド運動俱樂部では御大典を祝し野球及び蹴球試合を行う事になった。プログラムは午後二時よりミカドセンドチーム対義塾野球午後四時よりミカド対サンタエレナ蹴球戦。

#### ◎参考

第五回鮫島旗戦が終つた後、ミカド俱樂部に反省会ともいえる会合があつた。その席で常盤のパパイ（石原桂造）は選手の一人一人に強い反省を求め、同時に将来に備えての各自



の確かな誓いを要求した。この時各選手は、「この次は必ず勝つよう頑張ります」といったが、中に一人竹下完一選手は「自分は今婚約中で、間もなく結婚する身、どのような誓いも立てるわけにいかない」と述べると、石原はその場から竹下に退席を命じた（竹下証言）。後日竹下を慕って集った若い選手数名あり、これが旭チームの結成となったのである。

旭チーム結成後間もなくミカドと対戦する機会があり、旭の投手は竹下で、四回まで旭二点入れて先行した。この時の石原おやじは顔面蒼白、苦痛の表情であったが、旭軍の連矢で逆転、四対二でミカドの勝に終わったという。竹下の後日談。

## 弓場勇論

横田守正

はじめに

弓場勇が、「ブラジルの野球」の中で、いかに大きな存在であったかは、以前から充分承知していた筈であったが、この野球史の編さんで、各方面から調べを進めていくにつれて、それはまことに想像のほかであったと、改めて識ったのであった。

では、どのように大きかったのか。それを解明し、書き残すことがこの稿の主眼である。

まず最初に断っておきたいことは、この論は、あくまで筆

者個人の感じであるということ、従ってこれが実際に正鵠を得ているかどうかは、全く私一人の責任という点である。

弓場勇の野球が、技術的にも精神的にも、まことに高度のものであったという点は、彼と直接技を競ったことのある凡ての人の証言であるが、ただそう書いただけでは、その実際の万分の一も、いい表わしてはいない。というのは、彼の野球は、全く文字通り彼の命を賭けたものであって、そこら辺りのいいかげんな、努力とか頑張りなどは、根本から違ったものであったといえるからである。

例えていうなら、水のしたたるような真剣白刃の下に、己れの首根をさらけ出して、一点に目を据えた昔の修験者の姿。世の冒険登山家や探険家たちが、身の危険を承知の上で、あえて高所に、氷壁に挑んで行く心。全くそれらと寸分違わなかったのである。



一九二七年

第一アリアンサ

脇

手島

弓場

山田

(脇氏提供)

ではどういう風に彼の野球が他の者達のそれと違ったのか、又どうしてその違いを分解するのか。非常に難しいことであるが、以下その解明に全力投球をして見よう。

彼を知る殆んど凡ての人達が、彼の野球や彼の行動。この行動というのは、彼の思想、生活、事業など全てを含めたものを意味するのだが、世の平均的な人達のそれと、とほうもなくかけ離れた、異常といってもよい程のものであったことは、よく知る処だ。

この彼の野球と行動の二つは、全く時限の異ったもので、この二つは全然別々であるとして一般からは思われていた。要するに彼の野球には、あのスポーツが持つ純粹なものが、大きく見られたのに反して、行動の方にはそれがなかつたと受取られていたのである。

処が、よくよく考察して見ると、関係ないどころか、二つの起源は全く同じであり、一つであった。彼の野球を語るには、彼の完遂した、この怪異ともいえる行動を抜きにしては語り得ないと知って、筆者は彼の野球だけ書くという当初の予定を変更して、あえてその行動の一部にも触れることにしたのである。

## 弓場の野球

弓場が野球をはじめたのは、生まれ故郷の三田中学だといふ。兵庫県下の中等野球（現在の高校）で優勝したとも聞かすが、甲子園の全国大会に出たという話はない。当時すでに有

名で後に慶応大学の強打者となった山下実と対戦して、二回も三振に打ち取ったとは、彼が常々語った自慢話の一つである。この話の裏づけとなるのは、彼と同じ一九二六年に渡伯した谷垣正巳が、渡航手続きの時、係りの人から、弓場勇という物凄いピッチャーが渡伯したと、話していたと晩年に語っていた。つまり谷垣が渡航する一カ月前に渡伯した弓場が、すでに県下で有名な投手であったという話である。谷垣と弓場は、同じ兵庫生まれで、生年も一九〇六年、渡伯も一九二六年と同じだが、谷垣は六月着伯、弓場は五月二十七日サントス港着。

どちらも無類の野球好き、谷垣は甲子園に出場しているが、弓場の出場が語られていないのを見ると、弓場は県下の予選に落ちたのでなかるうかと思う。

弓場は最初から投手である。彼の投球は真正のオーバーストンドであった。マウンド上にボールを握って立つと、打者の入るのももどかしく、大きく腕をふりかぶり、胸を張って投げ降すのである。第一球は必ず外角に決める直球だ、この直球はウナリをもってアップして来たという。その次はこれも必ずドロップ。或る時は右打者の肩から、又ある時は真中高目から外角の下角にドスンと落ちる。打者の目の前で直角におちる感じ、アツと息をのむ間もない。この辺りの説明は、永い間好敵手で、この球に立ち向ったチエテ軍猛者達の語るところである。どうにもならない猛烈なスピードのこの二球は、いくら早く振っても球が捕手のミットに先に納まるのであった。

たまたま当ると一塁側へのチップ。何とかならないかと、苦

心の末に考えた攻撃法は、バント攻めだったという。何んと一年間、ぶっ続けにバントの練習をしたのだとは、当時チエテ軍の四番打者北出末男の述懐である。

弓場が投手守備に意外にもろかったとは、共通した相手打者達の評である。足許に転ぶ球を拾って一塁に投げる送球は、きまつて大悪投だったという。何故だろうか。一球に魂のすべてをこめて投げ込んだその直後は、一瞬放心状態となるのでは、という人もある。然し矢張りこれは、彼の人となり、要するに彼の性格のあらわれと見てよいのではないかと思う。

家族と共にサントス港に上陸すると、アリアンサから出迎えに来た輪湖俊午郎から、「ブラジルにも野球があり、すでに邦人間では数年前からミカドという野球倶楽部が出来ていて、アニニューマスという海外興業直営の植民地にも球団があり、南聖のレジストロにも十数チーム組織されていて、仲々賑やかである。特に一九二四年からは、伯国野球リーグ協会主催の下に、金色の大優勝旗の争奪戦が行われていて、今年九月にもその第三回大会が聖市で開催される予定である」との話聞いた。

国を出る時に、果して自分の一番好きな野球が、ブラジルでも出来るだろうかというのが、彼・勇ただ一つの心配ごとであった。ともかく道具は持って行こう、道具さえあればキャッチボールも出来る。植民地の青年を集めてチームを作り、野球を楽しむことも出来る筈と、数個のボールとミット、グローブを船に持ち込んだのであった。

こういう彼に輪湖の話は、全く思いがけない喜びだった、

驚きでさえあった。

あわただしい上陸、そして長い長いガタクリ汽車の旅、着いたところは、猛暑肌を刺す太陽や、天を摩す自然樹の中に立って、植民という現実がいかに空想の夢をかけ離れたものであるか、思い知らされたのであったが、この時に気付いたのが、ほかならぬ野球であった。" そうだ野球をやろう " 野球こそは凡ての力を吾らに与える源泉だ。何を置いてもまず野球だ。

早速チーム作り。これは案外簡単だった。同じ時に入植した植民者は五十数人といわれるが、その中に東京の力行会本部で同じ釜の飯を食った鎌田讓、佐藤俊二郎、脇俊雄などがある。この連中はみな旧制中学の卒業生ばかり、野球の経験中にも同好者がいて、人数集めにはこと歎かなかった。樹を伐りトッコを抜いて球場作り、練習を始める。在植者の中にレジストロ植民地からの転住者がかなりいて、すべてに好意的協調的だった。が、いざサンパウロへの遠征、その費用はとなるとそう簡単でない。弓場は持参した金を協会事務所から引出してこれに投入したのである。

さて聖市に着いて見ると、レジストロもアニューマスも来ていない。結局ミカドと三回戦を行うことになる。第一戦は二十二対十で簡単に勝ったが、第二戦は逆に二十三対十二で敗れ、一勝一敗。これまではアクリマソン公園。第三戦は舞台をコンデ街坂下に移して対戦したが、前夜の雨でカンポが物凄くぬかっけてとてもすべる。

ミカドチームはスパイクを用いているがアリアンサはズック

の靴だ。肝心な時にすべつての失策が多く、文字通り惜敗、五対三のスコアで敗れた。試合経過を見ても、観戦記者の評を読んでも、勝敗の鍵はスパイクの有る無しだったという。然し敗因をただ一つスパイクとズック靴だけにかまけるのは如何かと思う。試合の内容をよく見極めるために、点の入り方と、その歩みを調べてみよう。

ア 000010002-13

ミ 11011001×-5

一回Ⅱア軍の攻撃、木村、渡辺四球、二死の時山田も四球で満塁、庭瀬遊葡で無為。ミ軍は北原四球、この後投手一塁に悪投で三進、一死の後竹下も四球二盗、曲尾を三振に取ったが、野村の遊葡矢で一点。

二回Ⅱア軍二死の後、弓場、瀬戸共に四球、木村三振。ミ軍、一死の後神田三塁に安打二盗、手塚の三振捕逸で神田三進、北原の右飛矢で一点を加う。

三国Ⅱア軍一死の後、鎌田中前安、山田投葡を竹下二塁に悪送球で二・三進、庭瀬四球で満塁、大山、木村凡打。ミ軍山田安打、竹下、曲尾、野村共に凡退。竹下投手二度日の満塁策、弓場は好投。

四回Ⅱア軍弓場一死、瀬戸二死、木村二矢に生きたが渡辺三死。ミ草原一死、村田捕前安、捕逸で村田三進、投手の牽制悪投で又一点。神田、手塚凡死。

五回Ⅱア軍鎌田遊前安打、山田一死の後、庭瀬左中間二塁打で一点、大山四球、これも一塁埋めか。捕逸で二・三進、木村投葡、弓場左飛。ミ軍一死後、竹下遊葡一塁低投で二進、

曲尾二死、又も捕逸で竹下三進、野村二度目の遊葡矢で一点、原三死。

六回Ⅱア軍瀬戸中飛失、木村四球、渡辺投葡瀬戸三封、木村も刺さる、鎌田遊飛。ミ軍村田、神田、手塚共に三振。弓場の豪球うなる。

七回Ⅱア軍山田、庭瀬、大山共に凡退。竹下の魔球も冴える。ミ軍北原、山田、竹下三者三振、弓場の投球いよいよ本領発揮。

八回ア軍弓場の四球のみ。ミ軍原、村田で二死、神田三遊間を破り二度目の安打、手塚二塁失、北原も二塁矢で又一点。山田三死。

九回Ⅱ五対一でア軍最後の攻撃、この回のトップ主将の渡辺雄棍一打、見事中堅頭上を抜いて二塁打、鎌田二葡一塁に悪投で一点二進、山田四球、庭瀬三葡で鎌田封一死、山田果敢な三盗、大山四球（おそらく敬遠）捕逸で山田ホームイン、木村三球三振で二死、続く弓場、神に祈り仏にすがって、一打逆転を誓う。然し竹下、そうはさせじ。四球又も敬遠策だ、切齒擔腕五度目の満塁も、瀬戸の投飛に終る。

ミ ア

3	5	3	4	打
5	4	4	安	
1	1	5	3	
3	1	1	4	
5	4	盗		
6	1	0	失	

前記の記録で目立つのは、三振アの五、ミの十一、四球の



ア十二ミ三である。弓場の投球が豪速球で、よく敵の好打者を三振に打ち取ったのは判るが、ミ軍の得点全部が、失策によるもので、走者二塁或いは三塁の時である。一方ア軍の点、五回は二安打、九回も二塁打（無死）が得点となつてゐるほか、五回もの満塁は竹下投手敬遠の満塁策戦で見事危機をのがれていることである。弓場が己れの力を頼りに強引な勝負を挑むに反して、竹下は、冷静な情況判断、その都度大切な敵のチャンスを巧みにかわしている点、頭腦的管理野球といつてよく、その上魔球をよくし、コントロールもよかつたのではないか、と判じられる。ともかく、天上天下独尊、われに勝ちうる者やある式の弓場に、この一敗は（二敗だが二戦目はみかんの食べ過ぎ、下痢敗け、これははずそう）普通なら頂門の一針だが、ただ敗因を、ズック靴一つにしている処が、弓場野球の一面と見て間違いあるまい。

勝つことしか知らない野球、それが負けたのであるから、この一敗を弓場が、いかに嘆き、いかに悲しんだか。あたり憚からぬ豪泣だったとの当時の記者の言葉が、よくいい表わしている。天を仰ぎ地に伏して悔んだ直後、この仇、是が非でも討たずんばの決意、これこそは彼の野球の凡てであつた。



一九二七年

第一アリアンサ

脇俊雄

（脇氏提供）

一九二七年、永かったこの一年はようやく終って、遂に来た第二回の聖市遠征は、充分な練習と準備にこと欠かなかつたが、肝心の遠征費の出処がない。一家中で働いて収穫を終えたばかりの粕の山を売り払って金を作る、父君の為之助が、殺してやるといって、追い回したというが、それも家族への狂言だったとか。息子よ、やって来い。父親の胸のうちであつたであろう。

八月十三、十四の両日、アクリマソン公園に、再び相対したミカドとアリアンサであつた。両軍ともかなり選手の入れ替りはあつたが、復讐の一念に燃えるア軍弓場の前に、ミカドはもうものの数ではなかつた。第一試合七回暗黒中止までに二十四対三、疾風吹きまくる中の木の葉である。翌日の第二回戦も、二十一対十一、錦糸に輝やく大優勝旗は、アルエラの太枝のような弓場勇の腕に、高々とかかげ揚げられたのであつた。

一九二八年、三回目の聖市遠征は、九月七日からアグア・ブランカのパレストラ球場（現在のパルメイラス蹴球場）で行われた鮫島旗戦第五回大会である。ミカドチームとは十六対十一、十六対五で共に楽勝し、このあと在聖米国人チームのパレストラとの交歓試合には十対九で敗れている。

一九二九年の第六回大会は、前年と同じパレストラ球場であつたが、アニューマスに十二対一、決勝のミカドには十六対五、それぞれ一方的な大勝で三連覇し、鮫島旗を獲得して帰植した。ついでに米人チームをも一蹴し、昨年のを返して、名実共に天下一である。

尚この年のアリアンサは、リンス市で一カ月の合宿練習をしたが、折柄ノロエステ線を遠征中の、浅見哲之助率いる聖州義塾チームと練習試合をし、又ゴヤンベールとリンス野球人の混合とも試合をしている。このゴヤンベール・リンス混合とは、七回で五対四、ア軍は投手鎌田、捕手手島、混合は投手加治木、捕手土原で、ア軍が敗れたと、八月八日付の時報にも、八月九日付けの聖州新報にも載っているが、この試合の後で、もう一つ練習試合があり、それが弓場勇と進藤憲吉の、初顔合せとなったのではないか、と思われる、かなり確かな証言がある。

その証言の第一は、元ミカドチームの名遊撃手西村英一（一九七九年三月亡）が、一九七八年六月編さん要に寄せた手紙の中に、「昔リンスで、アリアンサと地元のリンス、ビラツキの合併メンバーが試合をしたことがあった。此の試合は、進藤と弓場の投げ合いで、一対〇で合併軍の勝利、所要時間一時間位いの模範試合でした」とあり、後日私たちが、西村を病床に見舞った時も、この試合の素晴しかったことを語って、自分も合併軍の一人だったと語っていたこと。

また進藤憲吉口が、生前竹田仙造にも横田にも、「俺は昔リンスで、弓場と試合をして勝っている」と語っていたし、その試合は、丁度リンスに遊びに行った時、弓場が野球をしていると聞いたので見物にいくと、「お前野球やるのか」というので、「やるよし」というと、「それじゃやろう、もしお前が勝ったら、サンパウロの大会で貰った優勝旗をお前にやる」というので始めた。こちらは、そこいらの何も知らないやつらを集めてね、やったら勝っちゃった、優勝旗なんかい

らないっていったんだ、という進藤の話である。

どうやらこれが、弓場、進藤の第一戦と見て間違いないようである。当時の進藤はカフェランジア、西村はビラツキ在だが、腕に覚えの両人、全伯一アリアンサ軍合宿と聞いてのリス訪問は、うなずける話である。アリアンサ側から、また地元リスの野球関係者から確証の得られないのは、なんとも残念というほかはない。

## 弓場と進藤

ブラジルの野球史には、是非とも書き残さなければという事件は沢山あったが、そのうちでも、弓場と進藤の対決は、まことに劇的な幾たびかの決闘であった。

その第一回が、前述のリス市での出会いで、結果は一對○、最初の軍配は進藤に挙げた。

この試合は、弓場がサンパウロにおいて、すでに二連勝し、天下の弓場という満ちたりた自負のうちに練習していた時に、突然現れた名を聞いたこともない進藤という者に、一手指南をと、至極軽く立向ったもののように見られる。一方進藤は、弓場の名を知りつくして、その練習振りやいかにと見物に来て、手合せの機会もあらばと考えていたであろう。丁度よい弓場からの誘いに、同じ見物人の中から、リス、ビラツキの者など、急ごしらえのチーム編成。

西村英一の遺筆に、所要一時間、稀れに見る模範試合とあるから、結果は一對○、投手戦であったと見るのが妥当と思われる。

ともあれ、この試合によって、両人はまことに得難い好敵手を、まことに不思議な偶然によって、探し当てたのである。この二人の出会い、それはたんに二人の為ばかりでなく、ブラジル球史に輝きを添える、大きな出会いであったといえるであろう。

第二回目の対決は、一九三二年四月、第三回ノロエステ大会、ビラツキである。

ノロ線大会もすでに三回目、参加チームはアリアンサ、リンスのほか、チエテと地元のビラツキ。この数年中に、聖市は元より、ソロカバナ、北パラナ方面にも、野球熱は洪水のように拡がって、各地に好選手が数えきれない程生まれていたが、中でもアリアンサの弓場は、技術的にも最も力を高めていた頃。その上、名手山岸の入団で、チーム力は一段と充実している。一方昨年からリンスに移り住んだ進藤も、竹田兄弟を入れて、これも攻守に万全を期している。スケジュールは進み、決勝はアリアンサ対リンス。両雄の対決には、まことにその所を得た、いわば川中島の決戦となった。弓場は不覚にもリンスで一敗の汚名をうけた進藤に、今度こそは是が非でも雪辱をと、心深く誓ったであろう。千余の大観衆見守る中に、両軍の一投一打は、文字通り火を吐いて、人々は吸い込んだその息を、しばしば止めていた。試合は九回で二対二、十回又も四対四、十一回の裏ア軍宮崎選手の一打で五対四で終幕したのである。

この試合は、球史に香気高い一頁を加えただけでなく、弓場、進藤二人の胸のうちに、固くして溶けることのないライバル意識を深く打ち込んだ、まことに意味多い一戦となった

のであった。

三回目は、翌三十三年六月、バストス球場での第二回ノロ、ソロ大会である。この年のアリアンサは、主戦投手で主将の弓場は勿論、捕手宮崎、一塁望月、ショート山岸など、チーム全体が充実していて、その張り切り方は全く物凄かった。一方リンスは、進藤投手、竹田兄弟など、かなり揃ったメンバーであったが、肝心の進藤が、日伯新聞リンス支局の仕事に追われていて、満足な練習も出来ず、緒戦にアリアンサの猛打を浴び、マウンドを降り、高松らの救援をうける始末、竹田兄弟、高松などの奮闘も空しく、結果は十三対三リンスの無惨な大敗に終わっている。

次の出合いは一九三七年である。進藤も竹田兄弟も、その前年に聖市に移り、中央の球界が爆発的なにぎわいを見たのであったが、各地の野球熱も素晴らしく、特にノロエステは、常勝アリアンサの弓場を先頭に、チエテなどの強豪チームの台頭と、伝統のビラツキ、リンスなどと共に、ノロ線大会。ノロ、ソロ大会など数多く催されていた。このような全伯的な発展期に入った機運を、いち早くつかんだ進藤は、是非とも全伯大会開催をと、その主体を作る目的で、聖市球界を一丸とした野球クラブを設立、その名称をサンパウロ野球倶楽部とした。勿論これらの凡ゆる連携的な運動には、石原桂造、竹内秀一、野村忠三郎、高野富継、竹田一家その他、球界先輩たちの強力なバックアップが、あつてのことであるが、その中心的頭脳は、いつも進藤憲吉その人であった。

各地の球界首脳たちに了解と賛同を得て、ようやく第一回全伯は開催されたのであったが、この時も進藤は第一番に弓

場に相談と賛成を求めた。しかしこの最初の大会には、ア  
アンサは参加しなかった。というのは、弓場の主張は、以前  
から全伯大会というものは、各地方別に予選を行って、その  
勝者たちが各地球界の代表として、参加しなければならぬ  
という論理であった。この論旨は、まことに筋の通ったもの  
で、日本の中等野球を範とする方式論であった。

しかし何としても、その第一回を開催するには、いまだ各地  
の球界が、そのような構成の行える情勢にない、多くの地方  
では、聖市での大会に、参加可能のチームが、それほど多く  
ないというのが進藤の見解である。このような論拠の相違の  
ほかに、これとは全く別に、進藤と弓場との間に、政治的な  
おもわくともいえるものが、大きく作用したと思われる。こ  
のような事が、その後も幾度かあったのと思ひ合せて、筆者  
はこの兩人の間に、別な面でのライバル意識が強く、しかも  
常に、あつたと思うのである。このようにいきさつがあつた  
が、一九三七年九月の第二回全伯、聖市ポンテ・ペケーナの  
大会には、アリアンサも出場して、A・Bリーグ。最後の決  
勝戦には、四回目の進藤、弓場の対決が実現したのであつ  
た。

この年は前年まで、弓場の片腕的存在であつた名遊撃手山  
岸が聖市に移り、サンパウロチームは、谷垣正己、山下寛人  
などを入れて、一段と強化したこともあつて、試合は七対  
二、ア軍は泣く泣く敗退した。

この時の弓場の嘆きようは物凄く、山岸に怨み言葉のかぎ  
りを尽したという。このうらみ如何にしても果すべきの誓い  
を、天地の神に誓つたのである。全員頭を剃り、丸坊主に

なつて帰つたという有名な話は、その誓いの固さをよくあらわしているし、尋常でない弓場の野球を、充分に物語っている。

一九三八年、第三回全伯大会の初日、九月二日の第二試合は、蓋しブラジル球史の中で最大の決闘ともいわれる大試合となつた。

今年の大会は、前年までの二回、サンパウロ倶楽部主催と  
いうことであつたが、球界の強い要望を入れて、日伯新聞社  
が主催者となり、文字通り球界挙げての総力結集で、会場も  
コンデ街坂下のスタン広場のまん中に、白い天幕を張り巡ら  
して、入場料をとつての本格的な野球大会であつた。

前まえから語り伝えられているだけに、コロニアはすでに  
この日の来るのを、胸とどろかして待ちもうけていたのであ  
るが、わけても聖市のコンデ街は、集まる珠玉の六球団の中  
でも、昨年の覇者サンパウロと、それに敗れて済把の涙とと  
もに帰植したアリアンサ、天地に誓つた復仇の二心に燃える  
ものの立会いは、果してどのような結末を生むであろうか  
と、直接野球に関心のあるものもない者も、かつて経験した  
ことのない興奮のうちに、迎えたこの日であつた。

型のように、三浦鑿日伯社長試球式は、第一試合バストス  
対聖西戦の前に終り、内外の来賓や、大観衆の見守る中で、  
午後一時二十分、横沢球審の右手が高く上り、決戦の火蓋は  
切られ、サ軍投手進藤の右腕から投げおろされたその第一球  
から、人々はこの試合の物凄さを、いや応なしに、知らされ  
るのであつた。

進藤、弓場の対決、今やその第五回目である。過去の四回



は、リンスでの一対〇進藤。二回目ビラツキで五対四弓場。三回目バストスで十三対三弓場。第四回は昨年 of ポンテ・ペケーナで七対二進藤と、丁度二勝二敗のタイで迎えた今回である。

進藤は三十八才、弓場は三十二才。これが最後になるのでは、と胸のうちの進藤は、かつてない練習のはげみよう。連日子分本郷を相手のキャッチボール、またバックに名手山岸、中林、竹田富を揃えて、すでに過去四回で知り尽くしている熱血児弓場を迎え撃つべく万全を期している。

一方ア軍は野に山に、鍛え抜いて赤銅いろに染め上げた顔、腕、脚。それに鍋、釜、米、味噌、フェイジョン持参で、トマス・デ・リーマ街の地下室に数日前からの合宿である。何れの面でもまことに対照的な出会いであった。

第一回ア軍無為のあとをうけて、サ軍は一死の後、武藤捕逸に生きる、三番竹田富、カウントー一三から左中間深く三塁打して、爆発的な応援の沸き立つ中に先取一点。三回ア軍も二死の後、佐藤一葡矢に生き、望月の右前安打で佐藤長駆三進、馬場の遊葡は名手山岸のグローブをはじき、佐藤ホームイン一対一。この後は両軍攻防の秘術を尽したが、弓場の超豪速球にあえなく三振を続けるサンパウロ。進藤無類のコメントロールに魔球よく冴えて、ア軍も無為を繰り返かえし、遂に迎えた最終回。この回のア軍一死のあと、トップ大山二塁右を抜き、宮崎の投葡で二進、続く藤沢中前に快打して大山勇躍ホームイン、二対二

この裏サ軍最後の攻撃、この回のトップ竹田富、衆望空しく中飛、山岸も三飛で二死、続く中林の一打ショートハンブ

ルに生き、二盗また三盗、猛虎のような力走で二死ながら三塁に抛る。続く打者は竹田彰介。サ軍のベンチ騒然、一打同点か。投打まことに必死の形相である。ボールカウントは二―三、最後の最後の一球となった。

球運を賭し、神に祈ったこの一球は、弓場の振り上げた手を離れ、風を載って飛ぶ。この時や正に、三塁走者中林決然ホームに殺到、打者また突如のパント、球は投手の前に転ぶ。弓場必死につかみ、金剛力で一塁に送る。打者走者けん命に滑り込んだ。アウトかセーフか、千余の観衆の眼は塁審の手に集中、高野審判の右手高く上って、瞬間すべては終わった。ホロにがいア軍一年の苦節は、今報いられて、弓場はあたかも荒野に人影の無い如く、球友の誰彼をかきいだいて、声もなく泣き伏した、男の涙であった。

沸き上る大観衆のざわめきも、遠いとおい潮騒のように、彼の耳底まではように届いては来なかった。

かくて両雄最後の出会い、それは “巖流島” にもなぞらえられる血斗は終わったのである。

“ 脇俊雄の語る 弓場勇 ”

僕が最初に弓場を知ったのは、大正十四年二月、東京小石川区林町にあった力行会に入った時です。僕は東京生まれですが、弓場は兵庫県三田の豪農の長男で、彼が海外移住の為に、力行会入りを希望した時、父親の為之助さんは、クリスト教ならよかろうと行って許したということでした。

一九二六年二月八日、初航海のさんとす丸でブラジルに着

いた自分は、村上真市郎氏のお世話で、ピニエイロスから九kmの、加藤さんという人の処で、半年ほど諸作りをしていたのですが、何としても淋しい。同航した七、八人の友達も散り散りで、語り合う者もない毎日でした。

同じ年の六月、力行会の青年数人が、アリアンサに入植したので、懐しさもあって、自分もアリアンサに行きました。そこには弓場一家、鎌田譲、山田幸保などもいました。



一九二七年  
第一アリアンサ  
鎌田 山田  
弓場  
(脇氏提供)

僕は信濃海外協会中央部のカメララーダでしたが、弓場は相  
当に資産を持った家の長男で、写真機なんか持って歩いて、  
仕事なんかしなかったですよ。弟さん達は一生懸命働いてい  
ましたけれど。

彼は、三田中学のピッチャーで、県の大会で優勝したとか  
いっていました。また後に慶応で有名な選手になった山下  
を、三振にとったともいっていました。間もなく植民地の青  
年を集めて、野球チームを作りました。あそこに入った青年  
たちは、たいがい中学を出ていましたから、チームは割に簡  
単に出来たのです。僕も彼の強引な奨めでサードをやりまし  
た。日本では余りやったことは無かったのですが。最初のメ  
ンバーは、忘れましたが、田中という産業組合の理事長、そ

れに鎌田、山田、キャッチャーをやった木村、鈴木威さん、大山。相馬というのがいました。東京新宿の有名な菓子店の息子です。後にアマゾンに行つて亡くなりましたが。勿論弓場がリーダーでキャプテンでした。鎌田も相馬も、お坊ちゃんでおとなしかったですから。それに二人ともとてもアツサリした性格でした。

ともかく、あそこの青年達は、みんな夢を持っていました。空を眺めて星の話をするものとか、想いおもいに未来を描いて、語り合っていました。自分が今でも思うのは、アリアンサ時代が一番楽しかったと思います。

弓場もその中の一人だったのです。彼のした事については、或いは色々批判もあるだろうと思います。人間ですから誰でも長短は持っていますよね。彼の場合は、他の人にならない強引さというか、強引にひっぱっていく力というか、それが特長といえるでしょうね。それが異常と見られた点でもあると思います。自分なんかも、全面的に賛同というのではなかったけれども、彼のその強引さにひかれて、一年半、一緒にやったということですよ。

## 二面の弓場と進藤

横 田

弓場と進藤が、生涯のライバルとして、対手を意識し対抗したのは、第一回のリンスから第五回のスダン球場までであるが、それはあくまで球場での技の勝負であった。これとは別に彼ら二人の間だけに、常に、しかも根強く意識した対抗があつたとは、前述した。

それは何か？ について、具体的なことを書いていこう。ブラジルの野球が、日系コロニアの中に育まれ成長したことは、万人が認める通りである。

日系コロニアが農村に始まり、農村に栄えていった必然の結果として、当国の野球もその中に育ち発展していったが、一方聖市コンデ街に始められた野球も、その時その時の進みに従って、数量ともに向上していき、この農村と都会が、あたかも車の両輪のように、相磨し、噛み合って、今日の大を成したのがブラジル野球である。

弓場は常に「農村野球」ということを口にしていた。それは「街の野球」への対照としてでもあったが、野球が農村の発展興隆に寄与貢献したという事実を踏まえての意味のほかに、彼の属しない他のものへの、独特の感情、一種の嫌悪感と、彼の生活上の自衛手段とも見られるものが、加味されていたと思えるものがある。

最初に彼が上聖して、「矛」を交えた一九二六年の対ミカド戦の時から、「あの野郎どもは、山で働くのが嫌いで、街でブラブラしているバカブンド達」と軽蔑をこめて広言していたが、一九三六年、進藤や竹田兄弟などが出聖して、にわか中央の球界が活発化してくるに従って、折を見ては、わが里に人を集め、大会をすることに腐心した。その例がノロソロ大会、四移住地大会などの提唱である。

また全伯の第一回が開催された、一九三六年にも、「全伯なら地方別に予選を」という理論を表に、参加を拒否したが、何かそれだけが真正の理由ではなかったように、受取れる言動があつたというものがある。

一方進藤は、聖市に移ってから、一意全伯の開催に心を致し、多くの球友の合力を得て、遂にその第一回に漕ぎつけたし、また何時何処からでも、頼まれれば幾日でも出向いてコーチし、そして残した功績は、直接その手をとった幾百の選手、或いはその孫選手たちが、今日なお活躍している事実が、充分すぎるほど立証している。

それだけではない。第二次大戦後、進藤は直ちに青年層とタイアップし、オリンピック・ダ・シルバ・エ・サー（初代会長）や、鈴木悌一法学士（初代副会長）その他を押し立てて公式に野球連盟を設立したことは、伯国球界最大の功労者と賞讃連呼、金字をもつて書き残さねばならない一大業績である。

進藤をこのように活躍させたその奥には、彼があくなき野球好きであったということのほかにも、或いはそれに加えて、彼をこの面に狩り立て押しやったもの、それが弓場への対抗意識だと見るのは、穿ちすぎであろうか。このように見ると、筆者がこの論文の当初に書き入れた、兩人の出会いこそは、わが球界にとって、まことに大きな、そしてまことに得難い幸運であったと、いってよいと思うのである。

## 人間弓場

弓場という人物が、他に較べるものない全く独特の生き方をした人間であったことは、彼を知る凡ての人の異論なく認めるところである。

例えば彼の野球であるが、彼の野球が他の普通の野球人の

それと、全然異つたものであつたというのは、これまで繰り返し述べたように、普通の人の努力とか、頑張りとかと、その程度や方法が、ケタはずれて違つていた。何故か、又どこにそんな違いがあつたか。それは、彼の野球は、勝つことしかない。負けるということとは、彼の頭の中には、鶉の毛で突いた程もなかつたからである。誰でも試合をするからには、勝とうと思つてする、というであろう。然しその裏で、負けることもあり得ると、考えなかつたとは言えまい。彼はそれを考えたことがない。つまり異常だつたのである。

一九二六年、出聖してミカドと対し一勝二敗、観衆の面前で号泣した。一九二九年リンスで進藤に敗れ、結果は彼の口から一言もない。一九三七年、カーマ・パテントで敗北、全員丸坊主で帰る。敗けてならないものが、この三試合完敗したのだ。

その時どうしたか。彼は神仏に天地にその復讐を誓い、そしてそれを実現している。ミカドにはその翌年に、リンスのはピラツキで、そしてカーマ・パテントのはスタン球場で、見事その誓いを果している。決して負けない、負けたら必ず何がなんでも勝つてお返しする。これが彼の野球であつた。

野球以外の行動。彼の思想、生活、事業なども、ここに詳述する材料を持たないが、要するに、彼が世の常と全く異質のものであつたことを、記憶するものが多い。

そしてその異常性は、一体何から来たのか。何によって備わり、彼の性格となつて一生を支配したのであるうか。

筆者はこれを、彼の生まれ育つた環境ととるのである。

彼は兵庫県下の豪農の嫡男として生まれた。豪農というの

は、藩とか国とかと同様に、富あり、手兵を持っていた者さえある。その嫡男は、要するに殿様なのである。殿様は文にも武にも秀いでいて、人々の師表とならなければならぬ。が、一方、彼を巡るありとあらゆるものは、彼の意の赴くところ、活殺取捨勝手である。これが彼の一生であった。野球に日常に、類を見ない彼の異常性は、実にここに起因したと思う。

彼は情熱の人であった、と同時に繊細な神経の持主でもあった。愛妻はまさんをめとった時の話が面白い。

色白でほほ豊かに、楚々としてにこやかに笑う。花ならば牡丹か芍弓薬、天使のような乙女が入植して来たのは、元力行会で同窓だった戸田医師（嘱托医信濃協会ブラ拓）の構成家族はま。一目で勇の心臓が破裂しそうになったのも無理はない。それからの彼は、夜もない昼もない、まぼろしを追う一人の若者となる。かわいそうなのは一頭のブーロ、時をかまわず少女住む窓ぎわに走って、帰っても飼葉、水もない、あわれ間もなく墓土となったという。左手で弾くバイオリンの音が、彼女の胸にどのような響いたか、バケツの水が何度か窓から飛んだとも聞くから、恋の成就もなまなかに易しいものではなかったらしい。結婚は一九三〇年、赤児を背に、声をからしての応援は、ビラツキにバストスに、はまとの夫唱婦随ぶりは、見るものを羨しがらせた相愛の仲であった。彼が写真やバイオリンに長じていたほかに、絵画にも並以上の関心をよせ、ながい間、聖美会のメンバーをわずらわしたことは、いまだ壮年の頃からであるが、何ととっても晩年の小原明子女史指導のバレエ団は、ただ働くだけが人間でない



と主張した彼の人生の、最後の華といつてよく、弓場勇という一個の生命をより強くより大きく、描き残す砦となった。



アリアンサ軍は遠征費を作るため山伐りをうけ負い資金作りをした、1928年ごろの写真。

“ 金原友治の見た弓場勇 ”

私がアリアンサに入植したのは、一九二八年六月だった。第三の移民収容所に着いたのは、十三日の夜であったが、次の日の朝、「おれも力行会員だ」と黒く日焼けした青年が現れて、「おいーおめえら野球やらねえか」と言つて、グローブとミットを出した、「面白い奴だな」と誘われるままにキャッチボールをした。この青年が弓場勇で、それから彼と野球のおつき合いをする事になった。

彼は野球では右投、右打ちだったが、食事の時のゴルフオ持つ手も、自炊の庖丁も、散髪し合う鋏やバリカン、写真を

撮る時、バイオリンを弾くのも左手だった。一見豪放磊落のようだが、細い琴線の持主だった。自分が入植した当時、彼は家には居らず、第一アリアンサ中央区の信濃移住組合、独身コロノ宮村の家に寝泊りして、何をしていたか、写真機を肩に出歩いていた。その時分、「迷える羊」と題したガリ版の小冊子を書いていたが、それには随筆随想、対談などがあった。ロマンチストだった彼は、トルストイに傾倒して、理想郷を夢見て移住して来たにちがいない。それが原始林の実生活では夢と違い、考えさせられたことだろう。殊に肉体労働は、大地主のお坊ちゃん、縦の物を横にした事もない彼には、苦痛ではなかったか。バラ色の夢がしぼんで行くにつれ、思い悩んだ。小冊子の題も、その頃の己の心をそのままに「迷える羊」とつけ、何かと模索の想いを綴ったのである。そうした中で彼は、唯一のごまかしの効かないものと思いついた。野球競技である。彼には中学時代にかなりその名を知られた実績がある。青年たちに呼びかけて野球を始めたい。これは彼の考えにぴったりで、情熱を傾注するに足るのであった。

然し移住地の開拓、原始林を拓き、カフェーを植えることと、スポーツとか芸術とかは、相当の距離がある。一部の人たちから白眼視されることがあったのも仕方のないことであつた。

後日、彼が同志と共同生活を始めたのも、当時としてはまだ草創期だった養鶏を大々的に始めたのも、理想の現実化であり、一方農場内に不遇の病人を引取ったり、配偶者を失つて途方に暮れている家族の世話をしたのも、また農場内の子

女でバレー団を組織し、我らの真実の生き方は、「農業することだ、芸術することだ」と喝破したのも、その人となりのあらわれであり、人間性の表現といえるのではないだろうか。

金原友治の略歴。

福島県白河市の産、一九〇九年三月五日生まれ、一九二八年六月八日着伯、白河中学時代に野球を覚え、アリアンサチームの二塁手として、弓場と一緒に上聖、ミカドチームと対戦、ア軍二度目の優勝に貢献する。

## 座談会

“ 弓場勇の印象 ”

一九八〇年八月二十九日

於、球連本部 元チエテ移住地出身 北出 末男 下  
大迫 茂

藤川 三郎 柴倉 節男

資料委 横田 守正 黒木 常彦

藤川 弓場は、オーバースロー一点張りで、オーバースローはいいんじゃないけれども、ピーゴロはもう暴投しよったもんなあ。

北出 あれが先生の欠点だった。だから弓場を攻めるのはバント攻めでね。

柴倉 ピッチャー守備は全然だめだった。大体球を拾いに行

かない、投げちゃったら、もう知らん顔しとった。

藤川 然しね、弓場はねえ、プレートに立ったらもう目付きが違うちよったねえ、眼が座つとつたでえ。

横田 中林さんの話なんかでも、進藤さんもよいピッチャーだったけれども、それでも進藤さんの球は、なにか打てるって感じだった。処が弓場のはてんでどうにもならんっていう感じっていったねえ。

藤川 私らも、佐藤やなんやかんやいっても、投げる段になつたら、やはり弓場じゃなあと。

北出 そりやもう弓場に敵うのは居らなかつた。

柴倉 弓場さんだけの豪球投手は、絶対に居らなかつたねえ。打つたらねえ絶対に打てないんだ、いくら頑張ってもねえ全然だめなんだ。球がキャッチのミットの中で、ボールと音がしてからチエテの選手はバットを振つとつた。それだけ球が速かつたんですよ。ところが遇に誰かがピーゴロを打つと、弓場はファーストに物凄い暴投を投げよつたですよ。

北出 それを見抜いてチエテは、一年間ブツ続けに、バントばかり練習したんです。それから弓場に勝てるようになって。弓場さんはピッチャーとしては、何んといっても第一人者。

藤川 弓場のオーバースローで抛ってくるやつは、アップして来るんや。みんなチップぽっかりや。それでアウトコーナーを第一球ね、ワンストライクを奪ったら必ずドロップや。

北出 そうでしたねえ。

藤川 清のドロップやなにやいったって、てんで違うんや。

横田 弓場さんの球が、アップするってのは聞いて知ったつたけれども、ドロップというのは知らなかった。

北出 ドロップは凄かったですよ。一球目は必ずドロップでした。弓場さんの球にや、僕は割り合いに強かったよね。

横田 北出さんはよく打ったんですね？

北出 いやあ。

横田 藤川さんは左バッター？

北出 いや右です。藤川君はいつも一番だった。

藤川 弓場が恐ろしかったのは、僕と死んだ斎藤君だった。

北出君はピンチにや強かった。

柴倉 あの頃は、みんな足が速かった。

(注) この話は、座談会、「チエテの野球」の一部。

### 別派のアリアンサ (その1)

(第二アリアンサ四十五年誌、井浦久造の記述から)

アリアンサの野球といえば、弓場と誰もが思いがちだが、その他にも第一、第二、第三や渡辺農業といった地域でも野球をやっていた。青少年の訓練にと、幾多の犠牲を払い、情熱を燃した先駆者が沢山いたのである。

一九二八年ごろは、まだ入植者も少く、山伐り、家作りなどで思いもよらなかったが、二十九年ごろには入植者も増え、キャッチボールをやり出し、コトベロ区とトラベッサ区にそれぞれチームが出来、対抗試合をした。

その時のメンバーは、

メンバー	
トラベツサ	コトベロ
香川 四郎	投 井浦 久造
大久保武雄	捕 堀 信一
白井	一 林田 信之
前川 (弟)	二 石井 満
前川 (兄)	三 望月太九郎
和久井 泉	遊 中島 正
平林稻太郎	左 遠藤 義徳
大坪 愛児	中 高橋 勝
曾根原	右 宮原 幹雄

大坪愛児は故人となったが、高橋勝は健在。

一九三〇年ごろから、弓場が提案したアリアンサ支部大会が出来て、全アリアンサ軍を結成して遠征したりした。

その後も世界的な不況、カフエーの暴落などの中に、青年たちに活力をと、青年会長香川四郎や副会長高橋勝など、ブラ拓の協力で中央グラウンドを作り、野球だけでなく青年運動の興隆にも努力した。

別派アリアンサ (その2)

竹内 冠記

一九三四、五年ごろ、リンスで全ノロ大会出場の話が出た

が、当時米一俵が六ミル。合宿や遠征費一人頭七十ミルは、とても大きな負担だった。だが全アリアンサ結成という青年たちの主張で、この犠牲にも堪え、この結果全ア統一青年団が出来た。当時のメンバーは、

投手 山本

捕手 前田

一塁 前川 武

二塁 石井 尉

三塁 目黒 清

遊撃 山本 章

〃 竹内

外野 前田 昇

〃 宮島 平

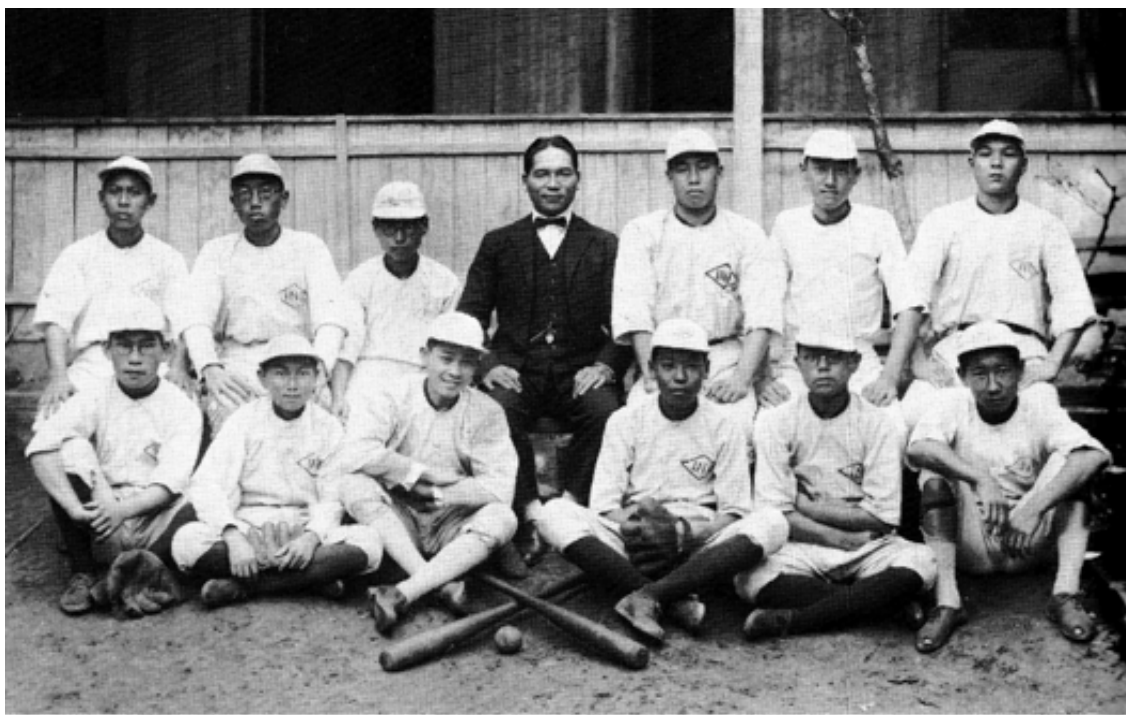
〃 松本 辰

〃 田村 幸

〃 細田 正

◎聖州義塾球史 尾関輿之助寄稿

当時サンパウロ市唯一の日系学園として、寄宿舎設備のあった聖州義塾（小林美登利の経営）には、地方から遊学のため出聖した数十名の塾生がいた、その大半は中学生または中等学校入学準備中の少年であったが、一九二八年五月一日に少年野球団の結団式が行われた。



1928年、聖州義塾に少年野球団結成さる。(浅見哲之助未亡人提供)。後列中央の黒服は小林美登利塾長、その右が浅見哲之助監督、前列左より、下元、蔵力、江沢、大内、尾関、森部、後列左より、菅山、森田、川原、小林、浅見、堀岡、松原。



監督兼主将は故・浅見哲之助であったが、この浅見が大の野球狂で、彼がその年の二月に青少年指導員として入塾してから野球熱が盛んになり、遂に短時間の間に野球チームを結成させることになったものである。

五月一日に結成したチームは、その月の二十日、当時唯一の混成チーム、ミカド・クラブのセカンドチームと初の手合せをし、十九対十三で敗退した。

越えて七月十五日、塾は同チームに対し第二回戦を挑み、コンデ街坂下のミカド・チームグラウンドで試合をした。

両軍のメンバーは次の通り、  
メンバー

義塾                   ミカド

下元(健)	投	杉野
浅見	捕	森山
森田	一	江沢
川原	二	高柳
菅山(守)	三	神谷
江沢	右	高橋
尾関	左	安達
大内	中	樋口
森部	遊	川上

戦績は次の通り(七回)

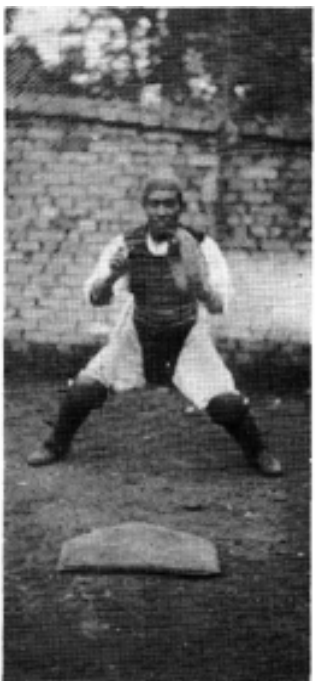
ミ           2501052-15

塾           0111033-9

またまた塾の敗戦となったが、当時の観戦記によると、塾軍は浅見を除き、全員少年で、これに反シミカドは大人のチームであった。

第三回戦はミカドグラウンドで九月十三日午後一時より挙行された。この日は見物人が多く、頓に有名になった塾対ミカドの対戦を見んものと、数百の観衆が十重二十重にカンポを埋めたと記録されている。

のメンバーにゆの通也



1930年、聖州義塾時代の浅見哲之助(監督一捕手)、(浅見哲之助蔵)。

スコア―はミ軍十対九塾軍  
両軍のポジションは次の通り、

メンバ―

塾

C F 川 原

P 下 元

菅山(守)

浅 見

2 B

尾 関

畑 野

江 沢

CF 森部

大内

ミカド

高柳 2B

山田 | F

田中 SS

塙 C

川上 CF

神谷 3B

松垣 1B

アマデウ P

江沢 RF

同年十一月四日、義塾チームは、全コンデ軍（旧ミカドのメンバー入る）とミカド・グラウンドで対戦、十五A―十という戦績で勝つ。

両軍ナインは次の通り、

メンバー

義塾 ミカド

川原 | F 1B シキンニヨ

大内 CF 2B アルベルト

森部 " 3B ユアサ

森田 SS 3B ユアサ

浅見 CS SS ハガソ

菅山(守) 2B P アマデウ

江沢 1B C ビンボウ

畑野 3B RF トシオ

下 元 P CF ビデオ  
尾 関 F F 高 橋

ついで十一月十二日アクリマソン公園運動場で御大典祝賀試合として聖州義塾対ミカド戦を挙行、ミカド主将森山、塾主将浅見、アンパイア原、観衆満場を埋め、ミカド軍は白地の日の丸の中にMという字を抜いた応援旗を先頭に応援団を送りこめば、塾側も赤十字の旗の中央に●（インスチット・ニッポ・ブラジレイロー正式の名称）という印を染めた応援旗を持ち出し、高、半田、両応援団長の下に、塾応援団は手に手に小旗をかざし、団歌を唱い、野球場の周囲は試合前から野次が飛び殺気立っていた。塾先攻で試合開始、

塾 020512-10  
ミ 103000-4

#### ◎年末試合

選手の帰郷前、同年の最後の試合をミカドと対戦する、十二月二日塾運動場、午後一時、十五対十四で塾辛勝。

◎一九二九年二月 これまでの野球団は塾友会運動部となる。その外ピンポン、バスケット部を設ける。

運動部長・浅見哲之助、野球部主将・下元健郎、同副主将・大内義雄、運動部会計・川原潔、野球部第一軍編成

投・下元、捕・浅見、一・大内、二・森部、三・尾関、遊・菅山

(守)、中・川原、左・児玉、右・畑中、補欠・佐藤(忠)、佐藤(精一)

◎一九二九年四月、旭クラブと対戦

十五対八で塾大勝、同十四日全聖市ベースボール・リーグに加盟、斥候戦として、対パレストラ（北米人）と試合、二十四対十五で大敗。

◎同二十一日 コチア青年野球部の挑戦に応じ最初の遠征（コチア）十四対六で大敗、この試合には、森田（遊）、江沢（二）、畑野（三）、退部していた。

◎一九二九年五月十二日 伯国リーグ戦、対パレストラ（白組）、塾の球場、塾先攻、スコアー、塾十四対八にて大勝。  
塾 3221006-14  
パ 3010130-8

このベースボール・リーグというのは、フットボールの国でベースボールを普及しようという趣旨の下に、アメリカ人と協同して設けたもので、コロニア側からは、旭クラブ、聖州義塾、外系側からは、パレストラ緑組と白組（アメリカ人）、ジエネラル・モーターとの五チームが参加した。

◎五月九日 初の塾対ジエ・モーター公式試合を挙行したが、初めから投手戦で両軍得点なく、六回まで二対一という珍らしい緊張したゲーム、七回・ジエ・モーター二点をあげ、塾は八回表で四点奪回し三点リード、その裏大雨となり試合続行不能、ドロンゲームとなり塾にとっては諦められない試合となる。雨の中を傘をさした観衆が退場しないほど緊張した見事なゲームであった。

義塾にもセカンド・チームが結成され、旭クラブの第二選手軍と、五月二十六日塾球場で試合、

旭 23010-6

塾 60034-13

注 少年チームなので五回。

塾チームの編成は、次の通り

CF 一ノ瀬 弘

SS 佐藤 忠

P 佐藤 精一

1B 畑中 忠雄

3B 蔵力 千秋

2B 村崎 重典

RF 大内 進

LF 畑中 浄治

C 藤井 正行

なお塾軍は冬休みを利用して六月十八日聖市出発、ノロエステ線遠征に出かけた(多くの本選手が参加出来なかった)。グアイサラ、プロミソン、リンス、アリアンサと各地転戦、六戦中、四勝二敗という成績をあげたが、アリアンサでは弓場、手島などを含むブラジルのチームと試合、四十四対六という惨敗振りであった。

## 浅見哲之助の略歴



浅見哲之助氏

浅見は愛知県名古屋の産、一九〇五年生まれ。一九二八年二月、二十三才で渡伯、聖市に小林美登利氏経営の寄宿舎、聖州義塾に日語教師として入塾した。聖州義塾は、地方の日系人有力者の子弟が、聖市で中等学校に入る準備のための唯一の寄宿舎であつた。場所は当時まだ家数も少いガルボン・ブエノ街、バロン・デ・イグアツペ角より少し入った処、後にブラ拓がその経営を続けた家である。

彼は物凄く野球が好きで、入塾早々、塾内の少年を集めて少年野球団を組織し、自らそのコーチ兼監督となり捕手をつとめた。結団式はその年の五月一日である。そしてその月の二十日には、早くもミカド・クラブのセカンドチーム、つまり第二軍と試合をしている。結果は十九対十三で敗退。越えて七月十五日には第二回戦を挑んだ。

場所はコンデ街下のミ軍球場、両軍のメンバーは、

メンバー

義塾

ミカド

下元(健)	投	杉	野
浅見	捕	森	山
森田	I B	江	沢
川原	II B	高	柳
菅山(守)	III B	神	谷
江沢	R F	高	橋
尾関	F	安	達
大内	C F	樋	口

森 部 遊 川 上

戦績はミ軍十五、義塾九（七回）

塾軍は浅見のほかは全部少年、ミカドは大人である。

第三戦はやはりミカドの球場で、九月十三日午後一時より。この試合は少年対大人で、しかも少年が善斗を続けているので、もう街の呼びものとなり、数百の観衆がカンポを十重二十重に埋めたと記録されている。スコアーは、ミ軍十、塾軍九の大接戦。

第四戦もこの年の十一月四日全コンデ軍と対戦、遂に十五対十の成績で勝っている。

十一月十二日、アクリマソン公園で行われた、御大典祝賀運動会に、記念試合として第五回日の対決となった。この試合観衆も多く、応援団も熱狂、結果は十対四、塾の大勝である。このほかにも新進の旭クラブ、北米人のパレストラなどと、次々に試合を重ねて技術の向上をはかった。

なお塾軍は、学校休暇を利用して、一九二九年六月十八日聖市を出発、ノロエステ線に遠征した。リンスを手初めに、グアイサラ、プロミソン、アリアンサ等を転戦、六戦して四勝二敗という成績をあげた。アリアンサでは弓場、手島などの全伯一のチームと対戦、四十四対六というスコアーで敗れた。この遠征は、塾の少年の見聞をひろめたほか、リンス球団発生の素因ともなっている。

彼は何年の頃か、パウリスタ線のベラ・クルース駅カスカッタ耕地にて結婚、後パラナ州トレス・バラス（後のアサイ植民地）に移住、バルサモ区にて日語教師をつとめ、ここでも野球の普及に力を尽し、木村正和、要一郎などの名選手



を育て上げた。アサイ野球の恩人である。大戦後出聖、破魔  
商会に勤めたり、洗染業も営んだ。愛妻との間に、一男、七  
女を得て、一九七五年、七十才で病没するまで、熱血漢の名  
を全うしている。

義塾、遠征の思い出

森部一希



前列左より

下元 健朗

浅見哲之助

菅山 守

児玉

弓場 勇

森部 一希

畑中 忠雄

川原 潔

江沢 晋二

聖州義塾の浅見暫之助先生と、弓場勇氏との間に手紙の通信が何回か行われた結果、学校の冬期休暇中にリンスで落合って、交歓試合でもやろうということになり、一九二九年リンスへ遠征することになった。

試合はリンスで二回、グアイサラで一回と、プロミソンでも一回やった。その他にリンスで急いでかき集めたチームとの間にも一戦した。この中に木村俐さんなどの顔があった位いしか思い出せない。

義塾チームは、グアイサラのうち（森部家）があり、チームの半分がうちに宿泊、残りはユニオンの内山吉蔵さんに分宿した。だからグアイサラでも一戦したわけで、プロミソンでも間崎さんや飯田さんなどが、よく世話して下さったし、アリアンサとの試合でも、かなりの好プレーヤーなどもいてよくやったが、その人が誰だったか思い出せない。

義塾でもチームメイトだった尾関興之助は勤め（同仁会）のため、残念乍ら同行出来なかった。あの時のメンバーは浅見、下元健朗、江沢の晋ちゃん、川原、畑中（元バストス市長）児玉、菅山守（故人）、大内などだった。アヴァニヤンダーバの滝見物に一日を過したりして、とても楽しい日々だったことを、今でも懐しく思い出している。

1929

### ▼運動界

（時、四月二十九日）

聖市野球速盟生る。

今般聖市に、聖市野球リーグが組織され、毎年優勝組を決定する事になった。参加チームは、ジェネラル・モーター、パレストラ、旭、聖州義塾の四チームであるが、第一戦は二十八日（日曜）午前九時よりコンデ下カンポで、アサヒ対パレストラ戦があり、同日午後二時半よりアベニード・プレジデンテ・ウイルソンのジェネラル・モーターカンポで、パレストラ対ジェネラル・モーター戦が行われる。

▼運動欄

（時、五月三日）

聖市野球リーグ第一日の成績

メンバー	
アサヒ	パレストラ白
竹下	投リード
森山	捕サラテニ
村田	一ハムソン
アルチネリ	二アンテイ
平野	三デアモンド
村上	遊ウンゼル
木村	左ケーベ
アルベルト	中アシレス
森	右マイク

去る日曜午後コンデ下カンポの野球戦は、パレストラ白組十対アサヒ六、メンバーは、上記の通り。

ジェネラル・モーター七、パレストラ青五、バッテリーは、ジェ軍投ウイリアム、捕デシユリエル、パ青軍コーシエ、捕ウーベル。

◎ミカドクラブ野球団再生 (時、五月九日)  
しばらく沈黙状態にあったミカドクラブ野球団は、又再生する事になったと。

◎ミカドクラブ総会 (時、五月十六日)  
来る三十日午後八時、ミカドクラブにて総会を開くと。

◎義塾十三対アサヒ十一 (時、六月六日)  
去る二日午後二時よりカンポ・グリセリオに於いて義塾対アサヒの野球戦あり、義塾勝つ。

ア 015003020ー111  
義 21007111×ー13×

メンバーは、  
〔アサヒ〕 森山、アマデウ、森、木村、村上、村田、森本、アルベルト、竹下  
〔義塾〕 下元、浅見、菅山、大内、畑中、尾関、森部、河原、江沢

◎義塾野球団遠征 (時、六月六日)

義塾野球団は、来る十五日頃よりノロエステ遠征をなし、汎リンス、プロミソン、上塚第二、アリアンサの各組と試合すると。

	試合数	勝	勝比率
パレストラ緑	3	1	0・333
全白	3	2	0・666
ゼ・モーター	2	1	0・500

義	塾	2	2	1・000
ア	サ	3	1	0・333
	ヒ			

◎ミカド・クラブ創立九周年記念

(時、七月四日)

去る五月十三日は、ミカド・クラブ創立九周年記念日であつたが、其の記念として、来る七月七日(日曜)午前八時からカンポ・ポルトゲース(ルア・セザリーオ・ラマリーヨ)午後四時まで招待各フット・ボール・クラブの試合、午後四時から、ミカド野球団とパレストラの試合。

1929

◎ミカド「運動日」無事終了(時、七月四日)

フットボール

勝エストレラ、ミカド対フラメンゴ負

勝ミカド二組対フラメンゴ二組負

勝ミカド一組対ジヨバネジ負

野球試合

ミカド七対パレストラ○

◎運動界

更新のミカド野球部

(日、七月十日)

去る七日、カンポ・ポルトゲースに於いてパレストラ軍と対戦したミ軍野球チームは七対○にて勝。夕闇迫って審判はコールド・ゲームを宣した。年々ミカドはチームワークに欠け、勝てる試合にモロク破れているが、今回はその欠点を見

ず、度々の敵のチャンスにも点を与えず、この点特筆大書すべき事である。

打順及び守備は

C	石坂
1 B	松垣
S S	瀬戸
C F	近藤
3 B	小栗
P	高野
2 B	原田
F	丹坂

◎来る日曜の野球試合、パの挑戦に応ず

(時、七月十八日)

去る日一敗地にまみれたパレストラは陣容を整え来る日曜ミカドと再試合する。午前九時よりパルケ・アンタルチカ。パレストラは選抜、ミカドは伊東監督、小栗主将新任、統率よく加うるにバッテリーは高野、石坂。必ず善戦と期待されている。

メンバーは、

投高野
捕石坂
一松垣
二原田
三小栗

遊瀬 戸  
右神 田  
中近 藤  
左丹 坂  
補 塚

◎六対五、ミカド惜敗す（時、七月二十五日）

去る日曜午前十時よりパルケ・アンタルチカにて聖市の両強チーム、ミカドとパレストラが対戦、互いに善戦しのぎを削った。ミカド先攻で開始。時間の都合で八回迄ミカド惜敗す。

敵失 1 0 1 0 1 4 0 0 — 7 一点数

ミ安打 0 0 1 1 2 3 4 0 — 5 — 0 0 0 0 4 1 0

回数 1 2 3 4 5 6 7 8 — 1 2 3 4 5 6 7 8

パ安打 2 0 0 1 1 1 0 0 — 5 — 3 0 0 1 1 0 0 1

敵失 2 2 1 2 2 0 0 1 — 1 0 —

◎急告

（時、八月一日）

本年度野球リーグ戦は来る九月六、七、八の三日間聖市に於いて挙行する事になりました。現在聖市にはパレストラ、及びジエ・モーターの二米人チームのほか、ミカド、旭及び義塾の三邦人チームがあり、これらが八月中に予選を行い、その優勝チームを聖市代表として、地方より遠征のチームに当らしめ、三日間の優勝チームに鮫島旗を授与する事に致しましたから、地方球団にして本年度リーグ戦に参加御希望の

向は来る八月十五日までに左記宛御申込相成たし、参加条件は左の通り、

- 一、聖州内に現存する野球チームたる事
- 一、往復旅費は参加チーム自らの負担
- 一、聖市滞在費は協会負担のこと

昭和四年八月一日

聖州野球リーグ戦協会

CP—850 SP

1929

◎聖州野球リーグ戦 (日、八月一日)

本年度野球リーグ戦は来る九月六、七、八の三日間聖市に於て行われる事となった。現在聖市には、二外人チーム即ちパレストラ、ジェネラル・モーターに、邦人チームとしてミカド、旭、義塾の三チームあり、此の五チームが八月中に予選を行い、優勝チームが聖市代表チームとして、地方よりの遠征チームと戦い、一九二九年度旗争覇戦を行う。今回は最近産声を上げたコチア・チーム、返り咲きアニューマスも来る、アリアンサ亦必勝を期して攻め上つて来るし若手義塾など揃うので好試合を期待するファンは今から血を躍らせている。因に申込は来る十五日迄聖州野球リーグ協会に(郵函は一八五〇)。

◎日伯紙八月十五日号に

“野球リーグ戦”に際して、と題してアリアンサ軍の一月合宿について批判した記事が見える。チト行き過ぎでないか、の主旨で運動による精神の向上、私は大いに期待(危殆)



しているとある、署名のない一文なり。

▽運動界△ ミカド対パレストラ野球

(時、八月十六日)

先週は七対三でミカド敗北、次回は来る日曜。

▽運動界△ 対戦四回、二勝二敗の両軍は来る日曜パレストラ供にて決勝戦を行う。

◎ミ対アリ野球戦 (時、八月二十三日)

何といつても野球は邦人青年運動の中心となっているのであるが、また今年もミカド対アリアンサの野球試合は、来る九月七日の独立記念祭を機会に、金、土、日の三日間、聖市に於いて挙行される事になったが、本年こそは必勝と、精銳をすぐったミカド軍と、猛練習に益々其の技の上達を見たアリアンサ軍の大試合は、勝敗却々予想を許さず、運動界は為に異常の緊張を示している。

尚右の野球試合に就いては、野球協会では例年の通り諸費用を寄附に仰ぐべく、一般邦人の援助を希望している。

◎聖州野球選手権争奪戦 (日、九月五日)

来る六、七、八の三日間、アリアンサ、アニニューマス、サントス、及聖市ミカドとの間にパルケ・アンタルチカのパレストラ運動場にて挙行される。アリアンサ、アニニューマスの両軍はすでに上聖猛練習中。

◎華々しく幕を閉じた (日、九月十二日)

聖州野球選手権争奪戦

### アリアンサ軍三たび優勝

聖州運動界の年中行事として内外好球ファンの興味の中心となっていた聖州野球選手権争奪戦も逐年さん加チーム増加し、今年の如き九チームに達し、アリアンサ軍、アニニューマス軍、サントス軍並にミカド倶楽部の四チームが、各地代表として去る六、七、八日の三日間にわたりパレストラ球場にて試合した。

組合せは抽選にてミカド対サントス、アニニューマス対アリアンサとなり二組の勝者

メンバ―

アリアンサ

守 打点 安失振

ミカド

守 打点

安失振

望月 (2)

5 2 0 0 0

石坂 (2) 5 1 2

0 0

綱島 (4)

5 3 0 1 0

神田 (9) 5 1 1

0 2

池上 (6)

5 1 0 2 1

瀬戸 (6) 5 0 1

6 0

弓場 (5・1) 5 2 1 1 1

丹坂 (4) 5 0

0 1 2

山田 (3)

5 2 2 0 1

小栗 (5) 5 1 2

2 1

森 (7)

5 1 0 0 0

鈴木 (7) 5 0 0

0 0

津川 (8)

5 1 0 0 3

高野 (1) 4 1 1

0	0						
高野 (9)	4	1	0	0	2		松垣 (3) 4 1 0
1	0						
鎌田 (1・5)	4	3	0	0	1		近藤 (8) 4 0
0	0	0					
計	4	3	1	6	3	4	9
7	1	0	5			計	4 2 5

三塁打 高野、瀬戸、山田

二塁打 小栗

が最後に優勝戦を行うに決定。

第一日はアリアンサ対アニューマス、十二対一、ア軍の大勝、此の日ア軍の手島捕手は足を負傷し出湯不能となった。

第二日はミ軍対サ軍、五回戦にて十八対二ミ軍の大勝。

八日はミカド対アリアンサの決勝戦、両軍とも相当自信あり、シートノックにフリーバッティングにしばしば妙技を演じて見物人を喜ばし、試合前既に戦機熟す。

球審安養寺、塁審ビューバー、九時半開始。

ミ軍よく打ち又投手良く投げ、ア軍の健棒を封じたるも練習不足にて失策続出し十六対五にて惨敗す。

〔ネット裏〕

両軍伯仲の伎倆と見られたが、ア軍月余の練習に守備の差大きく、打、投に優れてミ軍は連失に破れた。ア軍の鎌田投手コントロールよく下手投げ近目はよい武器、六回代った弓場投手、鎌田より凄味なくミ軍の猛者凋落来るか、手島に代り本陣を承った若冠望月一塁手打撃に守備にア軍の至宝である。一方高野のアウトドロップ、不確実だがアの打を封じ

た。要は練習の差にあった。

各チーム代表並にア、ミ両軍慰労会

八日午後八時より「ときわ」で各チーム代表、ア・ミ両軍選手慰労会が、協会主催で開かれ、鮫島氏の挨拶、各選手の自己紹介、パレストラ軍のヒューバー氏も見え、三十余名盛会であった。

アリアンサ対ミカド・オービー試合

八日午後よりアリアンサ対ミカドオールドボーイスの試合が義塾カンポで行われ、九対八でミ軍の勝、開戦六時半。

◎コチア青年会の初試合 (吉田光雄談)

宮崎初次氏が訪日して、野球道具一式を購入、青年会に寄附したが、しばらくそのまま。これを聞いた聖州義塾が「教えてやる」と挑戦して来た。丁度本郷孝が入植、安井さんの広場で一戦が決った。結果は十四対七でコチア青年会の勝。メンバーは。

青年会

本郷

吉田

相月

桜井繁

森田

武藤

上岡

義塾

下元

浅見 尾関 森部 菅山 畑中

球審 吉田正隆。

◎ミカド倶、寄附金募集の新趣向

(時、十二月十九日)

ミカド運動倶楽部では、少年の運動にも便宜を計ってやりたいとて、今回寄附金を募る事と定めたが、従来のようにただで金を貰うのは心苦しいとて、主なる聖市在留邦人の住所入り電話帳を印刷し、之を御用にたつると引換えに寄附金を貰う事として、三河方面を治めるところは気が引かへてゐる。



1929年、北パラナカンバラ地方で少年野球も発足、その練習風景。子供たちはユニフォームこそお母さんたちの手製で出来たものの、靴まではなし、はだしでキャッチボール。

## 渡部重の略歴

渡部重は、一九〇八年福島県相馬市中村に生まれた。一九二八年県立中学を卒え、同年六月サントス入港のまに丸にて渡伯、力行会を経てソロカバナ線。パラグアスの文化植民地に入植した。

この植民地の実労者は、近隣のカマラーダ達であったが、事務所があり、ここに働く者は、日本力行会からの呼寄青年であった。その数廿余名、これらの者の為に、北米から図書、運動具、車、映写機などが送られて来た。渡部は柔道をよくし講道館初段であったが、他のスポーツ、特に野球にも優れていた。

ここの支配人山田登幸もスポーツ好きで、各種競技場と一緒に、百数十家族のコロノを動員して野球場を作った。その刺激で、近隣に太陽、アブア・デ・カラファ、ルテシア、アグア・リープレ、サント・アントニオなどの耕地にも運動部が出来、これらも指導した。

植民地内や、近耕地に日系児童がふえ、渡部は日語校の校長となった。この日語校に少年野球チームを組織し、バストスに遠征した。一九三二年である。

青年野球チームも出来たが、渡部は足が速いので一番打者、捕手であった。その他に松山兄弟、熊谷、小島三兄弟、高松兄弟、大和、花田、根岸などおり、特に熊谷は一米八〇の長身で一塁を守り、投手もした。一九三六年の聖市での第一回全伯大会にも出場した。

陸上競技もよくやり、全伯にも出た。一九三五年まで文化植民地のスポーツ、文化活動したが、一九三六年パラグアスー市に私立の寄宿舎、自由学園を創立、学術のほかに運動にも力を尽し、ジョーゴ・アベルトにも参加した。そのかわら、「石斧吟社」「白日社」「タマンコ吟社」など、俳句、短歌の結社を主宰、聖州新報に発表した。彼の生涯を通じての、文学や芸術への多才振りは、この頃から始められたのである。

一九三九年、この自由学園が、総領事館直属の奨学舎となり、渡部は北パラナ、ロンドリーナー市の奨学舎の初代舎監に任命され赴任した。渡部の後任には、元バストスの斎藤太郎を渡部が推還した。自由学園は渡部個人の財産であったが、敷地建物などすべてを連合日会に無償寄贈した。

ロンドリーナ奨学舎は、一アルケレースの敷地があり、運動場の急造を必要としたので渡部が測量し、連合青年会が各植民地別に一週間ずつの合宿工事を続けた。宿舎は旧日本大学校、ロンドリーナ市の青年は毎日曜、その炊事は主に渡部の妻が働いたのだが、この時彼女は過労が因となり、不治に近い喘息にとりつかれたのである。この強行軍工事は約三カ月かかった。皆板製の手押車を、坂道の上に走らせた。

一九四〇年、運動場が出来て、入植記念祭が催された。相撲、柔道、野球、芝居もやった。後にパラナ野球大会も、一九五五年第七回のセンバツ大会に、小林が満塁ホームランをカッ飛したのもこの球場であった。ここでも少年野球を最初に作ったのは渡部である。そしてこれらを後援し、行動を共にしたのは、小笠原一二三、五十嵐政雄、平田努、今井二郎、

松尾行蔵などの五人組である。

この地での活動は、大戦勃発までで、その後はマスカッテ、鶏買いなどで糊口をしのいだが、一時パラグアスーでバツカ買いなどし、一九四六年、プ・プルデンテ市のコチア産組倉庫に就任、寄宿舎を担当、少年野球、青年野球を指導した。

一九五五年クリチーバ市に移る。ク市でも学生を主体に野球を指導、五七年ツパン市での選手権大会には飛行機で参加した。成長してきたクリチーバ野球チームが、全伯大会に出場するのを見て、野球界から引退した。

渡部の場合も他の野球キチガイと同じように、彼の妻がその功の大半を背負っている。彼女の名はマルガリーダ富美代。彼のパラグアスーの日曜学校の教え児で、後リンスに彼女が移った頃、恋文を交換して結婚した。彼が二十七才、彼女は十七才だった。長女が生まれ、一年八カ月で死亡してから、彼女は上聖して洋裁師となり、自由学園内に洋裁学園を併設した。一家がロンドリーナ市に移って、球場作りが始まってから、大勢の青年たちの炊事を指揮したので、慢性の喘息におかされ、自後十八年間苦悩を続けたが、クリチーバ市で救世教に浄霊されて全治したという。一九七六年五月三日、聖市で輪禍に会い、変死をとげるまで、熱心な浄霊活動をしたのも、充分うなずけるのである。

彼女の存命中も、また歿後も、二人が文字通り一身体、人のうらやむおしどり夫婦であったのは周知で、彼自慢の一つでもある。



## 野村忠三郎略歴

竹田仙造

野村氏は長野県上伊那郡飯島村の産、一八九八年生まれ、一九一八年若狭丸で渡伯した。日伯新聞の編集長として、その健筆を振ったのは、とみに有名なことだが、野球人としても、聖市実業リーグ以前から、日伯チームの中堅として時に長打を飛ばしていた。

一九四〇年、日語普及会なる母国の国策公社が出来、その長に就任してから、少年野球の一層の発展を意図して積極的に乗り出し、大きな成果を上げ、今日球界隆盛への布石をなしたといっても過言ではない。

惜しいことに、終戦時の混乱の火中で、狂信者の犠牲となり、その凶弾に倒れた。思い出すもいまわしい一九四六年四月一日の朝だった。



## 高野富継小伝

竹田仙造

高野は一九〇四年六月、東京都板橋の生まれ、一九二三年十二月、即ち関東大震災直後にかなだ丸で渡伯した。彼がミカド・クラブに加入し、投手として活躍したのは、一九二九年の弓場アリアンサとの決戦からだ。最初リオのガス会社に入っていたのを、三浦日伯社長に呼ばれて聖市に来た。三

浦さんは高野が文豪二葉亭四迷の子とあって、特に目をかけたものようだ。機智に富み、悟迷亭と号して川柳をよくした。

早稲田中学で投手をした経験を生かし、ミカドでは四、五年活躍したが、肩をいためてからは専ら審判員として活動、一塁審として大声でやる宣言に、若い少年選手たちを震い上らせた。

多感な男で、一九三八年の全伯に、弓場アリアンサが、鍋釜をかついで出征して来たア軍をルス駅に迎え、すっかり感激、「これは放っておく手はない」と、ア軍合宿に、差入れをしたりした。

持前の頑固さに、彼の最後は淋しいもので、多くの友人が医者を呼んで、なんとか再起を図ったが、頑として聞かず、我を通したため、もつと永かったであろう余生を、みすみすないものにしたように思われ、残念でならない。

彼で書き残しておきたいことは、コンデ街で遊んでいたアマデウ・リッピとエドワルド・マルチャーニ（通称ビンボウ）という二人の伯人青年をつかまえて、野球を教えたことである。二人とも長身だったが、アマデウの方が野球カンもよく、投手を教えた。アマデウとビンボーは、その後、竹下完一がアサヒというチームを結成したのに参加していたが、後に鈴木威の作ったマケンジー・チームに移って活躍した。この二人の伯人は、日系外選手の最初であった。

1930

▽運動界△

(時、四月二十四日)

一時下火となった聖市邦人青年の運動熱は氣候の涼しくなりかけた昨今、又々火の手が上り、日曜毎にカンポに飛び出して、ベースボールの打合いに余念なきは喜ばし。



多羅間鉄輔氏の本拠地、リンス、イデアル植民地チーム、1933年9月、リンス大会に優勝記念撮影（家は会館兼今井教師宅）。

後列左より、牧野、佐藤文六、

二列 \* 、佐藤与一郎、川口美佐雄、松原勝利、多羅間、今井、笹谷新市、

前列 \* 、(4人目)横山、(5人目)谷口、(7人目)吉田、(右端)今井(投手)

◎動き出した聖市球界（日、五月二十九日）

昨年アリアンサ遠征軍を迎えて以来、頓に停滞していた聖市野球界も、サントス遠征を目ざして、この程ミカド倶楽部の更生機運濃厚となり、安養寺、横溝、瀬戸、山田、高野諸氏を中心として寄々協議中であつたが、去る日曜日旭軍と交戦して急編成の為苦盃を喫した、来る日曜、義塾軍と試合する。

◎ニッポランジアの青年会主催野球大会

（時、六月十二日）

四月二十九日天長の佳節を期して、ハチ切れそうな元気のブリグキ地方七チーム對抗野球戦が、ビラ・コンセイソン改めニッポランジアに於いて、同地青年会主催で挙行された。参加チームは更新、太陽（セツコ）バレーロ、フェイジョン、リーザ、ニッポランジア（黒人チーム）エリジオの七チーム、二組に分れて第一予選から始まる。

学校庭のカンポノーボは黒山の人出。フェイジョン対リーザの第一試合、球審西村、塁審石光、両軍の応援は凄惨、遂に悲壮なるシーンを現わした。戦い半ばにしてリーザの主将山本、打撲痛に堪えず倒れ、栄冠はフェイジョン軍に。然も七回に至らず六回の裏で十対三、フェ軍は狂喜する。続いてエリジオ対バレーロ戦は、鮮やかな中熊球審のプレイボール、バ軍先攻で開始、バ軍の守備堅く、エ軍吾門投手の魔球も効せず、新進バレーロ六対三。

一方カンポ・ヴェーリヨでは老練の太陽と更新が対戦、太陽十六、更新五。昼食後二回戦。カンポ・ノーボでフェイジヨ

ン対太陽の対戦。狂気の応援団、幾度か壮烈な場面を展開する。太陽の島之江投手少しも乱れず、健投よくフェイジョンの故か投球さええず、四回囊中熊救援もむなしく太陽の勝。カンプ・ヴェーリヨでは、意気上るバレー口と、辛勝を騎るニッポランディア、地を捲く接戦となる。二軍の投手南部傷いて西村遊撃が替り、二軍八対六で勝。決勝戦は太陽対黒人（二軍）。球審中熊、塁審池田、玉井。陣容を固めて必勝を期する二軍の意気天を衝く。一方太陽も善戦、されど島の江投手懸命の投球も、二軍の健棒を封ずる能わず、三回裏にて勝運は二軍に倒く、太陽投手、佐藤に替りたるも挽回ならず、遂に十二対〇の惨敗に終った。吉井商店寄贈の優勝旗は主将南部投手の手に授けられ、萬富の歓声が湧いた。

メンバー

二軍

太陽

西村 投 島之江

佐藤

菅	齋藤	長岡	蓮沼	膝付	石光	南部	中島
遊山野	右西山	中樋浦	左島之江見	ⅢB馬島	I B 浜本	I B 堀越	捕細井

◎ウニオン青年会の野球試合

(時、六月二十六日)

ウニオン青年会では、葡語研究会を岸本、木村両氏指導で行っていたが、聖州義塾の浅見哲之助氏が休暇利用で来植したので、その送別の意味で野球試合をした。六月十五日午後、内山義文球審にて開始、紅白両軍、七回まで五対五、大接戦に黒山の観衆手に汗を握ったが、八回目に自軍奮戦、八対五で白の勝ちとなった。

白 1 0 0 1 2 1 2 1 ー 8  
紅 0 0 0 1 0 2 2 0 ー 5

当日のメンバーは。

メンバー

紅 白

飯	中	岸	津	川	松	秋	岩		
田	村	本	波	崎	原	山	田		
左	中	右	遊	三	二	一	捕	投	
	小	井	倉	木	星	倉	森	浅	
林			吉			富	田	見	
	川	上	三	村	野	良			

◎第七回全聖州野球選手権大会

(時、十一月二十日)

一九三〇・十一月十五、六、七の三日間アグア・ブランカ、  
SPRW球場

八時入場式、八時半始球式中島総領事 第一試合、モヂ対ミ  
カド、モヂ先攻で開始したが、ミカドの猛攻にモ軍総崩れ、  
五回までに二十八対三で一方向的に終る。バッテリーは、ミ軍  
原一鈴木。モヂ北原、清水―田辺〇第二試合バストス対アニ  
ユーマスは暴雨の為中止、翌十六日午後二時より行う。

第二試合、バストス対アニユーマス。アニユーマス善斗し  
て敗る。

バ 031000640―14

ア 301004023―13

バッテリーは、バ軍、有村、園田―小金沢、ア軍、小川、  
渡辺―赤尾。

優勝戦、ミカドの健棒にバ軍大動乱。

十七日午後二時半より、ミ軍先攻で開始。球審渡辺、塁審  
小川、赤尾で、本大会の捧尾を飾る最後の決戦は始められ  
た。

バ 5002001―8

ミ 33241137―33

メンバー

ミカド バストス

中原 遊 斉 藤太

一白 井 一 渡 辺

三瀬 戸 捕 小金沢

遊	安養寺	三園田
捕	鈴木木	中山下
左	小川	二斉藤竜
投	アマデウ	投有村
投	高野	左山中
右	横溝	右千田
二杉野		
打数	62	打数 27
安打	13	安打 4
失策	3	失策 25

優勝杯は中島総領事からミ軍安養寺主将の手に。午後六時三十分感激の裡に閉幕。

(編集注、一九二四年から行われた選手権大会は、一九二九年、アリアンサ軍の三連勝で中断し、この三十年に再開されたが、アリアンサの参加なし)。

山岸 清略歴 横田

「山岸の前に山岸なし、山岸の後に山岸なし」

「遊撃を守って、飛翔する牛若丸」

「十年間、エラーなし、名ショット」



これらの言葉に多少の誇張を感じる向きもあるうが、筆者が最初に見た彼山岸のプレーは、全く文字通り、少しも大きさではなかった。

左利きの彼のグローブが、打球に触れたかと思った次の瞬間、身はクルリと回って投球は矢のように目ざすグローブに突刺っていく、アツという間もない。軽快で華麗な身さばき、守備範囲の広さと正確な連係プレー、まこと絵のようでありリズムカルでさえある。

後年このポジションに沢山の名手はあったが、やはり彼のイメージを上回るものはない。

伯国球界に、内野手として彼の残した印象は、いまだに消えないし、これからも容易に失せることはないであろう。彼こそは不世出のプレイヤーだったといって、異を称えるものはあるまい。

OBになってからの彼のグローブを見た筆者は、平らで板のような昔型に驚いて、「これで球がつかめますか?」「つかむ必要はない、当ればよいのだ」、彼だけがいえる言葉だと思った。

彼は又名投手でもあった。決して豪球ではない。緩急自在、右に左に敵の虚をつく、いわゆるチェンジ・オブ・ベース。小兵ながら彼のプレート姿は、堂々たる風格を持っていた―

一九三八年、サンパウロ球界に突如巻き起った蜂谷旋風、サ倶楽部のマウンドに、彼の左腕が躍って、竹田富中前の一発のみに喰い止められたのは余りにも有名。「富はよい打者だった」との述懐は、いまも忘れていない。名手は敵を知る、

という好例であろうか。

一九〇八年七月二十四日、長野県上高井郡井上村の産、上高井農学に持田先生という恩師の特訓を受けたという。「先生は、いわゆる石井連蔵型でねえ」、遠い旧師の姿をいつくしむ笑顔は、永い不運ともいえる過去を、ようやく抜け得たかに見える今、元気で明るい。

一九二九年、第三アリアンサに入植して以来、大変遷の半世紀余。

現住所はサンジョゼー市郊外、鐘紡社の近くで、コダック写真工場に勤め、三人日の奥さんに二男一女あり、長男は優秀な成績でI・T・A工大を卒え、現在母校の教授。山岸にもようやく安らかな余生の日が来たのである。

### 進藤憲吉の略歴

一九〇〇年六月、秋田県秋田市樺山登町に産る。

一九二〇年、早稲田大学文科に一年在学、翌二一年母県に帰り、仙北郡枯和野神宮寺に代用教員を奉職、県議猪股謙二郎にスカウトされ、本荘市に移り、郡役所の種牛馬課の書記となったが、仕事より本業は野球であった。

この年、東北六県の大会で秋田県チームの投手として優勝、県下中・小学生の憧れの的となる（二十三歳）。

この地で満嬢と相識り翌年二月結婚、間もなく京都に移転、三カ月間京都府土木課に籍を置き、渡伯を準備、一九二四年六月のしかご丸にて、兄木村貞治の構成家族として着伯

した。

アララクアラ線クルパ駅カンパイー耕地（新主英国人）に入耕、一年を過し、シンニヨーポルト耕地に移転、ここで長男健一生まる。

（一九二六年）

タクアリチンガ市の近くで一年、のち藤岡耕地に移り桑植え、カロセイロなどもした。兄木村と別れ、カタンゾーバ市より十五KMのボア・ソルテに行つて、日本語の先生となる。この地でフットボールのチームを作つたという。一九二八年頃。日語教師では葡語を覚えられないので、カフェランジア市の副島商店の店員となる。夫人は同家の家庭教師で働く。しかし何としても仕事に慣れず。

この間二年、アラサツーパー市に移り一年。ここで次男健二生れる。

（一九三三年）翌二十二年、リンス市の日伯新聞社に入社、故蛭田徳彌、竹田仙造一家など、数多くの友人を得、マージャンにも精を出し、また野球にもその実力を見せ、アリアンサの弓場とも数回試合をした。

これ以前、一九二九年に、アリアンサチームがリンス市内で一カ月の合宿練習をした。その期間中に聖市から浅見皆之助卒いる聖州義塾チームが来て、ア軍は練習試合をしたが、八月八日付けの時報紙を見ると、四日の日曜に、リンス、ゴヤンベー連合軍と試合、七回までア軍四、連合五点で終つたとある。後日、進藤の話によると、リンスでア軍が野球の練習をしていると聞いて見物にいくと、弓場が野球を知っているなら試合をしようという。よしやろう、となつて進藤はリ

ンス近辺のザコを集めて試合することになった。始める前、弓場が、もしお前が勝ったら優勝旗（鮫島大優勝旗で、もう二年連続ア軍の手に有った）をやろうといったという。この試合結局俺（進藤）が勝ったんだ、といていた。もしかしたらこのリ、ゴ連合軍との試合のことではなかったか？とも思われる。この試合が進藤、弓場の最初の試合なら、ビラツキの西村栄一も連合チームの一員であった筈、凡ゆる努力を試してみたが、その正否を確かめ得なかった。（編集部）



全県大会優勝記念



創立当時の神宮寺クラブ

彼は生来金銭に極度にテンタンで、貸したも借りたも忘れてる。家には誰でも泊め、誰にでも食べさせる。困っているといわれれば持金全部やっってしまう。このため夫人の苦労は一通りでなかった。或る時は何処にいったのか、奥さんが

新聞に尋ね人広告を出したという逸話もある。”でもあの当  
時が彼の一番幸福”ではなかったか、と未亡人最近の想  
話。(この未亡人も、今は亡い)

新聞社を退いて、バウルー市に移り、グアラナーキング印  
の製造を始める。(一九三三) ここでも中村好光、加来普一  
などと野球チームを作った。

夫人が病氣して出聖治療中、沢尾ホテルの番頭もした。貧  
苦は迫る、一九三六年出聖してモツカ区に住む。この頃トキ  
ワ旅館の石原桂造と談合、サンパウロベースボールクラブを  
設立する。当時すでに聖市内に散在していた個人の野球チー  
ムの統合を図ったのである。

この頃ノロエステ、奥ソロも野球は盛んになり、全伯大会  
開催を必要とする気運を見た彼は、リンス市ですでに盛業中  
の富士屋運動具店に、聖市進出を奨め、富士屋が聖市マンダ  
レー街に本店を移し開業(一九三六年二月十九日)すると、竹  
田一家やその他と全伯開催の構想を押し進め、各地方チーム  
の参加を呼びかけ、遂にこの年の九月、第一回全伯の開催に  
漕ぎつけたのである。もとより大会の開催は、彼一人の力で  
はない。然し彼がその最大の推進力となった事も何人も否め  
ない。

初大会の参加は、チエテ、バストス、パラグアスと地元  
聖市軍。アリアンサの弓場も勿論招かれたが、弓場は、「全  
伯なら各地予選に勝ったもののみ出場」との論を展開、予選  
なきは全伯に非ずと、その出場を拒否した。

これは正論ではあるが当時の情勢では未だこのような組織  
に至る段階でなかったようである。

大会は第二次大戦勃発の一九四一年まで六回続いたが、第二回目にはアリアンサも参加、第三回からは日伯新聞社主催となり、スダン広場に白い幕を張り巡らし、前年惜敗した弓場雪辱の意気物凄く、サ軍に対し二対一、バストスをも倒して優勝した。このア軍対サ軍は、弓場対進藤という超二巨頭最後の対決となったのである。

その後の弓場は専ら農村野球を唱えたに反し、進藤は都会に農村に、その普及と発達に広範な活動を続けた。この意味では、竹田兄弟、一九三七年渡伯の横沢太一などと同じく、その寄興した実績はまことに大きい。

横沢太一が渡伯して来た頃は、コンセレイロ・フルタードに住んでいたが、横沢一家の食事は全部進藤宅であった。又この年、テナー藤原義江が来伯、独唱会の世話、歓迎野球の世話など、当時彼が発行していた雑誌「植民」の主催だった。

前述の全伯開催に刺激されて、聖市内に出来た十数チームを総合して、聖市実業野球連盟が組織運行されたが、時の総領事市毛孝三、蜂名専一などと共に、彼も亦大きな役割りを果している。

一九四一年大戦開始とともに、野球界は窒息を余儀なくされたが、終戦と同時に各地の野球は急速に復活し、全伯を統括する野球連盟の結成を急がれて、竹田富、小田敏などの中堅と、彼進藤を中心とするベテラン達の期せずして成った一大集合勢力によって、伯国初の公式スポーツ団体「聖州野球連盟」の設立に成功したのであった。

以後、球界の大御所として、その発展に不絶の努力を続け

た点で、その功績は恐らく他に比を見ないといつてよい。

戦中戦後、居を替えること数度に及んだが、一九七〇年、パーキンソン病、幻視病（一種の精神科）を得て、十月二十五日長逝するまで、病床でも、うわ言に球を投げ、打つ指導したと聞いて、彼こそ伯国球界最大の恩人と断じて誤りなからう。

### 進藤憲吉余談

秋田中を卒えた進藤は野球修業の目的か二十歳で早稲田の文科に入ったが、翌年郷里に帰り代用教員を奉職した。ここで一歳年下の同じ訓導鈴木千代野という女性と婚約したが、猪股という県会議員にスカウトされて本荘市に移り、杵柄倶楽部の投手となった。

この本荘市に立花という料亭があつて、女の子十四、五人を置きなかなかの繁盛であつた。この料亭のお帳場を預つていたのが、まだ十六にもならない色白の美少女、この家の女主人に見込まれて養女となり、花の香りのにおい初めたばかり、やがて県下一の秋田美人にやと評判の満（みつる）であつた。

進藤は二十四歳、この年の東北六県の大会に投手として出場、長身を利して投げ降す速球とカーブ、内に食い込む鋭いシュートを縦横に駆使して打者を寄せつけず、ゆうゆうと優勝の大旗を獲得し、東北の彗星と、毎日の新聞に大きく載り、女学生などの憧れのまとなつていた。

日焼けして一段と男らしい今話題のこの青年の姿が、新聞

記者や野球関係者たちと、この料亭立花にしばしば見られるようになったのはその頃である。

そうした折に、かい間見た花の姿は、まだ蕾の開きそめとはいえ、清楚の香はあたりに込めて、光源氏が若紫を見たよりもなお強く、若者の胸にしみ入ったのではなからうか。

進藤の兄貞治の養家木村と、満の実家は同じ町内で、ごく親しい間柄であった。木村のおばあちゃんは幼い時から満を可愛がっていた。ある日、このおばあちゃんが、満あての傳言を進藤に頼んだという。これが二人の言葉を交す最初のチャンスとなったのである。

その後の進展は以外に速く、会うごとに燃える炎はいやましたのであった。

満は料亭の養女となることを初めから好まず、極度に養母を嫌っていたが、店の内容を知るに及んで、その恐い経営の仕組みに、幾度か逃げようと考えた程である。

一方木村家では、貞治の事業上の失敗で、いよいよこの地を引払って京都へ移転を余儀なくしていた。進藤も京都市行きと知った満は、もうこの機会をのがすことは出来ない決心、進藤に連れて行ってと言ったが返事がない。

出発の日を知った彼女は自分の銀行預金を降しその日を待つ。銀行員からの内通で知った義母は、満を部屋に呼ばせた。

満は下駄もはかず足袋はだしで雪の中を実家に走ったという。その後の騒動は映画もどきである。

ようやく話がつき、ささやかな婚礼が叔母の家で行われ、京都に三ヶ月、二人は木村一族の構成で渡伯した。



しかし二人のロマンスはここで終ってはいない。

渡伯後いく度が重った経済との困難、その上過労から来た夫人の病など、苦難の道はいつまでも続いた。だがぐち一ついったことのない夫人は、やはり心から進藤を愛していたのである。また進藤も、たとえ野球が好きで、行く先もつげぬ旅をすることはあっても、必ず家に温い寢床が待っていると信じていたに違いない。

金銭的に恵まれることの少かった二人ではあったが、それだけに妻の優しさを知っていた進藤ではなかったかと思う。男の恋情とはこのような姿となることが、又多いのである。

### 進藤神話

一、進藤は一年中右肩に毛糸編みの肩当てをしていた。  
二、道を歩く時、上衣のボタンをかけたことがない。ポケットにボールがあり、右手の三指で握っている。  
三、風呂につかる時、右の人指しゆびと中指は、つき立てていて濡さない。

1931

### ◎汎ノロ野球大会

(日、一月八日)

第一日(一月三日)

アリアンサ 二十七対リンス三

ビリグキ 十二A対リンス一

第二日(二月四日)

アリアンサ 十五対リンス三

ビリグキ 十二対日之出二

第三日二月五日)

リンス 十五A対日之出五  
アリアンサ 十八対ビリグキ四

◎杵柄倶楽部 誕生

汎ノロ大会に刺激されて、リンスの中老連「俺達もやろう」とチームを結成、杵柄倶楽部と命名した。投手は水城磯次、捕手竹内産義、二塁は農田源行、三塁は本田安記、遊撃は浅野、左翼は中川、右翼吉瀬、中堅山中信二補欠兼監督は福島捨吉、審判池谷定次郎

◎聖市の陣容整う (日、五月二十八日)

全伯選手権保持者ミカド供を中心に、青年会が組織した新メンバーは、投手高野富継、捕手鈴木威、一塁尾関興之助、二塁樋口謙三、杉野武次、三塁瀬戸渡遊墨安養寺頭三、左翼小川武夫、中堅平野実、右翼下元健郎、近藤規 神田貢、鈴木厚、塚井猛、木村稜威雄

◎サンパウロ鮮やかに勝つ (日、六月四日)

野球シーズンのトップを切ったサンパウロ青年会チームとぶえのすあいれす丸乗組員チームとの試合は三十一日午後二時十五分からサントス市カンポ、アメリカノに於て挙行。バッテリー、サ軍高野―鈴木、ぶ丸軍小泉、岩下―近藤。結局十二対七でサンパウロ勝つ。

◎先づ運動から春ひらく

サンパウロ青年会主催で

(日、八月十三日)

来る十六日正午から、アグア・ブランカSPRW運動場で、野球とラグビーの試合

メンバー

旭クラブ 青年会

アマデウ 投 高野

〃 下元

小斎 捕 安養寺

マルチネリ 一 尾関

江沢 二 樋口

林 三 瀬戸

森山 遊 杉野

上田 左 小月

アルベルト 中 平野

北島 右 近藤

(注旭のアルベルト氏はアマデウの弟) をする。

野球 (二時開始)

日伯新聞

昭和六年九月十七日 (七百四十六号) 七頁

◎サントス野球倶楽部活躍 (日、九月十七日)

全伯優勝野球大会を間近に控えてサントス野球倶楽部が復活の快報。従来選手不足のため船と試合の出来る好都合の場所にありながら徒らに道具を寝かせていた同倶楽部は、部長

金城温厚居士、小浜主将其他高松、金田、米下諸氏の努力により近く更新の意気高らかに猛練習を始めることとなった。昭和六年十月一日（七百十八号）七頁

◎繰り展げられんとする

純真に輝やく球技

来る二十四、二十五両日挙行の

全伯優勝野球大会（日、十月一日）

第七回全伯優勝野球大会は、サンパウロ青年会主催の下に来る二十四、五日アグア・ブランカ原頭に於て挙行される事となった。内定のチームは、サンパウロ・サントス、バストス、アニューマス、モヂ、アリアンサ、アラサツバ、ビリグイ等。

1931

◎全伯に望む青年会と旭チーム

（日、十月五日）

メンバー

旭 青年会

アマデウ 投手 野

小 齊 捕手 若月

エドワード 一尾 関

江 沢 二杉 谷

林 三瀬 戸

畑 中 遊杉 野

上 田 中平 野

織田（兄） 左樋口  
織田（弟） 右小川  
森山 下元  
北島 近藤  
古賀 鈴木  
佐古多 木村  
アルベルト 池田

### ◎全伯野球大会

諦め切れぬエンボイ実習生軍

七回にてワールドゲーム

優勝盃はS・P・Sへ

（日、十月二十九日）

サンパウロ青年会主催第七回全伯優勝野球大会は、二十四日からランバリー、エメボーイ、アサヒ、S・P・S（サンパウロ青年会）の四チーム参加、トーナメント式で優勝を争ったが、先ずランバリーはS・P・Sに十八対十二で敗れ、アサヒはエメボーイに、十二対五に退けられ、優勝戦はS・P・S対エメボーイ、午後四時五分より、高松（球）森山、池田（塁）三審判にて開始、S軍先攻。

S 4020823-19  
エ 6141050-17

薄暮のためワールドゲームとなる。感激のうちに四チーム整列、サンパウロ軍の平野主将、川西領事の讃辞、各主将の手で日伯両国旗撤下、午後八時大会の幕を閉じた。

優勝戦両軍のメンバー。  
上はS下はエメ軍。

投 高野(六) 谷(二)  
捕 若月(四) 江刺家(四)  
一 尾関(二) 太田(二)  
二 杉谷(一) 桑原(六)  
三 瀬戸(三) 梶村(八)  
遊 杉野(五) 宮崎(三)  
左 樋口(七) 藤沢(五)  
中 平野(九) 樺山(九)  
右 小川(八) 臼井(七)

(編注、数字は打順、尚この大会も第七回、前年の大会も第七回と新聞に載っている。)

1931

◎汎北西第二回野球大会(時、九月十六日)

汎ノロエステ・スポーツ連盟主催、第四回汎ノロ陸上及び第二回野球大会は、野球は九月四日より、陸上は五日より三日間、アリアンサ原頭で挙行了した。野球はアリアンサ再び優勝した、試合結果は、

アリアンサ 四一対チエテ 五  
アリアンサー二対バストス 一二  
アリアンサー一六対ブリグキ 三  
チエテ 九対バストス ○  
ブリグキ 二六対バストス 二二

◎南米一蹴不成

ブエノス丸チーム敗退

対青年会野球戦 (日、十一月十二日)

ブエノス・アイレス丸対サンパウロ青年会の野球戦は八日午後一時からサントス市カンポ・ポルトゲースに於て挙行、青年会内野の凡失に、船側に七点を許したが、よく打ち結局十一A対七で快勝した。引続きサントスと船との試合を行ったが、サントス善戦、高松好投手八回一対一で暗黒ドロングームとなった。

モヂ対アサヒ

青年会アサヒチームは来る十五日モヂ・ダス・クルーゼスに遠征、同地のチームと試合する事になった。旭ナインは投手アマデウ、捕手小斎、一塁織田兄、二塁森山、三塁織田(弟)、遊撃江沢、左翼上田、中堅アルベルト、右翼小斎(弟)である。

◎明るく朗らかに野球O・B軍

(日、十一月十九日)

今サンパウロにオールド・ボーイス軍結成の機運あり。近く移住地視察旅行から帰聖する矢崎節夫氏を俟って、メンバーは投手川西豊蔵、捕手矢崎節夫、一塁竹内秀一、二塁蜂谷専一、三塁明穂梅吉、遊撃東後一美、左翼山田隆次、中堅石原桂造、右翼野村忠三郎

◎覇気衰へず打倒現役軍

伯国野球史を劃する

オールド・ボーイス結成

(日、十一月二十六日)

来月早々サンパウロ青年会チームと一戦すべくサントスから高松を投手に連れて来て全伯の覇者打倒を策して居る。

◎聖市野球リーグ組織の機運濃厚

既に四チーム成立す(日一二、二四)

同仁会の敷地を利用して、リーグ戦を行ふ。新チームは、領事館、海興、コンデ。

T女の場合

T女は東北F県の生れである。昭和七年、不況のどん底にあえぐ日本を後に、父母と兄一人弟一人の五人家族で渡伯して来た。配耕されたのはN線B駅のA氏の耕地であった。

B駅から支配人に連れられて、一家が耕地に着いたのは、もう黄昏れはじめた頃であったが、朝から新移民の到着を待ちこがれていた耕地の日本人やブラジレイロ達は、あくこともなく好奇の目を光らしていた。暑い中を疲れきってようやく着いた一家は、そこにいた黒人とも見分けのつかない旧移民の群れるのを見て、早くも安堵と不安におしつぶされるのである。降り立ったその場の空気は、たちまち異様なものになった。誰かが「あゝ」といった。しばらくはそれだけだった。早くも人々は、この新移民の中に、ひとときわ光るもの、輝くものを見たのである。

“まるで天の岩戸が押し拵げられたようだった”



色白の花の蕾十八の、余りにもととのつた乙女のかんばせ  
T女の姿、人々はまるで後光を背負った女神が、降り立った  
かのように、わが目を疑ぐり、一瞬の驚きに息を飲むので  
あった。

当時のN町は、N線中でもかなり早くから開拓されて、日  
本人の一大集団地となっていたが、焦熱地獄のトラバリーヨ  
の中で、目だけが光っているものばかり見ている毎日の彼ら  
に、まるで異った遠い国の人間が来たように思ったのも無理  
はない。

T女のウワサは、その晩のうちに植民地の隅から隅までつ  
たわった。早くも”誰が一体彼女を射止めるだろうか”一足  
飛びに話は突き進む。青年たちの間でも、”われが”という  
者さえ直ぐには現れない。やがて契約農年の一年が過ぎた。

父の妻が義理の為もあって、T子の縁談は急速に進められ  
た。それは父が経済的にかんりの余裕があり、「ムスメ三コ  
ント」という言葉を極度に嫌がったこともある。E耕地の青  
年会長Sが相手に選ばれた。見合いとは名ばかり、嫌も応も  
なく事は運ばれて嫁いだ。

T女の悲話は、もうこの時点から始まった。

Sは九州K県の出身、父母と兄弟三人のまん中、兄には嫁  
があり、六人の子持ち、それらが朝から晩までバツテン語で  
ある。東北F県のT女には、とてもわからない別語だった。  
あれで笑い、これで指差される毎日となった。

功をあせるSは、綿作に米作に、あちこちと転居を続け  
る。普通作もあつたが、それ以下という年が多かつた。だが、  
それとは関係なく、彼の会長役は益々忙しく、重なっていく

ばかり。野球の練習はもとより、交歓試合は相次いだ。その都度丁女は大釜に飯を一杯炊かねばならない。いま家族を食べさせたすぐ後に、数人の選手を連れてくるなど毎度である。米横をさらつても足りないなど、人前ではとてもいえたものではない。直ぐ近所のSさんの店に走って、ポンとモルタデイラを買ってくる。このSさんにどれだけ助けてもらったかわからない。

Aというチームなどは当然のことのように乗込んできて、バシア一杯の握り飯と漬物を食べてしまう。足りないような顔さえ見せる。

夫のSはそんなことは一切気にしない。T女が幾度父の処へ借金に行ったか数えきれなかった。こんな事が十五年間も続いたという。

こんな間にも子供は次々に産れて、男女九人にもなった。

いつまでたっても抜け切れそうにない野球貧乏。

なんとかしなければ将来はまっ暗、に終止符をうつべく相談の上、北パラナのM町に移っていった。もう野球とは絶対に関係しない約束だった。しかしこの土地でも彼Sの世話好き、貧乏好きは直らない。二年で又聖市に移り住み、やっと落付いて二週間目、Sは元のB町に旅行し、心臓病で急死した。B町の球友達が盛大な葬儀をしてくれたのが、SへのまたT女への最後の返礼となったのである。

(編、この話は実話。球大家族の一例として挿入した)



娯楽もない農村では野球が唯一の楽しみだった。日曜日には村じゅうがグラウンドに集まって一日を過ごした。

## 大坪愛見略歴

竹田仙造

彼は岐阜県出身、得意はむしろ陸上だったが、脚が速く、急場のピンチ・ランナーとして時々昔のチエテ軍で走ったのが縁で、出聖してカナカオの日語学校で教鞭をとるかたわら、カナカオチームの中心として活躍、また審判員としても、その誠実な人からを買われ、永年審判の仕事にたずさわり、戦後も引続いて球連の役員として、後進のためにつくした。

一方カナカオ肥料会社でも、彼の緻密な経営管理論を高く評価し、会社の主脳の一員として、ますます健全な活躍が期待されたが、持病の高血圧のため、一九七七年急逝した。享年六十七歳。

谷垣正巳小伝

竹田仙造

谷垣正巳は兵庫県出身、父は県下でも有名な中学校の校長さん。

新天地に活躍の地を求めて、一家移住に踏み切った。その出発の様子は母国の新聞で報道され、私も見たので、初めて会った時から特別の親しみがあつた。

一九三六年モツカでの第一回全伯の時も、入植地のカンポ・リンポ（ジュンジアイの手前）から、わざわざ見物に来て初めてブラジルでの野球を見たという。野球がやりたくて、単身出聖、聖州新報などを経て蜂谷商会に入社、理論野球を前面に出し、強力な蜂谷チームを育成した。

戦後のことになるが、コチア球場での全伯大会決勝戦に、ウニヴェルソ対ビラッキ。突如起つたビ軍への走塁妨害事件、彼は軍の監督として、高野富継と共に規則を盾に、あくまで審判の判定を尊重、一般観衆の物凄い野次、罵倒にも一歩も怯まず、信ずる処を貫いたのは、谷垣らしいものだった。

この野球史の編集にも、各地に出向いてくれたが、一九七七年病あつく、急逝された。享年七〇歳、肝臓ガンであつたという。

1932

## ◎野・球・聯・盟

選手権統一、確立を期し

直接関係者のみで組織

(日、一月二十一日)

当然生れるべきでありながらその万全を期して充分なる研究と準備を進めて待機中であつたサンパウロ野球聯盟は、伯爵対日伯軍の第一回試合当日より二日遅れた十九日、名誉会

長に内山岩太郎氏の快諾を得て完全に結成した。同聯盟は▽名誉会長内山岩太郎▽理事石原桂造、川西豊蔵、矢崎節夫、白鳥堯助▽常任理事東後一美、河合武雄、高橋敏朗、高松等、高杉清三郎、安養寺顕三、佐々木七郎、平野実、杉谷茂二二現在参加の七団体（伯爵、日伯、学生、海興、太洋、領事館、組合）全員の支持にて球技の健全なる普及發達を期して居る。

尚二十四日コンデ街下スタン球場に举行される試合は午前九時半より領事館対組合、午後二時より海興対太洋である。

動機となった日伯対伯爵戦は、十七日午前九時より日本俱樂部横の青年会カンポ、七回コールドで十八対四、伯爵の大勝、日伯進藤再登板して又打たれ、六回裏九点を献じたという。両軍のメンバーは、

メンバー

日伯

伯爵

進藤・高野	投	アマデウ
石坂	捕	安養寺
竹内	一	ビンボー
蛭田	二	森山
野村	三	小川
小斎	遊	瀬戸
淵田	左	白井
上田	中	江沢
丸尾	右	神田
	補	石原

(注、この試合は聖市リーグ戦の第一試合とした)

昭和七年一月二十八日 (七百六十五号) 七頁

◎組合先勝

領事館意気無く凡失続出

サンパウロ野球リーグ

(日、一月二十八日)

組合対領事館の第一回戦は二十七日午前十時からスダン球場於て佐々(球)安養寺(塁)高橋(塁)領事館先攻で開始された。

組 2 4 0 2 0 2 A - 1 0 A

領 0 1 0 2 3 0 0 - 6

試合経過記事より出場選手名を見ると、

領事館

軽 部  
江 藤  
川 西  
根 本  
平 野  
高 野  
池 田  
会 田  
石 原  
組 合

稲葉 法華 牧山 成富 南里 杉谷 横溝 矢崎 縄田

日伯昭和七年（一九三二年）

一月二十八日（七百六十五号） 七頁

◎雨中の接戦 伯爵軍破れる

（日、一月二十八日）

降雨の為延期となつた太洋対伯爵の一回戦は二十五日午後二時からスタン球場に於て平野（球）高橋（塁）伯爵軍先攻で開始。

降雨の中を元気に挙行、アマデウ投手のコントロール悪く、太洋一、二回一点宛を得たが、伯爵軍は三、四回に各一点、太洋は五回裏一点をものにし、降雨急に激しくノーゲームとなる。

尚来る三十一日は午前海興対太洋、午後日伯対学生の二試合が行われる筈。

◎サンパウロリーグ（日、一月二十八日）

スタン球場一月二十四日

球審 佐々

墨審 高橋

領 0 1 0 2 3 0 0 - 6

拓 2 4 0 2 0 2 A - 1 0 A

メンバー

領事館 拓殖組合

二、軽部 稲葉

江藤 法華、左

投、川西 収、山、三

投、根本 成、富、捕

捕、平野 有、里

一、高野 杉、谷、投

右、池田 横、溝

会、田 矢、崎、二

石、原 縄、田、一

山、下 松、同、中

渡、辺 辻、本、遊

1932

◎サンパウロ野球リーグ

打撃振はず 学生軍敗退

対大洋第一回戦 (日、二月十一日)

七日午前十時五十分スタン球場にて佐々(球)高野、横溝

(二墨審)、学生先攻。

太 0 5 5 1 0 1 A - 1 2 A

学 0 1 0 2 0 1 5 - 9



試合経過記事中より出場選手名を見ると、太平洋軍の投手曾根原。

メンバー

太平洋 学生軍

小田(勇) 下元

ビンボー 菅山

曾根原 鈴木

高杉 若月

小田 畑中

古賀 森部

小田(勝) 吉田

村田 木村

森 尾関

◎サンパウロ野球リーグ (時、二月十五日)

◎サンパウロ野球リーグ

根本投手好調に 領事館先勝

海興凡失多く力戦空し(日、二月十八日)

スダン球場十四日 領事館二三 投根本捕池田(弟) 海

興 五 投村井 捕高松、江刺家 コンデ対学生ドロンゲーム。

領事館は海興の第一回戦は十四日午前十一時二十分からスダン球場に於て曾根原(球)高野、安養寺、高橋の四審判、領事館先攻。

海 20100111-5

領 3114400-13

この日の領事館チームは川西領事自ら右翼を守り全軍を叱咤、バッテリ根本、池田よく江藤、皆藤守備打撃によく完勝した。

伯爵対学生、ノーゲーム。

午後三時より伯爵対学生の第一回戦は、一回両軍零、二回伯爵六点、学生零、三回両軍各一点、四回伯爵零、その裏学生総攻撃、一死満塁の時雨でノーゲーム。バッテリは、伯爵アマデウ―安養寺、学生森部―若月。尚来る二十一日は正午と三時から、伯爵対学生、日伯対太洋、二十八日には海興対組合の一回戦。

◎サンパウロ野球リーグ（日、二月二十五日）

第一回一挙十点、投手起用誤る学生軍、午後二時三十分からスタン球場に於て曾根原（球）高野、高杉（塁）。

伯 1000101A-12  
学 0100110-3

学生軍は下元、若月。伯爵は瀬戸、佐々のバッテリ、下元投手完膚なきまで打たれ無死にて六点を許し、森部に替るも四点追加の伯爵軍一挙十点で勝敗を定める。この試合安養寺ケガしたが中堅にてライナーを素手で止める。

来る二十八日は正午から海興対組合、又Aクラスの日伯対大洋第一回戦は午後四時から審判は前者高松（球）安養寺、高村、後者は瀬戸（球）安養寺、杉谷塁審、なお来月六日には学生対太洋、日伯対伯爵の各第二回戦。

◎サンパウロ野球リーグ（時、二月二十九日）

大洋 十五 投 高野 暴投失策多く

日伯 六 投 曾根原 シュート良し

◎サンパウロ野球リーグ（日、三月十四日）

老巧伯爵、堂々快勝、対学生二回戦、伯

爵対学生二回戦は六日午後二時よりスタン球場にて高橋

（球）齋藤、小斎墨審、伯爵先攻で開始。

学 4001011-7

伯 1130343-15

バッテリーはアマデウー佐々、森部、若月、学生軍元気に初回四点を挙げ好調を思わせたがその後振わず、凡失を繰返し、敗退した。来る十三日は領対組、学対太、日対伯。

◎サントス倶楽部対さんとす丸野球戦

（日、五月二十九日）

去月二十四日出聖、日伯軍を粉碎して引揚げたサントス野球チームは其後予定通り各般の準備整り猛烈な意気を以て毎日曜練習に怠りないが采二十二日（日曜）は午後二時よりアメリカカーノ球場に族いて折柄停船中のサントス丸チームと一戦を交ゆべく夫々関係者に案内を發した由、尚同倶楽部の相設役は左の諸氏、金城慎義、上原直勝、小淵友市、前田京一、金田宣雄。

◎リンス野球大会（時一九三二、二、二九）

汎ノロ、ソロ大会の前哨戦、オール・リンス大会は、新設

の多羅間イデアル耕地で、二月二十一日、多羅間氏の始球式後、サン・ジョン対イデアル、近藤(球)、奥村、中川(墨)で開始。

イ 2 1 1 1 4 3 1 - 1 3

サ 3 0 2 0 0 0 1 - 6

寸評 サンジョン、前半好かったが、後半乱れて大敗した。  
メンバー

サンジョン

イデアル

C・I B 湊

S S・ 谷 口

III B 鴨 井

III B 吉 田

― F 八 木 C 阿部(兄)

C・I B 磯 部 P 佐 藤

S S・ P 木下(弟) II B 今 井

R F 潮 C F 牧 野

P・S S 池 田 R F 高 須

II B 久 保 ― F 阿部(弟)

C F 川 上 I B 宿 屋

小 橋

第二回戦 リンス六 ウニオン二

竹田(球)、磯部、中川(墨)。

寸評 出足好かったウ軍、後半にリ軍の好打、好守に会い涙を呑む。

メンバー

ウニオン リンス

III B 倉富(弟) II B 川 崎

S S	秋山(弟)	I B	市川
I B	倉富(兄)	P	近藤
P	奥村	C F	石峯
C	上條	S S	竹田
R F	秋山(兄)	F	奥野
C F	高橋	C	木下(兄)
F	木村	R F	堀
II B	梅田	III B	柏木

優勝戦、リンス六A対イデアル五

竹田(球)、中川、磯部(塁)、五時―七時。

イ 1 0 1 0 0 3 0 - 5

リ 0 0 1 0 1 2 2 - 6 A

寸評 両軍の意気物凄く大接戦で死に物狂いイ軍勝かと思われたが、最後にリ軍の奥野右中間に二塁打し、逆転勝ちした。

メンバー  
イデアル

リンス

S S	谷口	II B	市川
III B	吉田	I B	市川
C	阿部(兄)	P	近藤
III B	佐藤	F	石峯
P	今井	S S	竹田
C F	長尾	C F	奥野
R F	高須	C	木下

I B 宿屋 III B 柏木  
| F 阿部(弟) R F 堀

1932

◎サントス倶快勝 対サントス丸戦

(日、六月二日)

二十三日サントス港埠頭裏の球場にて、

サ丸 001010000-2

サ倶 320010230-11

メンバー

サントス倶 サントス丸

高松 投佐分利

中野 捕服部

花村 一松井

増本 二池田

原田 三村田

坂本 遊田江

馬淵 中乾

石上 左伊吹

水田 右八川

◎サンパウロ野球リーグ (日、六月九日)

四日スタン球場 領事館○ 義塾十五

メンバー

義塾 領事館

I B 畑中(浄) 根本 投

III B 弘田 池田(外) 捕

遊	佐藤(忠)	皆藤	ⅢB
投	畑中(忠)	平野	SS
左	畑中(徳)	軽部	右・IB
中	佐藤(清)	高野	右・中
ⅡB	武藤	大村	IB・左
右	宮崎	小林	中・右
右	黒羽	池田(信)	IB
捕	菅山	石原	左

◎日伯再敗対サントス戦 (日、六月九日)

五日サントス球場 サ二〇 日九

宮崎進球審

◎野球聯盟第一回戦日程 (時、六月十六日)

内山総領事寄贈「ビクトリア盃」争奪。

六月二十九日伯対領、七月三日目対義、七月九日領対マツ  
 ケンジ、七月十日伯対義、七月十七日目対伯、七月二十四日  
 目対マ、七月三十日マ対義、七月三十一日目対領。

◎サンパウロ野球リーグ (日、二月十六日)

東後一美氏歓迎試合、聯盟球場五日。

高橋、多田、長谷川三審判、バッテリーは、伯爵アマデウ、  
 御厨、日伯長野、曾根原、高杉、十回延長、三時間三十五分。  
 当時の日伯、伯爵、義塾の打撃順位は、山田秀〇、六三六、  
 長野、畑中忠、古賀、菅山、曾根原、樋口、畑中浄、尾関、  
 畑中徳。

◎モジアナ線でも野球（吉川信雄の思い出話）

一九三二年、モジアナ線サン・ジョアキン駅フアシナ耕地にて、同線初の野球戦が行われた。同耕地主のジャルバス・マルチンス・ボルジェスは若い頃北米に留学し、野球技を覚えていたが、野球好きの吉川一家が入耕して大喜び、早速リベIRON・プレート市に行き、日本東京美津濃運動具店製の野球用具を購入、四百人の人夫（ムチロン―無料奉任）が一日で球場を完成、カンポ開きをした。フアシナチームの投手は吉川正三、捕手は山下、ジャルバスは一塁手、吉川三兄弟は主要メンバーなりし。監督は間弓義詩。試合の相手は、フォルタレーザ耕地チーム、辺見国雄監督、辺見息が投手、試合は一対一の時、ジャルバス三塁打して本塁に奮死せしと。尚吉川一家は長男清人、次男保、三男信男、四男正三、一家は後年出聖して一九三五年頃ヴェルゲイロ街（現メトロ駅附近）にて盛大に洗染業を営んだ。

◎ビラマリアーナ球場（時、四月七日）

かねて市内ビラ・マリアーナ区の日本病院建設敷地は、効果的利用法として、漸定的にサンパウロ青年会に管理を委せて、運動場として開放されることになっていたが、この程ほど設備も完了したので、来る十日（日曜）学生対大洋、日伯対伯爵戦を挙行すると。

◎リンス教員野球団（時、七月二十一日）

汎リンス教育会は、伯国初の野球チームを組成、青年に挑戦、去る十日午後三時より、リンス市ジナジオ・アメリカー



ノ運動場で球審進藤、塁近藤で初試合、戦績とメンバーは、

青 2411330-14

教 0500251-13

メンバー

教員軍

青年軍

SS (パルミツタ)	河野毛呂SS
CF (ゴヤンベ)	亀井岩項III B
C (イデアール)	今井熊坂I B
III B (ゴヤンベ)	唐沢蛭田I B
P (サンタアメリカ)	佐藤岸本C
RF (共和)	横川竹沢P
I B (ジアメリカノ)	亀井(誠)青山 F
II B (アウローラ)	田中北村RF
F (昭和)	谷口川崎CF

◎サンパウロリーグ 延長

(時、七月二十五日)

時局柄、左の通り延期した。七月三十一日伯爵対日伯、八月七日伯爵対義塾。

注、去る十日勃発した聖州の護憲革命はその後益々拡大、戦闘中なり。

◎青年会主催の聖市近郊戦 (時、十一月七日)

十二月四日聯盟球場、エメポイ対サンパウロ、十二月十一日サントス球場、サントス対サンパウロ。

## 竹田一家

竹田富蔵は大阪生れである。だから彼は生粋の大阪商人である。関東人のいう上方贅六ということになる。処が彼はその贅六ではない。それは後述する。

そんなケチな人間ではない。それどころか彼は義人である。侠気の人だ。侠商と呼ぶべき人だった。

若くしてすでに商才に長けていた。莫大小（メリヤス）の加工業、つまり、メリヤスの布を工場から仕入れて来て、シャツ、猿股、もも引その他いろいろな上張り、下着類を裁ち縫いして売りさばいていた。次々にアイデアを生かして新型を作り、当時のモボやモガを翔ばせていた。或る意味で服飾界のプリンス、新進デザイナーであったのだ。

商売は、至極繁盛していた。しかしあの頃の（一九三二年）日本は世を上げて緊縮政策、不況の波の荒れまくっていた時である。富蔵の勇心は、何処に行こうか、満州か、ブラジルか、何れに新天地を求め、将来を賭けるかであった。同じなら大きい方がいい。彼の決断はブラジルであった。働いても食えない時、カネが湯水のように流れているというブラジルに行つて、ひと儲けしてくるぞ組の多かつた移民の中に、彼だけは違つていた。彼は未来を大きく切り拓く、その方を求めて来たのである。彼と彼の子孫の繁栄をもくろんで来たのであった。

入耕したのはリンス駅屋比植民地である。富蔵は四十、妻のとうは三十九、長男仙造は十九、彰介十六、富男十二、金吾十、そして末子一人娘の章子は七歳という素晴らし働き手ばかりの八人家族。

耕地支配人青山万次郎が小躍りしたのも無理はない。処が家長の富蔵が商人だった。長男仙造だけを耕地に残して、當時すでに邦人の雄都として、聖市コンデ街に劣らぬリンス市に運動具店を開業した。着伯直後の一九三一年である。

別項で述べている通り一九二六年アリアンサに入植した弓場は、二七年、二八、二九年と三年連続、聖市のミカドその他を打ち負かして、天下にその覇を称えていたし、二十七年にはニッポランジア、三十年にはバストス、チエテ。ソロカバナはパラグアスー、プ・プルデンテ。北パラナにもバンディランテス、カンパラなど野球チームは邦人のいる処殆んど余すなく勃興、陸上競技と共に一大運動化

する気運を見せていた。商人富蔵の鋭敏なアンテナが、この長短波をキャッチ、その前途の洋々あるを見抜いての開業はさすである。

新天地の開拓に、営々としてその精魂を燃していく日本移民の中に、明日の鋭気を養うレジャーの王者として、爆発的な発展のきざしを見せていた野球であったが、その用具となると、移民のコウリの中に忍ばせたものはほんの僅かで、殆んど各自の手作り。ボールにはテニスのボールに布を被せたもの、グローブ、ミットなども布や牛の皮を縫い合せて型を作り、バットは山から伐り出して来た木を、手当り次第けずって使ってみる。重いもの、折れるものなど、仲々これという良木にいき当らない。ガタンブー、カネーラ、ペローバ等々、試して見てはその結果にうんざりしていた。

アリアンサが、ガイビーラという適木を見付けたのは大手

柄。

一九三〇年、アリアンサの鎌田譲が日本にあって、七組の用具を買い入れて帰伯したのは、アリアンサ、ミカド、バストス、チエテ、ビラツキ等に分けられたが、前述のように各線名地に柿然と結成された野球チームには、干天の慈雨ともならない。

このような時に、専門店、富士屋の誕生は、どれだけ球人たちが喜ばせたか。各地からの注文が引つきりなしに、その応接に文字通り寝食を忘れるのであった。余りの繁盛に、心なきものの中には、ねたみのような言葉も出たほどである。

しかし事實はそれどころか、送金など余りスムーズにいかず、注文の商品の催促は相次ぐ、代金は着かない。それでも定められた日時には間に合わせる。支払いは後日にとというのが普通だったが、その後、責任者が不在となることなどは珍しくない。だがいやな顔一つせず、後も送り続ける。この辺が大阪商人の土根性というのであろうか。「竹田さん大会が……」というとき「えゝ……そりやよろしいおまん」富士屋寄贈の優勝旗や作り花が、各地で次々に栄光のシンボルとして手渡されていったのだった。

彼は若い頃から無類の野球好きだった。よく長男の仙造を連れて、豊中球場（全国中等野球が最初に開催された所）に見物に行ったという。望み通り五人の男の子は皆野球好きで、それぞれ秀れた選手に育っていったが、特に次男の正男は、有名な浪花商業の正選手で、納家という好投手と一緒に、何回か甲子園球場で、対抗試合をしている。

長身瘦躯の左打ちで、その好打は四男富男（後述）をはる

かに上回っていたと伝えられている。

着伯直後から、リンス球団の中心選手となり、ノロエステ全線に活躍したが、一九三六年一家と聖市に転住、その年の第一回全伯、モツカ区のアントルチカ大会では、一塁手として出場している。当時の数少ない本格派プレイヤーだった。美男でシンパチコ、「ホントにキレーナ方でしたわー」と進藤未亡人など、後年も眼を細くして想い浮べるのである。胃潰瘍の手術失敗とか、惜まれる天折であった。行年二十四歳。

前後したが、長男の仙造は野球技そのものよりも、審判技術に特才があった。特才と書いたが、彼の場合は心して努めた結果である。明快でセンスある判定は、いつも研究というヤスリで磨ぎ澄まされていた。誰彼れの別なく、人なつこい人柄と一緒に、「仙ちゃんの球審」は、全伯の定評となっていた。何処にも頼まれ、どんな難事でも引受ける、真剣な態度、名解答はおのずからそこに生れるのであった。

一九三七年、横沢太一の渡伯で、彼仙造の技術は一段と飛躍したが、それは彼の素直な受け入れからであった。審判はとかく年功も経ずして、頑迷となりやすい。彼にそのような毛もなかったことが、名審判の評価を残したもととなっている。

三男彰介は兄弟一番体格にも恵れていて、京阪商業に学ぶ頃、ラグビー、水泳にも長けていたが、野球でもその一発はいつも期待され、兄正男亡きのちは、一塁手として常に第一線に活躍、全伯第三回、スタン大会を最後に公式戦を退いたが、父雷蔵のあとをついで、公式記録員となり、今なお球界下積みの功労者として続けている。

一九四六年、藤村佳正氏の次女、たか子さんを射とめたが、彼の最後のホームランとあってよいであろう。

四男富男は一九二〇年九月六日の生れ、兄正男の素質をそのままそっくり頂いた感じ、十二歳のリンス着のその日から、もうバットとボールの二十四時間である。親が好きで、兄たちが秀れている野球一家の中のワンパク小僧、たちまち近所のガキ共を集めて、ブラジルに只一つの、そして一番小さい子供だけの野球チーム、少年球団が形作られていった。翌三二年には長男仙造も耕地を引払って（義務農年を終えて）リンスに来る。そして日語教師となり、同時に野球コーチ兼監督、これと殆んど同じ頃、ニッポランジア、リーザの育英舎（日語学校）にも少年チームが出来る。そのうちにバーストスにも出来る。ペレイラ・バレット、当時のチエテ移住地にも出来る。

各駅各植民地に、日語学校を主軸にして少年野球チームは簾生した。

一九三三年、リンス日本入会主催で第一回全伯少年野球大会が開催された。

三四年も開催された。リンスは二年連続優勝である。もちろん富男が主戦投手でその立役者であった。

同じ三四年には、奥ソロのプレシデンデ、アナスタシオ駅に、三二年に誕生した梅排植民地の少年チームと、サンパウロ市で相見えた。聖市ブラジル農業社の肝要りで催された初の聖市大会であった。

これにも堂々の勝利を飾って帰着している。団長は木下精一、監督は次兄の正男。

三五年の第三回全伯バス大会には、バスボールの問題から一と紛糾、惜敗して帰った。三六年には一家と聖市に移り、早速青年チーム入りして、魔球を投げる大投手進藤のキャッチャーをつとめ、九月のモツカ大会、全伯青年第一回には、聖市軍の正選手として出場している。

三七年、聖市に実業リーグが誕生、これからの数年、第二次世界大戦の勃発、一九四一年までが、彼の華々しい選手活動のクライマックスであった。そしてこの時期に伯国球界に不滅の名を残したものである。

大戦の終憶を待つももどかしく、球友の小田敏雄と語り、現野球連盟設立の急先鋒となつての活躍は、彼の野球人としての最も大きな功績として、永く伝えられるべき事実である。後半の彼は、ヴェネズエラ人、キューバ人、米国人などと、巾広く交際をもち、伯国球界の将来を大きく押し拡げようとの思策のものであり、とかぐ邦人のワクの中にとどまり勝ちという型を、別な姿にする動機を作った点も見落してはならない。

末弟の金吾は、大正小学校在学中に、少年選手として活躍したが、青年となつては兄達の光芝の影にかくれた感があり、余り目覚しかつたことはない。むしろ彼は、一家をあげて用具の製造に励んだ殿りとして、時代の移り替りと共に、常に新型を提供し続けている点を評価さるべきではないか。

伯国球界は、数え切れない多くの名選手、功労者を産み、また消耗（？）し続けて来たが、この一家庭、全員が揃つて最大級の活動をした供は、他に全く見当らない。「あれは商売柄」などというを見ないわけではない。然し事實は、そん

なちつぽけなものでは決してない。はるかに遠く、はるかに高い時点からの格付けがなさらなければならぬ程のものと、いわなければならぬ。

### 江原政寿の略歴

群馬県前橋市田中町出身、明治四十二年（一九〇九年）二月二十六日生れ、渡伯は、昭和四年（一九二九年）五月二十九日サントス港着の神奈川丸。

江原は大正十四年、十五歳の時、前橋中学（当時）三年生で、甲子園の中等学校全国大会に出場し米子中学と対戦、翌十五年にも連続出場、静岡中学と対戦したが、延長十九回六対五で惜敗している。

高松商業とも対戦している。このように伯国球界では最高の輝かしい球歴を持っている。

パラナの野球は一九三一年からだ、その第一回、カンバラ、ビラ・ジャポネーザ、平和、北パの四チーム戦に出場、伯国球界に見参した。その後の江原三兄弟の活躍は、全伯でも有名となり、特に政寿の三塁手は、その華麗なプレーと、強打を高く評価された。

大戦後の活躍も見覚しく、一九五四年のセンバツ大会には、オールパラナの監督として出場、優勝してパラナ三連覇の糸口を開いた。

温厚な人柄は誰からも好まれ、親しまれるが、先ばしつたり、ポリチカするを大嫌い。何れにしてもパラナ球界の大先達、大恩人である。



## ◎奥ソロに野球

新装の運動場に競う「陸の若人」

(時、一月十六日)

去る五日梅坪小学校に於て少年野球と陸上大会が催された。栄えある昭和八年の黎明と共に勇ましく産声を挙げた奥ソロ青年聯合運動会に先だち、二日リベイロン・クラーク新設運動場にて三校野球リーグ戦が行われた。選手の熱戦応援団の熱狂裡に梅坪が左のスコアで優勝、氏原氏寄贈の優勝旗を獲得した。

梅坪小学校八対三正和小学校

梅坪小学校十七対一サンタマリアナ小学校

## ◎カフエランジア対サンタ・リッタ野球

(時、一九三三年二月六日)

昨今ノロ線に野球チーム続々生れ、去る二十九日カフエランジア球場にて同市チームとサンタ・リッタ第二回戦が行われた(一回戦はドロンゲーム)。カ軍は主戦投手高橋病気で平岡が投げたが、サ軍の打撃振り大勝した。

スコアとメンバーは、

サ 2 2 0 1 0 4 0 2 0 - 2 1

カ 1 5 1 3 0 1 0 0 0 - 1 1

球審竹田、塁審近藤

メンバー

カフエーランジア

サンタリッタ

C

瀬 瀬

下

田

SS

P	II	B	平	岡	和	田	II	B
III	B	吉	田	徳本(兄)	C			
R	F	藤	沢	徳本(弟)	CF			
S	S	吉	本	岩	本	P		
	F	徳	本	清	野	III	B	
C	F	笹	岡	坂	本		F	
I	由	猪	狩	宮	本	R	F	
	B	・	P	山	本	I	B	

◎バストス野球戦

(時、一九三三年二月二十日)

去る五日バストスで支部対抗戦を行った。

第一次戦

ウニオン I 十六対カスカッタ十五

中央 二四対エスペランサ十七

プログレツソ 十六対グロリア II 十一

中央家長 十九対ウニオン II 五

第二次戦

グロリア II 二一対プログレツソ十三

◎リンス対ビリグギ戦又々中止

(時、五月二十八日)

本年バストスでのノロソロ大会の前哨戦、リンス対ビリグギは、ビ軍選手病気で延期となり、来る十三日、十四の両日ニツポランジア球場で行うことになって、ビ軍は前二回の敗戦に雪辱の意気上っていたが、過日のバレーロ対フェイジョ

ン戦で審判のことから紛糾し、青年聯盟役員総辞職となり、従って対リンス戦も再中止の止むなきに至ったとは遺憾千万。

◎竹下完一氏大正小学校を辞職

(時、一九三三年)

宮崎先生の死後間もなく大正小学校に入り八年間という永い間教鞭を執り、同校を今日の隆昌に至らしめた校長竹下完一は、今回一家の都合上辞職するの止むなきに至り、本月十日限り退職されたるが、之に対し同校後援会幹部は、氏の為末広旅館に於て、送別の宴を開き、且つ多年の労を謝する為、後援会の名に於いて謝礼をなしたと。

◎奥ソロの少年野球 (時、七月三日)

六月十一日サ・アナスタシオ駅ヴィラ・マンザーナにて梅坪、聖母、正和、ブレイジョン第二小学校の四チーム戦あり、各チーム熟練にて熱戦。成績は次の通り。

正和 十一対ブレジョン第二  
梅坪第二 三十一対ブレジョン 十  
梅坪第一四 A 対ブレジョン 二  
聖母 三十一対ブレジョン 三

◎全ノロソロ第四回大会 (時、七月六日)

ノロソロ第四回大会は、去る十七日より四日間、バストス市球場にて挙行、邦人渡伯二十五年、バストス入植五周年祭で盛大。

参加は、アリアンサ、リンス、ビリグキ、サンタ・クルース、チエテ北パのトレス・バラス。A B二組で、第一日ア軍主将弓場より優勝杯返還、南里淳氏開会、畑中仙次郎氏祝辞。

第一試合リンス二十一対七ビリグキ、コールド。アリアンサ十三対三トレス・バラス、実力勝ち。チエテ八対三バスト、チ軍打撃稍勝る。

第二日、チエテ17対4サンタ・クルース。

アリアンサ13対3リンス、期待の一戦もリ軍進藤打たれ、高松、竹田善戦も空し。

ビリグキ13対10バスト

第三日、バスト14対1、サンタ・クルース

アリアンサ14対5ビリグキ

第四日優勝戦、ア軍9対五チエテ。人気を集めた優勝戦も、ア軍一、二回に計7点でチ軍弓場の豪球打てず、又もア軍優勝。

◎全バストス第二回大会（時、十一月四日）

三週に一旦る全バス大会は、十月十五日最終戦を迎え、ファルツラ、グロリアに圧勝の中央チームと、ウニオン、エスペランサにコールド勝ちのカスカッタの決勝戦となる。

優勝戦、球審斎藤（龍） 塁審岩本、笹原。

中 420300331-15

力 200410030-10

戦評、果然一進一退の白熱戦、然し打撃に優る中央の堂々

たる勝利。

◎バストスチームの覇業（聖、八月十二日）

チエテとの定期戦に遠征のバストスチームは、住路アリアンサに寄り、過去六回の連敗を雪辱すべく、常勝を誇るア軍に挑戦、去る八月二、三日二戦に勝ち、遂に伝統を破る偉業を遂げた。

試合経過とメンバーは、

ア 00006000016

バ 050000002A-7A

メンバー

バ軍 ア軍

園	田	投	弓	場
斎	藤	捕	手	島
山	下	一	望	月
吉	田	二	番	川
笹	原	三	高	野
和久井		遊	山	岸
加	納	左	宮	崎
千	田	中	山	口
阿	部	右	瀬	戸
林				

バ軍マネーシヤ本田

二回裏バ軍は五点先取、アの投手山岸退き弓場救援に、三、四回両軍無為、五回表ア軍三点を返し、バの投手園田、

山下に替る、ア軍更に二点を加えた後なお満塁、打者弓場に投げた山下の球、弓場のコメカミに当り打者転倒、両軍殺氣立つ。山下退き畑中プレートへ。八回裏捕手の暴投でバ軍二点を入れそのまま逃げきる。

### 第二戦（三日）

ア 1000000001  
バ 00004041A-9A

前日の敗れを返すべく弓場登板したが、バ軍も必勝を期し園田先発、一点先取のア軍に熱闘を繰り返し、五回四点、七回にも又四点、更に八回一点加え9A対1、バ軍堂々大勝利、積年の怨みを晴らした。

（編注、後年弓場氏は「前触れもなしに来やがって」山下「電報を打ったんだが届かなかった」

第五日 バストス18対5リリーザ

中央 棄権 育英社

リンス不戦勝

優勝戦 リンス6A対1バストス

バ 01000000-1

リ 122001A-6A

斯くて第一回の王冠はリンス軍に、林大使寄贈優勝旗と日伯社杯並びに竹田運動具店寄贈の花輪はリンス軍へ、農ブ杯、熊坂氏寄贈の準優勝旗はバストスへ、大成功に閉会した。

### ◎第一回少年野球大会（日、十一月十五日）

リンス青年会主催の少年野球大会は、去る一日より五日間リンス市ジナジオ、アメリカカーノ球場で開催、出場はリン

ス、育英社、リーザ、アリアンサ、中央、バストスの六チーム。全チームの入場式、多羅間総裁の試球。

第一日

育英社 3対3 リーザ

アリアンサ 6対2 バストス

リンス 1対4 中央

第二日

アリアンサ 9対2 育英社

バストス 4対3 リンス

リーザ 9対8 中央

第三日

リンス 6対1 アリアンサ

バストス 9対8 中央

第四日

アリアンサ 3対2 リーザ

バストス 4対3 育英社

リンス 1対8 育英社

中央 2対1 アリアンサ

◎OB対学生チーム（時、十一月十四日）

前号所報通り明十五日午後二時よりスタン球場で萎靡不振の聖市球界打開のためオールド・ボーイ・チームと最近結成された学生聯盟チームとで対抗野球試合を挙行するが、OBのメンバーは左の通り。

▼OB軍 監督宮坂ブラ拓専務、主将二墨矢崎ブラ拓主事、投手高野（日伯）捕手山下（聖報）一墨石坂（日伯）三墨鈴



リンス青年会主催、第一回少年野球大会、開会式（1933）。



木（建築技師）遊撃（小田・兄）左翼古閑（ブラ拓）中堅岡田（ブラ拓）右翼樋口（日伯）補欠野村、石原、東後、御厨（雨天の場合は日曜日挙行）

老いて益々旺

OB軍主将矢崎ブラ拓主事など二十年も昔取った杵柄ならぬバットを振り廻すが、聖市野球の皮切りは及公だナニ若い者に負けるものかと元気一杯だ。高野投手以下内野は現役としてもまだしゃくしゃくたる顔触れだからこの勝負は案外面白いものとなりそうである。

◎最終回に形勢逆転学生軍惜敗す

（時、十一月二十一日）

サンパウロ市では久し振りの野球だ、多くのファンはどんなにか興味を以って、この老童対学生の試合に臨んだ事だろう。が前半はすつかり期待を裏切って、殊に第二回老童軍高野投手退き大木に救援され乍らも三安打四回死球、野手選択などあつて一挙六点を学生軍に得られ甚だ活気のない試合になつてしまったが、第五回頃から老童軍の追撃急になり、第六回を終つてその差一点、斯うなると粘り気の強い老童軍が調子に乗つて楽なプレーをするに引換え、若い人達はすつかり固くなつて失策を繰返し、失策の度に気を腐らすという始末で、畑中が下元に代り更に塚本をプレートに送るといふ混乱状態、全軍を統帥しようという投手に自信がないのだから、とうとう追撃を拒み得ず惜しいところで敗けてしまつた。審判は小田、多田両氏、試合時間二時間三十分。

学生 打得安 老童 打得安

下元	5	2	1	石坂	4	2	2
宮崎	6	2	1	林	4	3	2
武藤	5	1	0	鈴木	4	3	1
佐藤	3	2	0	小田	4	4	0
畑中	5	2	2	樋口	3	2	2
弘田	3	1	0	岩佐	3	1	0
柳沢	4	3	2	古関	4	0	1
塚本	3	1	0	岡田	3	2	1
坂田	5	2	3	大木	4	1	0

◎プロミソンに野球チーム誕生

(時、三月十日)

プロミソンに野球チームをとほ、随分前から同町有志の希望で、二、三用具を整えて練習していたが、愈々駿足揃いのナインが出来たので、同町有志の杉本法雄、鈴木秀造両氏の肝入りで、美事なユニホームその他用具整い、去る四日同町郊外の球場に於て、勇ましく孤々の声をあげた。式後予定通りボンスセツソチームとの練習試合に移り、七対五のスコアを以つて先ず勝ち、幸先のよいスタートを切った。尚野球チームの誕生と共に、プロミソン一円の野球リーグ戦が行われ、汎日本人会長忠次郎氏寄贈の優勝旗を繰って近く遂鹿戦が行われる筈。

◎全伯少年野球大会（時、四月二十九日）

梅弁の追撃及ばず リンス遂に優勝

サンパウロ青年会主催の全伯少年野球大会は、去二十三・四の両日、恵まれたる野球日和の下にスタン・カンポに於て開かれた。参加チームは三組に過ぎなかつたが、リンスチームはノロエステ線を、梅弁はソロカバナ線を、サンパウロチームは聖市及び近郊を夫々代表した形となり、三組鼎立、開会前早くも白熱の気は報つた。初日の試合は午後二時より梅坪対サ青年両チーム間に行われたが、力量の差かサ軍脆くも破れ、十二対六で梅坪勝つ。

二日午前九時よりリンス対サ青年は、リンスの強豪無人野を行く如く、二十二対二でサ軍の惨敗、午後二時から愈々決勝戦リンス対梅弁、老巧リ軍初回到一点取り幸先よしと見え、五回梅弁二点を入れ、リ軍も一点を入れ同点、以後両軍緊張、七回梅弁の内野矢にリ軍一挙二点を奪い優勝した。内山総領事は選手一同を日本倶楽部に招待、晚餐を供した。

◎修学旅行

（時、六月三十日）

冬期休暇を利用し、去る十七日夕刻バストス移住地を出発した第二、第六、第七の三校生徒は織田、久保、荒井、清水の四先生監督の下に、ポルト・エピタシオの水景を見物した後、サント・アナスタシオ駅に下車、梅坪、正和、サンタ・マリア三校を訪問、同地混成チームと野球試合を行ったが、スコアーは第一戦サ、アナスタシオ十二対バストス二。第二戦バストス三対サ、アナスタシオ二。

## ◎リンス青年会主催全伯少年野球大会

(時、六月二十七日)

リンス青年会主催全伯少年野球大会は、二十一日より三日間、チナジオ・アメリカーナ運動場に於いて開催。リンス、アリアンサ、大和、バストスの四チームでリーグ戦を行った。二十一日午前、大和七対バストス二十二、四回にて大和棄権、午後一時よりのアリアンサ対リンスは、ア十一、リンス十四でリンスの勝。第二日午前のリンス対大和はり軍の勝。午後のバストス対アリアンサはバストス勝。三日目アリアンサ対大和はア軍の勝ち。愈々リンス対バストスの両強豪の一騎打となり、場内一斎に緊張し、猛試合が開始されたが、バストス三点の差で敗れ栄冠はり軍に輝く。バストス二位、アリアンサ三位、大和四位、午後四時より、総裁今田、委員長菅山、青年会長小山の三氏挨拶。因に今回の優勝でリンス軍は二回の栄冠を獲得したのである。

## ◎ノロソロ野球大会 (時、八月二十二日)

チエテ移住地入植記念日の九日より三日間同地中央小学校運動場にて、参加チエテ、アリアンサ、バストス、リンスの四チームにてノロソロ大会が開催された。入場式の後、第一戦(九日午前)バストス対リンス

バ 021030000-6

リ 100000010-2

寸評 バ軍はチャンスをよく掴んで得点を重ねたが、リ軍闘

志なし。

第二戦（九日午後）アリアンサ対チエテ

ア 1 0 0 2 0 0 3 2 0 ー 8

チ 0 0 5 0 0 0 0 0 0 ー 5

寸評 大会随一の呼物、チ軍に対しア軍は年来の仇敵。アの山岸投手先発に、三回中島の二塁打を交え安打集中、五点を得たが、大弓場の投球に押えられ、その上四回と七、八回に得点され無念に泣いた。

第三戦（十日午前）アリアンサ 10×8 バス

トス。寸評、ア軍の打数35、バは36、安打各7、全く伯仲の健棒で攻撃戦だったが、梢バ軍に失策多く、少差でア軍の勝。

第四戦（十日午後）チエテ対リンス。五回既に十三対二でチ軍大勝。コールド・ゲームとなる。

第五戦（十一日午前）アリアンサ対リンス。

リ軍依然振わず、結局十二対〇でア大勝。

第六戦（十一日午後）バストス対チエテ。

バ 1 0 0 0 0 1 0 3 0 ー 5

チ 0 1 4 0 0 1 0 0 A ー 6 A

寸評 バ軍の畑中初回に本塁打したが、チ軍は三回に好機をものにして四点を入れ優位に立つ。六、八回バ軍の猛追も及ばず、チ軍の勝となる。この試合バ軍に対しチ軍は復讐戦、地元の応援で終始白熱、本大会の棹尾を飾るにふさわしい戦となる。三日間の激戦譜、アリアンサの連勝で大会は盛会裡に終了した。優勝チームア軍のメンバーは、投弓場、捕宮崎、一塁志保、二塁綱島、三塁沢田、遊山岸、左中村、中大山、

右藤沢。

◎時報社主催 全ノロ青年野球大会

(時、十一月七日)

十一月一日より三日間、リンス市シナジオ球場にて、時報社主催の第一回ノロエステ線青年野球大会が開催された。参加はアリアンサ、ビリグキ、カフエランジア、グアイサラ、リンス、プロミソン。入場式は多羅間総裁の挨拶、竹田主将の宣誓など。

第一日第一試合、進藤球審、塁審中村、中島、木村、プロミソン対グアイサラ。

P 9 1 9 7 2 - 2 8

G 0 0 0 0 0 - 0

プ軍の猛攻にグ軍潰滅。コールドゲーム。

A 2 1 8 7 6 - 2 4

C 0 5 1 5 0 - 1 1

カ軍の力闘空しく、ア軍の堅陣揺がず。  
メンバー

G P

土 肥 遊・投

野 村 捕

渋谷 III B

後 藤 I B

円 治 捕・I B

矢 野 III B

横 山 I B・投・捕

久 万 遊

三 村 投・I B・遊

二 宮 投・中

渡 辺 I B

神 田 I B

山本(兄) 中

田 辺 左

山本(弟)左 山下右  
三村(兄)右 金井中・投

第二試合、アリアンサ対カフエランジア。

メンバー

C A

捕 円羽原 II B

I B 伊藤伊藤 I B

中 徳本(弟)山岸遊

投・遊 徳本(兄)弓場投

III B 有木佐藤中

遊・投 桑原(兄)野原右

左 桑原(弟)花岡 III B

右 清野大山捕

II B 合田(下田)

第二日第三試合、リンス対ビリグキ。

| 110002011-6

B 210020011A-7

不戦一勝同志、技伯仲大接戦。

メンバー

B |

遊 島之江 竹田(仙)遊

I B 松尾 竹田(富)中

III B 桑木 竹田(正) I B

I B 黒木 佐々捕

捕 中島木 下左

中 西 本 竹田(彰) 右  
右 大 谷 池 田Ⅲ B  
投 松 隈 今 井投  
左 鐘ヶ江 秋 山Ⅰ B  
第四試合、アリアンサ対プロミソン。

P 0 4 0 0 0 0 2 0 0 ー 6

A 4 3 0 3 0 0 0 2 A ー 1 2

ア軍技量に優る。

第三日決勝、アリアンサ対ビリグキ。

B 0 0 0 0 0 0 0 ー 0

A 3 0 3 0 0 0 5 ー 1 1

ビ軍の申出にてコールドゲーム。

午後二時十分、球審進藤、塁審竹田、木村、木下で開戦。ビ軍努頭に嶋之江の二塁打で幸先よしと見えたが、ア軍の好防に得点なく、ア軍はよくチャンスを物し、七回一挙に五点を入れるや、ビ軍の申出にてア軍優勝。

リーディングヒッターは山岸清。十三打数七安打、○、五三八。二位は弓場、○、五〇〇。

◎汎ソロ野球大会 (時、十一月十四日)

バストス教育主催、全バ球団と本社後援の第一回汎ソロ少年大会は、去る一日から三日間バストス中央球場で開催。参加は第一、カスカッタ、アルト、プログレッツ、サウデ、ボンフィン、エスペランサ、文化の八チーム。可憐な児童が蒼空の下、闘志を見せて頼もしい。午前八時半入場式、花火で始まる。



第一日、エスペランサ11対10ボンフィン。

カスカッタ2対7サウデ、アルト13対4文化、プログレッソ0対17第一。

第二日、アルト6対24エスペランサ、第一12対6サウデ。

第三日、優勝戦アルト対第一

ア 0100000-1

第 420313A-13A

メンバーは、アルト||山田、今井、堀川、上條、大倉、小野、阪東、上井。第一||小橋、作間、上田、中川、松田、水本、高平、富田、中川。

◎リンス少年野球 (時、三月二十三日)

去る三月十日、ノロ線リンス郡内の少年野球が行われた。時報紙と富士屋運動具店の斡旋。集るはサン・ジョン、アリアンサ・セントラル、第一アリアンサ、リンス学園の四チーム、熱戦を展開した。

第一試合、アリアンサセントラル12対0

第一アリアンサ。第二試合、リンス9対2

サン・ジョン。優勝戦、ア、セントラル7対6リンス。リンス惜敗で、ア、セントラル優勝。

◎奥ソロ少年野球 (時、四月十三日)

正和对梅排、第一第二軍共、正和勝つ。

去る十七日ソロ線サ、アナスタシオ駅の梅坪小学校で行わ

れた正和对梅坪の戦績は、

△正和第二チーム対梅坪小学校は、審判山鳥、砥上、禅藤、十四対十で正和の勝。

△正和第一チーム対梅坪青年は、午後三時半開始。審判田中、清谷、西、二十三対十で正和第一チームの勝。第一試合及び第二試合のメンバーと成績は、

### 第二試合

梅 榊 正和

山 畠 投 砥上(正)

田 中 捕 篠 原

砥上(利) 一 山本(太)

唯 井 二 山崎(俊)

清 谷 三 山崎(光)

須 山 遊 丹(俊)

斎 藤 左 丹(章)

遠 藤 中 石 岡

渡 辺 右 山本(隆)

2 2 打 数 4 1

1 0 得 点 2 3

7 安 打 1 0

5 失 策 2

2 残 塁 5

1 四 球 5

0 三 振 0

### 第一試合

梅 緋 正和

高野	投瀬戸口
渡辺(市)	捕丹(勝)
遠藤	一奥村
清谷	二西(一)松沢
宮沢	三山本(勝)
須山	遊上田
宍戸	左西(広)
隈元	中田中
本田	右岡山
24	打数
33	
10	得点
14	
7	安打
11	
8	失策
4	
5	残塁
8	
1	四死
5	
6	三振
4	

1935

◎第三回全伯少年野球大会

(時、六月二十六日)

於 バストス中央小学校グラウンド

日時 六月十五日より五日間

参加 エスペランサ、サウーデ、カスカッタ、リンス、アルト、以上A納文化、バストス第二プログレッソ、ボンフィン、以上B組

第一日 サウデー7対4、エスペランサ、文化10対2ボン

フィン、アルト2対0カスカッタ、バストス11対3プログ  
レツソ

第二日 リンス2対0金ルト、バストス2対1文化、サウデ  
4対2カスカッタ

第三日 プログレツソ4対1ボンフィン、リンス14対2エ  
スペランサ、アルト10対0サウデ、文化18対9プログ  
レツソ、カスカッタ4対1エスペランサ

第四日 リンス5対0サウデ、バストス10対0ボンフィ  
ン、アルト13対0エスペランサ、リンス9対0カスカッタ  
第五日 三位戦、アルト2対4文化第五日 優勝戦、午後二  
時五分、球審園田、塁審西村、石木、千田、バ軍先攻

息づまる投手戦に始まる。二 二回共に無為、三回リ軍の  
四番打者竹田大三塁打、次打者の安打で先取一点。五回パ軍  
絶好のチャンス実らず。七一回バ軍最後の攻撃、三番の大森  
死球に生き、四番水本中堅に安打、竹内二ゴロー死走者二、  
三塁、六番上田三球目を猛打、投手竹田止めて三塁に暴投し  
二点入る。七回裏、上田投手の好投でリ軍得点なし、二対一  
バストス優勝。過去二カ年の雪辱なる。時に午後三時半。

バ 0000002-2  
リ 0010000-1

◎第二回全ノロエステ青年野球大会

(時、十一月六日)

時報リンス支社主催、汎リンス青年会並に富士屋運動具店  
後援の第二回ノロエステ大会は、去る一日より三日間リンス

球場で絶好の野球日和に一大球宴を展開した。参加チームはリンス、ビリグキ、カフエランジア、プロミソン、グアイサラ、ノーボ・オリエンテ、ドウラード、セントラル・アリアンサの八強豪、球場は大観衆でうずめ尽された。

入場式には多羅間総裁祝辞、今田委員長訓辞、農田源行挨拶、リンス竹田の宣誓、午前十一時は進藤審判長のプレイボールで開始。

第一日第一試合、セントラル・ア対ドウラード。球審進藤、塁審中島、佐々。

D 31818-21  
A OO201-3

メンバー  
セントラル・ア ドウラード

5	上野	土肥	6
7	矢嶋	三村(兄)	9
3	小池	横山	3
1	井上	三村(弟)	1
6	只野	円治	5
9	宮島	渋谷	2
4	片岡	山本(弟)	7
8	桜井	佐藤	8
2	夏秋	山本(兄)	4

第一日第二試合、ビリグキ対カフエランジア。

C OOOO-0  
B 1077A-15A

カ軍の先攻で開始。ビ軍桑本の剛球にカ軍手が出ず、一方

ビ軍は鏡ヶ江、川渡の好打と駿足の黒木連続盗塁などで猛攻、カは

順	カ	軍	守	順	ピ	リ	グ	キ	守
1	円	羽	2	1	鐘	ヶ	江	2	
2	斎	藤	3	2	島	之	江	4	
3	加	藤	6	3	桑	本		1	
4	徳	本	8	4	川	波		3	
5	桑	原	1	5	黒	木		9	
6	平	岡	7	6	西	本		5	
7	黒	田	4	7	松	尾		7	
8	林		9	8	大	谷		6	
9	藤	田	5	9	成	沢		8	

16の達矢で自滅した。

第二日第三試合、リンス対ノーボ・オリエンデ。

		O	O	2	4	0	0	0	4	-	1	1
N	0	0	0	0	0	1	2	0	0	-	3	

球審進藤、塁審島之江、黒木。

若さのリンス、老巧人ノ・オ軍の対戦、今井リ軍投手の速球よく五回までノーヒット、期待の一戦は一方的に終わった。

順ノ・オ 守順 リンス 守

1	大	坪	2	4	1	武	藤	6
2	斎	藤	5	2	竹	田(富)	2	
3	中	島	3	3	竹	田(正)	8	
4	赤	川	1	6	4	柳	生	4
5	北	出	6	2	5	佐	々	9

6 井 口 8 6 蟻田(彰) 3  
 7 川 崎 7 1 7 木下(明) 7  
 8 北 原 4 6 8 今 井 1  
 9 加 藤 6 7 9 木下(清) 9  
 第二日第四戦はプロミソン棄権でグアイサラの不戦勝。  
 第五試合、ビリグキ対グアイサラ。  
 E 4 9 1 0 1 5 1 - 2 1  
 G 0 0 1 0 0 0 0 - 1

順 グアイサラ 守 順 ビリグキ 守

1 三 瓶 2 1 鐘ヶ江 2  
 2 角 田 5 2 島之江 4  
 3 小 山 6 3 桑 本 1  
 4 地 村 1 4 川 波 3  
 5 宮本(弟) 4 5 黒 木 9  
 6 二 田 7 6 西 本 5  
 7 中 原 8 7 松 尾 7  
 8 西 9 8 大 谷 6  
 9 宮本(兄) 3 9 成 沢 9

球審進藤、塁審佐々、木下。  
 全く力の差、一方的に終る。  
 第六試合、リンス対ドウラード。

D 0 0 0 0 0 1 - 1  
 | 0 1 3 0 0 4 7 - 1 5

これも力の差コールドゲーム。

順 ドウラード守 順 リンス 守

1	土肥	6	1	竹田(仙)	4
2	三村(兄)	9	2	木下(清)	5
3	横山	3	3	竹田(正)	8
4	三村(弟)	4	4	柳生	6
5	円治	5	5	竹田(彰)	3
6	渋谷	2	6	佐々	9
7	山本(弟)	7	7	木下(明)	7
8	佐藤	8	8	今井	1
9	山本(兄)	4	9	竹田(富)	2

第三日優勝戦、リンス対ビリグキ。

臥薪しようたんリンス王座に。ビ軍涙をのんで再び二位。灼熱の太陽のもと千余の大観衆は、そよともしない重い空気を飲んでいた。晴れの決勝戦、相對するは地元リンスと昨年二位のビリグキチーム、昨年は7対6でビ軍の勝、リ軍の雪辱戦でもある。球審進藤、塁審中島、川崎。

B 000210040-7  
| 00106013A-11A

寸評 リ軍三回表一点先取、だがビ軍四回二点入れ五回にも一点追加で優位に立ったが、五回裏一四球二失四安打で六点を奪われ大勢を決した。然し八回四点を返し反撃したがその裏三点を献じ止めを刺された。かくて栄冠はリンス軍の頭上に輝いた。

◎ベルナルデス惜敗対プルデンテ戦

(時、一月十八日)



昨年暮の四駅対抗に敗れたプ・ベルナルデスは、必勝を期しプ軍に挑戦したが敗れた。十二日ベルナルデス球場、審判生駒千秋。

B 101011110ー6  
P 000020204ー8

メンバー

ベルナルデス プレデント

SS 岩村 金城 III B

III B 竹(弟) 麦田 IB

P 竹下(兄) 岩間 SS

II B 結城 前田(兄) RF

C 松本 長谷川 CF

I B 長野 前田(弟) II B

IF 藤波 下乗 C

CF 稲毛 三浦 IF

RF 吉村 比嘉 P

1936

◎新春のピリグキ野球大会(時、一月十八日)

去る正月二、三、四の三日間、ノロ線ピリグキ駅エリジオの新球場で、ピリグキ大会を催した。参加はジャンガーダ、ロベルト、リザ、向上、バレーロ、フェイジョン、ニツポラシニア、太陽、エリジオ、更新の十チーム。

戦績は次の通り。

ジャンガーダ 6対5 ロベルト

リザ 0対2A 向上

## 第二回戦

フエイジョン 1対4 A バレイロ  
ニッポンランジア 5対4 太陽  
エリジオ 0対1 ジャンガード  
更新 5対6 A リザ

## 準優勝戦

バレイロ 11対1 ニッポンランジア  
ジャンガード 7対1 リザ

## 優勝戦

バ 0001000001  
ジ 00001203A-6A

ジャンガードの山田秀美は四割五分五厘で、リーデングヒッターとなる。

## ◎富士屋、聖市に移転 (時、二月十九日)

“めしよりも野球で”

ノロエステ球界に轟したリンスの富士屋運動具店主竹田仙造氏は、全伯野球大会の気運濃厚になってきたのを見て、今度はサンパウロに野球を盛んにしたいと、家族を連れて此の程聖市に移転。タマンダレー街三四六番に開店した。

(編注) この富士屋の聖市移転は、当時日伯新聞社のリンス支社から本社詰となっていた進藤憲吉の奨めであった)

## ◎奥ソロ対駅野球大会 (時、四月八日)

秋空高く白球、熱狂の観衆前にプ軍快勝。

去る二十二日、サントアナスタシオ駅正和青年会主催で、

同駅球場に第二回奥ソロ対駅野球大会が開催された。出場チームは、ア・マシヤド不参加で、プレシデンテ・ヴェンセスラウ、サント・アナスタシオ、プレシデンテ・ベルナルデス、プレシデンテ・プルデンテの四チーム。午前八時入場式、内田総裁の祝辞、渡部重審判長の訓辞の後、第一回戦開始。

第一試合 プ・ヴェンセスラウ対プルデンテ午前八時四十八分開始。十一時十六分終了。球審渡部重。

P・W 2232000-9  
P・P 070611A-15A  
守 P・P 打 P・W・守

1	金城	1	沖土居(兄)	1
3	藪田	2	前村	6
1	奥村・斎藤	3	伊藤	5
2	石井	1	山鳥	3
7	三浦	5	泉	7
5	広岡・比嘉	6	森部	8
6	玉那覇	7	榎	2
8	長谷川	8	澤田	9
9	尾形・市来	9	沖土居(弟)	1

第二試合 プ・ベルナルデス対サ・アナスタシオ、開始正午、終了二時、球審渡部重。

P 3031002-12  
S 0110120-11  
守 S・A 打 P・B 守

2	篠原	1	村本	5	9	山本	9	吉本	1
1	瀬戸口	2	結城	1	8	山本	8	小野田	8
3	山本	3	前田	7	7	山崎	6	竹下(弟)	3
1	砥上	1	竹下	9	6	円(兄)	5	南部	6
6	円(兄)	5	南部	6	5	円(弟)	7	岩村	2
7	山崎	6	竹下(弟)	3	8	山本	8	小野田	8

第三試合 プ・ブルデンテ対プ・ベルナルデス、開始二時三十分、終了四時三十分。

P・P	6	2	2	2	1	3	0
P・B	2	0	1	0	3	1	棄権
守	P・B	・	打	P・P	・	守	

5	村本	1	金城	5	1	前田	3	石井	2
1	結城	2	薮従	4	7	前田	3	石井	2
6	南部	5	市来	9	1	竹下(兄)	4	斎藤	6
9	竹下(弟)	6	広岡	7	6	南部	5	市来	9
2	岩村	7	三浦	3	9	竹下	6	広岡	7
8	小野田	8	長谷川	8	2	岩村	7	三浦	3
3	吉本	9	比嘉	1	8	小野田	8	長谷川	8

ベ軍常に苦戦、七回に至つてブルデンテ優勝、富士屋寄贈

の優勝旗と青年会杯を授賞、内田、渡部挨拶閉会した。

### ◎サンパウロ野球クラブ誕生

(時、六月十九日)

近年邦人野球界は、急足の隆盛を示し、ソロカバナ線ノロエステ線といわず、各地に野球熱勃発して、野球連盟の結成の気運まで濃厚となって来たのに反し、独りサンパウロ市の球界は振わず、往年のミカドチーム等衰微後は、一向に目立ったチームも生れず、従つて全伯大会も催されぬ実情を憂いた球界関係者は、進藤憲吾を中心に、之れが不振の打破更新を図つて来たが、去る十六日夜、常盤ホテルで有志十数名集会、聖市球界の復興について種々議をねつた結果、取り敢えず野球倶楽部を組織することを決定して、左の諸氏を役員に推薦し、「サンパウロベースボールクラブ」を結成した。

顧問鮫島直哉、部長石原桂造、当番幹事進藤憲吾、樋口謙三、会計幹事山下寛人、佐藤栄二、幹事野村忠三郎、長谷川末喜、鈴木威、多田栄一郎、高野富継、森山敬太郎、横溝一男、杉野正喜、小田秀行、チーム監督進藤憲吾、小田秀行

同倶楽部は、球界の更生をはかると共に、全伯野球大会の開催方法等に全力を集中していくことになって、本部を常盤ホテル(郵函一八五〇)に設け、拡く同好の士の入部を希望している。なお部費は一月五十ミル。



昔の思い出

石原桂造（寄稿）

コロニアに野球が始って今年丁度五十年に当る。最初出来たチームはコンデ街に在った青年会のメンバーで、当時の人が十人余り現在も生存している。其の後に生れたのがミカド運動クラブで、既に故人となった笹原、渡辺などという人達が、リーダー格で、野球、テニス、ピンポンなどをやって、当時の青年連が交っていた。そのころ米人間にもチームがあつて、時々試合を行ったけれど、全然問題にならず、試合というより教えを受けたようなものだった。

追々アニユーマス、レヂストロ、アリアンサなどにも野球部が生れ、一九二四年、初めて全伯大会が催された。いつでも集つたのは四チームだ。これらのチームが試合を行い、アニユーマスが初優勝した。今は故人となつた鮫島直哉という篤志家があつて、見事な優勝旗を我々に寄贈してくれたの

で、この優勝旗争奪戦を毎年行っただけでも、四、五回しか続かなかった。ということは、弓場チームが図抜けて強かった故もあるが、今日のようにフェデラソンなどのいう統一された機関のなかったのが主な原因であろう。

その頃からミカド運動クラブも既に蔭が薄くなり、一九三四、五年頃は殆んど有名無実の存在となった。これを苦にしか進藤がある時、私の家へ来て、「新しく野球クラブを組織しよう」との話で、元より私も好きな道なれば双手を揚げて賛成した。一切の産婆役を進藤が努め、勿論ミカドの残党もまじえ更に竹田兄弟や武藤などリンス出身の新顔が加わり、至極スムーズにココの声を揚げたのが、現在の「サンパウロ・ベース・ボール・クラブ」である。

その頃は野球も大変盛んになって、聖市では実業野球リーグが行われ、地方にも多くのチームが表われて、全伯大会も再開された。

一九四〇年の全伯大会でサンパウロが優勝した。第何回だったかは記憶にないが、この年は皇紀二千六百年祭で、私は訪日の途次リオを出帆して三日目に優勝の電報を受取った。船の無線局長が野球好きで、態々自身電報を持って私のキャビンに来て「ヤア、お目出度う」というわけで、二人で祝杯を揚げたことを覚えている。

翌年は戦争が始つたので、全伯は勿論、総ての競技が中絶の止むなきに至り、戦争中から終戦後にかけて進藤は地方へコーチに行くし、その頃私はゴルフに熱中して野球の方は熱がさめかけ、サンパウロ・ベースボール・クラブ、まさにピッチの状態だった。折柄救いの神ともいうべき人が現れた。

誰あろう横田その人であった。元より横田は熱のあるクラブの後援者でもあるし、彼はクラブ内容から選手の充実に、殆んど商売もそっちのけで奔走された。その結果、サンパウロ・クラブは各試合共に上位にあつて、全伯でも優秀なクラブであることは、世間周知の事実であろう。横田は実にクラブ再生の恩人であると同時に育ての親でもあると私は常に敬意を表している。(……後略。一九六六年筆)

1936

◎チエテ野球リーグ戦 (日、五月三十日)

チエテ青年連盟主催、オールチエテ第二回野球リーグ戦は、去る九、十日の二日間、参加ノーボ・オリエンテ、バラ・フロレスタ、ウニオン、サン・ジョゼの四チーム。

各チームの奮戦は目覚しかった。戦績は、第一日の九日、N・O 15対5 S・J、N・O 20対5 U、B・F 35対3 S・1、サンジョゼの投手捕手負傷で棄権、ウニオン不戦勝、十日、B・F 30対8 U、N・O 14対10 B・F、ノーボ・オリエンテ優勝。

◎第四回全伯少年野球予選

参加は十チーム、栄冠は新星チームチエテに

(聖、七月四日・日、七月八日・時、七月八日)

日本人教育普及会、ビリグキ郡部会主催の第四回全伯少年野球大会は、去る六月二十四日から五日間ニッポランジア球場で開催されたが、参加チームの少年選手の熱戦に、二千余の観衆を酔せた。新進チエテが輝く栄冠を獲得した。大会役



員は総裁多羅間鉄輔、委員長宮崎八郎、副佐々木郭土日、審判長進藤憲吾、出場十チームは、バストス、リンス、チエテ、日伯、エリゼウ、中央コロニア、ジャンガーダ、リーザ、アグ  
ア・リ、ノバ、ロベルト。A B二組のリーグ戦。A B各組の勝者で決勝戦を行う。全試合の結果は次の通り。  
優勝戦 チエテ 5対0 日伯学園

第一試合

第二試合

第三試合

第四試合

第一日 A組リンス12 B組バストス 20

A組チエテ11A B組日 伯8A

(24日) リーザ1 アグア・リンパ0

エリジオ3 ロベルト1

第二日 A組ジャンガーダ11 B組チエテ9

A組リーザ10 B組バストス22

(25日) アグア・リンパ0 リンス4

中央コロニア0 ロベルト1

第三日 A組チエテ13 B組バストス 1A

A組リンス7 B組チエテ6A

(26日) 中央コロニア0 ジャンガーダ0

エリジオ4 リーザ0

第四日 A組エリジオ9 B組日 伯4

A組ジャンガーダ5 B組エリジオ7

(27日) 中央コロニア0 バストス1

ロベルト0 リーザ2

第5日(28日)午後1時 優勝戦 A組チエテ5 B組  
日伯0 優勝チエテ

大会五日目の三十八日午後一時、熱狂する二千余の大観衆  
見まもる中に、決勝の火蓋は切られる。両校の応援歌に球場  
は爆発。五回に本田剛為の大三塁打、均衝破れ一挙五点。球  
審進藤、蜜竹田、中島、開始一時終了二時十五分。球  
守 日伯 打 チエテ 守

6	森	1	本田(壤)	6
2	本松	2	塚田	7
3	渡辺	3	関	2
5	遠藤	4	本田(剛)	5
8	森山	5	有馬	8
9	石場	6	田口	1
7	吉田	7	伊木	9
4	瀬尾	8	榛菓	4
1	馬場	9	山本	3

◎バストス、チエテ定期抗戦(日、九月一日)  
アリアンサの参加なく、二チームのみ。

バ 00000000ー0

チ 20404441Aー19A

メンバー

バストス チエテ

板垣投中島

中川捕北出

稲垣一中井  
高柳二藤川  
松田三赤川  
上條遊菊地  
上山左本田  
小橋中東  
茂庭右齋藤  
上田補田口

1936

◎全伯野球大会華々しく復興

過去に伯国日本人野球リーグ戦と銘打った大会が（鮫島旗争奪戦）一九二四年から一九二九年まで、毎年一回催されて来たが、アリアンサチームが三連覇したのち、立消えの形になっていた。近年各地に野球は素晴らしい発展をして来たので、是非全伯大会の開催をという声が沸き起り、その実現の為にサンパウロ野球倶楽部が結成され、これが中心となって、遂に第一回大会が開催された。

期間は九月三日から七日までの三日間。

会場は聖市モツカ区のアントアルチカ蹴球場、参加はバストス、チエテ、パラグアスと地元サンパウロの四チーム。リーグ戦である。

九月三日午前十時、市毛総領事の始球式後、十一時二十五分。

第一試合 パラグアスー対チエテ戦は、球審竹田仙、塁審林、竹田富で開始。

P 1 1 2 0 2 2 5 0 1 - 1 1 P安1 2 振5 T 6 1 0  
 2 2 6 2 1 0 A - 3 2 A 丁安1 8 振9 終了二時四〇分、  
 本塁打北出(チ)一、松山弟(パ)一。

寸評 パ軍善戦して敗る。

守 バラグアスー 打 チエテ 守

5、2 尾 田 1 藤 川 1  
 8 高 橋 2 菊 池 6  
 2、9 渡 部 3 北 出 2  
 1 松山(兄) 1 赤 川 5  
 6、9 松山(弟) 5 中 島 1、8  
 3 奥 村 6 東 8、7  
 4 大和田 7 中 井 3  
 7 桜 井 8 本田、7 田口、1  
 9、5 稲 田 9 斎 藤 9

第二試合 サンパウロ対バストス、四日午前九時二十分開始、終了十二時四〇分。

B 0 0 9 0 0 2 0 0 0 - 1 1 B安8 振9  
 S 9 0 3 6 0 0 0 2 A - 2 0 A S安1 1 振3

球審竹田仙、塁審川崎、北出。

寸評 バ軍運なくサの軍門に降る。

守 バストス 打 サンパウロ 守

9 | 8 小 橋 1 畑中(兄) 6  
 7 上 山 2 進 藤 8

1	—	5	板垣		3	竹田(富)	2
1			西山		1	小田(兄)	4
3			稻垣・上田		5	竹田(彰)	3
8	—	1	吉河		6	武藤	5
2			林		7	小田(弟)	3
5	—	松田	9—庭	—	8	Amadev	—1松隅
6			上條		9	畑中(弟)	7

第二日

第三試合 サンパウロ対パラグアス

S	7	5	3	1	4	—	2	0	サ安	1	0	振	1
P	2	0	1	0	0	—	3		パ安	1		振	9

球審斎藤、塁審川崎、笹原、午後二時開始、終了三時四十五分。

寸評 サ軍の一方的な勝利。

守	サンパウロ	打	バラグアス	—	守		
6	畑中(兄)	1	尾田		2		
1	進藤	2	高橋		8		
2	竹田(富)	3	松山(兄)	3	—	1	
3	竹田(彰)	5	渡部		1		
5	武藤	6	奥村	1	—	3	
8	小田(弟)	7	大和田		5		
9	佐伯・山下	8	桜井・後藤		9		
7	畑中(弟)	9	稲田		7		

第四試合 バストス対チエテ戦は午後四時十分開始、五回夕闇で中止、翌五日午前十時続行開始。

B	0	0	0	0	1	0	1	—	2		B安	2	振	6
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	--	----	---	---	---

T 1020067-19 T安8振3

球審竹田仙、塁審竹田正、鈴木。

寸評 バ軍精彩なく敗る。

守 チエテ 打 バストス 守

1 藤川 1 小橋 8

6 菊池 2 上傑 6

2 北出 3 坂垣5-9-7

5 赤川 4 西山 4

1-8中島 5 林 2

8-7 東 6 上田1-9

7-本田1-田口 7 中川7-9-1

3 中井 8 稻垣-3高柳-9

9 斎藤 9 上山-9松田-5

第五試合 バストス対パラグアス、九月七日午前十時開始、終了十二時五十五分。

B 300090030-15 B安2振8

P 100220010-6 P安6振10

球審竹田仙、塁審木村、安島。

本塁打松山兄(パ) 1

寸評 パ軍は五回達矢で九点献上し自滅した。

守 バストス 打 バラグアス-守

8 小橋 1 尾田 2

7-上山7-西山 2 渡部 9-8

1 板垣 3 松山(弟) 6-1

2	林	1	松山(兄)	1	6
3	上田	5	奥村	3	
6	上傑	6	高橋	8	
9	茂庭	9	中川	7	稲田
1	高柳	8	大和田	4	
5	松田	9	桜井	7	9

第六試合 サンパウロ対チエテ、七日午後二時三十分開始、終了。

S O O 0 1 0 3 0 1 5 — 1 3  
T O O 2 3 1 4 3 0 1 A — 1 4 A

S 安 1 6 振 1 本 3、T 安 1 1 振 6 本 0

寸評 二勝同志の最終戦、九回表同点となり、その裏菊池のサヨナラでチ軍栄冠を握る。

守 チエテ 打 サンパウロ 守

4	藤川	1	武藤	6		
6	菊池	2	畑中(弟)	8		
2	北出	3	進藤	1	5	1
5	赤川	1	竹田(富)	2		
1	8中島	5	竹田(彰)	3		
8	7東	6	小田(弟)	9		
7	本田	1	田口	7	小田(兄)	1
3	中井	8	山下	9		
9	斎藤	9	松隅	5	1	5

第六試合経過

この試合はリーグの最終戦、サ軍チ軍共に二勝、期せずして優勝戦となる。両軍の投手は期待通り老巧の進藤と中島の先発、一、二回は共に無為、三回チ軍赤川の三塁打などで二点を入れ俄然均衡は破れたが、次の四回表サ軍は山下の本塁打、松隈の二塁打その他で四点をものにし優位に立った。しかしその裏チ軍は四安打二敵失で三点を獲得逆転する。チ軍は五回にも一点を加え、二点リード。六回表サ軍は小田兄、山下連続三塁打と武藤の適時打で三点を入れ再び優位。応援団は熱狂、球場は正に爆発的となる。だがその裏チ軍猛然と反撃、一死走者一、二塁に北出好球を強打すれば、中堅越本塁打了と思われたが、畑中好走これを柵外に腕を延ばして捕え、超大美技で防ぐ。攻防はクライマックス。なおも一死満塁に猛将中島の好打その他で四点、再度逆転する。七回にも三点追加、その差六点と断然優位。八回一点を返したサ軍は、九回表最後の反撃に出る。竹田正コーチの策入れに竹田富四球を選び、続く竹田彰中堅

越の大ホームー、二点。小田兄の安打で一死一塁に山下右翼に好打し、小田生還、松隈投葡で二死となったが、続く一番の武藤、衆望を担っての一打は右翼越しのホームーで又二点、遂に十三対十三の同点となる。

ここで七回より好投の松隈退き、再び進藤マウンドに戻る。勝負は振り出し、攻防は決死の形相である。この回チ軍のトップは九番の斎藤、よく選んで四球、藤川も四球で無死一、二塁、二番の智将菊池の一打、二塁上を抜いてサヨナラとなる。十三対十四A、球界空前の大試合、凱歌はチ軍に上った。



(編注一 進藤、石原その他の必死な努力で再開した第一回であったが、参加が少かったのは各地球団に、費用、自信が欠けていた為、特に要望されたアリアンサは、弓場の「予選なしには？」で見送られた。然し後日解決ア軍も二回から参加している。)

(編注二 第六試合、サンパウロ対チエテ戦の第四回サ軍の攻撃に、トップ竹田彰が四球で一塁に向っている途中、次打者の小田弟がバッターボックスに入った。トタンに千軍から抗議あり、打者はアウトだという。理由は規則上、前打者が一塁ベースを踏む以前に次打者が打者席に入ったからと。審判団も正しい規則書を持たず、反駁出来ぬまま一死を宣す。この間二十分も費したという。半世紀前の話である。)

### ◎奥ソロ野球戦

(時、九月十六日)

第三回奥ソロ野球大会は、予定の通り六日、七日プ・プルデンテ青年会主催で同市のカンポ・コンメルシアルにて盛大に挙行された。参加はプ・ヴェンセスラウ、サ・アナスタシオ、プ・ベルナルデス、ア・マシヤード、プ・プルデンテの五チーム。ヴェンセスラウ対ベルナルデス戦は、努頭からベ軍が健棒を振り、二十三対十三で大勝、午後二時からアナスタシオ対マシヤードは、ア軍三回までマ軍に押されていたが、中半盛り返し、遂に十六対5で快勝した。

第二日はアナスタシオ対プルデンテ、初回プ軍一挙六点を挙げたが、ア軍七回に俄然総攻撃を開始。遂に二〇対十三でア軍の勝。

最後勝残りのアナスタシオ対ベルナルデスの決勝戦は、両軍健

棒振り、混戦を展開したが、遂にア軍の得点勝利、二十四A対十八で栄冠を獲得、優勝旗を手にした。

### ◎リーグ結成の声 (時、十月十四日)

全伯大会が復活して、モツカ球場に諷爽たる選手の活躍を見た観衆の中には、久しく忘れていた野球への魅惑がムラムラと起り、大会後、先ず町の野球として名乗りを上げた領事館チーム、ブラ拓と封戦、次いで蜂谷、同仁会など、雨後の筍(?)のように続々チームが結成され、海興、日伯綿花、さては各新聞社、コチア、モヂを入れると優に十チームに余ると予想されるので、何時とはなしに連盟結成の声が起り、去る領事館対蜂谷の試合後、日本倶楽部に関係者が集った時は、大体野球の進藤の手もとで具体案を立てることになり、進藤は日下種々考究中であるが、出来れば春秋二回全チームのリーグ戦をやったらとの意向であり、優勝旗なども寄贈に仰がず、断然我らの手でと力んでいるから、遠からず賑やかな野球時代を出現するに至るだろう。

### ◎産ぶ声揚げた野球連盟

(時、十一月二十三日)

聖市球界では、かねてから連盟組織が計画されていたが、去る二十日夜日本倶楽部で、市毛総領事、石原桂造氏外各チームの代表者十数名が集って協議した。直ちに来月からリーグ戦を始める事になり、既成の同仁会、総領事館、蜂谷、日伯、ブラ拓、ペトロポリス(伯入学生)の六チームで結成した。名称は「実業野球連盟」とする事になった。

日伯新聞

昭和十一年二九三六年) 十一月二十九日  
二千七十五号)

◎蘇る野球譜 聖二球界にめぐり来る春

実業野球聯盟成る(日、十一月二十九日)

久しく沈滞の淵を辿っていた在伯邦人野球界も第一回全伯野球大会を契機として一陽来復熱球の春が訪れようとしている。既に本年九月の大会で、心臓を躍らせた領事館やブラ拓の老年連中早速チームを編成して飲むか飲まれるかの珍試合を演じたが、其後同仁会、蜂谷商会、日伯新聞など雨後の筍のようにチーム誕生したので、これを機会に市モスポーツ総領事の発起で聖市実業野球聯盟を結成する事となり去る二十日午後日本クラブへ、領事館、蜂谷、ブラ拓、同仁会、ブラスコット、商工業之友、時報社、日伯社等の代表者集合、第一回協議会  
を行つた。現在五チームある外、四、五チーム出来る筈。来春一月からリーグ戦を行う。参加資格は一つの会社商店の従業員で結成されたもの、希望者は本月一杯に常盤の石原へ選手名表を、尚第二回会合は十二月一日日本クラブで、細則はその折決定する。

◎ポンペイで初の野球 (時、十二月三日一去る十二日ポンペイア植民地主権で同地小学校庭に、ポ植民地青年と小学校対ジャトバ青年と小学校の對抗試合が行われた。好天に観衆多数、午前十時入場式後、墨審和田、川野ジャトバ少年先攻

で開始。三回までジ軍よく攻めて10対1と優位であったが、四回ジ軍の大山投手内野飛球を捕りそこね腰を痛め、その後投球出来ず、ポ軍一挙に十五点を入れ、五回後一塁手替ったが、結局十九対十でポンペイアの勝となった。この試合でポ軍の加藤捕手が活躍した。午後二時四十五分より青年対抗試合を開始。

ポ軍稍や優り十二対七で初の栄冠を獲得した。この試合でジ軍の捕手大山と中戸遊撃手が活躍、中戸は三塁打一と本塁打一本を放った。午後五時終了、江藤会長閉会の辞で終幕した。この後、両地関係者の間に、パスリタ延長線の少年野球連盟組織が話し合われた。ジ軍は横井先生が指導である。

全伯組織のはじまり

竹田仙造

弓場さんの率いるアリアンサが、一九三七年の第二回全伯大会に出て来たについては、大きな下心があつてのことで、彼がいつも提唱していた予選の優勝チームが集つて覇を競う全伯選手権大会を、是非実現さねばならんというものだった。

チームを率きつれ、鍋釜炊事道具一切持参で、コンデ街下の合宿所に乗り込むと同時に、まず日伯新聞に話を持ち込んでも、竹内秀二野村忠三郎さんたち幹部に強硬に交渉を始めた。この話が仲々つかかなかつたらしく、夜もおそくまでかかって、次の日の対サンパウロの試合に、睡眠不足で敗れた。やっと話がついて山に帰つたが、話の本筋は日伯新聞に主権者になれということだった。

これについて三浦社長宅で相談したが、三浦さんは、「俺は興業は嫌いだ」と最初から話に乗らず、竹内さんがさんざんてこずって、日伯も大きくなったんだから、もう興業としてでなく、社会事業として、やるべきだと力説、野村さんもこれに同調、やっと社長の承認を得て、決行することになった。これは弓場さんの熱意が、三浦社長を動かしたわけで、このやり方で今日の球連の全伯大会も行われているのである。

### 中林敏彦略歴



入植カフエランジャ町サンルイス耕地リンス駅アリアンサ三区、

一九三三年十月頃。家族親父一武衛、母ふく（義母）渡伯は十七歳、次男十五歳昌夫十歳茨城中学中退（五年）岩上二郎（前知事）は彼の先輩。

ノロエステ線ブリグイ駅ニッポランジャにて、日語教師。聖市にては、日本新聞、伯刺西爾時報、聖州新報、日伯新聞などに働き、第二次大戦中はビラツキにて養鶏、戦後パウリスタ新聞に入り、戦後の全伯少年大会を始め、日伯毎日新聞を創立すると、早速センバツ大会を始めた。

“中林敏彦とその野球”

座談会

於 球連本部

日時一九八〇年八月十二日 午前九時半

出席者

元ノロエステ線、ビラツキ住在

資料委員会 清田武正

木村静男（中林氏の義弟）

竹田仙造

山下寛人

黒木常彦

司会 横田守正

司会 今日、中林敏彦さん（愛称カンチヤン、現日伯毎日新聞社社長）の“野球と、その人”ということでお話し頂きたい。というのは、御本人は、自分のことは全然話したがらないので。

竹田 一番先に、なぜ中林さんと呼ばないで、カンチヤン、カンタローというかというとですねえ、彼が若い頃、当時流行した、“赤城の子守唄”東海林太郎のねえ、あれがとても好きで、あればかり歌っていた。それから皆さんが、カンチヤン、カンタロー……。

黒木 ああ、そうですか。どうして、カンタローつていうかと思つて。

司会 あれの名付け親は、上村武明、カンムラという青年。

竹田 石原のおやじ（桂造、トキワホテルの主人、故人）が、とても、それにほれ込んで、カンタつて名前にしてしまえ。

山下・竹田・司会（一緒に）その話を知っている人は、余りない。

竹田 ところで、彼は何年に来て何処に入ったのかねえ。三十五年？

司会 いや三十三年ですよ。最初に入ったのは、カフェランジア。サン・ルイス耕地リンス駅のアリアンサ三区。

竹田 ああ、ゴヤンベーのわき、カフェランジアと、リンスの間、間部さんなんかのおつた処だ。

司会 それが三月で、もう十一月には、サンパウロに来たというんだ。どうしてそんなに早く出られたのか。昌夫君の話では、罪金払つたというんだ。

竹田 それから？

司会 それから、日本新聞（翁長さん）に一家全部で働いたんだ、コンデ街にあつた。

山下 日本新聞か、聖州新報か？

司会 いや日本新聞だ。それでねえ、ビラツキに行ったのは、新聞の記者で行った。当時ビラツキは、もうノロエステでも、大きな植民地だったんでしょう？

黒木 ああ、あそこは大きかったですよ。リンスと同じ位になっていた。

司会 彼のビラツキの初めの頃のこと、誰か知っていませんか、三十四年だ。

木村 最初フアルマシアに働いたんですよ。土口井さんの筋向いの。あそこのビン洗いしていたんだよ。

司会 それから？

木村 それから、うちの街に来た。コレゴ・フエイジョの青葉小学校。

黒木 じゃ、加治木先生の後ね。

木村 ええ、後に猪森先生の後です。

司会 町から近いんですね。

清田 ええ、一番近いんですよ。

司会 そこに、かなり日本人が居たの？

黒木 百二十家族くらい居た。

司会 その時分、もうビラツキの野球は？

清田・黒木 もうあっちこっち盛んだっ  
た。

司会 十七で彼は日本から来たんだから、



十八の時だな。当時十八の若い中学  
出の野球の出来る先生というわけ  
だ。あそこに何年くらい居った？

木村 三年くらいだった。

司会 それで三十八年、サンパウロへとい  
うわけか。

竹田 三十七年の大会（全伯）には、ビラ  
ツキから出ていて、三十八年にはサ  
ンパウロから出ているんだから。  
山下 そうして聖報に入ったんか。

竹田 いや時報が先だった。

山下 いや聖報よ。もう聖報も野球チーム  
があっただんで、ワシ、谷垣、カンタ  
ロー、玉木。これがカ、中尾とぶつか  
ってなあ。

司会 昌夫の話じゃ。時報が先で、聖報は  
後だったんだがねえ。

竹田 時報が先だよ、僕が日伯に入った時、  
彼時報にいたんだ。

山下 ああそうか、海興にも居ったなあ、  
あれは戦前？

竹田 戦前だ。一九四〇年頃だ。

山下 ありや彼、野球をやるうと思っ  
ったんだ。蜂谷に対抗してやるには  
大所に人らにや駄目だったんでね。

竹田 あそこで渋谷信行とか剛為（本田）

とか入れて、やったんだ。

清田 三十六年と三十七年、支部対抗に二年続けて一緒にやった。

司会 ビン洗いの一年は、野球やっていたな  
かったね（笑）。

木村 やっていなかった。学校の先生にな  
ってからですよ。

黒木 フェイジョへ行ってからですね。も  
う少年野球やってみましたか？

木村 やってたよ。

竹田 少年野球があるから、いやでも。

司会 ああそうか、学校の先生は何処でも  
少年野球の指導員だったね。

木村 あの頃、勝又がいてね。

竹田 あれの、初球を打たんとね。

司会 コレゴ・フェイジョで中林さんが野  
球を教えていた頃、いい選手がいま  
したか。

黒木 そんなには、勝又、それから高橋。

竹田 山本……後でスザノでキャッチだっ  
た。

木村 山本はもっと早かったですよ。

清田・黒木 ありや、コレゴ・リーザだ。

司会 あの背の高い、大きな声の……バス  
トスへ後で行った……。

黒木 中熊？

木村 中熊はバストスだった。

竹田 三十二年の進藤、弓場の試合の時、中熊、来とったよ。あの頃誰か、何か新聞かなにか出しとったね。トウシヤバンか。それにね、弓場さんのインタビューがあった。

清田 そりやね。ビリグ牛のノロエステ民報、それが喧嘩の源になったんだ。

竹田 それにね、弓場さんが、ビラツキには中熊がいるから注意しないと、つてあつたよ。

司会 その頃、弓場さんと中林さんとは？ やつたんだろ。

清田 やあ……やったことはないなあ。大將は学校の先生だったからなあ。先生は暇が貰えなくてやれなかったよ。

司会 中林さんがビラツキ時代に、何か特別印象に残るようなこと、なかったですか？

清田 足が早かったですね。大きな足でねえ。

木村 いつも一番だった。サードからホームまで、すつとんで来たもんね。

竹田 バット短かく持ってね。小さく構えて、とにかく当てる主義だった。

木村 清田 そうだったねえ。

司会 おそらく、短く持ってたんでは、一番じゃなかったかな。

竹田 三分の一くらい手元に残してね。剛為や、富男、山下君なんかと違うんだ。

司会 そうだ。あれで弓場の球の外角を、ねらったんだってね。おれ、彼が三塁打を打ったのを見たことがあるよ。完全な短打法っていうだろうなあ。早稲田の伝統っていわれている、重いバットを短く持って、強打する。カンチャンは、それを信奉していたんじゃないかな。

竹田 サンパウロへ出て来てから、二回りーデングヒッターになったんだ。木村さん、あんたの姉さんとは、どんなこと……だったの？

木村 はつきり、知らないがねえ……。

―同 アッハッハ……。

竹田 なんだか、横田さんの話じゃ、だいぶ話が……いつ頃結婚したの？

木村 三十九年、うちがオラトリオ（聖市近郊サント・アンドレー市近く）に来てから、一カ月もたたない。

竹田 ああそうか。

司会 おれ、いつか彼の気嫌のいい時、聞いたんだけど。彼の生活が、多分時報の編集で大分よくなった……。

木村 そりやそうでしょう。

司会 そこで、今をおいて外にない。あんな女は世界中、二人とないんだ。あんなの、ほかの野郎に取られてたまわかってんで、俺すつとんでいったよ。つていつていたよ。ぞつこんほれ込んだロマンスは何日頃か知らないけれど。

竹田 ロマン스는ビリグイで始つてたんじやないの？

木村 さあ、よく知らないね。

司会 サンパウロへ来る前に見染めとつたんじゃないの？

清田 二人の約束は出来とつた、僕はそう思う。

木村 あるにはあつたんです。だから来るとすぐに決つたんです。僕はまだ……。

黒木 あんたは、まだ子供だったから。

竹田 地下にもぐつとつたんだな。

一同 アッハツハ……。

司会 当時は今の様に、大びらじゃない。

竹田 特に学校の先生じゃ……おかしなこ

山下 とは出来ませんものね（実感の様子）  
しかし、そこはうまい事せにや、三  
コント払わにやならんもの（笑）。

司会 どえらい金なものなあ三コント、あ  
の頃は。

清田 木村さんはじゃビリグイを整理して  
来たん？

木村 いや置いて来た。それで又帰ったん  
です。大霜が来たからね。あれから  
約十年、戦争中はビリグイにおった  
んです。中林が来て二年いて養鶏や  
ったんです。

竹田 それから戦後のことになるだけれ  
ど。中林君と野球の話の中には、「セ  
ンバツ」を始めたということをし、ど  
うしても入れとかにやと思うんだ。  
そりやそうですね。

竹田 僕が古い車を持っててね。今のジャ  
ルジンから通っていたんだね、あの  
頃中林君、カラムルに住んでいてね、  
ルイス・ゴエスから乗せて来て、そ  
の車の中で話が出たんだ。日本でプ  
ロがオールスター。ファンの人気投  
票で選手を決めてやっていたから  
ね。これ面白いぞ、これやろうじゃ  
ないか、つていったんだ。中林君も、

そりや面白そうだねってね。

司会 そりや創刊の時？

竹田 始めた時だ。それで、人気投票で始めたんだ。処が、束にして投票するのがあつたりしてね。一寸ガタガタしたことがあるよ。ノロエステなんか、大方運動して歩いたとか。

黒木 中林さんが来てね。ノロエステが出ると話にならんぞ、っていったんで、総会を開いて決めたんですよ。

司会 ああそうか、何せ、いったい始まるのか、始まらないのか、社運を賭けてんだから、失敗したらどうするか、というような。

黒木 最初だからね。

清田 本郷君が心配症でね。あれえ、雨が二日も降ったら、日伯はつぶれてしまうぞ。なんていったことがあるよ。そうなんだ。

清田 丁度パジャーリヤ球場が出来たところだ、この機会にやろうよって頑張ったんだよ。球場開きじゃなかったか。球場開きじゃなかった。もう完成してたよ。

黒木 球場開きにや、ビラツキが呼ばれて来た。

木村 中野が来て投げていた。

竹田 この “センバツ” を始めたってことは中林君の話になると一番大切なことだもんね。

司会 そうですよ。それともう一つ、戦後球連が出来て、第一回の全伯（青年）がシリオのカンポであって、その翌年、パウリスタ新聞が少年を始めた。あの少年大会を始めるのに、中林さんと竹内さん（秀一、故）がいい出して、それに蛭田さんが賛成して始めたそうです。ずい分社内には反対もあつたそうだがね。

竹田 そうな、いらん苦労はせんでもというわけだ。

司会 何れにしても、球界の功労者の中でも大きな存在だという点で。

一同 そりやそうだ。

司会 人間としてのカンチャン。名物男。われわれの頭に、ガツチリ残っている男なんだが。何か性格の上で？  
まあ、気の強いのは無類だったんだが。

山下 よう喧嘩したよ（笑）。

司会 彼になぐられたってのは沢山あつたね。



一同 そうそう。

司会 一番ひどかったのは、園田さんじゃなかったかな。

山下 ありやひどかった。

司会 園田さんは、あの翌日夫婦でホータイのまんまカンタの処へ行って、俺は何とも思っていないよって反対にあやまり、じゃないが。

山下 そういったんだよな。

司会 それがね。よく考えて見ると、カンチヤンてのは、とてもみんなに好かれていているってことじゃないか、と思うんだ。あの男は、随分大勢の人からほれられているっていうんか。

山下・竹田 そうそう、みんなからね。

司会 新聞社でも、随分むずかしい時があったと思うんだが、その都度なんとかなったし、あの社屋だって、そういうった人のアジューダで出来たと思う。コロニアの有名な寄稿家が、いざの時や、いつでもよく書いてくれるし、みんな彼が好かれているからだと思う。最近読者がうんと増えるってのも、実力に何かプラスアルファあって気がする。

一同 まったくだ。

山下 それに、好き嫌いが恐しく強いという  
ことも。

竹田 こまかい神経もうんと持っている。

司会 その二つが、いつしよなんだ。

山下 水戸っポの特徴かな。

司会 弓場との仲は刎頸というか。

山下 もっと強いもの。

司会 男同志とか、さむらい同志とか。

山下 お互いが尊敬し合っていて。

竹田 自分にならないものを、相手の中に見た  
ということじゃないか。

司会 どうも有難う。

1937

聖市実業野球リーグ戦

◎東綿の不参加で組合せ編成やりなおし

(日、一月九日)

近年衰微の道を辿っていた球界にも昨年第一回全伯野球大会開催以来春はめぐり、続いて聖市実業野球連盟の誕生、全伯野球聯盟の曙光など多彩な事件に色どられ、やはり我が邦人競技界のメイン・スポーツたるを失わずかなり多忙な一年を送ったが、新春を迎えるとともに、聖市実業野球聯盟では本年度リーグ戦組合せを発表したが、八日に至って東洋棉花の不参加によって組合せに変更を来し、目下新たに編成中

ある。

なお参加チームは八つ、専用球場としてピネーロス区のカ・ナカナのカンポが当てられている。

### ◎流線型

(日、一月十六日)

▼通称タッチャンと呼ばれて邦人界の名物男だった斎藤龍雄君(四二)が去る十一日プ・プルデンテ市で死亡、同日共同墓地に埋葬された。原因は当日ソルベツテを買って食べたところ、咽喉が腫れて息がつまり血を吐いたまま逝ったと伝われる。

### ◎聖市実業リーグ開幕(日、一月二十五日)

昨年末結成された聖市実業野球連盟主催のリーグ戦は、雨の為延期されていたが、好天に恵まれ昨二十四日ピニエイロス区、カ・ナカオ球場で開始された。午前八時半石原会長の挨拶、参加チーム(ブラ拓、領事館、カ・ナカオ、同仁会、蜂谷、国井、日伯、聖報、コチア)の入場式、富士屋へナント寄贈あり。市毛総領事始球式、日伯対カ・ナカオ戦開始。

カ 7 1 5 1 0 2 0 - 1 6

日 2 0 0 2 1 0 0 - 5

球審山下、塁審進藤、横溝、木村。

カ・ナカオ 打 点 安

5	桜井(繁)	5	2	1
6	吉田(正)	5	2	1
4	大坪	3	3	1



8	1		9	3	7	5	1	2	6	8	4
坂	荒		堀	— 1 阪	増	吉	— 3 宗	吉	兵	小	藤
根	木		倉	田	田	田	武	武	藤	久	本
1	2	∞	4	1	4	3	4	1	1	2	1
0	0	5	0	1	0	0	0	2	2	0	0
0	1	4	0	1	0	0	0	1	2	0	0
		9	9	7	4	6	8	3	1	2	5
		矢	西	市	高	江	池	皆	根	成	加
		田	沢	毛	原	沢	田	藤	本	富	藤
		山	沢	毛	原	沢	田	藤	本	富	藤
		3	2	2	4	6	5	5	4	5	6
		2	0	0	3	3	2	4	4	2	3
		1	0	1	2	2	1	1	2	1	3

コチア

打点安

領事館

打点安

(時、二月十日)

◎一月三十一日領事館23対5コチア

	1	9	2	7	6	3	7	9
	加	法	青	岡	斎	南	武	桜
	藤	華	木	田	藤	田	田	田
2	3	3	2	2	2	4	2	1
1	1	1	1	1	1	1	3	1
2								
1	1	0	0	1	0	2	0	0
	3	9	8	4	5	6	1	7
	江	山	久	釘	池	越	笹	大
	野	梨	村	宮		智	原	泉
	村							
3	4	5	1	4	5	1	5	4
8								
2	2	2	2	2	3	3	2	1
2								
1	1	0	0	2	2	2	1	1
0								



6	5	1	1
南	3	法	5
里	上	華	加
田	田	藤	藤
5	3	6	6
1	2	0	2
2	0	0	3
橋	島	塚	玉
口	田	本	木
6	6	6	7
4	3	2	5
1	3	0	2

◎聖市実業リーグ (日、二月二十一日)  
 ブラ拓 打点安聖報打点安

3	8	7	9	1	4	5	6	2
桜	江	吉	森	本	大	桜	吉	吉
井	藤	本	田	郷	坪	井	田	田
正	藤	本	田	郷	坪	兄	正	光
4	5	5	5	5	5	5	4	6
0	1	0	1	2	3	3	1	1
0	2	1	1	1	1	1	0	1
8	1	9	3	1	6	2	7	5
1	8	松	尾	仁	鈴	江	鈴	榛
吾	高	本	関	居	木	刺	木	葉
間					兄	家	弟	
5	1	1	5	6	5	5	5	6
2	2	0	1	1	1	1	2	3
3	1	0	1	2	1	0	3	0

◎聖市実業リーグ第四日 (日、二月七日)  
 同仁会 13対12 カ・ナカオ  
 カナカオ 打点安同仁会 打点安

8	2	5
田	青	岡
代	木	田
5	4	4
2	1	3
3	0	0

3	1	斎藤	5	1	0	山下	7	3	5
7	勅使河原	5	1	0	駒場	6	1	2	
9	稲葉	5	2	1	番山	5	0	1	
2	青木	3	1	0	田中	5	2	1	
8	田代	4	1	0	御厨	5	3	0	
		12	14	6		53	23	15	

◎第四回奥ソロ大会 (時、二月二十四日)

去る二月十四日から三日間、ア・マシヤ

ード駅中央クラブ主催にて、第四回奥ソロ野球大会が催された。球場は中央小学校グラウンド、出場チームはプ・ヴェンセスラウ、サ・アナスタシオ、プ・ベルナルデス、ア・マシヤード、プ・プルデンテの五チーム。十四日午前八時半開始終了十二時五十分。

ヴェンセスラウ対ベルナルデス、雨で中止。翌十五日再開、ベ10対3ヴェでベ軍勝

午後一時からアナスタシオ3対1マシヤード、大熱戦の結果マ軍の勝。

第三日目 決勝戦

マシヤード 11対6 ベルナルデス

◎奥ソロ野球連盟成る (時、七月二日)

去る二十七日プルデンテ市に五駅代表集り連盟を結成した。創立委員、プ市尾方、吉村、奥野、ア市花岡、ベ市吉本、永野、アナスタシオ、三浦、山本。



◎聖市実業リーグ (日、二月二十五日)

二月二十一日

コ 3 2 2 2 3 0 3 ー 5

蜂 0 0 0 1 0 1 0 ー 2

寸評 コチア軍投手今井の貫禄。

メンバー

蜂 谷 コチア

2 奥田 5 吉田

7 大泉 8 小久保

1 笹原 6 兵藤

6 越智 2 吉武

3 笹原清 1 今井

5 池 1 藤本

8 久村 3 阪倉

9 山梨 9 増田

1 白石 7 堀

2 安 8

2 点 1 5

1 3 失 4

1 3 振 7

◎聖市実業リーグ (日、三月十八日)

聖 1 1 0 3 1 0 1 ー 7

図 3 0 5 4 5 2 A ー 1 9 A

メンバー

国 井 聖 開

7	9	5	4	6	2	3	7
柴	松	榛	仁	鈴	江	1	鈴
田	本	莫	居	木	刺	吉	木
					家	川	弟
						弟	
2	4	5	3	1	8	7	6
峰	釘		笹	笹	越	大	奥
		池					
川	宮		原	原	智	泉	田
			弟				

同仁会

メンバー

蜂	同
0	2
1	0
3	0
0	3
1	0
7	1
0	0
3	0
—	—
1	6
8	

蜂

谷

6	8	1	6
		9	
振	失	点	安
	1		
9	5	7	2

7	9	8	3	5	1	2	1	6
利	白	橋	久	寒	小	矢	江	服
子	田	本	保	河	田	萩	口	部
				江				
3	9	7	8	1	1	6	5	2
清	田	香	駒	山	橋	島	塚	玉
水	中	山	場	下	口	田	本	木

8—3 吉川兄  
1—8 高 9 久 村

1	0	1	8	1
振	失	点	安	7
7	1	6		
	5			

◎聖市実業リーグ

(日、三月二十日)

A

国井 相对 7 聖報

寸評 国井の小田左腕、聖報打てず。小田入り国井中堅チムとなる。

蜂谷 18 対 6 同仁会

寸評 蜂谷の勝因は笹原の好投と、攻撃に一日の長。

◎北パラナの野球熱 (日、三月二十日)

来る六月カンパラ市に於いて開催される全パラナ野球大会に備え、新鋭トレス・バラスは三月七日サンタ・マリアナを迎え、中央グラウンドで試合した。

サ 0 0 0 1 1—2

ト 5 0 2 0 0—7

雨で中止。

◎聖市実業リーグ

(日、四月一日)

安点失振

日 0 0 0 2 1 0 0 1 3

コ 5 7 0 0 0 1 A 1 6 A 6 1 9 6 5

メン  
バー

コチ  
ア 日 伯

5 吉 田 根 来 8

8 中久保 有 田 2

6 兵 藤 高 野 7

2 吉 武 松 隈 1

1 今 井 野 村 3

4 藤 本 樋 口 9

3 阪 倉 中 島 6

9 増 田 木 村 4

7 堀

7 佐 藤

安点失振

プ 2 0 0 2 1 2 5 5 0 1 7 6 1 7 3 0 7

ナ 0 2 0 2 4 1 0 0 0 9 1 2 1 1 1 2 7 2 2 3

メン  
バー

ブラ  
拓 カナ  
カオ

1 | 5 加 藤 桜井(兄) 9

1 矢 崎 吉田(正) 4

4 武 田 本 郷 1 | 5

6 | 1 松 本 桜井(弟) 3

3 南 里 武 藤 6

1	5	6	斎藤	吉田	(光)	5	1
7	勅使・河	森	田	7			
2	青木	江	藤	8			
9	稲葉	新	工	2			
9	川添	大	坪	2			

◎北バラナ野球 (日、四月一日)

北パ球界の双壁、アルト・パルミタル対全トレス・バラスの第二回戦は、三月二十日ア・パルミタル球場で行われ、ア・パルミタルが雪辱した。

安点失振

ア	2	0	1	0	0	2	2	0	0	1	7	9	7	2	1	0
ト	0	0	0	0	0	0	0	3	0	1	3	7	3	3	5	
メンバー																
トレスバラス	ア・パルミタル															

6	林	森	(弟)	4	
2	浅見	江原	(弟)	6	
5	中村	木	村	1	
1	高橋	藤	井	9	
3	山本	大	畑	2	
7	河野	(兄)	江原	(兄)	3
8	坂本	宇	野	8	
9	村田	稗	田	5	
1	河野	(弟)	森	(兄)	7

◎聖市実業リーグ

(日、四月十五日)

同	2	0	3	3	1	0	0	3	2	1	4	1	0	1	4	1	4	1	4	1	4	6	7	振
日	1	4	3	2	0	6	0	7	3	1	2	6	1	5	2	6	1	4	1	4	6			
メンバー																								
同仁会																								
日																								
伯																								
安																								
点																								
失																								
振																								

7	鈴木(弟)	根	来	7	8
1	吾河(弟)	小	島	4	
2	江刺家	有	田	1	2
6	鈴木(兄)	松	隈	3	1
5	仁居	高	野	7	
3	吉河(中)	野	村	9	
4	吉河(兄)	樋	口	9	8
9	松本	三	反	田	2
8	歳	鈴	木	3	
		中	島	6	
		堀	田	5	

◎球熱は沸く

(日、四月十七日)

チエテ倶楽部で野球を採用

(邦人野球団が模範試合を見せる)

◎聖市実業リーグ

(日、四月二十四日)

初陣の山岸(カナカオ)殊勲、蜂谷大敗を喫す。国井、ブラ拓に大勝

最高調の実業リーグ、領事館対カナカオ、国井対ブラ拓は去る十八日行われ、領事館は三回表で力軍に三十点を入れられ棄権。四十四対四で大敗。国井対ブラ拓は、七回二十三対十三で国井が大勝した。延期されていた蜂谷対カナカオは、アリアンサより山岸入り三振十本、十五対二で力軍が大勝した。

◎聖市実業リーグ

(日)

カナカオ打撃振わず、コチア大勝。

カ 00100000-1  
コ 00013000A-7A

老巧左腕の山岸と、剛速球今井の投手戦結果は今井の速球に力軍凡打、三振に興りれノーヒット、三振十という一方的に終る。

球審山下、塁審南里、進藤、横溝、二時間五十分。

メンバー

カナカオ

コチア

1	大坪	吉田	5
3	桜井(弟)	矢野	9
1	山岸	兵藤	6
6	武藤	吉武	2
5	本郷	相本	4
7	森田	今井	1
8	吉田(正)	藤本	8
9	江藤	増田	7

◎オウリンニヨス球信 (日、五月八日)

去る二十五日オウリンニヨス市グラウンドで同地青年会支部対抗野球試合が举行され、出場チームはオウリンニヨス、カレロン、東部の三チーム。オウリンニヨスが優勝し、ユニバーサル建築会社寄贈の大トロフィを獲得した。試合成績は次の通り。

オウリンニヨス 14対4 カレロン

オウリンニヨス 29対3 東部

◎聖市軍代表選手決る

オールスターキヤスト(日、五月十五日)

監督 進藤憲吉、主将 山下寛人、副主将小田秀幸、マネージャ竹田仙造

投手 今井義光(コ) 小田敏雄(国) 進藤憲

吉

捕手 吉武勝男(コ) 江刺家勝(同) 玉木正

(聖)

一塁手 竹田彰介、松隈悟(日)

二塁手 武藤正義(カ) 江口一夫(国) 小笠原

博(蜂)

三塁手 笹原盛雄(蜂)

遊撃手 竹田富男

外野手 畑中徳三郎、松尾徹、山下寛人(聖)、

小田秀幸、根本豊年(日)

▼流線型欄に、発表された聖市代表選手中にカナカオの山岸



投手の名が見ないので不思議がらせたが、実は飛び出した古巣アリアンサへの遠慮から、補欠に廻してもらったのだと。

◎聖市実業リーグ (日、五月二十二日)

聖 0 1 0 0 0 3 0 0 1 - 5

同 1 1 0 0 0 0 2 0 A - 7 A

メンバー

聖報 同仁会

2	玉木	吾河(弟)	8	5	1
8	駒場	吉河(中)	3		
6	島田	江刺家	2		
1	山下	鈴木	6		
4	橋口	高	1	5	
7	木村	仁居	4		
9	塚本	吾河(兄)	7		
3	御厨	榛葉	5	8	
5	跡治	柴田	9		
国	0 0 1 0 0 1 - 5	安点失振	3	5	2 0 1 0
コ	0 7 5 6 4 2 0 - 2 4		1 2	2 4	4 6
	メンバー				
	国井	コチア			
6	服部	吉田	5		
5	鈴木	藤本	8		
1	江口	広田	6		

1、1 小田 吉武 2  
 2、 矢萩 相本 4  
 3、 大久保 今井 1  
 7、 白田 増田 7  
 9、5 寒河江 小久保 9  
 8、 原田 阪倉 5  
 ◎聖市実業リーグ (日、六月十七日)  
 安点 失振

聖 81084A-25 8 25 7  
 領 15100-7 1 7 18  
 メンバー  
 領事館 聖報

2、 成富 橋口 6  
 1、6 高泉 駒場 8  
 3、 江沢 山下 1  
 6、1 木村 木村 3  
 4、 西沢 跡治 5  
 8、 阪隈 塚本 9  
 7、 城間 香山 7  
 5、 勝浦 玉木 2  
 9、 樋口 御厨 4

◎第一回全伯日本人小学校優勝野球大会  
 (日、六月十九日)  
 あと六日だ、輝く四校大旗に集う 球場決る(晴れの球

場はソシエダーデ、イピカ、パウリスタ、ピニエイロス競馬場と決定)

小学校の陣容

バストス第一小学校

投手 古川誠一(一四歳)、捕手▲溝部忠行(一五歳)、一塁手 崎田春一(一五歳)、二塁手 中野庄作(一六歳)、三塁手 大貫盛義(一五歳)、遊撃手 小野志(一五歳)、左翼手 三宅繁隆(一五歳)、中堅手工藤栄一(一五歳)、右翼手 畑中ワシントン(一三歳)、補欠 三井常夫(一五歳) 樋浦十治郎(一五歳) 牛山パウロ(一四歳) 小竹慎一(一六歳)

監督九魂隆、織田真、宮島靖彦、松浦要

▲印は主将

ジャガレ―小学校

投手 島貫、捕手 大和(和)、一塁手四條(文)、二塁手 植田、三塁手 吉本、遊撃手 大平(正)、左翼手 四條(和)、中堅手 市村、右翼手 菅

聖市大正小学校

岡島泰雄(一四歳)、▲竹田金吾(一六歳) 寺島幸三(一六歳)、岡島義雄(一五歳)、小笠原真一二四歳)、渋谷信行(一三歳)、遠藤富雄(一四歳)、酒井正(一六歳)、渡辺藤雄(一三歳)、義村都一(一四歳)、明石安雄(一三歳)

監督 岩永格二

コチア小学校

投手 安居、捕手 川村、一塁手 岡村、二塁手 神川、三塁手 吉田、遊撃手 矢野、左翼手 飯田、中堅手 植田、

右翼手中島

(編注 大会開催間近になってバストス・サウデー小学校とマリリア小学校の不参加が決り、進藤憲吉が奔走、急造りのジャガレー、コチア二チームが参加した。)

◎本社主催全伯少年野球優勝大会迫る

(日、六月二十二日)

大会委員

▽総裁 多羅間鉄輔

▽委員 (ABC順)

原節、芳賀仁吾、黒木秀吉、宮腰千葉太、間崎三三一、村上城基、大域武盛、関常一、下江京太郎、牛草茂、渡辺孝、吉住勝常、山口栄、山下定八

▽審判長 南里淳▽審判員 進藤憲吉、曲尾達雄、山岸清、

山下寛人、木村稜威雄、竹田仙造、竹田富蔵、小田秀幸、今

井義光、高野富継、松隈悟、根来豊年、横溝一男

▽記録係 竹田、多田、三反田

▽場内総司令 石原桂造

◎日伯新聞社主催 (日、六月二十六日)

第一回全伯邦人小学校優勝野球大会

大旗何れに微笑む、爽快陽光のもと

晴れの入場式

日伯新聞社主催第一回全伯少年野球大会は去る六月二十四日より四日間、バストス、大正、コチア、ジャガレーの四チーム参加を得て、ピニエイロス区、ソシエダーデ・イピカのグ

ラウンドで盛大に挙行された。

二十四日第一日は午後一時十五分より入場式を挙行、翌二十五日より愈よ三浦社長の始球式に、試合は開始された。

第一試合（二十五日）

コ 0101201-5

大 120312A-32A

劈頭の波瀾、コチア悲運の涙をのむ。

第二試合（二十五日）

ジ 1000-1

バ 51828×151×

バストスの乱打に、ジャガレー潰滅棄権す。

第三試合（二十六日）

ジ 3300103-10

コ 6000032A-11A

寸評 ジ軍島貫と、コ軍の左腕安居の投げ合いで全くのシー

ソーゲーム、両軍のベンチさえ意

外とする好試合、ジ軍敗れて悔なし。

第四試合（二十六日）

コ 00000-0

バ 3614A-24A

寸評 バストスの強打にコ軍花と散る。

第五試合（二十七日）

大 31155-15

ジ 23002-7

寸評 健気なジャガレーの奮闘、前半大正苦戦。

第六試合（二十七日）

大 000020ー2

バ 4172810Aー42A

球審山下、墨木村、横溝、開始四時二十分、所要二時間二十五分。

バスロス 安振失

6	9	4	1	7	2	3	5	8
小	小	中	古	三	溝	日	大	工
野	竹	野	川	宅	部	浦	貫	藤
1	2	2	2	3	3	0	3	1
8	0	1	2	0	0	1	0	0
1	0	1	2	0	0	1	0	0
4	0	1	2	0	0	1	0	0

大正 安振失

5	8	7	4	1	3	2	6
小	渡	遠	岡	1	3	2	6
笠	邊	藤	島	2	6	3	1
原			(弟)	竹	高	寺	渋
				田	野	尾	谷
0	0	0	0	2	0	0	0
3	3	1	2	0	1	0	1
2	2	1	3	1	3	9	6

9 小川 0 1 2

2 1 2 2 9

各チーム成績

	試合	打	得点	安打	本塁	盗塁	三打
バ	3	139	117	45	4	55	80.325
大	3	102	49	14	2	23	240.01
38							
コ	3	73	25	6	0	14	380.00
76							
ジ	3	62	17	4	0	6	210.00
63							

寸評 バストスの健棒冴え、大正の頑張り空し。

(注) 少年野球初めての大会でもあり、予定されていたバストスのサウデー小学校と、マリリア昭英塾の不参加で進藤、高野奔走、急に参加したコチアとジャグアレーの不振は止むを得なかった。又球場借用の交渉は構溝一男がした。

思い出ばなし

(仙)

第一回全伯少年大会の開催直前、バストスのサウデーとマリリアの昭英塾は不参加といって来た。さあ主催者は大騒ぎ、四日間を予定し球場も用意したのに、バストス第一と大正小学校だけではなんととしても格好がつかない。コチア産組方面

にコネのある高野が、コチア小学校とジャグアレー小学校に走り参加を要請、やつと承諾を得たが、ユニホームも用具もない。リンス出身者チームのユニホームを裏返して着せる。ズボンをたぐったり格好だけはつけ、何んとか四日間を終った。勿論この二チームは練習など一度もしていない。だがコチアとジャグワレーの試合だけは、同じ土地同志の対抗意識をむき出し大接戦、十一対十、大会随一の面白い試合となった。思い出しても懐かしい。

### ◎聖市実業リーグ 優勝旗贈呈式

(時、七月五日)

聖市蜂谷商会主蜂谷専一氏から、聖市実業野球リーグ連盟へ寄贈さるべき優勝旗は、母国にて製作、去る五月三十日入港のサントス丸便にて到着し、昨四日午前十時、ピニエイロスのカナカオ、グラウンドに於いて、その贈呈式が行われた。当日は寄贈主蜂谷専一氏が目下帰朝中のため、氏の養子越智氏が代理して一場の挨拶を述べて贈呈し、連盟側では各チーム代表並に監督参列、石原桂造連盟を代表してこれを受領、謝辞を述べ式を終ったが、該優勝旗は赤地に拡翼の鷲を金モールで刺繍され聖市実業野球連盟及び寄贈者の氏名の文字を染抜きした堂々絢爛たる豪華な優勝旗である。

### ◎聖市実業リーグ

(日、七月十三日)

六勝一敗コチア首位



コチア 20 A対2 同仁会

安 点 振 失

コ 1 2 2 0 6 7

同 3 2 1 1 1 7

コチア 3 2 対 7 聖報

コチアは第一戦に領事館に敗れたが、その後、今井投手を得て破竹の勢い、制覇した。

安 振 失

聖 1 0 0 4 0 0 0 1 5 3 4 1 6

蜂 6 5 1 0 6 3 1 1 2 2 7 6 7

◎北パラナ野球 (日、七月二十日)

北パ日本入会主催野球大会は、去る十日から三日間、昨年の覇者野村、アルト・パルミタル、ビラ・ジャポネーザ、カンプラ、トレス・バラスの五チーム。第一日野村がカンパラに敗れ、第二日アルトがトレス・バラスに勝。ビラとアルトの優勝戦となる。四回同点で日暮れ、翌十二日再開、アルト勝ち。雌伏三年アルト宿願を達す。

ピ 0 0 3 1 1 0 0 0 0 1 5

ア 0 0 0 0 1 1 0 0 3 1 8

◎聖市野球リーグ (日、七月二十七日)

安 振 失

日 1 2 2 7 0 0 8 1 2 0 8 7 6

聖 5 0 0 1 1 0 3 1 1 0 7 1 6 4

横沢初登場。球審山岸、塁審竹田富、桜井、江口。

メンバー

聖報	日伯
7 木村根来	8
5 跡路堀田	5
1 玉木松隈	3・1
1 山下横沢	2
6 島田野村	9
8 駒場高野	7
9 塚本小島	1・4
2 小林中島	6
3 御厨井出	4・3

安振失

スコ	2	1	1	1	1	0	0	—	9	5	6	1	8
ブ	2	1	1	1	1	0	0	—	9	5	6	1	8

聖市実業野球リーグを観て 横沢生

- 一、球場の設備が余りにも貧弱、為に完全なプレーが出来ない。せめて塁のそばだけでも除草をせよ。
- 二、審判は、もつと自信を持って当れ、判定を下す位置、ストライクの範囲を研究せよ。
- 三、打撃より守備が余りにも悪い。
- 四、ネット裏に、関係者以外の者を入れるな。

◎聖市野球リーグ

日伯敗る、対蜂谷戦

(日、八月三日)

蜂 5 2 3 0 0 2 1 3 - 1 6  
日 2 0 3 1 1 2 3 0 - 1 2

◎全伯大会の役員決定す（日、八月三日）

第二回全伯をひかえて去る土曜集り協議 したが、大会役員を次の通り決定した。

名誉総裁市毛領事、総裁多羅間鉄輔、大会委員長石原桂造、審判長横沢太一。

◎バストス支部対抗野球（日、八月三日）

去る七月二十三日より三日間、バストス青年団支部対抗大会を開催。参加十チーム盛大だった。入場式後十時半試合開始。

ウニオン 7 A 対 6 グロリア  
中央 8 A 対 5 ファルツーハ  
サウーデ 5 対 3 アルト

カルカッタ 1 8 A 対 2 プログレッツ  
エスペランサ 1 5 対 3 ボンフィン

中央 1 5 対 3 カスカッタ  
サウーデ 1 1 対 7 ウニオン  
エスペランサ不戦勝

エスペランサ 1 3 対 2 サウーデ  
中央 1 4 対 1 0 サウーデ

優勝戦エスペランサ対中央は、日没で八月一日に行う。

優勝戦

中央対第二エスペランサの優勝戦は、去る二十五日二回戦まで0対0で日没ドロンゲームとなったので、一日改めて午後二時より中央球場で再試合となる。エ軍は十七歳五尺七寸左腕の佐藤をプレートに送り優勝を期したが、中央軍よく守り、畑中投手の好投でエ軍を押え、18対5で凱歌をあげた。

### ◎市毛さんの肝入りで総合運動場建設設計書

先ず委員を設けて期成準備へ

(日、八月九日)

兼ねてから叫ばれていた邦人総合運動場設立も漸く機が熟して去る六日総領事から陸上聯盟、野球聯盟、柔剣聯盟の役員に集合の指令が飛び午後三時から約三十名の多人数が総領事館の会議室に集って協議した結果、先ず土地を選定することに意見が一致し総合運動場期成準備委員会を創設、委員に左の諸氏が当選した。

委員長大河内辰夫、委員石原桂造、下元健吉、進藤憲吉、南里淳、東後一美、横溝一男、鈴木威、山下寛人、法華茂、会計委員南里淳、記録係進藤憲吉

### ◎第二回全伯野球大会期待さる

申込締切愈よ迫る出場確定既に七チーム

(日、八月十一日)

来る九月四、五、六、七日の四日間、サンパウロ市、チエデ・クラブで開催される待望の第二回全伯野球大会の締切はあと旬日にせまって今迄聯盟本部に参加申込した

チームは、チエテ、ビリグイ、アリアンサ、バストス、聖西、サンパウロ、パラナー、以上の七チームであるが、この他出場確実と見られる所にレジストロがある。又昨年の優勝チーム、チエテに一敗、サンパウロ、これについてバストスの二敗も共に雪辱が意志に燃えて懸命の練習に余念がないが、新加入のビリグイ、アリアンサ、聖西、パラナの力量も殆んどこれに伯仲の意気を示して優勝は何処へ行くか予想は混沌として予断を許さぬ状況にわたっている。

### ◎第二回全伯野球大会昨日場所決る

トーナメントは六、七両日

(日、八月二十五日)

全伯陸上競技と相前後して四日、六日、七日の三日間に聖市で催される全伯野球聯盟主催の全伯野球大会第二回大会は未決定であった場所も昨二十四日全伯陸上競技の開かれるチエテ・クラブの少し手前ボンデ・ピケノのカンポと決定、四日の第一日目は入場式と他一試合で午前中のみであるが、六日、七日は午前と午後と通して三試合づつトーナメントで優勝が決せられる。

出場チームもチエテ、ビリグイ、聖西聯合、アリアンサ、バストス、ア・マシヤード、レジストロ、サンパウロ以上の八チームと決定し予想は新進チームの技術が共に伯仲しているので優勝候補はあげられないが、熱球、快打で物すごい試合展開するだろう。

なお、現在までメンバーの決定したチームを挙げると、

【チエテ】

監督 川崎、主将 菊地、選手 北出、東、中島、田口、  
本田、藤川、斎藤、広田、赤松、中井、森川、加藤、川又

【ピリグイ】

監督 青木、コーチ 清田、選手 鐘ヶ江、山田(弟)、織  
田、山田(兄)、木村、中島、島ノ江、中林、上野、清田、塚  
本、佐々木、西本

【聖西聯合】

監督・大久保、主将 坂倉、選手 今井、吉武、小久保、  
大久保、平代、白石、吉田、広田(武)、増田、広田(恒)、  
藤本、相本、野本、公門、矢野、佐藤

【サンパウロ】

選手 進藤、山下、山岸、笹原、竹田(富)、竹内、武藤、  
櫻井(弟)、中森、江刺家、江口、谷垣、畑中、小田(兄)、  
小田(弟)、根来、矢萩

◎胸は高鳴るスポーツシーズン

待望の全伯野球プログラム決定

(日、八月二十八日)

聖市ボンテ・ピケナの手前カーマ・パテンテ工場カンポを  
会場、九月四、六、七日三日間と発表された全伯野球大会一  
昨夕に到って三、四、五、七日の四日間と改正され、昨夕ト  
キワ・ホテルで開催した役員会に於て試合順序プログラムが  
次の如く決定発表された。

第一日 九月三日

午前八時三十分、選手入場式

石原会長開会の辞

優勝旗返還式、多羅間総裁訓辞、市毛総領事訓示、選手宣誓、審判員長訓示

午前十時 アリアンサ対ア・マシヤード

午後二時 チエテ対聖西

第二日（九月四日）

午前十時 レジストロ対バストス

第三日（九月六日）

午前十時 ビリグイ対サンパウロ

午後二時 第一準決勝

第四日（九月七日）

午前九時半 第二準決勝

午後二時 決勝

試合終了後、優勝旗受与式

以上で役員は審判委員長横沢、審判員横沢、竹田、高野、松隈、坂田、大坪、木村、記録竹田富造、多田栄一郎、入場料は四日間の通し切符が四銚、普一日券一ミル五百、学生が一ミルである。

◎トレス・バラス野球戦（日、八月二十七日）

去る八日トレス・バラス移住地中央グラ

ウンドで同地連盟主催の五区対抗リーグが開始された。参加は前覇者中央、バルサモ、ファイゲイラ、ペローバ、市街地の五チーム。入場式西村連盟会長の開会の辞後午前十時、第一試合ファイゲイラ対バルサモ戦から始まる。戦績は、バルサモ20対19ファイゲイラ、中央15対2ペローバ、市街地17対6ファイゲイラ、中央17対5バルサモ、中央16対12

フイゲイラ。十五日まで。

◎第五回奥ソロ野球大会（時、九月三日）

去る八月二十九日三十日の両日プ、プルデンテ市第一小学グラウンドで、参加プ・ヴェンセスラウ、ア・マシヤード、ベルナルデス、アナスタシオとプルデンテの五チームで第五回奥ソロ大会が開催された。戦績は、ヴェンセスラウ 21 対 14 マシヤード  
プルデンテ 相対 12 ベルナルデス  
準優勝アナスタシオ 16 対 6 プルデンテ  
決勝ヴェンセスラウ 20 対 18 アナスタシオ。

◎第二回全伯野球大会（時、九月四日）

昨年の第一回は、久し振りの全伯でもあり参加はバストス、チエテ、パラガスと地元の僅か四チームであったが、あれがよい刺激となり、この一年間の発展は物凄く、聖市をはじめ各地方も著しいチームの誕生を見たが、その熱気のあるらわれがこの第二回大会であった。今年の参加はノロエステから昨年の覇者チエテと古豪アリアンサ、ビリグキ。ソロカバナ線からは伝統のバストスとアルヴァレス・マシヤード、又南聖で再建の気に燃えるレジストロ、コチアチームを中心とする聖西連合、それに老雄地元サンパウロの八チームと賑やか、戦前早くも殺気を呼んでいる。会場はボンデ・ペケナのカーマ・パテンテ、九月三日輝く青空の下、入場式は午前八時半から行われた。

大会名誉総裁市毛総領事、総裁多羅間鉄輔、委員長石原桂造



などの挨拶、審判長横沢の注意などあり、予定通り第一試合  
アリアンサ対ア・マシヤード戦始まる。

安 振 失

アリ 7 1 0 6 7 6 12-3 9 2 2 1 6  
アマ 4 0 0 0 0 0 0-4 2 7 1 8

球審横沢、塁大坪、木村、松隈、開始十  
時終了十二時十五分。

寸評 ア軍の猛打で一方的

ア・マシヤード 打 アリアンサ

4	丹	1	大山	2
5	砥上	2	綱島	6
2	林	3	宮崎	7
7	三浦	4	弓場	1
6	花岡	5	佐藤	8
8	肥田	6	馬場	5
3	戸田口	7	望月	3
9	別府(弟)	8	阿部	9
1	野本	9	久保	4

第二試合 聖西 6対2 チエテ

(九月三日)

安振失

聖 0 0 3 1 2 0 0 0 0-6 5 4 1  
チ 1 0 0 0 1 0 0 1 0-3 1 7 9

球審竹田、塁横沢、大坪、松隈、開始午後二時終了四時四

十分。

寸評 前年の覇者チ軍、今井の速球を打てず惜敗。

メンバー

チエテ 聖西

守 打 守

4 藤川 1 大久保 6 守

6 菊池 2 広田(兄) 2

9 斎藤 3 吉武 7

2 北出 4 今井 1

8 東 5 相本 4

7 広田 6 藤本 9

3 中島 7 増田 8

1 田口 8 吉田 5

P H末松

5 本田 9 阪倉 3

第三試合

レジストロ 1対3 2 バストス(四日)

安振失

レ 0 1 0 0 0 0 0 1 2 6 1 8

バ 5 5 5 0 0 6 A 3 2 A 7 2 1

球審横沢、墨竹田、吉田、高野、開始午

前十時、終了十二時十分。

寸評 レ軍は13の四球と18の失策で自滅。

メンバー

守 バストス 打 レジストロ 守

8	小橋	1	浜	2
6	高柳(弟)	2	吉岡	6
1	板垣	3	大友	5
3	阿部	4	一色	1
4	園田	5	隅田	3
5	田地	6	松本	4
2	茂庭	7	小松	9
9	1佐藤	8	曲尾	7
7	中川	9	出利葉	8
				1

第四試合

サンパウロ 17対1 ピリグキ(六日)

本塁打、竹田富 安振失

サ	1	3	0	0	9	1	1	7
ピ	2	0	2	0	0	0	0	1
								1
								4
								4
								7

球審竹田、塁大坪、松隈、高野、開始午

後二時二十五分終了四時三十分。

寸評 竹田富の本塁打、山岸、笹原の三塁打、十五安打で圧倒した。

メンバー

守 ピリグイ 打 サンパウロ 守

3	中島	1	武藤	4
8	中林	2	笹原	5
6	上野	3	山岸	6
7	西本	4	竹田(富)	8
				2
				4
				4

9	木村	5	竹田(彰)	3
5	矢嶋	6	小田(兄)	9
1	鐘ヶ江	7	畑中	7
4	塚本	8	小田(弟)	1
2	山田	9	進藤	1
			矢萩	2
			根来	8

第五試合

アリアンサ 5対2 バストス (七日)

安振失

ア	0	0	0	0	2	2	1	—	5	7	5	4	
バ	1	1	0	0	0	0	0	0	—	2	6	8	8

球審横沢、塁竹田、吉田、木村、開始午前十時十五分、終了十二時二十分。

寸評一勝同志の対戦、バの新鋭佐藤の好投でア軍六回まで無為、七、八、九回、失策と適時打に無念バ軍敗る。

メンバー  
守 バストス 打 アリアンサ 守

5	田	地	1	大	山	2
6	高柳(弟)	綱	島	6		
3	板垣	宮	崎	7		
2	阿部	弓	場	1		
4	園田	佐	藤	8		
9	茂庭	馬	場	5		
7	中川	望	月	3		

8 小橋 8 阿部 9  
 1 佐藤 9 久保 4

第六試合

聖西 2対7A サンパウロ

(七日)

安振失

聖西	0	0	1	1	0	0	0	1	0	—	3
聖市	2	0	1	1	0	0	0	0	0	A—	7A
	8	1	0	9							

球審横沢、塁大坪、松隈、高野、開始午後二時十分、終了四時五十分。

寸評 今井、進藤の投げ合い、八幡様の幟、空缶など賑やかな応援合戦。三回の三塁打二本が効いた。

メンバー

守 聖市 打 聖西 守

7	谷垣	1	吉武	8
4	武藤	2	相本	4
6	山岸	3	広田(兄)	2
2	竹田(富)	4	大久保	6
3	竹田(彰)	5	今井	1
5	笹原	6	吉田	5
1	進藤	7	藤本	9
8	小田(兄)	8	矢野	7
9	山下	9	坂倉	1
			増田PH	

第七試合

アリアンサ 2対7A 聖市

(八日)

安 振 失

ア	0	2	0	0	0	0	0	0	0	1	2
サ	1	0	2	0	0	1	0	3	A	7	
										1	1
										6	1

球審横沢、塁大坪、松隈、木村、開始午後二時二十分、終了四時四十分。

寸評 熱と団結のチーム、弓場のアリアンサと対するは老巧進藤を中心技量を誇るサ軍の対立、前半期待通りの好試合だったが、八回谷垣の三塁打に止めを刺された。ア軍とサ軍の差は、安打四対十二 失策九対一で技が熱に上廻った試合であつた。

打撃率ベストテン

順位	氏名	チーム名	打	安	試合数	打率
1位	竹田(富)	サンパウロ	12	6	3	0.500
2位	山岸	サンパウロ	13	6	2	0.462
3位	板垣	バストス	11	6	2	0.455
4位	大山	アリアンサ	17	6	3	0.355
5位	佐藤	アリアンサ	15	5	3	0.333
6位	綱島	アリアンサ	15	5	3	0.333
7位	阿部	アリアンサ	12	4	3	0.333
8位	谷垣	サンパウロ	10	3	3	0.300
9位	竹田(彰)	サンパウロ	14	4	3	0.286
10位	武藤	サンパウロ	11	3	3	0.273

◎さよなら座談会 (日、九月十日)

日伯新聞社主催で、八日夜日本倶楽部に第二回全伯について

て座談会が催された。以下参加者名と要約である。

司会は横沢太一

審判 竹田、大久保、木村、松隈、高野

聖市 山下、進藤、アリアンサ、弓場、千

代木、山久保、ブリグキ、青木、チエテ、

江見、マシヤード、肥田

横 グラウンド建設が先決。

一同 その通り。

進 総合グラウンドの話が出ているが。

横 選手以外の審判責任者の養成。ルール

は朝日年鑑より六大学のを。

竹 早速取寄せたい。

高 ピッチャーのホープは？

進 チエテの広田、バストスの佐藤。

横 それにコチアの今井。全ブ軍を選べば。

そこで出席者全部で選んだ顔振れは、投手 今井（聖

西）、佐藤目（バ）、進藤（聖市）

捕手 竹田（聖市）、小田（ビ）

一塁 望月（ア）、坂垣（バ）、

二塁 園田（バ）、丹（マ）、補武藤（聖市）、

谷垣（聖市）

三塁 笹原、（聖市）、本田（チ）

遊撃 山岸（聖市）、菊池（チ）

左翼 広田（チ）、畑中（バ）

中堅 吉武（聖西）、根来（聖市）

右翼 斎藤（チ）、山下（聖市）

（編注 全伯第二回は無事に終わった。昨年の覇者チエテは、中島前夜入浴中に失神、菊池、今井の猛球をヒジになどあつて緒戦に消えたが、初参加のアリアンサ弓場の豪快なプレー、今井、佐藤（バ）広田、本田など新進の活躍又華麗な山岸の守備、確実な竹田富の打撃、その上横沢審判の画期的ともいえる洗顔された判定振り等々、事実上この大会を境に、球界は大きく飛躍したのである。）

◎市毛総領事の送別野球（時、十月一日）

野球となると館員全部に徴を飛ばして自らプレートに立つ、市毛総領事の帰朝も愈々間近に迫ったので、このスポーツ総領事を送るのに、我等野球関係者は、送別大会を催そうではないかと、前から企画を練っていたサンパウロベースボールクラブでは、昨日左の如く期日その他を発表した。期日は三日、場所はスダン、出場選手は全聖市の選抜、カザード対ソルテイロ。

（注 試合結果判らず）

◎藤原義江 歓迎野球（時、十一月六日）

テナー藤原歓迎野球は、記者団対老童とカザード対ソルテイロの二試合、明七日スダン球場で行われる。記者団と老童のメンバーは、メンバー

記者団

老童



野村(日伯)	投斎藤(ブラ拓)
久保(時報)	捕杉野(ラツパ)
御厨(聖報)	一竹内(日伯)
稲村(〃)	二長谷川(東山)
山崎(時報)	三矢崎(ブラ拓)
木村(稜)(聖報)	遊南里(〃)
古沢(日本)	左宮坂(〃)
内山(日伯)	中香山(聖報)
満部(〃)	右石原(トキワ)
石井	捕多田
西本	竹田
榛菓	横溝
木村	

◎第一回リンス青年野球大会

(日、十一月十七日)

リンス連合青年会主催野球大会は、去る五日よりゴヤンベ-球場に於いて三日間の予定で始められたが、第二日目に大雨で一日延期八日無事に終了、大和が優勝した。

第一日(五日)

ゴヤンベ- 6対11 アリアンサ三区

アリアンサ三区 27対13 アリアンサ一区

第二日(六日) 大和对アリアンサ一区は、四回降雨で四時十分、ノーゲーム宣告。

第三日(七日)

大和 25A対15 アリアンサ一区、七回

ゴヤンバー 10対7 大和

本大会随一の好試合であった。ゴ軍の川島投手好投して大和の猛撃を排け、堂々10対7で優勝した。

第四日(八日)

A

アリアンサ三区 8対14 大和

アリアンサ一区 9対8 ゴヤンバー

決勝、大和 19対5 アリアンサ三区

七回裏暮色迫り竹田主審終了宣告、午後六時四十分。

◎聖市実業野球リーグ再開さる

(時、十一月二十六日)

再開リーグの第一戦、国井対同仁会は明後二十八日午前九時からスタン・カンポで行われるが、午後二時から訪日一年振りで帰伯した実業野球優勝旗寄贈者、蜂谷氏歓迎野球が同じカンポで開催される。この試合は、実業野球参加各チームから二名宛選手を選抜して、紅白で行われる。

◎汎ソロ少年野球大会(日、十二月十六日)

去る十二月七、八、九の三日間、バストス中―央グラウンドにて第三回汎ソロ少年大会が行われた。A組でプ・プルデントが二戦二勝し、B組で中央軍が三戦三勝で決勝戦に臨んだ。

プ 0012011-5

中 020202A-6A

中央軍の連覇成る。

個人賞、打撃一位溝部忠行、〇、五七八、  
二位古川試、三位小野志。(何れも中央)

◎聖市実業リーグ (時、十一月二十六日)

再開された実業リーグは、二十八日午前九時から、スタ  
ン  
カンポで二試合行われた。国井6対1同仁会、聖報8対8  
アルバレス・ペンチアード。

◎聖市実業リーグ (時、十二月七日)

四日のブラ拓対同仁会戦は

安 失

ブ 2 1 0 2 9 1 5 - 1 7 4 2 5

同 2 1 6 3 9 9 A - 3 4 A 1 8 1 9

球審竹田富、塁中森、小務。

◎サンパウロ野球クラブ役員改選

(時、十二月十一日)

サンパウロベースボールクラブは、去る五日役員会を開催  
して、役員改選を行った結果、左の如く五氏が当選した。

部長 石原桂造、会計 曲尾達雄、幹事進藤憲吉、吉田光  
雄、横溝一男

◎テナー藤原義江「歓迎野球」

(日、十二月十四日)

南米歌行脚中のテナー藤原の歓迎野球は、小雨も物とせず  
観衆多数、シーソーゲームに汗を握ったが、鈴木の右前安打

がサヨナラでインヂアン（元カザード）が巨人（元ソルテイロ）に快勝、藤原寄贈盃を獲得した。

	打	安盗	四	振	失
巨	110010210-6	36	533	10	9
イ	02011201A-7A	32	722	4	11

バッテリー、伊Ⅱ進藤・広田、巨Ⅱ今井・吉武、竹田富、球審南里、墨木村、吉田、高野。

◎仙人チーム 雪辱目指すアリアンサ

（時、十一月十九日）

第二回全伯決勝戦に、惜くも聖市軍に敗れたアリアンサ軍は、その後毎日曜各区対抗リーグ戦を続けて雪辱すべく努力しているが、大山、安部、馬場は再制覇成るまで、坊主頭に髯をそらない事を神明に誓い、さなきだに弓場投手以下、仙人チームの稀あるア軍は、正に天下の一大奇観を呈している。

蜂谷専一氏の思い出

竹田仙造

一九三六年九月に行われた第一回全伯野球大会の感激で、それまで腹のなかで眼っていた中京名古屋独特の野球狂としての蜂谷さんは、じつとしておらなくなり、蜂谷商会の若い店員を集め、チームらしきものを結成、越智、釘宮などが中心となり、ひそかに練習する一方、よき敵はないかと相手を探していたところ、たまたま総領事館でも、時の市毛総領事

を主将として根来、平野館員らが集って新チームが出来たとの報に、勇躍これに挑戦、一戦を交えたが、総領事館チーム根本投手の好投で敗退、青柳を賭けてのことで『市毛さんに飲まれたよ』。しかしこれが動機となつて、聖市実業リーグにまで発屈したんだから、この一戦こそ『大いに意義あるものだったよ』と蜂谷さん、誇らしく人に語ったものだった。

持ち前の負けん気の蜂谷さんのこと、チームの強化に力を入れ、谷垣正己、笹原盛男、竹田富男などを加入させ、着々と実力を養い、バストスのエース左腕佐藤投手をとって、ますます強化、実業リーグの覇者、全伯大会制覇を期して一九三九年、聖市予選に出場を宣し、サンパウロ野球クラブと覇を争うことになり、聖市ファンの血を湧せたが、結局サンパウロの堅陣は抜けず惜敗となった。が当国球界への大きな刺激剤としての役割を果たしたことは事実で、蜂谷さんの試みは高く評価されるべきものだった。

この試合当日は、折から蜂谷さんはリオに出張中であつたが、急遽飛行機で飛んで帰つたと一つ話にあつたが、当時としては飛行機旅行もまだ珍しい時代だったことは、合わせて蜂谷さんらしいと今でも思い出すのである。

#### 横沢太一の略歴

生れ 一九〇一年九月二十一日、東京都芝区高輪町十二番地  
父 横沢次郎（当時、台湾某州知事）、母 キミ 太一の妊娠中帰国、東京で出産

渡伯 一九三七年五月十三日神戸出帆りおでじゃねいろ丸

太一（三十六歳）、とよ（妻二十八歳）、和雄（長男一歳

半)

着伯後、次の六児を得ている。

国雄（次男）一九三八年バンデイランテス

ナオミ（長女）一九四三年聖市

省三（三男）一九四六年ア・マシヤード

佳代（次女）一九四八年プ・プルデンテ

仁美（三女）一九四九年スザノ

和（四女）一九五一年グアラサイ

死亡一九六二年四月二十一日

於て伯国パラナ州フェルナン・ジアス市

## 遍 歴

着伯最初は、海興のアニニューマス農場に、一週間ほどで出聖、三浦氏の日伯新聞スポーツ担当記者として就職、進藤憲吉、竹田仙造、高野富継など多くの球友知友を得た。

間もなくプ・プルデンテを振り出しに、各邦人植民地の野球コーチとして、遍歴が始まったが、何処でも確実な保証契約がなく、次々と短期間に移住して歩いた。

一九三八年、巴州パンデイランテス、野球農場に招解されて、ここに野球黄金時代を築いた。その頃北巴運連の設立を主唱し、カンパラの上野米蔵、アサイの館脇利一などを説いて実現した。この地で次男国雄生る。

一九四一年、第二次大戦の勃発、母国親許からの送金が途絶し、生活が逼迫、次男の療養を兼ねて再度出聖したが、枢軸国民の弾圧の中で、野球も邦語教育も出来ず、いわばコロニアの暗黒時代で、邦人間の連絡に空白を生じた。

一九四一年、パリスタ線ツパン駅第一プログレッツソ植民地

に招かれ、菅生宅に寄遇、一年野球のコーチをした。

大戦の終息となって、奥ノロエステの弓場農場（勇）に拾われ、一躍野球の神様に返り咲いた。

弓場農場に三年程落ち付いたが、ミランドポリスに移転、一年間滞在、野球の指導。

三男省三は、一九四八年十二月、アルバレス・マシヤードで生れている。

次女の佳代は、一九四八年一月、プ・プルデンデに生れているので、再度プ市に移住したものと思われる。

終戦後の混乱期を経て、平和となった頃、聖市近郊リベイロン・ピーレスに、邦語教師として雇われ、夫妻とも教鞭をとり、此処で初めて給料（月給）を貰った。その期間二カ年位だった。三女仁美（ヒトミ）が、一九四九年八月スザノ生れとあるは、この頃であろう。

邦語教師に嫌気を感じて、聖州奥地フェルナンドポリスの野球愛好者の所にいき、約一年間野菜作りに専念、主として西瓜栽培などした。しかし其処も彼の安住の地ではなかった。四女和（カノウ）は、一九五一年八月グアラサイ生れであるから、彼の地に移ったこともあるのであろう。

一九五七年七月、再び踵を巴州に返して、アストルガ市在住、日本人会長川崎増太郎に招解され、同市日会の公認教師として、夫婦とも教鞭を預った、川崎は旧地野村農場で知り合った人である。

約半年間アストルガで過し、其の後近接の農業都市フェルナン・ジアスに移住、ここで二カ年目を迎えた或る日、即ち一九六二年四月十五日の午前六時半（睡眠中と思われる）変

転極りなき、六十一歳の生涯を閉じたのである。当日は日曜日、夫人は近所の生長の家白鳩会に出張していて、不在だったという。

### 生い立ちと性格

太一の一生は、他の一般農業移民と全く違うものであった。

父横沢次郎は、台湾総督児玉源太郎の下に信任厚く、某州の知事を勤めていたが、母キミが受胎したので、初産を祖国にてと、帰国の船中で、時の総理大臣桂太郎に会い、「男子ならば、余の名を」といわれ、出産して「太一」と命名したという。十二人兄妹の長男である。外地勤務の高宮の子太一は、父母の寵愛のうちに、奔放な性格を自然に持ったものようである。

渡伯した一九三七年は、すでに欧州は戦火の只中にあり、祖国日本も、満州から支那大陸に戦線は拡大し、政治も経済も軍事先行の一点張りで、彼の性格にも合わず、ひそかに海外へと考えたようであるが、そのほかにもう一つ、彼の野球、明大チームの選手という彼の自信が、渡伯動機の大半ではなかったかと思われる。

然し、かなり隆盛となっていた当時の伯国球界でも、彼を野球コーチ専門として生活させるには、まだまだ多くの障害を余儀なくした。その上、比較的上流に育ち、高等教育を受けた彼が、各地でその周囲の情況に馴染めず、ということも転住を続けた原因の一つとなったのではなからうか。

とよ未亡人の述懐に、余りにも人格が高潔で温容、それでいて内向的で、外での不満を家庭内に爆発、酒を好み、子供



も多く、他人に頭を押えられるを極度に嫌ったために、とあるが、転居に次ぐ転地、夫人の苦勞はいかばかりであったろうか。知人達の好意に救われたことも数あったようである。ともあれ、今日までの伯国野球の向上発展に、横沢太一は、最も多くの影響を与えた一人であるといつて、異論の者はあるまい。

野球一家横沢家の七男七郎氏が、プロ野球の審判として名声を博し、伯国にも来て亡兄の遺族を慰め、ロンドリーナ市に立派な墓石を建立したという。七名の遺児もそれぞれ成長、各地の野球に尽しているのです、今ようやくあの世とやらで、冥福しているのではあるまいか。心厚く合掌したいものである。

#### 横沢太一氏の印象 竹田仙造

横沢さんから受けた私の第一印象は、同氏の来伯が報じられていた野球人としてのものとは大分違つていて、むしろ「話術の名人」といったものだった。野球の昔ばなしは、明大時代から、日本のプロが戦前始まった時のこと、特に選手引抜きの話など、聞くものを話の中に引込んで、夜の明けるのも知らないことも度々あった。

それに氏独得のあだ名つけは、一言でその相手をいいあらわし、そのおもしろさは天下一品だった。この特技が、しばしば氏の当国では通用しない生活態度からの非難の急鋒をかわすのに役立つていたように思う。

横沢さんの渡伯の動機については、自分でははっきりした

ものもなく、一、二年外国を見るつもりで、ふらつとここへやって来たというのが本当らしい。従ってブラジルで野球が盛んだなどと、知るよしもなかったものと思われる。『来て見てびっくり、これはいける……よし』というのが本当だった。

しかしこの球界は、まだ野球を生活の糧とすることなど、とても無理な話で、それを敢えて押し通そうとし、又そうしなければならなかったために、色々と問題も起り、永年地方を転々の生活を強いられ、不遇のうちに一生を終えられたわけではあるが、「俺は野球しかやれない男だ」と一生を野球に打込んで行った。副業もなく野球一本で、これが氏の信念だったと思うとき、野球が氏の気持ちの支柱となり、氏を鞭うち続けていたものと思われる。

野球だけで生活せざるを得なかったので、時に友人たちにも不義理もあったが、その時はそれぞれが、口では小言もいつていたものの、心から氏を憎んだり怨んだりしなかったのは、不義理そのものに言い知れないユーモアがあったからだと思う。

晩年、とよ夫人の影響で、宗教界に入り、北パラナはアルトルガスに自適の生活を送り、七人の子供たちも、それぞれ高等教育をうけ、家族的には人に羨ましがられるものを得られたのは、せめてもの幸せといふべきである。

横沢さんが伯国球界にデビューしたのは、一九三七年の近代第二回全伯大会で、着伯日も浅く、主審としてこの大会をリードし、それは華々しいものだった。大きく派手なゼスチャー、きびきびした所作で、円熟した技術を駆使した試合

進行ぶりは、全く見事なもので、わたしたちがそれまでやっていたことが、一体何だったのかと思わせるほど、強烈な印象をうけた。横沢さんの出現によつて、当球界の審判技術は、急速に進歩したが、氏が特に強調したのは、審判団の以心伝心的な、連携プレーの大切さを強説したこと。又「不手際」という意味深長な言葉をもつて、同僚の失敗をカバーするなど、画期的な新風を吹込んだことは、我が当国に残した大きな業績といふべきであろう。

1938

◎傍若無人の天狗倶楽部（日、一月十二日）

誰か挑戦する勇者はないか

バストス移住地に野球で勇名を轟かせている「天狗倶楽部」は創立以来既に三歳、向ふ処敵なく、旧臆長駆して奥ソロに遠征、瀬戸、中熊、長谷川等活躍、ア・マシャード地方を蹴り散らし、鼻高々、最近貼紙して「我が天狗クラブを負かしたものにはバット並にボールを進呈する我と思はんものは来り戦へ！」と。

◎インデアン対巨人戦（日、一月二十七日）

第一回は市毛総領事送別、第二回は藤原義江歓迎試合として、既に二回行われたこの対戦は、球界最高峰を自認、クアンからも期待されているが、第一回は六対三、第二回は七対六で何れも若手巨人が惜敗、今度こそはの意気込み、その上進藤老不調、名手江刺家病気で巨人のチャンス復仇成るか、リーグ中絶の折柄、夏やせに活を入れるか、と期待されて一

昨日スダン球場で午後四時三十分巨人先攻で開始された。試合は予想通り白熱、五回六対六の時驟雨柿然と来り、やむなく引分け中止となった。五時四十五分。

打 安 振

巨 1 1 2 0 2 一 6 2 3 8 5  
 イ 0 4 0 0 2 一 6 2 4 2 2

二塁打、竹田富、三塁打、小田敏、竹田富、  
 本塁打、竹田彰、最優秀打者竹田彰

メンバー  
 守 イ 軍 打 巨 軍 守

4	鈴	木	1	江	口	5
2	広	田	2	竹	田	2
5	谷	垣	3	今	井	1
6	山	岸	4	竹	田(彰)	3
1	進	藤	5	竹	田(富)	6
3	赤	川	6	小	田(敏)	4
8	根	来	7	中	林	7
9	松	井	8	中	森	9
7	横	沢	9	松	隈	8
		畑	中	8		

◎聖市実業リーグ開幕 (時、二月三日)

悠々一年間の大リーグ、実業野球の最終戦は、来る六日午前九時からスダンカンポで三試合を行い、領事館に一敗した外は勝ち続けたコチアチームに優勝旗が授与される。六日の試合結果は

午前八時 蜂谷 5対15 国井  
正午 聖報 7対12 カナカオ  
午後三時 日伯 13対3 ブラ拓

◎実業野球連盟改組 (時、二月四日)

第二回リーグを前に不満チームも出現し、分裂の危機さえ感じたので、一昨夜トキワホテルに代表者集り、三十八年度の企画を決定した。第二回規定の骨子は次の通り。

一、A組B組の二リーグとし、A対B決定戦。  
二、主体サ供、全選手はクラブ員となる。  
三、凡ての試合はサ供の統率下にて行われる。

四、全選手登録、第二回の資格を得る。

五、毎月各チームはクラブ費を納入する。

奥ソロカバナ野球大会、二十一、二十二日開催、開催地はプ・ヴェンセスラウを第一候補不可能の時はプ・プルデンテと。

◎新生 野球審判協会 (日、二月五日)

本日、今後の方針を協議

昨年九月全伯大会に奮闘した審判七名が、協会の設立、審判技の向上、審判員の養成など今後の方針を協議する事になった。

◎奥ソロ野球第六回決る (時、二月八日)

過去五回までの奥ソロカバナ野球大会は、第一回と第二回はプ・プルデンテ、第二回はサ・アナスタシオ、第四回はア・マシヤード、第五回はプ・ウエンセスラウが優勝したが、今年の第六回は何れが制覇するか。

球場はプ・プルデンテ市、期日は二月十九日、二十日の両日と決る。

◎第六回奥ソロ大会（日、二月二十四日）

去る十九、二十日の両日プルデンテ市球場に於いて、前年度覇者ウエンセスラウ、マシヤード、プルデンテ、アナスタシオ、ベルナルデス五チーム参加で闘われ、ウ軍が連続優勝した。戦績は、ウエンセスラウ7対4プルデンテ、マシヤード17対9アナスタシオ、マシヤード17対16ベルナルデス。

優勝戦、ウエンセスラウ23対12マシヤード、バッテリーは、マ肥田、村重、ウ高松、沖之井。

◎本社主催 小学野球大会（日、二月十五日）

先生方も大賛成

本社主催第二回全伯日本人小学校優勝野球大会は早くも各方面に絶讃されているが、小学校先生方の意見を開き、主催者の希聖を述べる会を去る十二日日本クラブに開き一時間にわたる会議をした。

◎バ延長線に興る球熟（日、二月十五日）

汎ポンペイア野球連盟誕生

各地の野球熱に、新興地帯。パ延長線。ポンペイア町では去る一月九日汎。ポンペイア野球連盟を組織、ポンペイア小学校庭で、ポ

ンペイア町、ポンペイア植民地、サンタ・エレナ、マリリア昭和、ガリアの五チーム参加、サンタ・エレナが優勝した。更に二月六日。ポンペイア町、マリリア昭和、ポンペイア植民地の三チームでリーグ戦を行い、ポンペイア目が優勝。去る十三日はヴェラ・クルース。駅カンポに於て野球大会が開かれた。

#### ◎聖市実業野球連盟 (日、二月二十五日)

面目を一新、明日代表者会議を開く

既報、実業野球連盟では内容を充実し一定の軌道に乗って円満なる発達を期する目的を以って過日来委員に委嘱して連盟規約起草を急いでいたが、去る二十二日右草案が出来たので明午後八時半から日本倶楽部

に各チーム代表集り、草案を審議する、該案は規約十八条、細則二十二項、尚役員の改選、本年度予算、試合組合せ、来る三月六日から開始など。

#### ◎天狗倶楽部のヒット (日、二月二十七日)

都市対抗野球大会

二十七、二十八両日、バストスで

バストスの天狗クラブでは、都市対抗野球大会を開催、明二十七、八日、ビリグイ、バストス青年、バストス天狗、プルデンテの四チーム参加でリーグ戦を行い、雌雄を決す

る、ビリグイには中島、上野、山田、バストス青年には佐藤至宝投手、板垣、畑中兄弟、プ・プルデンデには藪田、市木、岩村、天狗クには元ミカド瀬戸、元ビリグイ中熊投手。

### ◎都市対抗野球

(日、三月一日)

俊豪六球団が参加バストスで火蓋切る　バストス青年団、天狗ク後援のこの大会は二十七、八日バストス球場で開催、参加チームは、ポンペイア、ビリグイ、ウエンセスラウ、プ・プルデンテ、天狗ク、バストス青年、二十七日ウ対バ青、ビ対天狗、ポ対天狗、二十八日、ビ対ウ、バ青対ビ、ウ対天狗。

### ◎リーグ前哨戦、やっと水難解消

(日、三月十三日)

コチア対カナカオ、本日午後二時より

実業リーグは先日の豪雨で球場水びたり、開幕は晴天待ちだが、各加盟チームは「今年こそは」に燃えているが、その前哨戦のトップを切ってコチア対カナカオの練習試合が本日午後二時からカ球場で行われる。昨年度の両雄今年の力価は、とファンから注目されている。

### ◎新陣容の実業野球、会長に蜂谷氏就任

十九日リーグ戦準備会開く

(日、三月十六日)

既報、聖市実業野球連盟では過日連盟規約を制定したが、一身上の都合により辞職した会長石原桂造氏の後任に協議の



結果去る十四日会長に蜂谷専一氏を推薦承諾を得た。尚球場も使用可能となったので愈々四月初旬より開幕する、その準備、正副会長の就任など、十九日午後八時より日本クラブで代表者会議を開く。

◎開幕を前に練習試合二つ二十日に挙行

(日、三月十九日)

今井投手の低調に、見事コチアを屠り、雄々しい武者振りを示したカ・ナカオに驚いた各チームの練習も白熱して来た。来る二十日蜂谷球場で蜂谷対国井戦あり、蜂谷は新たに谷垣、竹田(富)等超弩級を加へ面目一新している。又コチア対日伯はスダン球場で午後二時半より。

◎バストス原頭に熱球飛ぶ

(日、三月二十五日)

坂根総領事歓迎

バ軍プ軍の健闘にファン熱狂

去る三月二十日坂根総領事バストス訪問を歓迎し、プ・ブルデンデのニコニコ供とバストスの天狗クは天狗の先攻で開始

P 400010000-5

B 010001001-3

近来にない息詰る熱戦にファンは大喜び好試合であった。

◎カ・ナカオ球場で

(日、四月三日)

入場式(午前十一時)挙行

## 第二回実業リーグ

二、三日来の豪雨で蜂谷球場は水びたし、止むなく第二球場のカナカオで本日午前十一時から在聖名士参列の上華々しく第二回リーグ戦の入場式を行ふ。引続き十二時から同仁会対蜂谷戦をリーグの幕開け、午後三時から国井対日伯戦、本日の両試合は各チームとも技量伯仲、リーグ冒頭試合にふさわしい熱戦となろう。尚カ球場はピニエイロスからブタンタン行きの道を五百米、橋を渡り右に折れラヂオの高塔の下まで行けば選手がワイワイやってくるからすぐわかる。

## ◎第二回聖市実業リーグ（日、四月五日）

今年度の実業リーグは、一昨日カナカオ球場に於いて入場式を行い開幕された。入場式は来賓坂根総領事、淀川領事、宮坂ブラ拓専務臨席、参加六チーム入場、皇居連拝、皇軍の武運長久を祈り、宮坂専務試球式で第一戦は蜂谷先攻で開始された。

蜂谷対同仁会は、同二十四の失策で自滅、国井対日伯は、国井の今井好投で十対四楽勝した。

## ◎実業野球リーグ、蜂谷の善尉空し

予想通りカナカオ勝つ（日、四月十二日）

蜂谷対カナカオ戦は十日午後二時十分山下（球）高野、今井、江口の四審判で開始。

K 00054213A-15A

H 010002002-5

蜂谷二回に一点先取したが、四回本郷の中前安から力が楽勝した。新進田村好投す。

◎本社主催 全伯野球大会

制覇狙うチエテ軍新人交へ堂々の布陣

(日、四月二十二日)

昨年惜敗したチエテは今年こそと新人投手田口、打には本田、広田、主将菊池も健在。

投 田 口  
捕 広 田  
一 仲 井  
〃 中 島  
二 藤 井  
三 赤 川  
〃 本 田  
遊 菊 池  
外 斎 藤  
〃 中 島  
〃 東  
〃 本 田

◎プ・プルデンテを抑え

ア・マシャード勝(日、四月二十九日)

去る二十四日プルデンテ市に於て行われたア軍対プ軍の対抗野球試合は奥ソロ二雄の対決シーソーゲームの展開。出場  
のプ軍稲毛、比嘉、市毛の各投手、ア軍の二の宮投手など各

自得意の快投は頼しい限りであつたが、殊に二の宮の快調は  
近来の出来であつた。

プ 101001011-5  
マ 020000230-7

◎辻川氏送別珍野球 (日、四月二十九日)

昭和五年以来チエテ移住地事務所にあつて移住地の発展に  
献身的努力を尽す一方、チエテ野球の「創設の父」として大  
功あつた辻川政二氏は今般聖市本部に栄転することになつた  
ので氏の功に報ゆるため去る十四日午後惜別野球試合を行つ  
た。この試合は現役老童更に「呑み友達」を交えて珍チーム  
編成仲よく戦い、終つてビールの満をひいた。この日辻川氏  
二、三塁打を放ち、打率十割。

◎聖市実業リーグ 日伯猛追を排け

蜂谷快勝す (日、五月三日)

去る五月一日、蜂谷対日伯戦はカ球場で進藤(球)今井、  
矢萩の三審判、午後二時四十分開始。蜂谷田村の好投に、  
打つては

谷垣、竹田好打し一回早くも四点を得、圧勝した。

蜂 101041000-10  
日 000000113-5

六月十四日

アリアンサ 8対2 チエテ

再試合 アラサツバ 1対5 ピリグイ

アリアンサとピリグイは二勝一敗の同率となり、優勝決定

戦を行う。

アリアンサ 2対1 ピリグイ

ピリグイチーム代表となる。

(注) ピリグイは日伯学園の名で大会に参加した。)

パウルー地方

六月十一、十二日於てベラ・クルース球場

メスキッタ 14対2 パウリスト

ベラ・クルース 24対1 バウルー

ポンペイア 7対13 公榮

ベラ・クルース 26対1 メスキッタ

公榮 14対2 ポンペイア中央

優勝戦

ベラ・クルース 26対7 公榮

ベラ・クルース優勝。

◎第二回全伯日本人小学校野球大会

(注) 主催は日伯新聞社だが、事実上は日本語普及会の統率  
力が利用された。)

各地予選

◎聖市地方

於ピニエイロス、カナカオ球場。

六月四日

タボン 4対15 大正

バルゼン 4対9 A コチア

六月五日

コチア 6対5 バルゼン  
大正 7 A対3 タボン

六月十一日

バルゼン 2対1 大正  
コチア 1 8対4 タボン

六月十二日

バルゼン 4 A対3 コチア

大正 5対2 コチア

大正 4対1 バルゼン

(注 最終戦バルゼン対大正は、日没四回ドロングゲームとなり、ジユキア線の代表チームが無いので、大正とバルゼンの二チームの出場を認めた。)

◎プレジデンテ・プルデンテ地方

プ・プルデンテ地区予選、於プ市第一小学校。

五月二十九日

プレイジョン第二 0対1 7 プ・プルデンテ

ア・マシヤード 2 0対2 プレイジョン

プ・プルデンテ 8対0 ア・マシヤード

◎プ・プルデンテ地方

サウーデ (バストス) 0対4 A プ・プルデンテ

サウーデ 1 7対0 ウエンセスラウ

五回コールド

(注 ウエンセスラウ棄権し、プ・プルデンテの優勝決る。)

◎アラサツーバ地方

ブリグイ地区予選

日伯学園 10対1 聖マイ

聖フランシスコ 0対13 利高

青葉 4対2 東洋、利高 12対3 青葉

日伯 1対1 東洋、日伯 5対0 利高

アラサツーバ地方予選

於アラサツーバ学園球場

六月十二日

アリアンサ 2対3 A ブリグイ

チエテ 1対2 アラサツーバ

六月十三日

アリアンサ 7対4 アラサツーバ

ブリグイ 2対4 チエテ

アラサツーバ 2対2 ピリグイ

◎オウリンニヨス地方

・オウリンニヨス地区

ソブラ 13対5 オウリンニヨス

・カンパラ地区

カンパラ 21対3 ビラ・ジャボーネーザ

カンバラ 13対5 コ・プロコピオ

・トレス・バラス地区

バルサム 4対3 フイゲイラ

トレス・バラス 9対4 バルサム

代表校決定戦、於てオウリンニヨス球場

カンバラ 9対7 ソブラ  
トレス・バラス 11対0 ソブラ  
トレス・バラス 23対2 カンバラ  
トレス・バラス代表となる。

◎リンス地方

五月二十二日 (リンス地区)

アリアンサ第一 12対1 サンタ・アメリカ

五月二十九日

ウニオン 1対20 ゴヤンベ

リンス学園 2対1 ゴヤンベ

アリアンサ第一 1対14 リンス学園

(カフエランジア地区)

旭 6対4 旭第二

旭 24対12 公和

代表校決定戦

六月五日於てリンス市ジナジオ、ソーセ  
ゼアーノ球場。

リンス学園 14対0 旭

リンス学園代表となる。

◎マシヤードに野球クラブ生る

(日、六月二十一日)

古豪チームとして王者を任じていたア・マシヤードチームも、その後幾多の変遷を経たが、今度野村クラブとして更生の横尾君を主将とし、二ノ宮君を投手として陣容を堅めるに



至った。投手二ノ宮は身長一、八二米、その實力は定評あり、捕手の球、遊撃の初村の敏捷さと共に、トリオとして光っている。

### ◎第二回全伯日系小学校野球大会

(日、六月二十五日)

第二回全伯小学校野球大会は、昨二十四日スタン球場にその第一日入場式を行った。来賓は坂根総領事、多羅間総裁、蜂谷委員長、古谷教普会々長、石井事務長、矢崎審判長、細雨降る中に皇居遙拝、優勝旗返還、多羅間総裁と矢部審判長の挨拶など厳肅のうちに行われたが、雨降り止まず、試合開始は翌日に延ばされた。

第一試合 バストス21対5トレス・バラス、午前九時十五分から一時間五十分、球審竹田(仙) 塁審高野、谷垣、大坪。

バ	3	1	2	6	4	0	5	—	2	1	
ト	0	2	0	0	1	1	1	—	5		
										4	8
											16

安 振 失

寸評 バ軍の打撃秀れ一方的となる。

第二試合 バルゼン1対10Aリンス、十一時十五分より二時間五分、球審進藤、塁大坪、広田、山下。

パ 0000001—1  
リ 012232A—10A  
寸評 リンスの堅陣にバ軍善闘して敗る。

第三試合 ベラ・クルス0対3Aプルデンテ、二時より一

時間二十五分、球審竹田（富） 塁審高野、広田、木村。

安 振 失

へ 0 0 0 0 0 0 1 0 1 7 3  
プ 0 0 0 2 0 1 A ー 3 A 0 4 2

寸評 プ軍の西投手、ベ軍の寺内投手ともに好投接戦となったが、試合好者のプ軍勝切る。

第四試合 大正0対1 日伯、三時五十分より一時間四十分、球審進藤、塁審大坪、山下、竹田富。

安 振 失

大 0 0 0 0 0 ー 0 0 7 1 1  
日 1 3 0 7 0 0 ー 1 1 1 2 0

コールドゲーム

寸評 大正の渋谷好投、遠藤捕手も活躍したが、日伯の實力は数倍で結果は当然。

第五試合（準決勝）バストス3対5 日伯、球審、竹田仙、塁審大坪、竹田富、木村。

六月二十六日午前八時四十五分より。

安 振 失

N 0 0 0 3 0 2 0 ー 5 3 4 7  
B 0 0 2 0 1 0 0 ー 3 2 9 7

寸評 作戦の齟齬に大木倒る、との見出しで、バ軍は重なるチャンスをつかみ切れなかったとある。

第六試合 リンス3対1 プ・プルデンテ、午前十一時十分より、球審進藤、塁審大坪、谷垣、山岸。

安 振 失

— 0 0 0 0 0 2 1 — 3 3 1 1 0  
P 0 0 0 0 0 0 0 — 0 1 7 4

寸評 リンスの健棒に名投手（西）潰ゆ。三振十一個を奪う好投の名投手西と、疲労とバツクの不安に敗れた。

感激の竜虎戦、アラサツ—バ地方代表日伯学園覇業成る。敗れて悔なきリンス学園の奮戦、武士道亡びず、精神的美技と、当時の日伯紙は少年達の熱戦を称えている。

N 2 0 0 0 0 1 2 — 5  
— 0 0 0 0 4 0 0 — 4

二十六日午後三時十分、球審進藤、塁審大坪、谷垣、山岸、日伯学園先攻。

試合は、第一回表、一番の本松三塁を抜き二番石場も中前安打で一、二塁の時、阪本左翼へ二塁打して本松生還、続く森山投葡一死の間に三塁より石場も還り、先取二点。リンス中川、日伯森山兄両投手の好投に両軍無為に二、三、四回を過ぎる。五回裏リ軍は、一死の後佐藤七番四球二盗、中川左中間に二塁打で佐藤生還、綱田の一葡矢で中川三進、森部三振二死後、吉任の遊葡トンネルで中川還り綱田三進、吉住二盗を捕が遊に送球、綱田本盗、豊田も遊撃に安打、森部義も三塁に快打して土日住生還、リンス連安で一挙四点。六回の日伯はトップ石場、投手頭上に安打し二盗、捕手暴投で三進、阪本一死、森田第一葡を石場本盗、一塁手送球は走者捕手衝突落球・石場ホームイン。第七回表日伯の攻撃、小池一葡矢二盗、捕手後逸で三進、馬場一死、稲葉二死後、本松三葡矢で小池還り同点、本松二盗、捕手二塁へ暴投本松三塁へ、中堅手も三塁へ暴投し本松勇躍生還一点勝越しとなる。

この裏り軍最後の反撃は、吉住一死、豊田左へ二塁投三塁へ暴走して刺され二死、森部兄四球後、一二、三盗に連盗したが、池田三葡に終る。五対四の大接戦、栄冠は日伯に輝いた。

リンス 日伯軍  
 捕 森部(傾) 本 松 遊  
 中 吉 住 石 場 三  
 三 豊 田 阪 本 二  
 遊 森部(義) 森山(弟) 捕  
 左 池 田 森山(兄) 投  
 一 太 田 米 谷 左  
 二 佐 藤 小 池 中  
 投 中 川 馬 場 一  
 右 綱 田 稲 葉 右

30 打数 27  
 5 安打 5  
 7 盗塁 2  
 2 四球 2  
 6 三振 6  
 6 失策 4

打撃率ベストテン(七本以上)

順位	氏名	チーム	打	安	試合数	打率
1位	森山(弟)	日伯	9	4	3	4.4
2位	豊田	リンス	12	5	3	4.17
3位	石場	日伯	8	3	3	3.75
4位	樋浦	バストス	9	3	2	3.33

5位	宮野	バストス	7	2	2	2	8
6位	森山(兄)	日伯	8	2	3	2	50
7位	森部(弟)	リンス	12	3	3	2	50
8位	桂川	バストス	9	2	2	2	22
9位	池田	リンス	10	2	3	2	00
10位	阪本	日伯	10	2	3	2	00

◎北パ国際植民地野球大会 (日、七月七日)

国際植民地連合青年会主催第二回野球大会は、去る三日中央区小学校グラウンドにて先般来行われた試合の最後、準決勝と決勝が行われた。午前十時入場式、梶原日会長と丹審判長の挨拶後、第一試合向上14対13ロンドリナ、午後三時より向上対中央、6対4で向上勝。

メンバー

中央軍 向上軍

投	吉村	丹(弟)	投
捕	曾我部	丹(兄)	捕
一	沼田	宝田	一
二	石川	早坂	二
三	平田(弟)	角田	三
遊	頼則(兄)	佐々木	遊
左	頼則(弟)	眞田(兄)	左
中	石塚	安達	中
右	平田(兄)	眞田(弟)	右

◎奥ソロ予選 (日、七月十九日)

第三回全伯奥ソロ予選は、去る十六日午前八時よりブルデ  
ンテ対ヴェンセスラウで開始された。9対3ブルデンテの  
勝。

寸評 前シーズンの覇者ヴ軍は、再び駿将高松を迎え連覇を  
目指したが、これに対しプ軍は横沢監督を中心に猛烈に練習  
この日に備えた。プ軍先攻、り軍投手町田の緒戦をバント攻  
めで一回に九点をものにしたプ軍その裏二点を取られたが、  
その儀逃げ切り勝った。

◎再制覇を狙う聖市軍 (日、七月十二日)

去る九日夜トキワで石原倶楽部長招待の晩餐会で本年度の  
選手団が決った。 監督鈴木威、主将山岸、副将谷垣、投手  
進藤、山岸、小田、田村、捕手本郷、竹田富、内野竹田彰、  
山下、武藤、江口、中林、谷垣、山岸、外野松尾、吉田泰、  
鈴木、マネージャ、大坪、中森。

◎今日優勝旗授与式 (日、七月十七日)

実業野球紅白両軍に分れ模範試合も行う コチヤの輝く全  
勝裡に終った実業リーグ優勝旗授与式が今日カナカ才球場で  
行われ、優勝旗、打撃賞、守備賞の授与、会長挨拶の後紅白  
試合を行った。メンバーは、

メンバー

白 軍 紅 軍

田村 投 小 田

本郷	捕	矢萩
坂合	一	竹田(彰)
谷垣	二	武藤
江口	三	今井
進藤	遊	広田
根来	左	鈴木
吉武	中	竹田(富)
吉田	右	桜井
小島	補	奥田
仁井		服部

◎北パラナ野球大会 (日、七月二十日)

北パ日本入会主催第八回大会は、七月九日より四日間カンバラ球場に開催された。

第一日

中央 1対11 オウリンニヨス  
 野村 5対3 カンパラ

第二試合

アルト 18対4 北巴  
 ビラ・ジャポネーザ 34対2 平和

第三日

ビラ・ジャポネーザ 4対3 オウリンニヨス  
 野村 13対15 アルト

第四日(決勝戦) 午前十一時十四分開始

ピ 400321021-13  
 ア 140130020-11

メンバー  
アルト

ビラ軍

- |   |       |       |   |   |
|---|-------|-------|---|---|
| 7 | 森(宗)  | 兼     | 重 | 5 |
| 4 | 奥野    | 税     | 田 | 9 |
| 6 | 江原(佐) | 西(兄)  |   | 7 |
| 5 | 江原(政) | 伊     | 藤 | 2 |
| 9 | 宇野    | 鍋島(兄) |   | 6 |
| 2 | 大畑    | 良     | 水 | 1 |
| 8 | 稗田    | 上     | 野 | 8 |
| 1 | 森友    | 鍋島(弟) |   | 3 |
| 3 | 江原(章) | 矢     | 部 | 1 |

◎ノロ線予選決る

八月二十四、五、六の三日間

(日、七月二十三日)

全伯大会もあと一ヶ月、各線とも球界制覇を旗印に雄々しく予選を展開しているが、奥ソロ大会の後をうけてノロエステ大会が次のように決った。

期 日 八月二十四、五、六日

場 所 アリアンサ球場

滞在費 アリアンサで負担

◎いまぞ球に生く四年間の過恨を流す一戦

アリアンサ対チエテ(日、七月二十三日) 四年間にわ

たる感情問題を解消して再び相見ゆる両雄は去る十五日野球



発祥の地第三アリアンサ球場に日沖氏の投じた和解の聖球に始められた。スコア―は、

チ 000020140ー7  
ア 032003504ー17

終つて主催アリアンサの心尽しで茶話会を、席上弓場、菊池両氏の劇的挨拶あり、固く将来の結盟を誓い、次は三十一日チエテで第二戦を行う。

### ◎本社主催全伯野球 パ延長線予選大会

二十日マリリアで (日、八月九日)

参加チームは、ベラ・クルース、マリリア、ポンペイア、バストスの新古四チーム。

会 期 八月二十日

会 場 マリリア市球場

大会費 参加チーム負担

### ◎全伯野球

(日、八月二十日)

無風帯の聖市予選

果然、学生軍の旋風

実力全く謎、薄気味悪い存在

本社主催全伯野球大会聖市予選に昨日ドラゴン倶楽部が名乗りを上げたが、今度は二世の学生チームもメンバーを発表、サンパウロ倶楽部と三つ巴戦を行うことになった。学生チームは、マネージャ平田、投手松浦、久保、新工、捕竹内、一塁久保、二塁西田、栗田、三塁桑原、松本、遊小田、外弘

田、竹中、岩間。

◎パ延長線予選大会 (日、八月二十四日)

この線初の予選大会は、去る二十日マリリア市に開催された。

ポンペイア 18対8 ベラ・クルース

バストス 24対8 明和

決勝試合 バストス対ポンペイア

B 0350051221-28

P 000101001-3

寸評 バ軍の古豪中熊好投す。バ軍の佐藤五割一分三厘の打率で打撃賞を授与された。

◎奥ソロ予選大会 (日、七月二十二日)

奥ソロの予選は七月十六日から三日間、プ市球場で五チームリーグ戦を行った。

第一日 (十六日)

プルデンテ 9対3 ウエンセスラウ

マシヤード 9対0 アナスタシオ

第二日 (十七日)

プルデンテ 3A対2 ベルナルデス

マシヤード 6対4 ウエンセスラウ

ベルナルデス 1対10A アナスタシオ

第三日 (十八日)

プルデンテ 13A対3 マシヤード

ベルナルデス 7対9A ウエンセスラウ

プルデンテ 相對3 アナスタシオ

なお十九日マシヤード対ベルナルデス戦とウエンセスラウ対アナスタシオ戦が行われたが、すでに四戦全勝のプレシデンテの優勝が決り、この地方の代表権を獲得した。

◎ノロエステ予選 古豪アリアンサ

代表権獲得

(アラサツーバ電話午後七時半)

(日、八月二十三日)

本社主催全伯野球大会予選地区中最も激戦を予想されたノロエステ予選は、二十四日より三日間、アリアンサ球場で開始され劈頭より白熱戦を演じた結果、伝統に生るアリアンサ遂に晴れの栄冠を獲得した。

戦績左の通り、八月二十四日

アリアンサ15対13ブリグイ、チエテ20A対3

アラサツーバ (五回コールド)、アリアン

サ4A対2アラサツーバ・チエテ22A対19ビリ

グイ、以上二試合は二十五日、二十六日、

ブリグイ17対15アラサツーバ (補回戦)、

アリアンサ19対9チエテ

チ 000110301-9

ア 408042001-19

なおアリアンサは来る二十九日同地出発する由。

◎全伯野球聖市予選 (日、八月三十一日)

この地区で新たに名乗りを上げたドラゴン倶楽部（吉田カナカオ、江刺家、吉河同仁会など）と、松浦、竹内バッテリーの学生軍との試合は、去る二十八日蜂谷球場にて行われ大接戦を演じ、八回まで十対七で先行したド軍に、九回表学生軍は森本、岩間、松浦など連続好打して同点、延長十一回にも走者二人の時松浦殊勲の三塁打で決定的な三点を加え結局十対三で快勝した。

◎決勝試合 午後三時十分より

サ 268302310-25  
学 000214000-7

連戦の学生軍に対し聖市軍は、鈴木監督の指揮下に大挙十三名登場、圧倒勝をした。

午後七時よりトキワで勝宴、石原倶楽部長以下全選手、部長出席、二連覇を目指して勇歩を踏み出した。

◎第三回全伯各チームのメンバー

（日、九月二日）

ピラー

ジャポネーザ

矢部

伊藤

西春

上野

兼重

鍋島



◎本社主催 第三国全伯邦人野球大会

愈々けふ豪華な幕開き (日、九月二日)

夢にも忘れぬ幾旬!

巻絵大の覇争熱白

新時代の野球史は第一ページをブランクにして今日を持った。本社主催第三回全伯野球大会、球界ブルーリボンの輝く戦績は、ここ三日間、黄金の文字もて燦然と書き誌されようとする、持ちこたれた大会開幕の日はついに来た。

踊るような興奮の文字が書き連ねられて、主催紙のトップはうずまり、開幕を告げる鐘の音になっている。続いて開会式の式次第、各チームの主将、アリアンサの弓場、プルデンテの大城、バストスの瀬戸、ビラ・ジャポネーザの兼重、聖西の坂倉、サンパウロの鈴木などの抱負を聞き、試合日程、全出場チームの横顔、それに初日三試合の予想も載せていて、主催紙としての責任を余すなく書き上げている。

近代野球の第三回全伯は、球界開びやく以来の盛り上がりとなった。それは又とない良い主催者を得たことに負う処が多い。

第一回以来の主催者日伯新聞が、社内に幾多の傑出した野球人を持っていた為である。

野村忠三郎を筆頭に、竹内秀一、蛭田徳彌、進藤憲吉、高野富継などの大物に加えて、竹田仙造記者の活躍が大きかった。外部からは矢崎節夫、石原桂造、山本喜誉司などの支援、社内工場にも若い野球好きがいて、全社一丸となったことも見逃せない。

かくて主催者の大風のようなあふりに、当時の邦人界（コロニア）が、炎の竜巻きの様に燃えさかったのである。コンデ街を中心に、世はあげて野球一色に塗りつぶされた、といつても過言ではなかった。

球場 邦人集団地区に一番近いスダン球場

日時 九月二、三、四日

参加チーム

サンパウロ（聖市代表）

アリアンサ（ノロ線代表）

バストス（パ延長線代表）

プ・プルデンテ（ソロ代表）

聖西（聖西近郊地区代表）

ピーラ・ジャポネーザ（北パラナ地区代表）

球場は日系人の集団中心地コンデ・デ・サルゼーダス街に一番近い、グリセリオ街に面したスダン広場で、白い布を二巾にして球場を囲った。初日から二日目、又三日目の朝は、早くから竹田富蔵氏が、子供のいたずらで開かれたこの白布の穴を繕って歩いたという。

九月二日金曜日は快晴に恵まれた。入場式は前年の覇者サンパウロチームを先頭に、大会委員審判員連の居泣ぶ前に整列、「皇居遙拝日本軍将兵の死者に一分間の黙禱」などを行った。当時の日本は、満州に

端を発した日支戦争を、中支にまで拡大していたが、この国の日系コロニアは、朝夕その進展如何に喜憂していた。大会総裁の君塚慎氏の挨拶にも、三浦聖日伯社長、蜂谷専一大会委員長、矢崎審判長などの挨拶訓辞にもそれが言及されてい

たし、サンパウロ軍の主将山岸清選手の選手宣誓文も「母国非常時に際し、比処に第三回全伯野球大会を迎え、我等選手一同銃後赤誠の精神を以つて、飽くまで野球道の真髓の為に、正々堂々戦わんことを宣誓す」とあるのを見ても、当時の気運がうかがえる。

第一試合 九月二日午前十時十五分、

日伯三浦社長の始球式に続いて、球審横沢太一の右手が上がり、プレーボール、開始された。

球審横沢、塁審大坪、高野、山下、バ軍先攻、今井の制球乱れ、聖西悲運の涙、殊勲バ軍の佐藤投手。

聖西は聖市実業リーグで好投を続けている今井、対するバストスは新進の佐藤左腕投手、二者の投げ合いと見られていたが、四回二点五回にも三点と大量得点のバ軍、殆んどワンサイドに終わった。

安 振 失

S 0 0 0 0 0 2 0 1 3 4  
 B 0 0 0 3 3 0 1 1 A 8 A 6 6 6

三塁打白石

メンバー

聖西 打 バストス

5	白	石	1	阪	本	6
4	相	本	2	佐	藤	1
6	広田(兄)	3	板	垣	3	
2	吉	武	4	畑	中	8



8	一	色	5	中	熊	9
7	広田(弟)	6	瀬	戸	2	
3	阪倉	7	高	柳	4	
9	藤本	8	吉	住	5	
1	今井	9	小	橋	7	

第二試合 九月二日午後一時二十分開

始。球審横沢、塁審高野、山下、木村、ア

リアンサ先攻

A 001000001-2  
S 100000000-1

息詰まる接戦九回

アリアンサ不屈の闘志

2対1前覇者サンパウロ倒る

サンパウロとアリアンサの一戦は、事実上の優勝戦として、試合開始前すでに一種凄壮の気が漂っていた。昨年の対戦に敗れ、号泣剃髪して帰ったア軍は、文字通り臥薪嘗胆の一年を踏み、復仇せざるは止まずの意気。これを迎え討つサンパウロは、再制覇の夢に眼が光っていた。闘将弓場と老巧進藤の一騎打ちでもある。弓場の調子は物凄く、絶好のコントロールと猛烈なスピード、又曲球もかってない重味を見せ、粒揃いのサ軍の強打者連を牛耳る。立向うサ軍の打者は、この猛球に恐れもなく必死の攻撃を繰り返す。そこに凄絶な攻守が沸いた。

一回表 ア、一安打無為。サ、一死の後武藤三振目の球を捕逸に生る、三番竹田富1-3の五球目を左中深く三塁打して武藤生還、最初の一点を挙げる。後続なし。

二回 ア、又も一安打無為。サも一安打点なし。

三回 ア軍二死の後、佐藤一葡矢に生き、望月の右前安打で佐藤三進、馬場の遊葡は野手のグローブを弾き佐藤生還、1対1。

四回 ア無為。サ軍山岸、中林、竹田彰の三強打陣、三連続三振、弓場の投球冴える。

五回 ア軍宮崎安打、望月二本目の安打も無得点。サは三者凡退。

六回 両軍無為。

七回 アの佐藤二死安打したが得点なし。

サも二死の後、竹田彰安打も空し。

八回 ア三者凡退、進藤の投球も良い。サ 軍本郷安打、鈴木送ったが後続なし。

九回 1対1のままア軍一死後大山安打に 出、宮崎の投葡で二進、藤沢の左前適時打で大山勇躍生還、決定的ともいうべき一点を挙げる。2対1。

サ軍最後の攻撃は、竹田富中飛、山岸三飛して二死、中林の遊葡は野手ハンプルして生き、走者二、三連盗に成功三塁に擦る、続く打者竹田彰、三ファールで2―3、最後の一球を突如バント懸命に一塁へ走る。球は投前、弓場つかんで猛送球、一塁審判の右手は高く上った。サ軍の追撃も無為に終る。攻防の秘術を尽した、球史を飾る熱闘の記録となった。終了二時五十分。

三塁打竹田富。

サンパウロ

打 点 安 盗 四 振 犠 失

第三試合 バストス対ビラ・ジャポネーザ、九月二日午後三時十五分開始。五時十五分終了、球審竹田、塁審葛岡、木村、鎌田、バ先攻、古豪新進、実力の差。パラナ勢敗る。

	9	8	7	6	5	4	3	2	1		9	8	7	6	5	4	3	2	1
	2大	5原	9竹	1弓	4馬	3望	8佐	7藤	6宮	アリアンサ	9鈴	2本	1進	3竹田	5中	6山	8竹田	1武	7谷
	山		内	場	場	月	藤	沢	崎		木	郷	藤	(彰)	林	岸	(富)	藤	垣
36	4	3	4	3	4	3	5	5	5	打	32	2	3	3	4	4	4	4	4
2	1	0	0	0	0	0	1	0	0	点	1	0	0	0	0	0	0	1	0
9	1	0	0	1	0	2	2	2	1	安	5	1	1	1	1	0	0	1	0
2	0	0	0	0	0	0	1	1	0	盜	2	0	0	0	0	2	0	0	0
2	0	0	0	1	0	1	0	0	0	四	0	0	0	0	0	0	0	0	0
6	1	1	1	0	0	0	0	2	1	振	13	1	1	0	2	1	3	1	3
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	犧	1	1	0	0	0	0	0	0	0
1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	失	5	1	1	0	2	0	1	0	0

	V	B
三塁打、中熊、瀬戸、高柳。	0	3
メンバー	0	3
ヴィラ	1	0
ジャポネーゼ	1	0
8 上野	0	0
5 兼重	0	1
6 鍋島(兄)	0	2
2 伊藤	0	2
7 西(兄)	0	2
3 鍋島(弟)	0	1
9 税田	0	1
4 西(弟)	0	1
1 矢部(兄)	0	1
7 矢部(弟)	0	1
7 原野	0	1
バストス	0	1
阪本	4	1
中熊	1	1
板垣	3	1
畑中	8	1
佐藤	9	1
瀬戸	5	1
高柳	6	1
千田	7	1

小橋 2

第四試合 サンパウロ対プ・プルデンテ、九月三日午前九時十五分開始。プ軍先攻、球審横沢、塁審高野、桜井、鎌田。プ軍山下、サ軍山岸の登板、サ軍の健棒にプ軍は玉砕した。

P 1000000-1  
S 205112A-11A

第五試合 ビラ・ジャポネーザ対聖西、主戦投手の矢部、立ち上がり悪く、税田救援したが、聖西の猛攻に耐えず屈す。

ピ 0003302-8  
聖 431108A-17A

第六試合 アリアンサ対プ・プルデンテ、プ軍は市来先発、四回から若冠山下救援したが及ばず、弓場の猛球に零敗

P 00000000-0  
A 10132110A-9A

第三位戦 聖西対サンパウロ

A組の二位聖西と、B組の二位サンパウロの対戦、九月四日午前十時五分開始。午後〇時五十分終了、球審横沢、塁審高野、山下、桜井、聖西の先攻が始まる。

安 振 失

聖 201100010-5 1194  
サ 021100301A-7A

二点先取の聖西は、二回早くも同点、三回も同点、四回一点入れて又先行したが、六回捕手の一塁への高投で、この回

三点を献じ、サ軍に敗れた。沸いたシーソーゲーム。

### 決勝戦 アリアンサ対バストス

緒戦に強敵聖西を8対2、また北パ代表ビラ・ジャポネーザをも11対3と、一方的に破ったバストスは、これもかつてない血闘に大サンパウロを打ち負かし、余勢をかってプルデンテにも圧勝したアリアンサと、最高の栄誉を賭けて対決した。大会の棹尾を飾る華と咲いたのである。片や熱球の権化弓場、片や新進気鋭の左腕佐藤、まこと決勝にふさわしい対決である。熱狂したファンがスタン球場を埋めつくした。球審横沢、塁審大坪、木村、葛岡、試合開始午後二時五分、終了三時五十分。ア軍先攻。

ア 000003000-3  
バ 000001000-1

### 試合経過

一回から四回まで両軍無為、弓場はしばしば投葡を一塁に走る。五回裏バの攻撃は、トップ板垣遊葡失暴投で二進、中熊死球、瀬戸のバントは内野安打で無死満塁となったが、高柳、小橋、吉住三者三振で無為。六回ア軍の攻撃、望月右翼に安打、馬場左翼に安打、捕逸で二、三塁。弓場三振で一死、竹内の遊葡矢で望月生還、馬場三進、竹内二盗、原の遊葡で馬場還り二点、竹内挟殺で二死、続く大山右翼に大三塁打で原も還り三点先取。この裏バ軍は一死後佐藤中越の三塁打、続く阪本の遊葡矢で佐藤還り一点返す。七回は両軍無為

八回裏、畑中右翼に安打したが後続なし、九回裏も、トップ板垣三塁上を抜き二塁打に出たが、中熊、瀬戸三振、高柳



3	8	佐藤	5	0	1	2	0	0	0	0	0	0
4	3	望 尽	5	1	1	0	0	1	0	0	1	0
5	4	馬 場	4	1	1	0	0	1	0	0	0	0
6	1	弓 場	3	0	0	0	1	1	0	0	0	0
7	9	竹 内	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0
8	5	原	4	1	0	0	2	0	0	0	0	0
9	2	大 山	4	0	1	0	1	0	0	0	0	3
			3	8	3	4	3	2	9	0	3	

◎農村野球の向上目指し

ノロエステ野球聯盟生る

ノロ、ソロ聯盟は解消（日、九月十七日）

去る八月二十四日より三日間アリアンサ球場に於いて挙行された本社主催全伯大会の予選終了後、主将会議を開き、従来行われていた汎ノロ、ソロ野聯を解消して新たにノロエステ野球聯盟を結成することに一致した。規約は、名稀、総裁理事予選の期日、経費など詳細に亘って協議決定された。

◎最後の審判

南里さん送別野球

OB対記者クラブ六日正午スダン球場

（日、十一月四日）

青年指導に献身的努力を惜まらずために青年から兄の如く親まれたブラ拓南里氏の帰朝は各方面から惜まれ、野球界ではその行を旺んにする為、「南里送別野球」を行う事になりOB及び記者クのメンバーを、



メンバー

O B 記者ク

宮坂 監 溝部

野村 投 中林

葛岡 捕 竹田

辻川 一 深谷

多田 二 山崎

斎藤 三 稲村

矢崎 遊 林

村井 左 下飯坂

松井 中 榛葉

石原 右 内田

蜂谷 補 内山

宮腰 藤井

加藤 木村

横溝 石井

試合はスダン、南里氏審判。

◎蜂谷、遠征で大勝 練習不足で自滅した

サントス軍 サントス球場開き

(十一月、九日)

雨のために延び延びとなっていた新興サントス野球クラブ  
専属球場開きに行く六日聖市より蜂谷チームを迎え華々しく  
開催した。結局試合は十八対九で敗れたが、よい雰囲気  
の交歓試合となった。尚近日中にド

ラゴンチームを招き、金田書記生の送別試合を行ふと。

◎今度は野球団が、南里氏の送別試合

巨人対イ軍第五回戦（日、十一月十日）

珍試合爆笑戦を以て南里氏送別野球は終わったと思ったところ、聖市実業リーグ並に聖市野球クラブでは「我々も」と南里氏送別試合を今日正午からスタン球場で行ふことに決定。

右二球団は今まで巨人が三敗一分して居るので藤原盃第五回ともなるわけ、メンバーは、審判（球）南里、高野、木村、葛岡。

メンバー

インデアン 巨

進	藤	投	今	井
江刺家	捕	本	郷	
曲	尾	一	竹田（彰）	
吉	田	二	武	藤
谷	垣	三	中	林
広	田	遊	江	口
鈴	木	左	吉	田
根	来	中	竹田（富）	
大	坪	右	田	村

◎チエテ実業野球リーグ戦

今年のノロ線予選にアリアンサに敗れたチエテは、来期の復讐を誓い、その故に実業リーグを結成、不断の練磨を期することになった。参加は事務所、運搬部、産組ノーボ・オリ

エンテのOBと青年五チーム。総裁は古関徳彌氏。

第一試合十月三十日、事務所18対7運搬部、第二試合、産組12対6OB、第三試合十一月一日、事務所9対4青年、第四試合十一月二日、産組11対8青年、第五試合、OB29対16運搬部、第六試合十一月六日、産組対運搬部は事実上の優勝戦とて、ファンは大勢押かけ大接戦で産組が辛勝。

運	0	0	0	1	0	2	4	0	0	—	7
産	1	0	3	2	0	0	1	0	1	—	8
事	1	0	2	0	1	1	1	0	—	6	
0	2	2	0	2	0	0	0	1	—	7	

これもOBが決勝の一点で勝。

残る十三試合は果してどうなるか。今やチエテ球界は興奮に沸いている。

### ◎聖市の檜舞台目指し

戦備を急ぐオウリニョス軍

中ソロに野球熱昂る（日、十一月十二日）

本社主催の全伯パラナ予選にカンパラ球場にてビラ・ジャボーネーザと決勝戦に4対3で惜敗したが、この好成績に地元父兄の後援を得て待望の専属グラウンドも竣工したので毎日練習に余念がない。来年度は奥ソロを総嘗めにして聖市の檜舞台にと今から精進ぶりは涙ぐましいものがある。

### ◎インデアン奮闘及ばず 巨人初の凱歌

南里さん送別野球（日、十一月十五日）

南里氏送別、巨人対イ軍第五回戦は去る十三日午後二時よりスダン球場で行われた。試合はシーソーゲームとなり球界の恩人を送るに応しい印象的なものとなった。

イ軍先攻、

イ 1 0 0 1 2 2 0 1 0 一 7

巨 0 0 3 0 0 5 1 0 A 一 9 A

これで常勝イ軍に黒星が付き来月の第六回戦が楽しみとなった。

◎チエテ球場開き (日、十二月十三日)

チエテ移住地ドウラードス区では、豊田判十郎大石卯作両氏の協力で球場を作り、去る十月十六日球場開きをした。出場はドウラードス、ノーボ・オリエンテ、第二、第三市街地の四チーム。第三対ノ・オは2 1

対7でノ・オの勝、ドウラードス対第二は1 2対4で第二の勝、優勝戦はノ・オが第二に7対3で勝った。

メンバー

第二 ノ・オ軍

4	杉	谷	中	島	6
3		東	榛	葉	4
5	田	上	斎	藤	5
1	石	田	田	口	1
6	中	井	川	崎	7
9	末	松	菊	地	3

8 関(弟) 村 田 2  
7 関(兄) 森 下 8  
2 保 田 松 本 9

◎中ソロ、北芭の野球熱(日、十一月三十日)

中ソロの雄オウリニヨスに、北パの旗頭野村農場チームが挑戦、去る十三日才市球場で一戦を交えた。野村先攻で開始、才軍の藤井投手防戦につとめたが、野村はプルデンテからの新加入、市来、岡田、広田など打撃大いに振り、八回までは15対4で優勢、九回裏才軍反撃5点を入れたが結局15対9、野村が大勝した。野村は投手清水、捕手岡田、才軍は藤井、岩崎のバッテリー、次回は野村で。

◎球場へ乗込んだ蹴球団(日、十二月六日)

四日午後蜂谷球場でのブラ拓対ブラスコソトは、結局14対13でブラ拓の勝だったが、この試合五回の時、伯人の蹴球団が乗り込み、市から許可をとっているという。石原の親爺は車で蜂谷の領収証をとってくる、野球チームは手にバットを持って対峙、パトカー二台も来て大騒動、結局野球は隣接地で試合を続行して、紳士的に球場を蹴球団に譲ったので、両方とも円満に終了した。

◎リンス野球大会 (日、十二月六日)

十一月二十六日から三日間、リンス市立運動場で参加リンス、大和、サン・ジョアン、カンポネーザ、アリアンサ、ウニオン、ゴヤンベーの六チーム。ウニオンはサン・ジョンに

楽勝、リンス対大和は補回戦の末22対21リンスの勝、二十七日ゴヤンベ対カンポネーザはカ軍の勝、カンポネーザ対リンスは雨で七回までカ軍の勝、優勝戦カンポネーザ対ウニオンは3対1、カンポネーザ優勝。

◎蜂谷の輝く健闘 大敵カナカオを降す

接戦九台 11対10 (日、十二月七日)

全聖市軍の名捕手として活躍した本郷孝氏は今度ナカオを辞めることになったのでその送別野球を去る四日カナカオ球場でカ軍対蜂谷戦を以って行はれた。蜂谷は笹原兄のカムバックに反し、カ軍は山岸の病気などで力を滅殺され、大接戦の末蜂谷初の凱歌を上る。

H 000202304-11

K 430020001-10

前半カ軍圧倒的、後半、谷垣、池好打。

◎バストスOB対プ市ニコニコ軍の対戦

(日、十二月十日)

バストスOBの遠征を迎えたプルデンテのニコニコ倶楽部は、まず打って出、一回一点二回五点と断然優勢と見えたが、バ軍二回裏九点を入れ形勢逆転したので陣容を立直したのが奏効し、バ軍の猛攻を喰い止める一方、四回に四点、五回にも三点を加え結局13対9で凱歌を上げた。夕闇迫り五回コールドとなる。

P 15013-13

◎東綿の痛打 記者団惨敗

(日、十二月十三日)

新進東綿と記者団チームの野球戦は去る十一日午後一時よりスタン球場で行われた。一、二回は投手戦で1対1、三回到東綿の岡田痛打で記者団は大混乱、一挙4点を奪われ、投手を三度替えたが及ばず。結局はデビューにかくも大勝、前途洋々を想わせる。プレーヤーに好打者が揃っているが、田川支店長の野球を愛する精神が結実したと見てよいだろう。

◎橋の都に熱球 (日、十二月十六日)

スポーツ王国マリリアでは、去る十一日

新進バウルー対マリリア青年会は、17対13で青年会の勝。バウルー対瀬木は、17対15で瀬木の勝。明和对混成マリリアは、4対4引分け。なお同地には既成の七チーム以外にOB、第一第二メスキッタが編成されて、毎日曜十チームの血戦が行われ、今や野球狂時代を現出している。

1939

◎キシヤ驀進 ブラ拓を飲む

(日、一月十日)

ブラ拓对记者団の初試合は去る八月正午スタン球場で行われた。前半ブラ拓10対4で優勢だったが後半に記者団反撃し、六回裏には10対7に、又八回にはブ軍藤村投手を打ち

まくり一挙8点を入れ結局16対10で記者団勝つ。昨年の一回戦でブ軍勝で今度1対1、いずれ三回戦を行ふと。

### ◎少年球界 バルゼン対大正

(日、一月十日)

大正小学校野球部では、昨年度活躍した遠藤が十一日帰国するのでその送別を兼ね近郊の雄バルゼン・グラウンデを招き新春第一試合を七日午前十一時半よりスダン球場で開いた。

大 0000010-1

バ 101001A-3A

前半2対0と優位のバ軍、大正六回に一点報いたが又一点追加され、最終回無死満塁の好機も後続なく、バルゼンの初勝利となった。

### ◎パラガスー球戦

(日、一月十日)

正月三日、パラバスー自由学園球場で、パラガスー市、文化、太陽の三チームリーグ戦が行われた。パラガスー対文化は7A対6でパが辛勝。続いてパラガスー対太陽はパが16対6で快勝。文化対太陽は、一進一退のクロスゲームの後、文化が8対7で辛勝して往年の歴史を辛くも保持した。

### ◎第二回マリリア大会

突如出現のコロネル 群雄を薙で斬り

(日、一月十四日)

新興マリリアの第一回全マリリア野球大会は、去る六、七、八の三日間、マ市総合運動場で挙行された。出場はマ市



青年会、マ市OB、コロネル、瀬木、明和、キング、メスキッタの七チーム。戦績は次の通り。

キング 0対10 瀬木

マ青年 17対3 0B

明和 14対5 メスキッタ

メスキッタ 5対19 キング

マ青年 12対13 A 瀬木

明和 22対23 A コロネル

優勝戦は八日午後一時半より小野球審で開始。

瀬 0805111020-18

コ 2300150251A-19A

実力伯仲の瀬木対コロネルの優勝戦は、延長十回の裏コ軍一点をものにし、勝利を握った。

### ◎第一回パ延長線野球大会

(日、一月二十日)

去る十四、五日の両日マリリア市で第一回パ延長線野球大会が催された。出場は地元マリリア、ポンペイア、パウルー、バストス。

十四日午前九時、青年連盟がグラウンドにて小出会長の試球式後、バストス先攻で、第一試合バストス対パウルー戦はパウルーの斎藤投手乱打され15対3、バストスの快勝。

第二試合マリリア対ポンペイアは、〇時三十五分マ軍先攻で開始。四回で七対七、

マの応援必死、五回五点を入れ結局二十対七、マの大勝とな

る。第三試合ポンペイア対バウルーは、ポ軍22対6で圧勝。

第二日、バストス対マリリアは、今大会の優勝戦かと見られたが、結全は28対7でバストス快勝。続くマリリア対バウルー戦は、六回で11対9バウルー優位を、七回一挙16点を入れ25対11でマが大勝。バストス対ポンペイアは、15対4でバストスが優勝した。

◎リーグをA B制に 三月五日開戦

聖市実業リーグ (日、一月二十九日)

本年度のリーグはA B二組に分けA組優勝者には優勝旗を、B組優勝者にはカップを授与する。A組最下位とB組最上位は試合をし勝ったチームが来年度A組に組入れられる。抽籤は二月十九日、リーグ戦開始は、三月五日。

◎プルデンテ軍 補強成る

ベルナルデスに大勝 (日、二月七日)

選手の移動で危機に直面したプルデンテチームはブラ拓銀行部門馬(元チエテ二塁手)マシヤードの別府選手を入れ強化され、去る一月二十九日プ球場にてベルナルデスと一戦し、12対4で大勝した。

◎OBリーグ戦は引分け

青年対OBも引分け

パラガスー市の球目 (日、二月十一日)

中ソロ地方。パラガスー球界は去る五日文化植民地球場でパ

ラガスー文化、太陽チームでリーグ戦を行い、第一戦文化対パラガスーは11A対5でパ軍の勝利。パ対太陽は三回まで太陽4対1、パが四、五回に5点を加へ6対4となったが、六、七回太陽3点を上げ、7対6で太陽勝ち同率となった。

◎ノロ線予選を控へ動き出した地方球界

アラサツーバ支部対抗

(日、二月二十九日)

ビリグイ、チエテ、アリアンサ等全伯的強豪に取巻かれて大きな刺激を受けているアラサツーバ地方では昨年度は堂々の活躍をしたが本年は汎ア大会を行ふ事になった。その第一回支部対抗を去る二十一日から三日間学園球場で銀谷、アグア・リンパ、アラサツーバの三チームで行い、一回戦は銀谷5対アラサツーバ23でア軍大勝した。

	打	安	盗	振球失犠
ア	6	1	0	2
銀	0	0	0	4
	0	1	5	2
	2	9	2	4
	9	5	8	0
	3	3	4	1

青聯理事長の菊地ドートルの始球式後、ア軍先攻で開始、前半銀谷軍投手保崎の肩定まらぬに乘じア軍猛攻で試合を決めた。

メンバー

銀谷 ア軍

保崎 投 久保

榎本(園) 捕 三 浦  
石 橋 一 黒木(兄)  
丸 山 二 黒木(弟)  
坂 本 三 黒 羽  
曾我部 遊 松 本  
馬 田 右 大 田  
園 田 中 佐 野  
伊 藤 右 杉 本  
第二、三回戦は後報。

◎サンタ・イリアに野球団誕生

(日、二月十九日)

最近チームの編成を終ったマリリア駅サンタ・イリア支会野球部は、新興の更生第一、第二の両チームを招いて、同地小学校庭で対抗試合を行った。第一戦は更生第一軍と対し結局更生が二十五対八で大勝、第二戦は第二軍と戦い、十五対七でサ軍が勝った。

練習開始 リンス学園野球部

昨年度全伯少年野球大会に準優勝のリンスは今年九鬼文教主事、山口先生を中心に猛練習開始。

◎新興のカンバラ軍 昨年の覇者を一蹴

北パラナ球界 (日、二月三日)

来る四月二十二、三日の両日北パ運聯主催の北パ大会が開催されるが、去る五日カンバラ対平和の試合が行われ32対1でカ軍大勝。

余勢を駆って昨年全伯に出場したヴィラ・ジヤポネーザと一戦（十二日）大接戦の後8対6でヴィラを敗した。近いうちヴィラの復讐戦が行はれると。

◎結局は実力の差 アラサツーバ優勝

ア支部対抗野球リーグ

（日、二月二十五日）

去る十一日からのア市リーグは、ア軍が銀谷を23対5で敗り、二回戦銀谷対アグア・リンパは十二日行はれ予想通りアグア軍が27A対4で圧勝、決勝はアラサツーバ対アグア・リンパ（更新クラブ）となり結局18対2でア軍大勝。

	打	安	盗	振球	失	犠
ア	35	8	0	2	1	8
更	0	0	0	2	1	9
メン	0	0	0	2	2	0
更	0	0	0	2	1	8
ア	3	5	9	1	5	0
更	0	0	0	2	1	8
ア	8	0	7	1		

井上	投	黒木（弟）
山田（勝）	捕	三浦
木村（清）	一	黒木
岡田（清）	二	久保
山田	三	橋口
岡田	遊	本松
岡本	左	黒羽
矢野	中	佐野

木村 右太田

◎響けバットの快音 プ町に蘇る球熱

(日、二月二十八日)

古い歴史を持ちながら一向に見られなかったプロミソンの野球も、青年講習会の生徒たちがチームを作り、去る十九日ポンスセット運動場で町チームと一戦した。この試合は大接戦となり結局十対七で講習生の勝。

講	2	0	2	5	1	—	1	0
町	3	0	1	2	1	—	7	
メンバー								
町								
講								

田	花	山	田	加	的	本	中	大	的
辺	田	田	中	藤	野	田	島	橋	野
投	捕	一	二	三	遊	左	中	右	野
桂	斎	手	中	伊	幸	青	諫	安	野
川	藤	山	村	藤	内	木	山	永	野

これを機に鈴木、杉本、土屋、伊津野、小橋、井手、手山各選手が活躍する。

◎渡辺孝氏死去す 産組総会席上心臓麻痺

二日盛大な組合葬 (日、三月一日)

モジの重鎮、モジ産組理事長渡辺孝氏は去る二十八日臨時総会席上で急死した。享年五十五歳。一九一七年ミナス金山行移民百名を連れ渡伯、東洋移民社に勤務、棉作の元祖、又中央線カサパーバに水田経営は失敗、モジ産組を設立、親身になって若者の世話をしコンデ當時はミカド野球クの創立者の一人。

◎北パ球界にわか燃える (日、三月三日)

四月の全北パ大会を前に、今北パ球界は俄かに燃え立つて来た。さきに少壮カンバラは前年の覇者ヴィラ・ジャポネーザを抑え、第二支部では野村が栄冠の一步前まで迫り、少年球界ではセントラル植民地に権藤左腕あらわれ物凄く、全パラナは白球のとりことなった。

第二支部では過日野村がアルト・パルミタル球場にてア軍と対戦、大接戦の末2対2で延長に入り、観衆は熱狂、ア軍が審判の判定に不服で退場し、9対0で野村の勝、続く野村対セントラル第一回戦は11対1、第二回戦も8対2で野村が圧勝、輝く三戦三勝し、来る五日アルトとの第二回戦に臨むことになったが、注目の一戦となった。一方ヴィラ・ジャポネーザを奇襲して成功したカンバラは去月二十六日北巴植民地軍を迎え一戦、先攻のカ軍有利に前半を終ったが北巴軍よく攻め8対8の同点で補回戦に入り、十一回北巴一点をものにし勝抜いた。

◎第三回聖市実業野球リーグ始まる

(日、三月七日)

去る五日カナカオ球場で第三回聖市実業リーグが開幕した。参加八チームの入場、東綿田川氏の祝辞、蜂谷会長の始球式後、十一時十分、山岸主審、コチア対日伯、コ軍先攻で開始。コチア13対5日伯、投手今井好調、打者は桑原、今井、白石、一色で楽勝。日伯は砥上KOを喰い、若冠下手投げの小島好投したが、及ばず敗退する。東綿19対7時報、東綿は小栗好投、時報の相部好打せしが敗る。

◎奥ソロの雄マ軍とプ軍の対戦

(日、三月九日)

さきにバストスへ遠征惜敗したマシヤード軍は、一気に奥ソロの雄となったが、去る五日昨年の覇者プルデンテ球場にプ軍に挑戦した。マ軍の主力二宮投手いよいよ快調、捕手に新人別府、初村を遊撃に、一方市来、山下両投手を失ったプ軍は、三浦を投手に、大城を遊撃に配し防戦、善戦して敗れた。9対5。

メンバー

プルデンテ

マシヤード

3	薮	田	二	宮	1・8
4	・2岩	村	初	村	6
6	大	城	別	府	2
5	門	谷	高	木	7
7	檜	作	佐々木		7



1	三浦野村	3
8	菜切溝部	4
9	小栗河野	9
2	・4青木北	山8・1

◎森の快投野村を降す (日、三月十二日)

去る二月二十六日問題となったアルト対野村の第二回戦は、五日野村球場で全北パ注目のうちに行われた。

ア 0000003003-6  
野 0011000010-3

野村九回裏市来二塁打、清水バント、広田左中間安打で同点、十回三点をものにし遂に雪辱した。この後北巴はカンパラに勝ち、二者は共に一勝一敗となり来る十九日最後決勝戦を行うこととなる。

◎実業リーグ

(日、三月十四日)

初陣の普及会 同仁会を喰ふ

暴風で蜂谷対カナカ才戦はお流れ

実業リーグ第二日目は去る十二日同仁会対普及会戦で開始。前夜の雨でグラウンド不良、十時三十分より、園田(主)本郷、竹田仙、矢萩四審判、同仁会先攻、吉川三兄弟を失った同仁会は岩間、柴田、村上、斎藤を加え高をマウンドに、普及会は桑原を投手に、桜井、今野を補強。

D 000100011-3  
F 31011031A-9

◎昨日の二野球戦 (日、三月十九日)

海興12対9アルマゼン、同仁会9対9ブラスコット、昨土曜の午後スタウンで二試合、海興は松井、本田のバツテリー、アルマゼンは鳥賀陽、西田、海興打って勝つ、カナカオ球場での同仁会対ブラスコットは、ブ軍林投手を打ち込んで同仁会有勢だったが、ブ軍の反撃で同点引分けとなった。

◎聖市実業リーグ

(日、聖三月二十一日と三月二十二日)

蜂谷堂々の勝利、佐藤怪腕振う。

カナカオ対蜂谷戦は、リーグ中の白眉と見られ好試合を予想された。球審進藤、塁審広田、今井、矢萩、開始零時五分、蜂谷先攻。

安振失

蜂	2	0	1	0	0	2	0	0	3	—	8	1	0	6	5
カ	0	0	0	0	0	2	0	0	0	—	2	5		5	5
メ	ンバー														
カナカオ	蜂谷														

6	5	小島	谷垣	3
2	大坪	笹原(弟)	5	
3	桜井	笹原(兄)	6	
1	6山岸	竹田	2	
7	江藤	佐藤	1	
5	1吉田	大泉	7	
9	桜井(兄)	奥田	4	

4 吉 見 池 8  
8 江藤(兄) 田 村 9

◎ロンドリーナ少年・親爺軍に快勝

(日、三月二十三日)

日伯新聞社主催第三回全伯少年野球大会の北パ予選はオウリンニヨス市で行わるが、これに参加の口市少年は丹氏のコーチで猛練習中で、去る十九日親爺軍と一戦快勝した。相手の老童は投が運ちゃん丹、捕はメカニコ山尾、一塁赤尾雑貨屋、二塁村本パン屋、三塁浅田雑貨、遊撃斉藤靴店、左は山本曾デンチスタ、右は座光寺建築、中堅は大西マルセネイロ、16対14でチビの勝。

◎バストス実業野球 (日、三月三十日)

野球の普及と植民者の理解後援を得んと、去る一月八日から開催されたバストス実業リーグは、参加七チーム三ヶ月と長期戦となつて地元ファンを沸かしたが、ブラ拓が六戦全勝で優勝した。成績は次の通り。

一位ブラ拓 六勝 五位スター二勝四敗  
二位産組 五勝一敗 六位運輸一勝五敗  
三位日の出四勝二敗 七位工場 全敗  
四位製材所三勝三敗

◎コチア、時報大勝 カナカオ潰ゆ

寝首搔かれた普及会 (日、三月二十八日)

聖市実業リーグ第五次試合カナカオ対コチアは去る二十六

日午前十一時カ軍先攻で開始。

K 00000000

C 231201IA-10A

昔の面影ないカ軍がコ軍に勝てぬは予想されたが、この大敗は意外。山岸前半好投したが、バックの凡達矢に嘆いた。午後二時、時報対普及会は、時報の一方勝ち。

F 0000030-3

J 306410A-14

### ◎実業リーグ

(日、四月十八日)

山岸好投してカナカオ快勝

実業リーグ第九次試合日伯対カナカオ戦は去る十六日午前十時二十分日伯先攻で開始。カ軍吉田投手を痛打した日伯の竹田彰左翼本塁打に二点、二回にも林、菅野の連打で一点、好スタートの日伯、カ軍は二回裏砒上に代る小島を吉田三塁打江藤、吉本連打、三点、後半に吉田に代った山岸絶好のコントロール、結局9A対3、A組三位。

### ◎北パ野球カンパラ、ヴィラ先勝

(日、三月三十日)

九月の全伯に北パ代表を送る為行われる北パ大会は、四月に決っているが、この北パ大会に出場するカンパラ支部予選は、去る十九日よりカンパラ対平和、ヴィラ・ジャポネーザ対北巴の二戦で始められた。先ずカンバラと平和は15対0、ワールドでカ軍の楽勝。第二試合ヴィラ対北巴は12対3ヴ軍の圧倒勝。又二十五日は北巴対カンパラ、ヴィラ対平

和の二試合、二十六日決勝が行われた。

◎聖市実業リーグ (日、四月四日)

二日午前十時二十分より、カ球場、東綿対同仁会。

東 0 1 2 0 1 0 2 1 2 一 9

同 1 1 0 0 0 0 0 0 1 一 3

東綿の順当勝。

午後二時より、蜂谷対日伯。

蜂 3 5 1 3 5 一 1 7

日 2 0 0 0 0 一 2

蜂谷の田村好投、日伯は竹田仙病気欠場。

◎全パラナ大会 カンバラ支部予選

(日、四月四日)

新興パラナ地方球界の最高峯、全パラナ大会出場予選の幕が去る二十六日開かれた。午前の平和対北巴戦は平和の力戦空しく四回16対1で北巴大勝。午後は今年の覇者ヴィラ・ジャポネーザ対新進のカンバラ、どの程度まで喰い込むかと思われていたが、予想を裏切つて物凄い打撃を見せ、21対10遂にコールドゲーム。カンバラの支部優勝決った。

◎新進更生軍の意気 (日、四月十二日)

マリリア球界に、颯爽と登場した新勢力更生青年会チームは、去る二十六日マリリア市に遠征、マリリア青年会、コロネルの両軍と戦い、善戦した。

更生 9 対 1 2 A マ青年

更生 0対15 コロネル

コロネルは貫禄で大勝した。

◎北パ第三支部予選 (日、四月十六日)

第四回の全伯に送る北パ代表を決める北パ大会は来る二十  
二、三日アルト・パルミタル球場で行われたが、北巴最古を  
誇るトレス・バラスを含む第三支部では新興のピリアニット  
がト軍に挑戦快勝し、北巴大会への出場権を得た。

T 531004305-21

P 034206200-17

古豪と新進の大決戦となり、逆転又逆転と、死闘を繰り返  
した末、浅沼、木村など大活躍、遂に大豪を倒して代表とな  
る。

◎聖市実業リーグ

山岸快投に日伯潰滅(日、四月十九日)  
十六日開始、十時二十分終了十二時二十五分。

安振 失

K 03300201A-9A 63 2

N 210000000-3 47 12

二塁打菅野、三塁打吉田、本塁打竹田彰。

東綿対普及会戦は雨でノーゲーム。

メンバー

日 伯 カナカオ

2 竹田(仙) 山 岸6-1

8 根 来 小 島5-6

8	樋口	桜井(弟)	3
3	竹田(彰)	大坪	2
6	武藤	吉田	1・5
7	松隈	桜井(兄)	9
1	砥上	江藤(弟)	7
9	林	吉本	4
P.	H本	江藤(兄)	8
5	菅野		
9	1・5	小島	

◎聖市実業リーグ

初陣の東綿勝つ (B組で三戦三勝)

(日、四月二十二日)

東	0	2	1	0	1	0	7	0	7	1	8
普	0	0	1	0	2	0	0	0	2	1	5

善守の普軍、東綿の打に敗る。

◎聖市リーグ 時報15対8 同仁会

(日、四月二十九日)

二十三日午前十時開始、十二時二十分終了、球審竹田仙、塁審吉田、桜井、矢萩。  
メンバー

同仁会 時報

4	榛葉	相部(弟)	4
7	木村	上村	3

9	齊藤	中林	6
2	江刺家	本郷	1
6	鈴木	相部(兄)	2
1	・ 7 岩間	熊坂	5
3	仁居	山田	8
1	・ 8 高	内田	9
9	北島	佐々木	7
8	村山		
5	柴田		

◎聖市実業リーグ優勝戦(日、四月二十九日)

昨年の覇者コチアは誇る強打陣と円熟の今井投手、対する蜂谷は整備された内外野陣にコントロールと速球に完璧の左腕佐藤投手。正に黄金のカードである。ファンはこの日を待って押寄せた。午後一時四十五分開始。

球審山岸、塁審高野、大坪、矢萩、コ先攻。

安振失

コ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
蜂	0	0	1	0	0	1	0	1	A	1	3	A
												6 7 3
												2 7 9

試合経過一、二回両軍無得点、三回裏二死後池右に二塁打、谷垣の遊葡一塁低投で一点。

六回裏竹田富三塁強安打二盗、佐藤の投葡で三進。一塁手悪送球でホームイン。八回表コの白石四球、坂倉の捕邪飛を竹田富、観客の後で捕球、無得点。八回裏竹田の三葡一塁暴投に二進、笹原兄の右翼安打に生還。九回表吉武四球を選び二盗、二塁手矢で三進、一死後広田弟外角球を見送り、捕手



竹田の好送球に吉武奮死、広田弟三振に終る。蜂谷三年の雌伏で完全優勝成る。

二塁打池、美技賞竹田吉田、打撃一位A組池、B組中林。寸評 コチアは不運に泣いたというが、六回池中堅手、白石の長打を好捕、八回竹田富の捕邪飛を美技、又九回吉武三塁に奮死も竹田の好送球に刺されたので、蜂谷の好守が勝利したといえるようだ。

メンバー

コチア 蜂谷

5	白石	谷垣	4
3	坂倉	笹原(弟)	5
8	一色	竹田(富)	2
2	吉武	佐藤	1
6	広田(兄)	笠原(兄)	6
7	広田(弟)	大泉	9
4	桑原	田村	3
1	今井	奥田	7
9	石丸	池	8

◎初陣のアラサツバ名門リンスを破る

(日、四月二十八日)

振対5、本社主催第三回全伯少年を前に・アラサツバ学園対リンス学園の野球戦は、去る二十一日ア学園球場で行われた。

黒木球審り先攻。

安振 失

	0	0	1	0	3	1	—	5	4	1	5	5
A	0	0	0	2	3	1	A—	6	A	5	5	3

監督山口校長、菊地ドクター、ア軍高橋、リ軍玉城の投手戦で前半を終ったが、ア軍逃げきる。

メンバー

リンス      アラサツーパー

4	森本	片山	6
7	永野	犬丸	7
2	森部	榛葉	2
3	1久保田	高橋	1・5
5	鈴木	矢野	5・1
6	佐藤	下村	3
8	石井	福田	9
1	3玉城	藤本	8
9	山田	笠	4

### ◎少年球戦と大人の野球（日、五月九日）

バルゼア、大正、タボンの三校少年チームは、七日バルゼア校でリーグ戦を行った。大正対タボンは大正が八対一で勝。バルゼア対大正は物凄い投手戦となり、大正は十一、バは九の三振を奪って0対0で引分け。タボン対バルゼアはバの大勝に終る。

◎巨人対インディアン第七回戦は、巨人が8対2で勝ち対戦成績を両軍共三勝一分けとした。試合時間は一時間二十五分

の新記録。

◎北パ野球大会

(日、五月七日)

北パラナ青年連盟主催第二回野球大会は去る二十二日アルト・バルミタル球場で開催された。参加はアルト、カンバラ、ロンドリーナ、ピリアニットの四チーム。

第一試合 ピリアニット対ロンドリーナ戦

― 2 0 1 3 1 6 2 ― 1 5

P 0 1 2 0 0 0 0 ― 3

七回コールドゲーム。後半口軍の打棒振ふ。

第二試合 カンバラ対アルト戦

1 9 3 9

A 0 1 4 0 0 1 1 0 2 ― 9

C 0 0 0 0 0 0 0 0 0 ― 0

アルトの円熟した技術、実力差。

第三試合 ピリアニット対カンバラ

C 2 1 1 1 2 2 1 1 1 ― 1 2

P 2 0 1 1 1 2 1 2 3A ― 1 3A

必死の攻防に一進一退、ピ辛勝。

優勝戦 アルト対ロンドリーナ

A 0 1 0 0 0 0 0 0 0 ― 1

― 0 0 0 0 0 0 0 0 0 ― 0

戦評 片やピリアニット、片やカンバラを倒し、相対したロンドリーナとアルト。北巴球界を二分する勢力の激突は、一種の殺気あり。果して口軍吉村投手絶妙のコントロールはア

の強打を押え、丹中堅手、平田三塁などの好バツクも本領発揮出来ず、僅かに第二回好運の一点がウイニング・ポイントとなつて遂に優勝を獲ち取つた。アの森（宗）、ロの吉村両投手の健闘は球史に残る感激であつた。

◎全伯少年 ピリグイ地区予選

（日、五月十日）

アラサツーバ予選の第一次戦、ピリグイ地区戦は、四月二十二、三日ビ青聯球場で。

ビラツキ校対東郷校はピ校17対0で四回コールド勝。青葉対東洋は激戦の末、3対2でAが辛勝。ジャンガード対リーザは8対2でリーザの勝。青葉対リーザは14対2で青葉大勝。昨年の覇者日伯学園と連戦の青葉、健闘空しく13対4で惜敗、日伯に代表権を許した。

◎1対2 コチア辛勝 バルゼン放る

けふ聖西少年野球最終日

（日、五月十四日）

第一回聖西少年野球大会第二日目は昨十三日午前十時よりB組決勝戦たるカンポ・リンポ対ジャガレーの試合で開始されたが、実力の差でカ軍力闘も空しく16対1でジャ軍の勝、B級の優勝者となつた。

◎全伯少年 聖西予選 （日、五月十六日）

去る十四日行われた少年野球聖西地方予選は、第一戦タボン対バルゼンで、夕軍戦前の予想に反し九対六で大敵バ軍を

破り快勝。続くコチアとの決勝にも果敢な攻守を展開して一時は優位に立ったが、松村兄の三塁打など猛攻のコチアに屈した。二試合の戦績は、

T 0 1 0 1 4 1 2 - 9  
V 0 2 0 0 1 0 3 - 5  
C 0 0 0 1 1 3 4 - 9  
T 0 0 2 0 1 0 1 - 4

◎全伯少年 カンバラ地区予選

(日、五月十七日)

来るべきオウリンニヨス予選に、錦旗を再び白州にと、物凄い躍進を見せる北パのカンバラ地区予選は、去る七日カンバラ駅ヴィラ・ジャポネーザ球場でカンパラ・ヴィラ、平和の三チーム参加で行われた。

第一戦 ヴィラ対カンバラ

V 2 0 0 0 1 5 0 - 8  
C 2 0 0 0 0 1 0 - 3

前半は2対2だが、後半ヴ軍の猛撃が成功する。

第二戦 平和対カンバラ

H 3 0 1 0 1 0 0 - 5  
C 6 0 1 0 0 1 A - 8 A

初回の猛攻6点に力軍は大勢を決す。

第三戦 平和対ヴィラ

H 0 0 0 1 0 1 2 - 7  
V 2 3 3 0 3 0 A - 1 1 A

平和は連戦の疲れ、後半に反撃したが及ばず。

かくてオリンニヨス予選大会への出場権はヴィラ・ジャポネーザ軍が握った。

◎全伯少年野球八代表決定（聖、六月十八日）

来る二十三、四、五の三日間、日伯新聞社主催、文教普及会後援で開催される全伯少年野球大会は、各地の予選を終り、八代表が決定した。

- ・前年度優勝チーム 日伯学園
  - ・サンパウロ支部 大正小学校、コチア小学校
  - ・バウルー支部 ベラ・クルース小学校
  - ・リンス支部 リンス学園
  - ・アラサツーバ支部 アリアンサ小学校
  - ・プ・プルデンテ支部 プルデンテ小学校
  - ・オウリンニヨス支部 コルネリオ・プロコビオ小学校
- 各チームの評判は、日伯、中島監督、久保コーチの粘り。大正は渋谷の剛球と名捕手藤村。
- コチア、底力。ベラ・クルースは、ダークホース。リンス、玉城の剛球は超少年級。アリアンサ、弓場監督の下、アリアンサ魂。プ・プルデンテは斉藤太郎監督、渡部重コーチの指導力。
- コ・プロコビオは、横沢太一監督で実力は未知数。

◎少年野球斤候試合ふたつ（日、五月十九日）

奥ソロのプルデンテ予選を抑えて聖市大会へと虎視眈々の自由学園チームは、去る十四日オウリンニヨス小学チームを迎えて一戦。15対4で実力を誇示した。

## 大正校辛勝

昨十八日行われた大会前の斤候戦大正校対コチア戦は、コ軍の主力松村兄負傷で不在、大正の渋谷の速球を打ちあぐみ、息詰る接戦となり、5対4大正が辛勝した。

## ◎パウリスタ少年野球大会

遂に堅塁揺がず　メスキッタ軍玉砕

(時、五月二十八日)

第二回パ延長線少年野球大会は二十日午後一時よりマリリア市運動場で挙行、ベラ・クルース、第一メスキッタの二チームのみ強豪バストスの参加なし。メ軍善闘し最後のベ軍4点まで勝敗判らず観衆を熱狂させた。球審馬島、墨小野、長名川、江藤。

ベ　1010104ー7

メ　0002010ー3

## ◎20対1遠来軍不振リンス学園勝つ

(時、六月六日)

リンス支部少年野球大会決勝戦リンス学園対カフエランジア区代表タンガラ小学校戦は去る二十九日リ市ジナジオ・アメリカカーノ球場で挙行、夕軍はリ軍の玉城投手の快腕に封じられ僅か一点を得たのみに反してリ軍は毎回よく攻めて二十点、古豪の貫禄を示し圧勝した。

## ◎日伯学園は何時敗れる？

少年球界の命題解決　殊勲の青葉ナイン

(日、六月八日)

青 3043003-13  
日 1010301-6

月伯学園対青葉小学校は去る二十八日ビラツキ球場にて戦ふ。日学は昨年 of 全伯覇者、青葉は雌伏数年、涙ぐましい精進の新鋭、今年度全伯をねらう両チーム。青葉の投手勝間田の球威益々冴え完勝した。来るべきアラサツーバス大会に如何なる働きを見せるか、興味は深い。

◎全伯少年野球大会 近郊予選開く

大正 コチア共に勝つ

(日、六月十日)

全伯少年聖市近郊予選は昨日午前十時からタボン対コチア戦で始められた。タ軍の投手荒田の肩定まらぬにコ軍一回3点入れる。

タ 1010010-1  
コ 3100001-5

大正対バルゼン・グラндеは、大正は渋谷、バは石元両投手好投して大接戦、四回藤村安打、続いて渋谷快打で2点、バ軍無念の涙を呑む、5対3。タボン対スル・アメリカ7A対0タ勝。

◎1対2 コチア無念の敗北大正快勝す

(日、六月十一日)

事実上の覇者決定戦、全伯予選二日目、大正小学校対コチ



ア小学校戦は雨雲のカナカオ球場で午前九時から開始。

コ 0001101-3

大 020200A-4A

事実上の覇者決定戦、この日大正の渋谷投手得意の速球に威力なくバツクの好守に破綻なく、一方コ軍の実松投手は渋谷以上の好投だったが、二回不覚の暴投に破れた。

二回の大正は走者二、三塁石原のバント、拾った投手悪送球。

◎大正輝く制覇 コチア三戦一敗で二位

(日、六月十三日)

去る十二日聖市近郊予選は第三日バルゼン対スル・アメリカ、6A対0でバルゼンの勝、引続き大正対タボンは12対1で大正の完勝。大正は投手渋谷、捕藤村、二塁石原、三塁川村、遊撃渡辺皆活躍。コチア対バルゼンはコ軍6対1で一方的試合となった。

◎全伯少年野球 栄冠果して何処？

晴れの八代表顔ぶれ

(聖、六月十八日)

・日伯学院 前年度優勝チーム、今年も最右翼、監督中島と久保先生、今年度選手に期待。

・大正小学校 練習は充分、渋谷の剛球に捕手藤村のバツテリー、地元応援も必死。

・コチア小学校 予選で大正に敗れたが、実力は充分期待出来る。

・ベラ・クルース小学校 名門バストス不出場でのバウラー  
地方代表。バ軍不参加を惜む。  
・リンス学園 伝統のリンス、玉城と森のコンビは、攻守に  
光る。優勝候補の一つ。  
・アリアンサ小学校 野球のアリアンサは少年でもと。監督  
弓場の意気盛ん。小粒清投手の活躍は？  
・プ・プルデンテ第一小学校 今年は粒揃い、元老斉藤、渡  
部の采配が見物。  
・コ・プロコビオ小学校 北パの強豪、横沢監督のコーチ振  
り、その力は未知数。

### ◎第三回全伯少年野球大会

アリアンサ燦く制覇

(聖、六月二十三日)

日伯新聞社主催、文教普及会後援の第三回全伯少年野球大会は、二十三、四、五日の三日間、快晴に恵まれたスタジアム場に於て、各地予選を突破した珠玉八球団の参加で開催された。

二十三日

第一試合 ベラ・クルース対プルデンテ

ベ 0000000ー0

プ 411310Aー10A

球審竹田、塁審高野、園田、広田。

寸評 ベ軍の寺内投手不調の上、捕手の負傷で戦力を欠き、  
プ軍の出山投手好調で、ノーヒットノーランを記録。

◎大正貫祿を示し、アルト軍玉砕す

(聖、六月二十四日)

第二試合

ア 0000-0

大 3061-13

寸評 ア軍の権藤健投したが、大正の打撃に屈した。一方大正の渋谷好投、藤村の打、塩田の守よし。

アリアンサ 2対1 コチア

アリアンサ 24対1 プ・プルデンテ

寸評 コチアに接戦して辛勝したア軍、プ軍に圧倒勝ち、真価を見せ決勝へ進出。

安 振 失

大 0002030-5 4 8 7

リ 0003010-4 6 11 6

寸評 北パのアルトを四回コールドに葬った大正軍と、前年度覇者の日伯学園を簡単に退けたリンス軍の対戦。安打、失策などで大接戦の両軍、2対3の六由、大正3点5対3の裏、リ軍1点を返し二死の時、三塁走者チェンジと誤ってライン・アウトを宣告され痛根の終幕となる。大正の安4、リ6、大正の失7にリ6で、打撃その他に優るリンスは、不運の一語に尽きた。首位打者(七割五分)のリ軍山田中堅手は殊勲、特筆に値する。球審山岸、墨高野、谷垣、吉田。

二十四日

第三試合 コチア対アリアンサ

安 振 失

コ 0000010-1 162

ア 00002A-2A 393

球審竹田、塁審園田、本郷、矢萩。

寸評 コチアの実松好投、ア軍は荒木の先発で六回に一点を許し、清救援して止める。その裏一死後、清二塁上に安打、伊藤の安打で同点、伊藤も三塁矢で還り勝越し、七回表コ軍三者凡退に終る。大会中第一の白熱戦。

メンバー

アリアンサ コチア

3	納	富	松村(正)	6	
6	弓	場	馬	場	5
5-1	清		実	松	1
2	伊	藤	松村(一)	3	
1-5	荒	木	川	上	2
7	小	川	下	元	8
8	山	崎	秋	葉	7
9	馬	場	山	下	9
4	水	島	笠	原	4

第四試合 リンス対日伯学園

寸評 超少年級のリンスは、前年度覇者日伯を簡単に破る。リ軍投手玉城。日伯坂本、球審山岸、塁高野、大坪、谷垣。

二十五日

第五試合 アリアンサ対プルデンテ

寸評 24対1、ア軍大勝。

◎誰か知る！ 栄冠の涙

焼くアリアンサ制覇の偉業  
 若き日の感激 大会の幕閉ず

(聖、八月二十七日)

神技、清投手の好投、大正恨みを飲んで敗退、球審竹田仙、  
 塁審大坪、谷垣、吉田。

開始二時三十五分、終了四時十分。

	打	安盗四	振	犠	失
ア	0	2	1	0	2
大	0	0	0	0	0
メンバー					
大正	アリアンサ				

3	塩	田	納	富	3
8	竹	下	弓	場	6
2	藤	村	清		1
1	渋	谷	伊	藤	2
5	川	村	荒	木	5
4	石	原	小	川	7
7	進	藤	山	崎	8
8	相	馬	馬	場	9
6	渡	辺	水	島	1

寸評 ア軍清投手の偉力は完全に発揮され、大正軍必死の健闘も及ばず零敗。さるにても物凄き懸河のドロップ。胸のすくアウト・カーブ。

大正の渋谷は、激戦で辛勝した午前の対リンス戦後のダブルヘッダーが堪えたこともある。免もあれア軍の優勝は全く当

然であつた。

### 大会追想

この大会で記憶に残るのは、優勝戦中の出来事である。試合は順調に進み、予想通りア軍が着々得点を重ねていた。どうしたことか、突然アリアンサの監督弓場が、小兵の投手清をつかまえて、鉄拳の嵐である。"なんで殴るのだろう" "どんな悪いことをしたのだろう" とつきには判断もつかない。見たこともない不思議なものを見せられた数千の観衆は、一瞬息を飲んだ。

これが、あの有名な弓場の"しごき"と気付くまで数分間を要した。時と処を選ばない、情け容赦無用の、いわゆる愛の鞭だったのである。

あののち、数十年間、清勝次が、伯国球界不滅の大投手として活躍したのを憶うと、この"しごき"の意味が、いかに大きいか判るのである。

(横田)

### ◎邦人運動界の恩人 安善寺頭三君

十三日、追悼会を営む

(日、七月六日)

"馳けつこを陸上競技"に、"球投げを野球"に邦人スポーツの水準をここまで引上げた名物男安善寺頭三君が去る五月二十六日京都に於て急死したと報じられ石原、法華、藤平等刎頸の友が来る七月十三日故人の四十九日に午後八時から堂盤ホテルそ追悼会を行ふと。

### ◎リケーザ見事優勝す 青年野球大会



昨八日聖市力中尾球場にて、全伯大会聖市予選が行われた。

第一試合 ドラゴン 21対3 昭和

第二試合 サンパウロ 11対1 ドラゴン

昭和に一勝したドラゴンと対戦したサンパウロは、猛打で楽勝。代表権を獲得した。

好天に恵れ応援多数つめかけた。

同日聖西予選も行われた。成績次の通り。

サントス 17対12 聖西主戦投手の今井去って、聖西は精彩なし。

サントスは善戦して一勝した。

セントラル 20対17 サントス

サントスは聖西に一勝後の疲れで、増田投手に威力なく、力闘したが、敗れた。セントラルが聖西地区の代表となる。

◎マリリア地方野球大会

(日、八月二十日)

マリリア管内青年野球大会は去る二十九、三十両日挙行され、明和18対12檀アンデス・マリリア29対12メスキッタ、明和接待12コロネル、マリリア22対21明和、斯くてマリリア優勝。同軍はパ延長線大会にマ市代表として出場する事になった。

◎聖市近郊予選終る

代表はサンパウロ 初陣の中央軍

(日、八月二十九日)

全伯野球聖市及び近郊大会は昨日午前八時より力中尾球場



で開催、九時半ドラゴン対昭和戦は、ド21対3昭、サンパウロ11対1ドラ、聖市軍優勝。

### 聖西大会

サントス17対12聖西、セントラル20対17サントス、セントラルが聖西代表となった。

### ◎輝く栄冠チエテ軍に「打倒アリアンサ」

十年の宿願 大激戦遂に幕閉じる

(日、八月三十一日)

去る二十四日アラサツバ球場にて熱戦の火蓋を切った全伯野球ノロ線予選はアリアンサ、チエテ、ピリダイの実力匹敵、ピリダイがチエテを、チエテはアリアンサを、アリアンサ又ビリグイを破り、三すくみで開期を終り試合は更に三日間延長され、優劣を争った結果、無念ビリグイ、アリアンサ共に敗れ、代表権はチエテに、チ軍十年の宿願を遂げた。

### ◎不運の球団にも「覇者の春」

(時、九月一日)

十年の宿望を果して、歓喜二重奏のチエテ、「打倒アリアンサ」、「打倒弓場」をスローガンに、遺恨十年を過したチエテは、遂にその雪辱を果し、今年はノロエステ代表として、第四回全伯青年野球大会に、堂々の歩を進めることになった。老将菊池軍平は、現役を退き、監督として活躍する。九月一日より聖市入り。

投 田 口

中 島

右	中	左	遊	二	一	捕
齋	北	広	中	藤	赤	村
藤	出	田	島	川	川	田
		田				田

◎第四回全伯青年野球大会

(時、九月五日)

第四回全伯大会は、聖市ピニエイロス区のカ中尾球場に於いて、今日五日から三日間開催されるが、参加チームは左の六球団。

チエテ（ノロエステ）、バストス（パウリスタ）、アルト・パ  
ルミタル（北パラナ）、サンパウロ（聖市）、モジ・ダス・ク  
ルーゼス（中央線）、アルバレス・マシヤード（ソロカバナ）

試合日程

第一日

午前十時 セントラル対アルト  
十二時半 バストス対チエテ  
午後三時 サンパウロ対セントラル

第二日

午前九時 ア・マシヤード対バストス  
十二時半 アルト対サンパウロ

午後三時 チエテ対マシヤード

第三日

午前十時三位決定戦

午後二時優勝戦

◎第一日(五日) (時、九月七日)

・モジ対アルト・パルミタル

安振失

モ 0 0 0 0 0 0 0 1 - 1 5 1 7

ア 1 2 0 0 0 0 3 0 A - 6 A

球審大坪。初出場のモジは、北原ネルソンの二塁打を含む五安打したが、失策七で崩れ、アルトの三遊間、江原兄弟は攻守に固かった。

・バストス対チエテ

安 振 失

バ 3 0 0 3 0 1 1 0 0 - 8 8 1 8

チ 0 2 0 2 0 0 1 0 4 - 9 1 1 0 1 2

球審竹田。バストスは少年上りの吉川が先発、七回北谷が救援したが、九回チ軍の打撃に屈した。

・サンパウロ対モジ サ 1 9 対 1 モ

初陣のモジは、サンパウロの猛打に完敗、サ軍の竹田富、中林共に本塁打、安打計十四、五回コールドゲーム。

◎第二日(六日)

・マシヤード対バストス 球審竹田

マ軍の二宮投手、前半は好調だったが、七、九回に計十三点を奪われ、4対14で敗る。

・サンパウロ対アルト

球審大坪、墨高野、桜井、園田。

アルトの森投手、緩球よく前半は5対1、八回に乱れ結局12対1、大豪を苦しめた。

・チエテ対ア・マシャード 球審竹田

ア軍は、二宮の好投と、初村弟の好打で善戦したが、チ軍の猛打に敗れた。チ11対8マ。

◎第三日（七日） 三位決定戦

・バストス対アルト・パルミタル

球審竹田、墨審、木村、桜井、広田。

安 振 失

バ 0 0 1 3 0 2 1 0 0 ー 7 6 6 1 2

ア 0 3 0 6 0 0 0 1 1 ー 1 4 1 2 0 1 2

バストスは若年の古川を登板させたが、高柳遊撃手の負傷で守備の欠陥を招く。ア

ルトの江原三墨手は攻守に本領を見せた。

◎決勝戦

チエテの奇襲 巨人倒る

（時、九月九日）

全軍火の玉、気力のチエテが、健棒好守、技量を誇るサンパウロを破る。

恨みは探し、サ軍九回の破綻。

安振失

チ 0 0 0 0 0 3 0 0 5 ー 8 9 5 6

サ 100300021-7 915

対バストスに9対8で辛勝。マシヤード

にも苦戦したチエテと、セントラルとアルトに楽勝したサンパウロの対戦である。サ軍の勝利を疑う者としてなかつた。球場は熱狂と興奮の観衆に包まれている。北西の風、晴、サ軍は佐藤、チ軍は田口の登板、午後二時チエテ先攻、球審大坪、塁審高野、吉田、矢萩、午後二時開始、終了四時十分。

試合経過

一回 チ、三者凡退。サ、谷垣遊撃に安打、投の牽制悪投で二進、山岸一死の時三進、中林遊撃強襲安打で谷垣生還一点。

二回 チ、無為。サ、三者凡退。

三回 チ、田口、斉藤安投、無得点。サ、中林左翼に安打、無得点。

四回 チ、三者凡退。サ、一死走者二、三塁の時岩間遊越安打で砥上還り一点、本郷の遊葡一塁手矢で佐藤還る二点、谷垣の遊葡で岩間も還る三点。

五回 チ無点。サ、得点なし。

六回 チ、藤川三塁葡失、菊池三葡二封ならず、無死死一、二塁、北出右翼越しの三塁打で

二点、広田一死後、中島の中前打で北出還り三点。サ、三者凡退。

七回 チ、三者凡退。サ、山岸遊葡矢に生き、

中林の遊葡二封ならずで三進、中林も二進、竹田富の中飛犠で山岸還り一点、中林三進、二死後砥上左前安打で中林も還る二点。

八回 チ、無得点。サ、も無得点。

九回 チ、田口三塁強襲安打、村田遊撃右安打で無死一、二塁、斉藤三葡一死で走者二、三進、藤川の三葡本塁へ送球は田口ホームイン一点、村田三進、菊池中前安打で村田還り二点、北出の中越二塁打で藤川、菊池も還り四点、広田遊葡二死で北出三進、中島右前安打で北出還り五点目をあげる。8

対6でチ軍逆転。裏はサ軍最後の攻撃、中林投手後の安打二盗、竹田富二葡で中林三進、竹田彰の中犠飛で中林生還一点、差一点につめる。砥上四球二盗したが、佐藤の遊飛に終る。四時十分。チ軍の優勝決る。

チ軍はナインも広援も号泣した。

### 新聞批評

サ軍の敗因は、投手の交替を逡巡したことと、油断から選球が粗雑で、今一息で田口を崩せず。

チ軍は佐藤の速球を、軽く右翼へ打ったことと、何くその気慨で闘った。とある。

### 閉会式

### 打撃ベストテン

### 打安率

1	中 林 (サ)	13	8	0.	615
2	初村・   (マ)	8	4	0.	500
3	竹田 (富) (サ)	13	5	0.	385
4	中 島 (チ)	13	5	0.	385
5	本 郷 (サ)	8	3	0.	375
6	北 出 (チ)	14	5	0.	357

7	江原(政)(ア)	15	5	0.	333
8	二宮(マ)	9	3	0.	333
9	田口(チ)	13	4	0.	308
10	村田(チ)	13	4	0.	308

### ◎大会追想

初の会場となったカ中尾球場は、ピニエイロス川の向う側、現在大学都市の入口辺りで当時は、土手に囲まれた牧場であった。

外野には草が丈高く繁っていて、応援団など「ダニ」におそわれて難儀したという、実際の笑い話もあった。

球場はというと、内野などは整備したとはいえ、ひどいもので、現在のようではない。或時、横沢太一氏が、「せめて、自分の守るベースの困りだけでも、カルピしたら」といったが、それ程荒くれた土塊の上で、ゴロをつかむのである。内野の失策が次々に繰返えされて、試合の行方を、いとも簡単に変えるのであった。

こんな中で、山岸遊撃手は、アリアンサ時代の数年を加えて、大約十年間も、無失策であったという。今から想えば、到底信じられない名手であった、ということが出来よう。

バストス出身の上條完五遊撃手も、小兵であったが、戦前戦後を通しての名ショートであった。この人の、前でパツと変るイレグラル・バントを、瞬間につかんでこなす。まこと曲芸そのものだった。

昔は、このような球場での試合だった為にこのような名手が生れたのかも、想われるのである。

試みに、竹田富蔵の書き残した第四回全伯、全八試合の失策数を見ると、総数百二十。一試合平均十五。途方もない数字である。

◎プ・プルデンテに遠征（時、九月二十七日）

ソロ線プ・プルデンテ市野球クラブの招

待で、聖市野球チームは去る二十一日午後六時発の汽車で遠征、翌二十三日同市第一小学校球場にて二試合した。

第一試合 球審竹田、塁審横沢、渡辺、矢萩。

S 004020200-8  
P 00000001-1

サ軍の佐藤投手は、肩の痛みでベンチに残り、大老進藤登板、老獺な投球を見せた。プ軍の今井は速球を失い曲緩に変わる。

第二試合 球審横沢、塁審竹田、渡辺、矢萩。

S 000230140-10  
P 220100300-8

サ軍の佐藤投手は、プ軍の猛打に屈し、ノック・アウトされ、又も進藤登板、辛らくも逃る。一方プ軍は三浦病後ながら善投したが、四回中林、本郷、竹田金吾に三連安打され、五回には竹田富の本塁打で三点を奪われた。プ軍の門谷三塁手は好守、青木捕手は強肩を見せ好試合となり、なごやかな親善野球となった。聖市軍はその夜汽車で帰聖。

◎ドラゴン快勝対サントス戦



(時、十月四日)

去る一日(日曜)午後一時半より、カ中

尾球場にて、ドラゴン対サントス倶楽部の親善試合が行われたが、試合はサントスの先攻で始められ、ド軍の桜井投手の制球に悩む間にサ軍4点を入れたが、後、吉田が救援してから打てず、結局ド軍が5対4、逆転勝ちした。

◎支柱 今井病んで 遂に万策盡く

ソロ線の二雄闘う (時、十月十三日)

バストスチームは、去る七日プ・プレシデンテ市に遠征して、同市の青年チームと一戦を交えたが、プ軍の至宝投手今井が、肩を痛めて威力なく、七、八回に乱打して16対3の大差で勝った。

プ 000000210-3

バ 02222014A-16A

◎中央線球界”俺らもやるゾ”

(時、十月十八日)

聖市近郊は、長年コチアチームの独断場であったが、今年には是が非でもコチア打倒をする準備に、モジ管内リーグを計画、去る十五日から開始した。参加はイタケーラ、ジャカレイ、スザノ、コクエーラ、木曜会の五チーム、藤平運動店から、大カップの寄贈を受けて張切っている。

◎明朗郷建設 トレス・バラス

(時、十一月十八日)

ブラ拓では、トレス・バラス移住地を、明朗な植民地として育成する目的で、地元官公人と相談の上、トレス・バラス産組チームと、ブラ拓事務所チームの野球戦を行い、排日気運をケン飛ばさせることにした。新支配人榛葉彦平氏の創案で歓迎されている。メンバーは、

メンバー

産組

投	平田	投	池田・山内
捕	榛葉(弟)	捕	池田(勝)
一	小松	一	菊地
二	西尾	二	権藤・本庄
三	塚原	三	禅院・山内
遊	榛葉(兄)	遊	山内・池田
左	前田	左	真中
中	小林	中	林パウロ
右	武木	右	本庄・権藤

◎大和優勝す

(時、十二月三日)

ソロ線サンタ・クルース・ド・リオ・パルドでは、青年達が野球チームを組織して、同駅管内の大和植民地のチームと、去る二十六日試合した。結果は大和が18対10で勝利した。

◎サントスで日米野球戦

(時、十二月二十二日)

サントス倶楽部では、目下碇泊中の米船アルゼンチナ号の船員チームと、来る二十四日午後から一戦する。港都のファン大期待。

◎東棉対ブラ拓戦（時、十二月二十二日）

去る十七日カ中尾球場で、東棉はブラ拓と一戦したが、この日全員の調子よく、16対5で勝った。

吉田光雄 小伝

吉田は一九〇〇年八月二十三日北海道札幌に生れ、一九二七年単独移民で渡伯、直ちに近郊コチア郡の中尾熊喜耕地に入植、以来一貫して中尾肥料会社の発展に尽す。カナカオチームでは進藤、山岸、本郷、大坪の中で投手も時に勤め、一九四一年戦前最後の第六回全伯東山大会には、請われてサインパウロチームの監督となり優勝した。性直情、光ちゃんの愛称で多くの友人を持ち、陸上に水泳に活躍。特に戦後コロニアの混乱納らぬ中に訪伯した古橋水泳団一行の受入れに奮闘した。

本郷孝 小伝

本郷は北海道札幌の出身。本籍は東京都世田谷区の兄新氏宅、新氏は有名な彫刻家。一九〇八年五月の生れ、一九二八年リンスの多羅間鉄輔氏の呼寄せで渡伯したが、実際には入耕せず、小林美登利氏の義塾に入り、後、中尾熊葺の肥料社会に勤め、カ中尾チームの進藤憲吉投手の女房役捕手となった。強肩で打者の弱点をよく記憶し、口の中で「こんどは外

角だよ。お前さん打てるか？ おっとその腰じゃだめだなあ……」などとブツクサ。こうしたキャッチは彼以外いない。吉井修氏のシャ・オリエンテの外交員。戦後は中林敏彦に招かれて日伯毎日新聞社の創立に参画し、橋本静と結婚。一男三女を得たが、長男を輪禍で失い後、宗教に凝り病歿した。一九八〇年八月、行年は七十二歳。いつも気位いを持っていた。石原桂造から預ったミカド、サ供の品など戦時中秘持、鮫島旗もそれ。

### 北原ネルソン 小伝

ネルソンの愛称で有名な北原、長野の産、一九〇〇年生れ、十七歳で単独渡伯、モジアナ線コレゴ・リコに入植、後、数カ所を経て海興のアニユマス植民地に入る。所長矢崎節夫のもとで野球チームを作り、一九二四年聖市に遠征、ミカド、ラーパの二チームに大勝した。捕手で四番打者。翌年出聖してミカドに入部したが間もなくモジ地方に移った。一九二六年弓場勇のアリアンサ来聖に、手塚賢蔵と共に招ばれて参加。第三試合の竹下完一投手の捕手で活躍。ミカド優勝の重要選手となる。爾来中央線野球の重鎮として後輩の指導に尽し、戦前最後の近郊予選にその勇姿を見せたが、それを期に実戦から引退した。戦後豊和工業に入社、藤本正義専務を援けて同社チームの全伯制覇の蔭の人となる。一九七七年六月八日、七十七歳で長逝した。

1940

◎球場開き

(時、一月四日)

サンタ・クルース市の野球チームは、市の東郊カブラリア街道に一アルケールの土地を借り球場を作った。大洋、大和、サンタ・クルースO・Bの四チームで、球場開き試合を行った。

◎快！青空を截る白球（時、一月十八日）

各地に魁けて、汎パウリスタ大会

新興パウリスタ球界大会は十三日午前八時からポンペイア球場で挙行、第一戦はポンペイア対バストス、九対三バストスに一日の長。第二戦マリリア対バウルーは、マ軍の油断にバ軍速攻、初回到五點、そのまま初陣を飾る。バ軍は続いてポ軍に当り、足の悪い田口投手を助けつつ13—11で勝利を握った。

◎巨人対インディアン（時、一月十八日）

近年聖市の名物になっている、巨人（ソルテイロ）対インディアン（カザード）戦が、去る二十一日午後から力中尾球場で行われた。進境著しい小田投手は、投げ降しに速球とインドロ鋭く、十五対〇で完勝、七戦で四勝三敗となる。

メンバー

インディアン 巨人

進	藤	投	佐	藤
吉	田	〃	小	田
江刺家	捕	竹	田	
〃	〃	相	部	

山	下	一	竹	田	彰
中	野	二	小	田	兄
笹	原	三	本	郷	
山	岸	遊	砥	上	
谷	垣	左	田	村	
中	林	中	竹	田	金
鈴	木	右	岩	間	

◎暁星辛勝

(時、一月十八日)

ソロカバナ線ジョゼニアオドロ駅では、去る六、七日の両日、桜、轟、旭、向上、暁星、育英、中央の七チームで、トーナメント戦を行ったが、結局育英と暁星の二チームが勝残り、両者で決勝戦を行い、十回延長で暁星が辛勝、富士屋運動具店寄贈の優勝旗を獲得した。

◎サンパウロ軍に新鋭(時、一月二十三日)

進境著しい小田投手、15―0イ軍完敗す。新年に入つて初顔合せ、巨人対インディアン戦は二十二日午後二時から力中尾球場で行われ、結局15―0という予想外の大差で巨人大勝し、これで巨人は七戦四勝、一回勝越しとなった。この日の巨人の小田投手は、投げ下しの速球と外角から打者の膝に流れ込むインドロ凄く、イ軍打者を片端から料理、進藤老いた現在のサンパウロに新偉力となった。

◎汎パウリスタ球戦

(時、一月二十日)

去る十三日、バストス、マリリア、ポンペイア、バウルーの四チームで、汎パウリスタ野球戦を行ったが、新進パウ

ルーの奮戦空しく、古豪バストスが優勝した。戦績は、

マ 00000-0

バ 2174×-14×

マ 110210502-12

ポ 26010524×-20×

バストス 10063-10

バウルー 00000-0

バストス代表権を握る。

◎日曜の野球 (時、二月二十七日)

◇コチア10-5日伯。六回投手砒上の乱れに、折角のリード空しく日伯潰ゆ。

◇聖報1-4時報。ともに貧打拙守、語るべき何もない凡戦。

◇蜂谷5-3サン・カエターノ。一枚看板の小沢投手快投で、サ軍は最後まで昨年の実業リーグ覇者を苦しめ、一時は蜂谷危しの感さえしたが敗れた。小沢が与えた安打5、奪三振15は、特筆の価値充分なり。

◎覇権は、聖市リーグ愈よ開幕

(時、三月一日)

新顔加えて十チーム

一昨日、日本クラブで代表者会議あり、第四回聖市実業リーグのスケジュールが決った。開幕は来月十七日、決勝戦は五月二

十六日予定。チーム名は、小西、聖報、蜂谷、力中尾、日伯、

時報、東綿、海興、ブラ拓、コチア、文教。

### ◎北巴の野球戦

トレス・バラス強し

(時、二月二十七日)

さきに北巴球界の雄ロンドリーナ軍を、大差を以って撃破したトレス・バラス軍は、それ以来意気大いに挙り、今年に入つて、すでにピリアニット、セントラル両軍を一蹴、連戦連勝の勢いを示している。

### ◎小西対日伯棉花戦 (時、三月十六日)

去る十日の小西10対9日棉は打撃戦。

### ◎マルチノポリス球場開き (時、三月十六日)

凄じ、今井の球威、

奥ソロの古豪と一戦、

1915新進のマ軍善戦して潰ゆ

マルチノポリス球団は、駅前に大球場を建設し、完成したので、去る十日プ・プルデンテチームを招いて、球場開きをした。先ず小笠原青年会長の挨拶後、ニコニコと愛橋の珍野球で笑わせ、午後二時からプ対マ軍の一戦、七回から登板の今井凄じ球を見せた。

### ◎第四回聖市実業リーグ (時、三月一日)

一昨日関係者は日本クラブに集合、今年度の実業リーグのスケジュールを決定した。



三月二十四日 目伯1時報、東棉―海興、  
ブラ拓―コチア。

三月三十一日 蜂谷―文教、聖報―コチア、  
小西―時報。

四月七日 力中尾―東棉、小西―ブラ拓、  
聖報―日伯。

四月十四日 文教―海興、時報―コチア、  
蜂谷―東棉。

四月二十一日 目伯―ブラ拓、小西―コチ  
ア、東棉―文教。

五月五日 聖報―時報、蜂谷―海興、日伯  
―コチア。

五月十二日 小西―日伯、時報―ブラ拓、  
力中尾―海興。

五月二十六日 覇者決定戦。

◎待望の実業リーグ戦始まる

(時、三月十九日)

一昨日の十七日、快晴の力中尾球場に

新進古豪十チーム参加、第四回聖市実業リーグ戦が開幕し  
た。これからの半年間、ファンの熱い目が、この球場に集る  
ことだろう。日伯19―12時報、時報の中林投手は制球悪  
く、日伯の砥上は竹田仙の好リードで辛くも保つ。老将高  
野、樋口が活躍した。東棉18―3海興、海興は本田、松井、  
赤川がいたが投手なし。東棉は根本が好投した。コチア7―

4ブラ拓、コ軍は実松、相部弟、吉武、坂倉などが活躍した。

◎親善試合二つ (時、三月十九日)

聖報5―4小西。ソロカバナ球界の少年松野が下手投げでよかったが、聖報の渋谷はアウドロと速球で好投、園田の得点打が効いた。蜂谷2―1力中尾、山岸、佐藤両左腕の対決、蜂谷は竹田富の好リード、池の一打が目立つ。力中尾は山岸、吉田、山岸のリレー。

◎王座揺ぐ、バラガス―球戦

(時、三月二十四日)

パラガス―駅リベIRON・グランデ植民地では去る十七日ガラファ、太陽、文化、黒岩、リベIRON、パラガスの六チームで球戦した。戦績はガラファ13―4太陽、文化14―4黒岩、リベIRON13―0パラガス。

準決勝、文化9―2ガラファ、リベIRON不戦勝。決勝、リベIRON10―9文化。常勝の文化が敗れた。

◎聖市実業リーグ (時、四月二日)

時報4―3小西、最後まで予断を許さぬ熱戦で、観衆は大喜び。

蜂谷20―7文教(七回コールドゲーム)。

コチア10―3聖報、コチア圧勝。

◎力中尾、モジ遠征 (時、四月二日)

去る三十一日の日曜、力中尾チームはモジに遠征、全セントラルと一戦したが、最

終回に逆転勝した。十一対十。

◎実業リーグ佳境 (時、四月九日)

力中尾19―2東棉、山岸好調、根本不調。聖報18―4日伯、聖報の渋谷、この日も好投、老巧園田よく守る。日伯は砥上、松隈が打ったが、失策19で敗れた。

小西7―4ブラ拓、小西の松野好投と、上位打者の適時打で初勝利した。

◎聖市実業リーグ (時、四月十六日)

東棉2―9蜂谷、東棉の上田左腕も、笹原、竹田富の強打にあえなく散る。実力の差。

コチア7―1時報、実松少年と思えぬ好投、中林をインドロで料理。時報無気力。

文教14―1海興(七回コールドゲーム)。海興は山下投手の球が打てず、失策20で自滅した。

◎北巴球界、頓に活況 (時、四月二十日)

過般ピリアニット軍に敗北したアルト・パルミタルチームは、過ぎる三月十七日ピリアニットに遠征、復讐戦を挑んだが、ピ軍失策の続出で十五対五、楽勝した。又長駆遠征して来たトレス・バラスも、案外よいところなく、十七対〇でアルトが二勝した。アルトは北巴球界の王者、無敵である。

◎実業リーグ、熱戦二つ (時、四月二十三日)

文教5―2東棉、文教は昨年敗れた東棉に雪辱した。この

試合に、文教の攻撃中、無死満塁で、遊撃に直球、二塁に送球、二塁すかさず一塁に転送、珍らしい三重殺となった。日伯10―13ブラ拓、日伯の投手は総くずれ。ブラ拓は高津―上野とリレーで勝つ。

◎奥地にも"球春" (時、四月二十五日)

去る二十、二十一日の両日汎リンス青年聯盟では、イデアル球場に於て、久し振りの球宴を開いた。参加はリンス、イデアル、サン・ジョン、リケーザの四チーム、戦績は次の通り。リンス13―2サン・ジョン、リンス21―8リケーザ、サン・ジョン12―8イデアル、リンス20―1イデアル、リケーザ9―1サン・ジョン、リケーザ1818イデアル。  
(「小冠者」軍のリンスが優勝した。)

◎小雨を衝いて"日米野球戦"

(時、五月一日)

去る二十九日の日曜、聖市実業リーグの雄蜂谷チームは、サントス港に下棧、折柄入港中の米国船アルヘンチナ丸船員チームと、一大決戦を行った。両軍必死の攻防に、この日の佐藤投手好調で強敵の打撃を僅かに二安打に封じ、攻めては三回に獲得した五点を守って接戦の末、快勝した。5―3。

◎ピリグイの少年野球 (時、五月十日)

光輝ある紀元二千六百年の全伯少年野球大会に代表を送るピリダイでは、同地方の予選をすでに行つて来たが、これに

勝残った日伯学園と東洋は、この二校で決勝を争った。決勝は去る一日ピラツキ球場で行われたが、東洋が圧倒的強さを見せ、主戦の矢島投手を用いず、勝間田の豪速球で二十対一の大差で優勝した。矢島は準決勝戦で十九個の三振を奪ったが、勝間田も決勝で十九個をとった。

◎聖市実業リーグ 一時、五月十四日

十二日の日曜、力中尾球場にての三試合は何れも好試合で、ファンは堪能した。

日伯9―6小西、貧打の小西、三振十六で自滅。

時報17―2ブラ拓、ブ軍の投手高津、メツタ打ちを喰う。

力中尾8―5海興、海興の本田、赤川、竹中の三羽鳥、猛攻。特に本田の攻守走は抜群であった。

◎聖市実業リーグ (時、五月二十二日)

十九日のリーグ戦二試合は、予想外の大接戦でファンを喜ばせた。

力中尾10―7文教、バッテリーは、力軍山岸―大坪、文革山下―桜井。

ブラ拓7―6聖報、バッテリーは、ブ軍上野―佐藤(久)、聖報渋谷―佐藤(義)。

◎リンス大和優勝 (時、五月二十二日)

リンス青年聯盟主催で、去る十、十一日の二日間、大和北部グラウンドで、同地方の野球大会を催した。参加はリンス町、大和、汎ゴヤンベ―代表のアリアンサの三チーム。

大和 12—9 アリアンサ。  
アリアンサ 8—7 リンス。

大和 13—8 リンス。大和が優勝した。

◎ポンプैया球信 (時、五月二十六日)

パウリスタ延長線のポンプैयाでは、同線の雄バストス打倒が宿願であるが、横井、中川両氏の熱心な指導と、元北海道札幌鉄道局投手の入団で、一気にチーム力を増し、近くバウル、リンスなどと一戦し、来るべき汎パウリスタ大会には、是が非でもバストスを打倒、全伯大会の出場すべしと、意気盛んである。

◎聖市実業リーグ (時、五月二十八日)

二十六日のリーグは、海興事務所移転で棄権したため蜂谷、時報共に不戦勝。午後二時三十八分より日伯対コチアの一試合行われる。

球審 大坪、塁審 吉田、本郷、矢萩。

日伯 101220010—7

コ 32120102×—11×

バッテリー、日伯・酒屋、松隈—竹田、砥上。

コチア・実松—桑原。

日伯酒屋先発、初回到松隈に替る松隈が近来にない好投。コ等の実松不調で、その上三塁手の佐藤七個の失策で苦戦した。

◎第四回全伯少年、サンパウロ予選

(時、六月二日)

一昨日少年野球聖市予選が、力中尾球場で行われたが、今年  
はバルゼン・グランデ不参加で大正、聖フランシスコ、スー  
ル・アメリカの三校より選手を選考して、大会に望むことにな  
った。午前十二時二十分。

球審〓竹田、バッテリー、大軍藤村―塩田、ス軍加藤―  
日高

大正 1015110-9  
ス 0100010-2

球審〓桜井、バッテリー、ス軍加藤―日高、  
サ軍大串―平田

ス 0011102-5  
サフ 1000030-4

◎聖市実業リーグ閉幕 (時、六月四日)

去る三月十七日から続いて聖市のファンを沸かした実業  
リーグは、二日快晴の力中尾球場で、大観衆場を埋める中で  
閉幕した。

球審〓大坪、塁審〓高野、園田、矢萩。バッテリー、蜂谷、  
佐藤―竹田、コチア、実松、吉武―桑原。

蜂谷 000204940-19  
コチア 000012000-3

本塁打〓竹田富二本。打撃賞(本年度)〓笹原盛雄、○・四  
六七、美技賞〓コチア桑原次郎。

◎少年野球聖市予選

(時、六月四日)

聖市少年野球予選は、大正校と初陣のサン・フランシスコ  
学園の二校で、去る一日午後二時十分より、球審本郷、塁審  
竹田、近野の三氏の下に行われた。

大正 33200-8  
 サフ 00100-1

バッテリー、大正、藤村―塩田、サフ、大串―平田

初陣の聖フ校は、大正の至宝投手藤村の速球が打てず、一方的な試合となった。

◎聖市実業リーグ打撃ベストテン

(時、六月十三日)

	安	打数	率
1 笹原盛(蜂谷)	7	15	0.467
2 竹田蘭(蜂谷)	8	18	0.444
3 前山(東棉)	6	14	0.429
4 中林(時報)	6	15	0.400
5 吉武(コチア)	9	23	0.391
6 時上(日伯)	10	26	0.385
7 池(蜂谷)	6	16	0.375
8 田口(聖報)	5	14	0.357
9 桜井(文教)	5	15	0.333
10 白右(小西)	7	22	0.318

※打数13本以上

◎汎ポンペア青年野球大会

(時、六月十四日)

ポンペア青年連盟主催の野球大会は好天に暮れた八日、九日の両日ポ市球場で行われた。

アミザーデ14―2グワリタ



ポンペイア13―2ポンペイア植民地

アミザーデ8―6サンタ・イリヤ

サンタ・イリヤ20―10グワリタ

ポンペイア21―4朝日

ポンペイア植民地9―7朝日

優勝戦 ポンペイア20―1アミザーデ

◎全伯少年競技、無期延期（時、六月十一日）

待望の全伯少年競技会も、あと十日と迫っているが、陸上並びに野球の実行委員会では近頃各所で、日語教授違反のことで学校閉鎖などの事件が相次ぎ起っているのを見て、この時節柄大勢の日系人が一カ所に集合して、当局の誤解を招いてはと、大会の開催を中止することに決定した。

◎蜂谷、単身全伯に出場（時、六月十三日）

四超弩級を引拔れ、聖市軍補充に懸命 今年の聖市軍は、今迄兎角うわさのあったチーム内の悪気流を排除して、刷新明朗なものにしようと、去る十日夜七時よりトキワ旅館で選手会を開いたが、その開会直前に至り、突発的に、蜂谷が単独で全伯の出場すると谷垣副将の名で申出があり、その夜は議事にならず、翌十一日再び会合、来る十三日（土）改めて集会し、対策を練ることになった。因に、今回の蜂谷単独出場の申出について、石原倶楽部会長は、熱心にその撤回を蜂谷専一に懇望したが、入れられなかったと。

◎新聖市軍の陣容成る（時、六月十六日）

異常なる反発心を見せる新聖市軍

待たれる蜂谷との決戦譜

“蜂谷軍全伯出場”の巨砲をブツ放されて四名の超弩級選

手をアツサリ引っこ抜かれ、まさに、とびに油揚げの形だった聖市野球倶楽部では、全伯大会も目睦に迫った際とて、急遽選手の補充を行うべく、去る十三日夜常盤ホテルに集合した。全員洩れなく出席し、非常なる緊張裡に腹藏のない意見の交換を行い、元老山岸を中心に、今後策について協議したが、今年度も温厚深謀の山岸、再度の主将に推され、これに配するに副将は明朗中林、この名コンビに従う選手の補充も決定、費用捻出の議もまとめ、グラウンドの交渉も出来て何んの支障もなく会議を終った。本年は、相当思い切った新人の起用があり、残留組のもの凄いい反発もあることとて、チームの内容は十分期待出来る。聖市地方予選には、当然二者の顔合せであり、今より快い興奮が起る。

◎サンパウロ地方少年野球大会

(時、六月十六日)

去る十四日、力中尾球場で行われたサンパウロ地方少年野球の予選大会は、今年の全伯大会が中止となった為、これが今年の棹尾となることとて、観衆も多くその熱狂振りは異常であった。聖西対サンパウロ、午後二時五十分、聖西先攻で始る。

球審竹田仙、塁審矢萩、柳沢、近野。

聖西 0000331-7

サ 1000142X-8X

サンパウロは藤村の速球、聖西は松村の援球が先発で、息詰る攻防を展開、前半を終えたが、聖西が五回、六回と三点宛を入れ大勢決したかに見えたが、その裏サ軍は大量四点を入れ同点となり、観衆は極度の興奮状態、最終回の表、聖西

は又一点をものにし再び優位に立つ。さてその裏サ軍の最後の攻撃は無死満塁となる。聖西の投手慎重を極め、余りに時間が長すぎるといふ理由でボークを宣告され同点となる。次打者の三葡は、二塁手の一塁への送球が遅れ、三塁走者ホームインで一点勝越しのサ軍勝利となる。(編注、最後の送球が明瞭でない)。聖西はボークに泣いた。

両軍のバッテリー

サンパウロ、藤村、加藤―日高

聖西、松村、馬場―笹原

◎奥ソロカバナの早慶戦(時、六月二十一日)

プ・プルデンテ

ア・マシャード

対抗野球戦

去る十六日プ市球場で行われた待望の二供対戦は、ファンで球場は埋まった。プ軍先攻

球審Ⅱ横沢

プ 0 0 0 0 0 3 0 0 ー 3

マ 2 0 3 2 1 0 2 1 × ー 1 1 ×

期待にそむき今井の制球乱れる。一方マ軍の二宮無類の好投で大勝した。今井は十個の死球を与えた。ファンは落膽した。

◎聖市審判協会

(時、六月十九日)

聖市野球審判協会では、去る十四日夜日本倶楽部に集会を催し、矢崎会長を中心に種々協議を行ったが、今後は地方審判協会と充分な連絡をとり、中央と地方との関係を密接にし、斯道の発展を計ることになった。

尚聖市審判協会に対する種々問い合せその他は、総て庶務の矢萩富士男宛にされたい。

C. P. 1988, S. PAULO.

◎皇紀二千六百年、ノロ線陸競、野球大会

(時、六月二十七日)

去る十一、二、三の三日間、アラサツーバ市に於いて、皇紀二六〇〇年記念大会を催した。野球はアリアンサ、ビリグイ、リンス、アラサツーバ、チエテ、グアララペスの六チーム参加、十二日と十三日の両日行われた。

アラ 0 2 2 0 5 3 0 ー 1 2

アリ 3 0 0 0 1 0 2 ー 6

ピリグイ 0 1 4 1 5 2 1 ー 1 4

グワララペス 0 0 0 0 0 0 0 1 ー 1

チエテ 2 0 0 0 0 2 0 ー 1

リンス 1 4 0 0 0 3 A ー 8 A

二日目快晴、アラサツーバ不戦勝

ビリグイ 0 2 1 0 0 1 0 1 ー 5

リンス 3 0 0 1 0 0 0 0 ー 4

猛接戦、八回延長。

決勝戦

アラ 1 0 0 0 0 1 2 ー 4

ピ 2 0 0 0 2 1 A ー 5 A

ピ軍の猛攻にア軍花と散る。

◎第二回中ソロ野球大会(時、七且十一日)

去る七日、ソロ線サンタ・クルース球場にてパラガスー不

参加の為、サンタ・クルースとオウリンニヨスの二チームだけで試合した。

サ 110050110-9  
オ 000100000-1

サンタ・クルース軍の笠井投手コントロール良く、好調で才軍を寄せつけず、一方オウリンニヨスは藤井投手不調で矢部に代ったが、すでに遅く敗れた。

◎バストス入植十二周年（時、七月十七日）

連合青年団主催第十回支部対抗野球は、アルトが優勝した。六月十五日より四日間、十四チーム参加で熱戦を繰返した。

サウーデ34対1グロリア（2）

（五回コールド）

プログレソ17対7ボンフィン

（五回コールド）

ウニオン（2）5対4ウニオン（1）

エスペランサ（1）8対7アルモニア

アルト5対2グロリア（1）

エスペランサ（2）19対12ファルツラ

中央、カスカッタ不戦勝

サウーデ21対1プログレソ

（五回コールド）

ウニオン（2）28対2エスペランサ（1）

（五回コールド）

中央32対0カスカッタ（五回コールド）

アルト29対0エスペランサ（2）

準決勝

(五回コールド)

ウニオン (2) 5対3サウーデ

アルト15対13中央

決勝

アルト 012200010-6

ウニオン 101003000-5

決勝戦は物凄い大熱戦であったが、アルトに凱歌があがった。

◎親善少年野球 (時、七月十七日)

ブリグイのジャンガダ少年チームは、バストスに遠征して中央チームと試合したが結果は、

バ 5061571-25

ジ 0202031-8

◎親善少年野球 (時、七月十七日)

アルバレス・マシヤードの少年チームはバストスに遠征、六月二十五日バストスと一戦したが、好試合を展開して惜敗した。

マシヤード1対2バストス。

◎中ソロ、北巴球戦 (時、七月十八日)

オウリンエヨス、トレス・バラス、サンタ・クルース、バ  
ンデイランテスの四チームの球戦。

ト 200715-15

サ 010010-2

オ 0 0 1 0 0 1 0 0 0 1 - 3  
バ 0 2 0 0 0 0 0 0 0 0 0 - 2

物凄い投手戦延長十回。

優勝戦

オ 2 3 0 1 1 0 1 - 8  
ト 1 0 0 1 0 3 2 - 7

前半はオ軍、後半はト軍優勢でついにオ軍の勝。

◎サントス、力中尾に挑戦して放る

(時、七月十八日)

去る十日の日曜、サントスチームは力中尾に挑戦、力中尾球場で一戦したが、至宝投手の久米不調にて大敗した。

サントス 1 1 0 0 2 0 0 0 0 - 7  
力・中尾 2 2 0 5 0 0 0 8 A - 1 7 A

球審||中野、塁||矢萩、山田(秀)、木下

バッテリー、サ 久米―柳沢、平田

カ 山岸、吉田―大坪

◎ソロカバナ線球信 (時、七月十九日)

去月二十一、二、三日の三日間、サンタ・クルース邦人運動場にて、大和、オウロ・ブランコ、太洋、サンタ・クルースの四チームでトーナメント戦を行ったが、オウロ・ブランコが優勝した。

◎第二回中ソロ野球大会 (七月三十日)

連盟中央本部よりの勧誘で、去る二十日はオウリンエヨス

球場でパラグアスー対オウリンニヨス、二十一日はサンタ・クルース球場でサンタ・クルース対パラグアスーの二戦を行った。

パ 1 0 0 1 4 3 1 0 6 ー 1 9

オ 1 0 0 0 0 1 3 0 1 ー 6

パ軍は老巧松井、オ軍は矢部、藤井。

サ 0 7 0 1 0 0 0 1 0 ー 9

パ 0 0 0 0 0 0 0 0 1 ー 1

サ軍は笠井投手、パ軍は松井投手。

球審 〓 三原、墨 〓 佐藤、依田、岩佐

◎文教遠征して勝つ (時、八月十三日)

九鬼監督に引率されて文教チームは一昨日セント・アンドレ駅オラトリオに遠征したが、文教は七対四で勝利を納めた。

◎パウリスタ代表決まる (時、八月十四日)

去る十、十一日の二日間ポンペイア青年連盟球場で行われたパウリスタ予選大会は、古豪バストスと対抗のポンペイア共に倒れ、新進のマリアが優勝、予想外であった。

◎熱戦を展開した聖市の早慶戦

(時、八月二十日)

全伯随一のバッテリをくんで独立、全伯野球聖市予選に堂々の巨歩を進めた蜂谷軍と常勝の名にかけて負けられぬ聖



市軍とは、球場を埋めた観衆「聖市勝てよ」「蜂谷負けるな」とごうごうたる声援乱れ飛ぶ中に、一昨十八日午後二時より力中尾球場においてその決戦を展開した。

山岸の好投と新人の活躍に、聖市軍快勝、蜂谷軍攻守の拙劣に敗る。

8—3

聖市軍は予想通り山岸をプレートに、中林一塁、遊撃上條、三塁本田、捕手本郷、一塁砥上、右翼桜井、中堅竹田金、左翼岩間と新人古豪で鉄桶の陣を張れば、蜂谷も亦佐藤投手と竹田富捕手の名コンビに田村、天野、笹原兄弟の内野陣、谷垣、池、奥田の外野、溢れる英気を見せて対立、全ファン片唾を呑む中、佐藤のすべり出し悪く、一回二点更に二回五点と致命的得点を許した、この日山岸の制球凄く、蜂谷の打棒を完封、六回まで蜂谷無為、佐藤又三回より復調、得意の外角低目をつく球、然し味方の打棒振わず、内野失連出で、僅かに六回満塁の時竹田富殊勲の三塁打で三点を得て花と散った。聖市軍はこの日終始幸運に恵まれ、本田、竹田金。岩間等チャンスに千金の一打を放ち、又走塁に苦心の跡あり、蜂谷軍日頃の技能見えず惜敗した。審判大坪、塁審高野、葛岡、矢萩の四氏。

S 250001000—8  
H 000003000—3

老巧の山岸敵の打線を断ち、寄せつけず快勝、聖市軍の応援団は欣喜雀躍した。

聖市軍の補欠には、竹田彰、相部、山田（秀）、小田（敏）、渋谷。蜂谷には大泉、高橋、嶺川。

◎第五回全伯パウリスタ予選

(ブ朝、八月二十二日)

伝統と新興の一騎打、バストス遂に潰ゆ。

本年度全伯パウリスタ予選は、去る八月十日、十一日の両日ポンペイア球場で開催された。参加はポンペイア、バストス、マリリアの三チーム。初日午前十一時、昨年の覇者バストス対ポンペイアによって、第一戦の火蓋が切られたが、未曾有の激戦の後、新興マリリア軍は、球史十三年の伝統を誇るバ軍を破り、晴の代表権を獲得した。

戦績は左の通り。

パ	2	0	0	0	1	2	0	0	1	2	—	8
ポ	0	0	0	3	1	1	0	0	1	0	—	6
マ	0	0	2	1	2	1	1	2	0	—	1	2
ポ	2	1	0	3	1	0	0	1	0	—	8	
マ	0	0	0	1	0	0	0	1	3	—	5	
バ	0	0	0	3	0	0	0	0	1	—	4	

この優勝戦の経過と、「戦評」には、作田、北谷両投手を褒め、マリリアの勝は、技術よりも気魂にあつたとしている。

◎第三回汎ノロ野球大会(日、八月二十九日)

アリアンサ涙を呑んで敗北

第一日

第三回ノロエステ野球リーグ戦は数千ファンの血を沸かせ、輝く第五回全伯大会に送るノロ線代表チーム決定戦であり、ピラツキ球場熱砂を巻いて二十三日から四日間展開され

た。集うはアリアンサ、チエテ、グアララペス、ビリダイの四チーム四十一名の精鋭、入場式は午前九時、ドートル・マロニー代理、佐々木郭吉の挨拶、第一試合アリアンサ対チエテ。

審判は竹田（主）、堀内、鐘ヶ江、長橋。ア軍先攻で開始、ア軍雪辱か、チ軍連覇か。

チ軍の田口投手の速曲球にア軍一、二回無為、チ軍一回に三点とリード、弓場投手以下必勝を期して善斗したが、九対六でチ軍に凱歌、ア軍熱涙を吞む、時に一時三十分、スコアーは、

ア 001103100-6  
チ 301300110-9

グアララペス対ビリグイ戦は、午後二時竹田主審、佐藤、島ノ水、中井。ビリグイ先攻で開始、前半よく闘ったが、新進のグ軍後半に乱れ、十六対二、グ軍大敗す。

ピ 000120553-16  
グ 000011000-2

第二日は午前十一時から、アリアンサ対グアララペス。

ア 0110441-14  
グ 0011000-2

七回コールド。

チエテ対ビリグイは午後二時十分ピ軍先攻。前半チ軍猛攻で一方的、だが六回裏ピ軍少年の勝間田投手を送り、勝間田チ軍の打者を連続三振に取りチ軍の追加点を許さなかつた。スコアーは、

ピ 001452040-16

チ 337440000-21

第三日、グアララペス対チエテは、十時半、グ軍先攻。

グ 0010002-3

チ 134411A-14A

チ軍の一方的試合に終る、本大会最終試合、ア軍対ビ軍は、午後一時十五分開始。古豪ア軍弓場以下奮戦したが、新進勝間田投手のスピードアップに三振を重ね、ビ軍二点を得て、精励十一年、打倒ア軍の目的を達した。勝利の裏に感激の涙あり。

### ◎聖市球界総動員、石原、矢萩、送別野球

(時、八月三十日)

来る九月一日午後三時から、力中尾球場で石原桂造と矢萩富士雄の送別野球をサンパウロ野球倶楽部と聖市実業リーグ加盟の選抜チームで行う。石原オヤジも矢萩も「全伯大会を見ずに発つのが残念」といつていた。

### ◎聖市近郊予選大会

(時、九月三日)

全伯野球大会聖市近郊予選会は、聖西連合青年会主催の下に、三十一日と一日の二日間カシンギー球場に於いて開催された。参加は聖西、セントラル、サントス、オラトリオ、ジユケリーの五チーム。新進古豪の対戦は熱戦を期待されたが、古豪セントラル連覇の野望も、打倒七草を目指したサントス軍も共に倒れ、初陣伏兵のオラトリオが意外の善斗し、栄冠を獲得、初優勝を飾った。

かくて二日目の午後五時、下元会長の手により、優勝旗は

才軍主将中熊選手の手に授与された。戦績は次の通り、

オラトリオ 1 0 1 2 2 0 0 5 2 ー 1 3

聖 西 0 2 1 0 0 2 0 0 0 ー 5

サントス 101911 ー 4 0

ジュンジアイ 0 0 1 ー 1

オラトリオ 0 0 0 0 2 2 1 0 7 ー 1 2

セントラル 2 0 0 0 3 0 0 4 0 ー 9

### 優勝戦

オラトリオ 3 0 0 0 10 2 4 0 1 ー 2 0

サントス 2 0 2 0 3 0 1 2 1 ー 1 1

◎第五回全伯野球大会、番組決定

(時、九月五日)

覇権は何軍へ、あすから力中尾球場で。

第一日 入場式 午前九時

第一試合 (A組) 午前十時、チエテ対オラトリオ。

第二試合 (B組) 午後十二時三十分、サ・マリアナ対

コロネル。

第三試合 (A組) 午後三時、マシヤード対オラトリオ。

第二日

第四試合 午前九時、サンパウロ対コロネル。

第五試合 午前十一時半、チエテ対マシヤード。

第六試合 午後二時、サンパウロ対サ・マリアナ。

第三日

三位決定戦 午前十時、A Bの第二位。

優勝戦 A・B両リーグの一位チーム同

志で行う。

◎おゝ今こそ奏でん！

剛健結束、明朗譜

(時、九月六日)

フアンの樂趣を頂点につき上げて

愈々けふから

全伯野球大会 精進すること五年、それぞれ予選に勝抜いて堂々全伯のチエテ、コロネル、マ・マシヤード、サ・マリアナ、オラトリオ、聖市の六チーム、今こそ闘かわんかなの熱戦譜。

◎第五回全伯野球大会

(時、九月七日)

今年度の第五回全伯大会は、昨年の覇者ノロ線代表のチエテを筆頭に、聖市代表サンパウロ、北巴代表サンタ・マリアナ、ソロ線代表アルバレス・マシヤード、パ延長代表マリリアのコロネルと、聖西及び近郊代表のオラトリオの六チーム参加で、昨六日午前九時より快晴の力中尾球場にて入場式、パヂリヤ厚生局長の始球式で第一試合、チエテ対オラトリオ戦から開始された。

チ 225001008—18

オ 000100300—13

球審Ⅱ進藤、塁審Ⅱ葛岡、竹田、竹田吉田。

十時十五分チ軍先攻、オ軍の中熊の肩定まらぬ三回までチ軍は九点をものにし、試合を決めたかと思わせたが、四回田口投手不調、広田救援したが、死球などで十点を献じ、七回にも三点を取られ、一時はチ軍危しも、最後に貫録を見せ九回八点を入れ逆転に成功した。初陣のオラトリオは大豪チエテを相手に敗れて悔いなき善戦をした。

両軍のメンバーは、

メンバー

オラトリオ チエテ

中 熊 投 田 口

木 村 兄 捕 村 田

高 坂 一 北 出

米 崎 二 藤 川

小 沢 三 山 本

木 村 弟 遊 菊 池

高 田 左 広 田

一 色 中 中 島

斎 藤 右 斎 藤

### 第二試合

北巴代表のサンタ・マリアナと、バストスを倒して初出場のコロネル（マリリア）の対戦。

午後一時より、球審竹田富、塁審大坪、山下、笹原。

コ 0 2 0 0 0 0 1 2 - 5

サ 1 0 1 1 0 0 1 0 A - 7 A

両軍のメンバーは、

メンバー

サ・マ コロネル

森 部 投 作 田

只 野 兄 捕 小 林

岡 田 一 木 曾  
只 野 弟 二 涉 谷  
関 田 三 神 長 倉  
小 田 遊 水 谷  
福 田 左 黒 田  
市 来 中 星 名  
黒 須 右 山 口

サ軍投手森部のサイド釣り上り気味の球をコ軍打てず、最終回の反撃も空しくコ軍は敗れた。

◎第三次試合 (時、九月七日)

オラトリオ 0 1 0 0 5 3 - 9  
ア・マシヤード 0 0 2 4 2 3 - 1 1

午後四時三十分開始。

オラトリオ軍は午前第一試合の対チエテ戦に、激闘の疲れも見せず、マ軍の大石投手をよく攻め、後半猛攻で六回表九対八とまでしたが、その裏三点を奪われ、夕闇迫り大坪主審続行不可能とゲームセットの宣告、不屈の闘志も空しく花と散った。

◎第二日第一試合 (時、九月十日)

七日午前九時十分、球審大坪、コ軍先攻。

コ日ネル 0 0 0 0 0 0 - 0  
サンパウロ 7 5 4 0 2 1 A - 1 9 A

コ軍の作田投手、サの猛打を受ける。

第二試合、十一時三十分、マ軍先攻。



マシヤード 0 1 0 4 1 0 0 0 1 ー 7

チエテ 6 1 0 2 3 0 1 7 A ー 2 0 A

マ軍の二宮投手、チの猛攻に一回六点を献じ、内野の壊滅が痛かった。

◎第二日第三試合 (時、九月十日)

”運命の差一点”球魂血涙に塗る

巨豪に迫る新鋭の意気、息詰る接戦九台

サン タ 0 0 0 0 0 0 1 1 0 ー 2

サンパウロ 1 2 0 0 0 0 0 0 0 A ー 3 A

午後二時四十六分、サンタ先攻で開始。

サンパウロは一回裏に山岸の左中間二塁打で一点、二回の裏に上條の安打と小田弟の本塁打で二点で先行したが、その後森部のサイダースローが打てず難行した。サンタは小田弟に替った山岸を攻め、七回福田の死球、岡田の投前バントを投手ハンブル、黒須四球で満塁、只野兄の左飛蟻で一点。八回にも一死後、小田三遊間を抜き、市来のヒットで一点を加え三対二に迫る。裏聖市二死満塁は無為の後、サンタ最後の攻撃、黒須の代打只野(安)、セフティ・バント一死、只野兄遊葡で二死、森部ヒット出塁したが、投手山岸一塁に間髪を入れず投じ、一塁手桜井が刺す。大会第一の熱戦は終わった。

メンバー

サンパウロ

サ・マリアーナ

中―遊―投

山

岸

遊

小

田

右

桜

井

三

関

田

一	右	遊	中	林	中市	来
三			本	田	左福	田
二			砥	上	一岡	田
左			小	田	右黒	須
左			田	兄	右黒	須
遊			上	岩	右只	野安
中			竹	田	捕只	野兄
投			石	田	投森	部
サン			パウロ	小	田	弟
3			4		サ・	マリアーナ
7			安	5		
2			犠	0		
4			振	4		
3			四	2		
3			盗	0		
4			失	4		

◎第三日優勝戦

(時、九月十日)

大会第三日の九月八日、からりと晴れた初夏の空の下、球場を埋めるファン見守る中に午後二時、今年の覇者を決める決勝戦は、前年度の勝者チエテと、聖市軍で飼われた。

球審Ⅱ進藤、塁審Ⅱ高野、山下、谷垣、先攻チエテ。

チエテ 001410200-8

サンパウロ 37201031A-17A

千軍の猛将中島は前試合で負傷で不出場。サ軍は小田投手先発、一回裏中林の安打、好走二塁に、山岸、本田共に四球、砥上、桜井二死の時、竹田金左中間の三塁打で三点先取、次

回は小田中堅越の三塁打、本郷、中林も左前安打で一点、チ軍は投手田口を退け、広田が救援したが、内外野の達矢で一挙七点を献じ大勢を決した。サ軍は五回好投の小田を山岸に代え、老将に有終の美を贈った。試合時間二時間五十分、雌伏二年、サ軍の覇業成る。午後五時閉会式、大会総裁野村忠三郎、矢崎審判長の挨拶の後、ビーバー三唱で閉会。打撃賞はチ軍の菊池四・七二　サ軍は常盤で祝勝会、訪日中の石原に打電した。

◎聖市奉祝野球三試合（時、十一月十三日）

聖市実業野球連盟では、皇紀二千六百年を記念して超OB対チンピラ（コンドル）とジャイアンツ（ソルテイロ）対インディアン（カザード）などの三試合を行った。

超OBは田川御大が投手、メンバーには蜂谷、矢崎、瀬戸、蛭田など、心臓だけ強いのを揃えたが、三塁を踏んだのは藤平だけで、チンピラチームに二十三対〇の七回コールドゲームで惜敗した。又午後一時から聖市の名物となったジャイアンツ対インディアン戦が行われたが、進藤の意外の好投も空しく、三対〇でジ軍の勝。次いでコンドル対ジャイアンツの決勝戦は、現在聖市を二分する勢力の対決としてファンの大

き  
な関心のうちに開始されたが、コ軍の先発澁谷投手疲れて上條が救援、九回で四対四、延長に入り十二回五対四、惜しくもジャイアンツに敗れた。

◎第一回ノロ線都市対抗野球

(時、十月二十六日)

リンス軍快勝

リンス対プロミソン第一回都市対抗戦は去る二十日午後二時よりリンス青年会グラウンドで木村球審、山口、佐藤、北原の四塁審でプ軍先攻で開始、押し寄せたファンを熱狂させる接戦を演じたが、後半リ軍の健棒冴え、プ軍斎藤の好投も、バックの潰滅に敢えなく敗退した。

◎第二回ノロ線都市対抗野球

(時、十一月八日)

プロミソン軍再び敗る

去る二十日リンスに惜敗したプロミソンは、更に陣容を整え復讐の念に燃えて挑戦、リ軍も藤倉、片桐、安島、長沢と鉄壁の陣容で迎え、去る三日午後二時よりリンス運動場で多羅間の始球、宇賀山球審、木村、佐藤、山口で開始、両軍必死、応援熱狂したが、プ軍は再び敗退した。

プ 0 4 3 0 1 0 2 0 0 ー 1 0  
リ 0 4 0 0 3 1 4 1 A ー 1 3 A

◎各線都市対抗野球 (時、十一月十一日)

去る八日リンス市球場に於いて、マリリア、リンス、プロミソンの三都市対抗戦二試合を行った。成績は次の通り。

プ 0 0 3 0 0 0 0 2 ー 5  
マ 1 0 5 2 2 0 2 0 A ー 1 2 A  
マ 3 1 1 0 3 2 0 1 1 ー 1 5

リ 001120010-5

第一戦にプ軍を敗ったマリリアは、その勢いで古豪リンスをも倒し大人気。七時閉会。

◎東山に野球チーム (ブ朝、十二月十五日)

球興の波に乗ってこんどカーザ東山に野球チームが生まれた。頭数ではチツトも不足しない大世帯の事とて、去月三十日二組に別れて出初式を行ったが更に同野球部では、サント・アマロに東山商事部の土地でアクビしているのが有るので、これを活用して立派な専属野球場を作る事になり、その設計案を従業員間に募集中とある。

一等当選者には金五百ミルの賞金が賭けられてあるというので、この不景気の年末にこの大金は逃せぬとばかり、社員さん達は目の色を変えて規則書を引張り出したり、ベテラノの処へお智恵拝借に出かけたり大騒ぎである。なお同部では他流試合をやらねば実力が分らぬと、先ず白羽の矢を領事館へ立て昨日バス一台を借切りでカシンギー球場に乗りつけ一戦を交えた。結果は領事館三十対東山十一、東山は山本、後藤の二巨頭出馬、領事館も成瀬領事が出たが、領事館に一日の長あり。

◎雨中の国際野球戦、米軍の復仇空し

(時、十一月十七日)

十八対二、日軍堂々勝つ。

サントス入港中の米船アルゼンチナ号チームは、本年初頭蜂谷チームに、又ウルグアイ号も過日自軍に敗れ、復仇戦を

申込み、去る十五日力球場で自軍と一戦した。竹田仙（球）、高野、大坪、吉田。米軍先攻で開始、小雨の中期待の熱戦見られず、結果は十八対二、日軍のメンバーは、投・佐藤、小田、捕・本郷、一・竹田金、二・砥上、三・木下、左・岩間、中・竹田富、右・本田。

ア 00200000-2

サ 70010109A-18

聖市軍

投 佐藤、小田

捕 本郷

一 竹田金

二 砥上

三 木下

遊 上條

左 岩間

中 竹田富

右 本田

補 山岸

〃 松浦

〃 渋谷

〃 相部

〃 溝部

〃 佐藤

藤恵

この地方の日系植民地は最も古く、イグアツペ、桂植民地などリベイラ川の下流から逆のぼって、レジストロに住み着いたのは、一九一五、六年頃というが、当初の作物、米、カシナ、コーヒーなど、どれも余り思わしくなく、海興が植民地としてからも、大きな発展が急速にはなかった為か、その初期に野球は殆んどなく、一九二三年、笹原憲次が海興の職員として赴任して、植民地内の各支部に球団を作り、リーグ戦を始めさせ、一時期には七、八チーム寄って大会をやり賑やかにになった。

一九二四年に、菊池円平医師が入植して、投手をやり始め、笹原捕手との強力コンビが組まれて急速に本格化し、聖市のミカドチームに挑戦、三連勝の輝しい戦績を納め、有名な鮫島直哉旗の第一回優勝者となり、翌二十五年も上聖してミカドと対戦した。然し初回の優勝の折はまだ優勝旗が出来上っておらず、多羅間鉄輔領事寄贈の大カップだけを担いで凱旋、翌年の第二回戦の始まる前に、初の優勝旗受賞者としてこの旗を受け、一同晴々しい顔で記念撮影に納っているアクリマソン公園での写真が残っている。その二回目はミカドに見事雪辱されたのであるが、一九二六年六月、笹原憲次の急逝で、この地の球勢もその火を消してしまったのであった。

然しこの植民地から、聖州奥地のアリアンサ、バストス、チエテ、リンス、ビリグイその他、又パラナ州などに転住した人達は、各地でその土地、土地での、技術的経済的のリー

ダーとなり、野球の発展に尽している。大先輩笹原憲次の播いた実が、根を張り葉を拡げ花咲き実ったのである。

その後、製茶産業の興隆期となるまで、永い間野球の音信も絶えていたが、戦後、茶、バナナその他の産業の活発化と共に、野球も徐々に、その熱を盛り返している。

ノロエステ野球

竹田

弓場勇がアリアンサに入植した一九二六年から、ノロエステ野球が発足したが、これはコロニアの地方野球の出発でもあった。弓場は六月に入植したが、その年の九月、聖市に於ける大会に既にその勇姿を現わしたほどの野球野郎。しかし植民地に帰れば近隣にはまだどこにも試合の相手もなく、なんとかしてこの技を普及しようと、まず目をつけたのがリンスであった。

一九二九年、一党を引率れて約一カ月リンスに合宿練習し、その年の聖市での全伯大会の制覇を目指したと同時に、同好の士を集めては野球を論じ、その物凄い情熱を傾け熱弁を振り、青年達の共感を呼んだ。その刺激で木村侗、佐藤達夫などが主導者となり、リンス青年会のチームが出来た。

一方弓場は、ニッポランジア方面にも影響力を発揮し、同地では南部五郎、西村栄一などを動かし、始動を開始させ、また日本から直結ルートで入ったチエテ移住地でも、川崎稔、川又、辻川などを中心として、独特のチエテ野球の発芽を見ることになり、迫々気運が向上して来た。そこで弓場提唱でノロエステ野球大会第一回が、一九三〇年アリアンサで開催され、参加はビリグイ、アリアンサと少なかった。当時



は他のどこもその力が無く、リンスなども同時に行われた陸上には参加したが、野球は不参加。その翌年、一九三一年一月に第二回大会をリンス市で、青年会主催の下に開催した。この大会にはアリアンサ、ビリグイ、地元リンスと日の出（ラウロミール）といった新顔も出場し、メンバーの中には後のシネニツポンの平田公泰など、ちよつと意外な名もあつて懐しい。

一九三二年には第三回大会をニツポランジア町で、ビリグイ青連主催で行われ、アリアンサ対リンス、弓場、進藤の一騎討、後世に名を残した名勝負となつた。一九三三年にはバストスが主催、その入植五周年記念と銘打つての大会。その名もノロソロ大会、というのは、バストスは当時ソロカバナ線のランシヤリアの管下にあつたので、ソロカバナ代表、ノロソロ、のろそろと異名されたりした。

この大会にはプルデンデなど新興チームにまじつて、北パからトレス・バラスも参加、チエテ、サンタ・クルースも来て史上最多、盛大な大会となつたが、大会中に大降霜があつたりして強い印象を残している。

一九三四年の本大会は休業。その経緯は次の通りだ。この年の大会をアリアンサでやるべく、七月の期日を決定、ノロ線各チームに招待状を発送したが、チエテ以外のチームは応募せず、アリアンサ、チエテの二チームのみで、いよいよ当日となり、チエテ軍がアリアンサに乗込んで、試合をやるやらんで大議論となり、主催者のアリアンサでは、ビリグイやリンスにもう一度働きかけ、期日を改めてやるべきと主張。一方この日に満を持していたチエテは、おめおめ

引下るものか、売り言葉に買い言葉、そこへ応援団も立入り、仲に立つものもないこととて、とうとう喧嘩別れに終わった。(弓場直談) 一九三三年十一月、リンス青年会主催で少年野球大会が行われたが、これがノロ線少年野球の嚆矢である。参加は育英社、リーザ、アリアンサ、バストス、リンス、中央の六チーム。五日間の熱闘であったが、リンスの優勝。竹田富男の活躍はこの時から始つたのである。

翌三十四年四月には、ソロ線サント・アナスタシオの梅弁と聖市で会戦、これにも優勝、自後各地に勃興した少年野球の先駆者として数々の戦績を残している。

一九三四年の十一月、ブラジル時報社主催の全ノロ青年大会がリンス市で行われたが、参加はアリアンサ、ピリグイ、カフェランジア、グアイサラ、リンス、プロミソンの六チームで、何故かチエテは参加していない。優勝はアリアンサ。三十五年十一月にも時報紙主催の第二回大会が開かれたが、参加はリンス、ビリグイ、カフェランジア、プロミソン、グアイサラ、ノーボ・オリエンテ、ドラードと、セントラル・アリアンサの八チームで、チエテもアリアンサの弓場、山岸なども出場していない。優勝はリンス軍であった。

一九三五年、チエテで東洋大橋の開通式、移住地事務所主催で祝賀大会、尾関徳彌所長は大張切り、チエテ軍の投手は小兵だが名投手の杉谷茂一、主将は菊池軍平、その他北出、藤川、斎藤、前田など揃っていて、宿敵アリアンサ何者ぞの勢い。バストスも鼻息あらく、リンスは不調の老雄進藤に代つて新鋭今井投手。アリアンサは山岸が登校していたが、後半バストスの若手笹原、板垣などに打込まれ苦境となる。

相撲場にいた弓場勇にアリアンサ危しの報、彼・勇、片肌ぬぎ、迫つとり刀で馳せつけ、ベンチでユニフォームに代えるももどかしく、「ウォー」と雄叫び、投手板に駆け上り、はやるバストスをねじ伏せて凱歌をあげた。続いてのチエテ戦にも弓隊の好投で勝ち二勝した。

ところが弓場はこの大会に、野球選手として登録していないと、バストス、チエテ両チームがこの二試合の無効を提訴、可なり不穏な空気となったが、関係者の処置で納め、終了したもの、バストス、チエテ両チームに不満は残ったようだ。

一九三六年一月に、ブリグイだけの大会があったり、五月にはチエテだけのリーグ戦が行われたが、ノロ線大会は開かれなかった。

この年には進藤憲吉も聖市に移り、リンスの富士屋運動具店も聖市に進出、サンパウロ野球倶楽部も結成され、バストス、チエテ、パラグアスと聖市の四チームで華々しく全伯第一回大会が開催されたが、名門アリアンサの勇姿は見られなかった。

一九三七年には、聖市には十数チームのリーグが行われ、ソロ線や北パの野球も活発化した。ノロ線大会は見られず、九月に聖市ポンテ・ペケナで行われた第二回の全伯には、ブリグイと共に、チエテもアリアンサも参加している。

然し弓場が当初からの主張、全伯は各地区予選の勝者のみ参加という論は替えず、ノロエステは予選を行うべしという強論に、それでは先ず第一にチエテ、アリアンサの和解ということになり、一九三四年来の怨恨を流すべく、ノロ線野球

発祥の地、第三アリアンサ球場に、日沖剛の投じた和解の聖球で対戦、結果は十七対七でア軍の勝。終つて主催者心尽しの茶話会、席上弓場、菊池両雄の劇的挨拶あり、固く将来の結盟を誓い、同月三十一日チエテでも第二戦を行い、これもア軍の勝ちとなり、本予選は八月の二十四、五、六日の三日間、アリアンサ球場で行われ、ア軍は晴れのノロ線代表として、偉風堂々、聖市の第六回全伯に、宿敵サンパウロを二対一に降し、バストスとの決勝にも見事勝ち抜いて宿願を果した。この年の弓場勇は、野球の鬼ともいえる、その気概と技術は、彼自身最高のもので、今日まで永く語りつがれている。

翌三十九年のアラサツバ予選大会には、食中毒のこともあり、チエテの猛攻の前に屈し、以来四十年、四十一年には、も早弓場の影もなし、その投手生活を終つたのであるが、ノロエステの野球は、弓場の野球の歴史といつても過言ではない。

ノロエステ線の球人たち

竹田・黒木

平 田 公 泰

ラウロ・ムリエル（現グアンタン）でチームを編成、一九三一年四月にリンスで行われたノロエステ大会に初参加、主役を演じた。

後年シネ日本の経営主として活躍。島根県出身。

桑原 亮一

カフエランジア日語教師として、永年子弟育成に献身するかたわら、スポーツ面で野球を通じて青年指導にも尽力。広島県出身。

平岡 秋三

広島の出。桑原先生とは以心伝心。スポーツに依る青年運動に挺身、主として陸上競技に活躍したが、野球でも大会にたびたび出場、ノロエステで勇名を馳せた。

徳本 淳一

カフエランジア、タンガラ植民地の開拓者三兄弟とも野球にも活躍。持ち前の強肩から強打で鳴った人。現在もリンス文協をリードして、近年衰退が懸念されている同地方のスポーツ再興に余生を捧げる情熱の人。

佐藤 達三

岡山県出身、根からの野球人、リンス近郊ウニオン植民地日語教師を永年勤め、リンス青年会野球産みの親。気の荒い人で、喧嘩野球の中心にあった。

近藤 守栄

長野県高岡の産、名物の雪男、高岡中学でスキー選手、全国中学スキー大会に勇名を馳せる。リンスチーム中堅手として活躍。

安島 三郎

一九三六、七年頃からリンス少年野球の指導者として挺身。楽天的な一風変った雰囲気の中で、少年の心を掴んで縦横に策戦、全伯少年野球界一方の旗頭らの存在だった。後年南米銀行で活躍、現在勇退。

小山 勇

野球に限らず、青年のあるところ、常に小山の名が現れた。ノロエステの名物男。和歌山県出身。リンス青年会長で永く活躍した。

青山 稔

愛知県出身。リンス青年会書記として、リンス植民史の生きた辞書。野球、陸上が大会参加遠征とあれば、その資金作りに駆け廻る。マリオで親しまれる。

今田 求

野球、陸上の選手たちが怪我して駆け込んだのが今田医院。青年たちの遠征寄附のトップはいつも今田先生からということになっていた。若死にされて今だに惜まれている。

木村 俐

ウニオン植民地の重鎮。文化村建設を心がけ、理想郷を夢みた男。いち早く運動場を作ったり、学校を郡立にしたり、小山勇と提携、青年運動にも参加した。野球も陸上もやったスポーツマン。ノロエステの俐やん。



1935年6月27日、チエテ対アリアンサ、守備はア軍、球場は第三アリアンサ。

### 杉本法雄

熊本県出身。本来相撲の元締。野球でもプロミソンの創成期に、青年を集めてチームを編成、一九三五年リンスのノロエステ大会に出場。二宮投手の活躍などでアリアンサ弓場に对等の合戦をいどむ美技の演出者。

土屋雄四郎、宇賀山勝、渋谷正雄なども活躍した。

中川 茂

ペンナポリスに入植したが、大阪関西大学の野球部で活躍した人。当地にチームもなく、進藤憲吉の知遇を得て、時々KANDAIのユニフォームを着てリンス軍に加わったりしたが、後ポンペイアに移り、一九四一年ポンペイアがバストスを降した時のメンバーだった。

南部 五郎

三重県出身。ニッポランジア、ピリグイ植民地創設と同時に日語教師として入植、コレゴ・セツコで教鞭をとりながら、青年を集めて手製のグローブ、バットも自分で削り、中島鴉郎らとチームを結成、ビラツキ野球の基礎を築いた。出聖して不動産売買業を始めたが、恐らくこの方面のコロニアの第一号ではなかったか。

貝田 昇

北海道室蘭の出。一九二八年ピリグイに入植、丁度日本から持参のミット、グローブなどがあったので、同好の青年が集り、自然にチームが出来たという。ピリグイの先覚者。

細井 好次郎

野球理論家。その批評は一家をなすもので、当時の戦評は、技術の向上に大きな役割を果した。特にスコアーの採り方については、当国で最初に手をつけた人。

木村 淳造



ビリグイの野球一家として有名。長男伯生を中心に、孝、静雄、また甥の晴夫はうまい捕手、女婿に中熊又男強球投手がおり、も一人の女婿中林敏彦は強打を誇り、一時同地の球界に君臨した。

佐々木 郭 吉

ビリグイ連合日会の会長として、同地の発展に尽すかたわら、青年運動にも挺身、リーザ区に野球場を作り、アリアンサ弓場や、渡辺農場チームを招いて、技術向上に資した。

鐘ヶ江 敏 郎

ビリグイ入植第一号の藤太郎の長男。早くから投手として鳴らした。戦後もビラツキの監督となり、野球を死守し奮斗した。

島之江 森

佐賀県出身。内野手で活躍。ビラツキ野球の陰の男として、難しい問題を処理し、名手育成に大きな力となった。

清 田 武 正の小歴

彼は大分県出身。渡伯前、東京正則中学に学び、ビリグイに入植、バレー口植民地で青少年の指導に当り、特にビリグイ野球の創設に尽す。一九二八年頃、弓場、渡辺農場、バストスなどの交歓試合には主戦投手であった。ビリグイを去り、スザノに移転後も乞われて青少年野球のコーチをした。現在聖市リベルダーデ街で、悠々自適の生活を楽しんでいる。

る。



1925年レジストロセロッテ少年チーム対レジストロボアビスタ少年チーム

### 伊藤 達馬

後援者としてのトップ。金を出しても物をいわない人だった。後ロンドリーナ市に移り、青年スポーツには相変らず情熱を持った親分。

### 桂川 悦造

一九三〇年ごろからピリグイ青年連盟の理事長として活躍。同地方の野球界をリードした。桂川のを受けて青木龍馬、梶家勘一郎、田上忠雄、志賀憲光、松尾広司、高田改造など九代の理事長が、野球の為に大きな犠牲を払った。

織田 巖

広島県呉市出身。一九二九年渡伯、ブレジヨ・アレグレに入植、以来ビラツキ方面に比し立ち遅れている同地の野球振興に日夜奔走、一方審判としてノロエステ線のために尽し、その努力は戦後まで続いた。

清 進

ニッポランジア野球の草分け。南部五郎らの呼びかけに、島之江憲などと共に参加し、内野手、時に投手としてもなかなかのものだった。弟に清勝次投手があるが、後年弟の名声に満足しているという。



一九二六年六月三十日、レジストロ第一回カ  
ップ争奪戦、選手一同。



一九二六年六月三十日、レジストロ球場にて  
始球式、白鳥豊助氏、アンパイアー菊池四郎、  
投手・曲尾真輝



一九二五年、レジストロ第四部野球部

矢島 茂

一九二八年カフエランジアに入ったが、三十年ビリグイ市バレーロに入植、以来野球にとりつかれ、三人兄弟揃って好選手。三男精八郎は豪球投手として全伯少年に覇を唱えた。

永田 鶴作

一九三四年ビリグイのプレジョン耕地に入り、同地チームの一員として活躍。連盟の役員として貢献した。

小方 忠

一九三三年アラサツバ、アグア・リンパに入り、青木龍馬先生の教訓を受け、更に現力行会の林寿雄会長など先輩の教えを汲んで後輩の育成に献身した。

岡田 昇

安瀬盛次、高橋麟太郎など静々たる先輩の支援があつて、アグア・リンパの野球草創期に活躍。後、パカエンブーに移り、更に戦後はアララクアラ線ジャーレスに移転して、奥地の野球発展に尽した。

金輪 顯伸

姫路の産。少年期から坂中忠吉（ロベルト）の指導で実力をそなえたが、戦後ノロエステの公認審判員として活躍。

梶本 智

広島広稜中退、一九二六年七月ビリグイのエリジオに入

植。後アラサツバに移転、後援会員で奔走。陰の功労者。

佐藤 忠四郎

福島県出身。一九三三年安瀬耕地に入ったが、少年のころからボールに親しみ、後アラサツバに自立するや、持ち前の義侠心で寝食も忘れて奔走。アラサツバ総合運動場の建設の主動力となった。その熱意は今日まで止まるを知らない実力者。

江頭 輝夫

父・儀一は佐賀県人。一九一七年着伯。グアタパラ耕地を経てアグア・リンパに入り、少年ながら青年チームに加入。その後青年連盟役員として活躍。現在もノロエステ審判員で頑張っている。

久保 要

岡山県出身。一九三七年全伯に弓場チームの一員で参加、大敗丸坊主になった一人。後アラサツバに移り、OBで後援している。

根布谷 泰

鳥取県の出。一九二六年渡伯。ノロエステを農民生活で転々。スポーツに憧れ、一九三八年には全伯陸上で八百米に新記録。その後記録員として陰の努力を続けている。

大塚 実

佐賀県人。一九二九年ペンナポリスに入り、更にアラサツバ、ペロバル耕地に移り、同地の青木龍馬先生の薫陶を受けた。戦争でスポーツ活動も停止、戦後グアララペスで、自身やれなかった野球に、大変な熱を入れ、後に活躍した豊永ジューリヨ投手を育てた。戦後來伯した東芝、電々近畿、東映などの受入れにも尽力した。

#### 加藤 孝

父・幾太郎は広島県人。一九二二年渡伯。彼はアグア・リンパで成長。少年野球をやり、運送業でスポーツ連盟理事長を勤め、ノロエステスポーツ界の総元締めで活躍中。

#### 安瀬 盛次

安瀬財閥の総帥。アラサツバ学園創設の推進力となった。ノロエステの総道場として永年生まれ、青年たちの血を沸かした学園球場を作って、今日まで大きな影響を残した。

#### 高橋 麟太郎

アグア・リンパ日語学校の先生。少年教育に傾倒。のち安瀬を補け、アラサツバ学園建設に尽力。青年運動の一環を担った。

#### 黒場 名利

一九三〇年ごろから、アグア・リンパ青年会長。青年のため尽した。

和氣 爲吉（旧姓・山下）

愛知県人。一九二六年着伯。バウルーを経てブリグイに入植、日語教師をしながら、野球で青年を鍛えた。アラサツバ、グアララペスと移り、その地にチームを作った。後年バルパライゾ地方の野球を育てて一線を退いた。

細井 鬨馬

福井県出身。一九二九年渡伯。ブリグイ、コレゴ・セツコに入植、野球チームを作る。スポーツ万能、陸上に角力に活躍、特に角力では五月山のしこ名で、全伯大会に優勝した。バルパライゾ時代の合棒に加藤武義、三ノ宮正雄などがあった。

中島 正

東京都出身。一九二一年生れ。一九二七年着伯、チエテ野球草創期からその発展に参画。チエテ対アリアンサの熱狂期には、チエテの立役者として機智に富んだ進退は、グラウンドに注目を集めた。後年サンパウロに出てからも審判として活躍。戦後の野球にも影響力があった。弟に石井保、繁がある。

菊池 軍平

栃木県人。宇都宮鉄道局野球部の選手で、名を挙げた名手だけに、チエテに入植するやたちまちノロエステに勇名を馳せ、弓場の牙城を脅かした。現在は本居をアチバイアに果実王として、全伯に経営網を張り、その生産に配給に、菊池王

国を築いた。野球人として珍しい成功者。一九〇五年生、一九二八年渡伯。

杉谷 茂一

チエテ野球草創期の投手として、チーム結成に加わり、初期の主将で活躍したが、在籍は一九三四年ごろまで。自後は移住事業団にあつて、新移住青年たちのために、余生を捧げている。

川崎 稔

文字通りチエテ野球の産みの親。チエテ移住地の開拓にも参加したピオネイロ。常に青年たちの中心となつて、その冷静沈着な性格は人を引きつけ、ことに當つて不動。打倒アリアンサに精根を尽した。事故で挫折し、ために中央球界での活躍が見られなかつたのが惜しまれる。和歌山県出身。大阪商大卒のインテリ。

川 又 幸 三

長野県出身。一九〇二年生れ。一九一七年波伯。レジストロに入り、当時元気だった菊池医師や、笹原憲次らと大いに野球熱を上げたが、チエテに移住ホテル業をやりながら、若い者を集めて親身の世話をし、応援団長としてノロエステにその名を鳴らした名物男。

前田 伊一郎

和歌山の人。一九一六年生れ、一九三〇年波伯、チエテに



入植。三人兄弟のスポーツ一家。チエテ野球に随分と犠牲を払った。

#### 北出 秀雄

チエテ野球草創期からの、数少い生き残り。チエテ全盛時代の捕手、最強打者として名をなした人。

#### 東 篤介

前田伊一郎と共に、チエテ初試合に出た人。チエテの古参、強打者、黙々とただ打つだけの好漢。三人兄弟一家で野球をやった。

#### 村田 行一

審判員として、その優れた技術に加えて、沈着公正なジャッジは、ノロエステの名審判だった。

#### 広田 栄一、田口 繁治、本田 剛爲

チエテ若手の三勇士といわれた人たち。巧妙な計算ずくのピッチングの広田。名の通り豪快なバッティングの本田。叩かれ叩かれながら、又立直ってやりとげる凶太い根性の田口。それぞれが持つ三様の特色をミックスして築いたチエテ野球。三人とも戦後も永く活躍した。今は皆社会人として活躍中。

#### 赤川 威陽

愛知県人。一九〇九年れ。一九三三年渡伯。チエテ野球発

祥に参加した古参。出聖後は大手旅行業ツニブラの社主として、その俊才を發揮した事業家。

#### 菅井進一

チエテ発電所々長で永年活躍した名物男。ノロエステ大会が催され、各遠征チームが来た時、夜十時消灯して文句が出たこともあった。古い時代の戦士というべきか。勿論電気関係だけでなく、野球が大好きで、大いにやった人。

#### 伊木茂

鳥取県の出。一九二一年生れ、一九三〇年波伯。野球部マネージャーで永年世話をした。弟・貢は投手として名をなした。

#### 高津セルジオ

利三郎の長男。一九二四年アラサツーパに生れ、少年期の野球の中で成長。聖市に遊学、薬剤師となって帰り、ペ・バレット日本語学校、文化協会副会長など公職にあり、後輩の指導に活躍中。

#### 下大迫、柴倉

チエテの野球に限らず、陸上、角力など、スポーツ全部の応援団。どんな遠路もいとわず、青年達の鼓舞に出向いた。

#### 本田八良

一九一三年、十九才、大望を抱いて单身渡伯。同年サン・

マノエルを振り出しに、約十五年間放浪の末、一九三〇年チエテ移住地に入り、煉瓦工場を経営、一方青年運動にも挺身、特に野球に力を入れ、ゴイー（剛為）少年の活躍に目を細めていたが、若死した。福島県人。

### 中島鶏郎略歴

鶏郎の父銚次は長野県下伊都座光寺の産、日露戦争に出征し、勲七等瑞七級に叙さる。着伯は一九一九年五月讃岐丸で家族四人、グアタパラに入植、サン・ジョン耕地に二年、次にビラツキに土地を購入して移転した。

イジドロ革命のため都落ちして来た西村栄一が、南部五郎、管哲、石光、蓮沼、長岡、久次、佐藤、西山等を集め、キャッチボールをして楽しんでいた中の一人、一九三〇年アリアンサの渡辺力行会チームが旅行の途中対戦し、五対四で惜敗した。

同年、新婚の弓場勇の率いる弓場チームとリーザのカンポで対戦したが、十七対一で大敗す。同年汎ビリグイ青年連盟を結成、渉代理事長に桂川悦造、副に岡本太郎、野球部長に中島が選ばれ、この時代から特に野球は盛んになり、十八支部出来た時代もあった。

彼は大会毎に監督コーチ、また世話役として活躍、温厚な人柄を慕われた。

次の移転はアラサツバ市、野球場管理人兼コーチとして赴任する。

以後球界から引退するまで約五十年間、青少年に野球を通

じてスポーツ精神指導、ブラジル球界のために生きた人物といっても、過言ではない。

他からは知る事の出来ない家族の犠牲、特に夫人の内助が大きかった。

一九八〇年の南米大会、オールブラジルの監督中島登は、彼が手塩にかけて育て上げた自慢の一人息子で、球界の至宝的存在、親父の誇りであった。

一九七六年十一月十三日、喘息病が原因で六十九才、アラサーバ市にて昇天した。

### 黒木常彦の小歴

父・米樹は広島市宇品町の出、県政界を試みたが落選、意を海外に向け、一九二八年一月自由移住者としてセントスに上陸した。時に常彦は十六才、宇品小学から広島一中に入学、引続き野球選手だった。ビリグイに入植するや、エリジオ植民地チームの主将となり、郡大会に出場、第三回大会で優勝した。

一九三四年のノロエステ、リンス大会にもビリグイの主将で参加した。その後アラサーバ市に移転するや、菊池円平ドクターと共に、同市野球発祥に尽力した。

彼は次男で、弟の喜三雄、朝光、豊治、勝行、哲雄など六人兄弟チームを作り、実業リーグに活躍したり、野球の情熱は戦後も続いている。ノロエステ野球の牽引車として永年球界に尽力を惜しまなかった。

◎ビリグイ地方

ニッポランジア町を中心として、南部五郎、中島鶏郎、西村栄一らがチームを結成して青年たちが野球をやっていたが、一九二九年にはリーザの球場にアリアンサの弓場チームや渡部農場チーム、バストスチームなどを招いて対抗試合をした。

一方、同町の奥では、リーザを始めバレーロ、コレゴ・セリコなども、各植民地で清田武、細井関馬、島之江恵、杉谷好次郎（後の細井好次郎）、貝田昇、清進、高野喜久雄、山本為吾などがチームを作って、対抗試合を行い、野球熱がよいよ向上したので、これを期に桂川悦造が主導して汎ビリグイ青年連盟を結成、第一回ビリグイ大会を開催したのであるが、その数も十六、七を数える盛況だった。これにはアリアンサの弓場勇、進藤憲吉など先輩の指導が大きく、弓場などは日本から取寄せた野球道具を譲渡したりして、その育成に力を貸し、たえず声援を惜しまなかった。この隆盛の影には、他の地とも同じように野球気遣いが集り、裏方の力を發揮、これが起爆剤の役目を果し、球熱を加速するといった働きをしたのである。当時のほとんどの人々は、すでに鬼籍に入られたが、柳瀬喜六、蓮見、伊藤達馬、木村淳造、佐々木郭吉、鐘ヶ江藤太郎、中西貞六、鬼塚竹松、相原源作などは、まだ若かった時代で勢もよく、試合場にはチームより先に応

援席に陣どつて怪気炎を上げ、やかましいことだった。

同じ頃、少年野球も、その普及には各地の日語学校の先生方の指導で、或いは全伯随一の少年チーム地区といい得る位い盛んで、各学校対抗戦ともなれば、一家総出の応援。当時は村を少年野球一色で塗りつぶしたといった有様だった。

有名校としては、一九三八年全伯大会優勝の日伯学園（久保先生）これに対抗したエリジオの新田先生、育英舎の柿井先生、青葉の加治木先生など、児童教育の一部として野球を採用、スパルタ型といった練習すら強いて、後年多くの名選手を伯国球界に送った。

桂川理事長のあとを継いだ梶家勘一郎、志賀憲光、青木龍馬、田ノ上忠雄、松尾広司など、歴代のトップも、なかには家族のことも忘れるほどの熱の入れようで、奥さんに随分恨まれた面々もあったようだ。

野球の普及では、ビリグイは確かに他地方では見られないものがあつたとはいえ、技術の面ではいわゆる超人といわれる者が出ず、いつも弓場に押しまぐられ、又チエテの堅陣は抜けず、その後塵を浴びることが多かつたが、ここで育つた多くの選手たちが、それぞれ新興地に転出し、新天地で新しい野球を注入し、その地方の野球の中心的存在となつたことは、ニッポランジア野球の特色の一つとして、強く印象に残っている。

“チエテ移住地の野球”座談会

於 球連本部

日時一九八〇年八月二十九日、午前十一時半

出席者

元ノロエステ線 チエテ移住地在住者

北 出 末 男

藤 川 三 郎

下大迫 茂

柴 倉 節 男

資料委員会 司会 横 田 守 正

黒 木 常 彦

司会 皆さん、お忙しい処をお集り頂いてありがとうございます御座います。

今日は、元チエテ移住地、古くからの野球関係者のみなさんから、チエテの野球というものに、大へん功労のあった方、例えば選手として、或いは後援者、応援団として、力を入れられた方、なんかを思い出して頂いて、色々その方達のやったことなど、お話しねがいたいと思います。資料委では、竹田さんが都合でおられません、黒木さんと私（横田）が、聞き役というわけです。どうぞよろしく。

北出 チエテの野球で功労者といわれれば、私は第一番に川崎稔さんを挙げたいと思います。

藤川 下大迫、ああやっぱりそりやそうだ。

北出 あの方が監督として、ブラ拓に交渉して、亡くなられた矢崎節夫さんに話して、野球道具を寄附してもらった。

司会 ああそうですか。川崎さんのことは可成り前から色々うかがっているんです。

北出 まあ、技術の面ですれ……、それから経済面でいくと、川又善三さん、それから本田八郎さん。

藤川 柴倉、まあそういう処やなあ。

司会 川崎さんは、ピッチャーとか？

北出 いや、そういうのではなく、チエテの野球を引張ったという。

司会 そういうね。ああそうですか。

北出 それに高橋一敬さん、辻川政二さんの三人ですね。

司会 移住地関係の人達も？

皆一同 ああそりやもう、みんな……古関さんが居られて。

司会 杉谷茂一さん、あの方も事務所？

柴倉 ええ、あの当時杉谷さんも、第三の主任で。

司会 それから応援の方は、下大迫さんやら、鈴木の欣さん。あの方が有名だったようですね。

皆一同 ああ、あの欣さんは有名だった。

藤川 それから江見清鷹。そこに写真に出ている西山さん、扇を振ってね。

司会 高橋さんという方はどういう？

北出 やはり事務所の指導員。

藤川 馬に乗って、ホラばかりふいたもんや。

柴倉 しかし仲々よい方でした。

司会 チエテは何県の方が多かったのですか？

下大迫 藤川、北出。和歌山、香川が多かった。



藤川 バウルーの天理教、大竹さんも和歌山。

黒木 あの人もチエデに居ったんですか。

藤川 それから応援団長、藤川さんは広島。

北出 あのウニオンに居った栄一さん。

藤川 あれも応援団長では、よくやってくれたよ。

司会 チエテも、何か応援歌か何か？

下大迫 ええ、江見清鷹さんが作った。

(唄う)

勝てい チエテの選手よ

成果をあげて……

藤川 それから後で、

いざ讃えん……

下大迫 あれは陸上に作ったんだ。早稲田出の清水幹男から斎藤只男、もう二人とも亡くなった。弟の信男が指揮して歌っていた。

北出 柴倉。野球にも歌った、歌詞がよかったから。

藤川 やぶれ処女膜を……

司会 いやいや……それは。

一同 アハッハッ……。

下大迫 破れ堅塁を……てね。あの頃から俺が応援をやった。あの頃が一番だった。

北出 一番最初のチエテの野球はね、一九三二年の四月ね、事務所対A区でした。

司会 ああそう。その時貴方は？

北出 A区です。ピッチャーが私で、キャッチャーが大坪、一塁が藤村の兄、二塁が藤村の弟、ショートが東徳助、

三墨東喜三、レフトが前田、センター藤村みっちゃん、ライト前田弟。

司会 事務所の方は？

北出 事務所は、辻川さんとか、高橋、川崎さん。その後坂本、杉谷さん。

司会 バストスへ行かれた時、杉谷さんが投げられたとか？

北出 杉谷さんが投げて私がキャッチ。

柴倉 あの時、大坪さんもやったんじゃない？

藤川 ああ、やった。北出を置いといて俺が入ったんだから。

司会 川崎さん、川又さん、高橋さん、本田さんのほかに？

北出 事務所の方は、富沢さんの兄弟、山本ひろし、橋田とんちゃん（病院）。

下大迫 木原は？

北出 中村てのがプライナー履いてなあ。

下大迫 長谷川、天野さんが居った。

柴倉 天野さんは記録係りだった。

藤川 忠さんは？

北出 忠さんは一年後だった。アリアンサから来た曾根原さん。ピッチャーをやった。

藤川 戦後では菅井進ちゃん。坂本。

下大迫 坂本は戦前からだ。

北出 それからうちの兄貴。戦前は畑違いで下大迫、鈴木欣さん、天野さんの三人。それから柴倉さん。

藤川 江ヶ見清鷹。

司会 一九三六年に少年が強くなったんでしよう。その前の青年は？

北出 青年では杉谷さん、藤川三郎、赤川威陽、と弟、斎藤只男。

柴倉 斎藤ヨシオさん、東徳助、中島忠。菅田、広田、剛為、田口、忠次、坂本正男。

北出 それから僕ぐらいかな。

他の者 お前はひとの三倍位いだ。アハハッ。

北出 ああ菊池軍平さん。

他の三人 ああそれ忘れたら、とんでもない。

司会 菊池さんは何年頃から？

下大迫 たしか俺と一緒位いだ。

藤川 北出。一九三二年位いじやないか。

柴倉 三十二年か三年に、大学の連中がいつぺんに入ったんだ。

藤川 あれが関東で、口が粗っぽくなあ、何とかだんべえ……。

司会 菊池さんの話に。おれ弓場にや一ぺんしか敗けてないんだって。

北出 あの人そうでしょう。私等は十回、十五回も敗けるけど。

柴倉 勝ち出してからは、敗れたことないね。

北出 山岸さん、望月、大山さんなどの頃のアリアンサは強くて。

下大迫 第三アリアンサで試合した時、佐藤がサードで

パーとトンネルしてね、そしたら弓場さんが、パカッと頭をね。いやあ、あの時分の野球の鍛え方っていったらね……。それで試合が済んでから抱きついて泣いてたよ。俺が悪かった、こらえてくれ”てね…

：あの時は、俺も涙が出たよ。自分でも子供を鍛えていたからね。

司会 この前、明治が来て、島岡さんが問題になったけど、鍛えるってことは、野球では、どうしてもなければねえ、ならないんだよねえ。

一同 ええ、そうですよ。

司会 魂の入った野球ってのをやるにはね。

下大迫 そりやもう。

司会 明治の場合、叩かれた方が、むしろ喜んでいるんだものね。

北出 そのの処がわからんとね。

下大迫 弓場は”許せ、悪かった”てね声をあげて泣いたですよ。涙もろい男だったですよ、ほんとに。

司会 鍛える、てことのないってんじや、スポーツなんかやる意味ないよね。

一同 そうですよ。ほんと。

下大迫 応援でもですよ。欣さんなんか”何を”てね、マシヤード持ってなぐり込んだんですよ。

司会 その気迫が、それがすべてを作ったんだよね、昔の野球の。

下大迫 チエテの親父連中の理解のあること、わしや今でも忘れません。みんなが、方々炊事やれっていうもんだか

ら、よしやろう。チエテが一番借金のあつた時でね。産業組合の親父さん達、玉子を持って来るわ、味噌や何かもね。八木さんは売店の支配人だったから。

北出 ニワトリも。アハツハツ……。 (これから先、しばらく下大迫さんの苦労話。豚や、米や、味噌、醤油など。或る時は一寸トリツクをして調達した話。鶏のチヤンコ鍋を作つて皆に食わせた話。"おいッ、お上に申しわけないぞ" という合言葉の生れたことなど続いた。)

司会 それ、何年の時ですか？

藤川 三十九年、ピニエイロスでやった大会の時ですよ。司会 結局、強いチームというのは、勿論よい選手が揃わにやならんが、やっぱりバックかね、しつかりね。

一同 そうですよ。

下大迫 その時はね、耻しい話だけど。うちの家内が、いつそ別れようかと思つたてね。米ピツの中に一粒もなかつたんだ。

司会 そう……。

下大迫 それを三日の間、おれ知らんのや。林さんから借りて来てるんや。中沢へ行つたら"うちはヒヤードじゃ出さんですから"

"ああそうですか" それから奥野の精一さんに行つたさ。い。精一さんが、どつさり米を持って来てくれたんだ。あんなときや泣けたぞ全く……。

司会 泣けたねえ……。 (同感する)。

下大迫 去年のチエテ郷土会の時もカンボス・ド・ジヨルドンから一番に来てね、昔話をねえ、したですよ。

司会 ああそうですか。

下大迫 あの年、ワシはサンパウロへ初めて応援に来たん  
ですがね。サンパウロの選手がホームラン打ったんですよ。  
それをパースとマンゲロンの上に飛び上って捕ったんです  
よ。あん時や、敵も味方もない、ワースとね……。

(編集部註、これは一九三九年第四回全伯チエテ優勝の時  
の話。なお各地の球団活躍の蔭に、銃後でこれを支え、盛り  
上げた限らない話題の一例として、特にこの座談会を載せる  
ことにしました。)

リンスの野球

竹田仙造

リンス青年会の初代書記だった青山稔(マリオ)がリンス  
に入ったのが一九一六年で、この頃は町も始ったばかり、森  
部一衛、中村鉄工所など、ほんの二十家族位のもの。青年  
たちも楽しみもなく、手なぐきみのバラリヨに没頭するとい  
う毎日だった。何か青年達に楽しみをと、木村俐、佐藤達二  
などが主導して、野球でもという気運が向いて来た矢先、一  
九二九年、アリアンサから弓場一党が来て、一カ月青年会に  
合宿を執行するという話。これに刺激されて、熊坂梯助、狩  
股仁作、土原、加治木、富永パウロなど、同好が集ってチー  
ムを編成、アリアンサと合同練習を始めた。

一九三一年正月、第二回ノロエステ野球大会には、元バウ

ルー領事多羅間鉄輔氏を総裁に、当地初めての催しと盛大に挙行、アリアンサ、ピリグイ、日の出（ラウル、ミール）、リンスの四チーム、三日間熱戦の末、決勝戦はアリアンサ十八、ピリグイ四でア軍が優勝した。

一九三二年には第三回ノロ大会がニツポランジアで行われることになり、日伯新聞に入った進藤憲吉の出現で急に活気づき、近藤守栄（高田中学出のスキーの名手だった一故人）や、三十一年九月着伯した竹田仙造、正男兄弟の加入などで迫々充実、大アリアンサの前に立ちまはだからんと野心満々、練習に励み、球史に残る好試合を展開、神さま弓場に冷汗をかかした。試合は弓場の豪球に対し、進藤の技工的な投球で、ア軍たびたびの好機をいなし、三対三で補回戦に入り、十一回リンスの今井三塁手のトンネルでケリがついたが、初めて見る野球の面白さに、地元ニツポランジアでは、いよいよ球熱が燃え盛ることになった。メンバーは、

アリアンサ

弓場

宮崎

望月

山岸

竹内

馬場

リンス

進藤

上條

その翌三十三年六月には、バストスで入植五周年記念と、第四回ノロ、ソロ大会が催されリンスも参加。サントスから高松等、アラサツバから佐々など、以前ミカドで名を馳せ

管 屋 山 高 会 細 清 中 島 南 ビリグイ  
鉄 敷 本 野 田 井 田 熊 江 部

木 近 横 竹 今 杉 竹  
村 藤 田 仙 井 野 田 正



1931年第1アリアンサに遠征ビリグイチーム



た好選手を加え、今年こそはと野心に燃えたが、進藤投手病気を押し出たので出場で球威なく、アリアンサの猛攻に浮足たち、高松の救援でやや立直り、竹田正男、高松も好打したが、残念の一語に終わった。

一九三五年チエテでの第五回ノロ大会も、進藤引退、新進の今井義光が好投した位いで、この後は進藤、竹田兄弟などの聖市移転、青年野球は戦後の再興まで、沈滞期となる。二方少年野球は、一九三二年父兄たちの提唱で発足、ジナジオ、アメリカカーノ中学の日本語教師、亀井誠一先生が主体となり、日本語の一科目として実施、竹田富男、武藤正義など、後年の全伯的な選手を育成したが、これに後援団体として老童チームも併設、街の顔役たちも子供と一緒に汗を流し、経費面でも協力を惜まず、実力を貯えたので、一九三三年十一月、時の林大使から優勝旗の寄贈を得て、第一回全伯少年大会を開催した。参加チームは地元リンス、アリアンサ、バストス、それにブリグイ管内から育英社、リーザ、中央で六チーム。五日間の熱闘の末、優勝戦はリンス対バストス。スコアはリンス六対一、リ軍が初優勝した。一九三四年四月には、サンパウロ青年会の主催で少年野球が行われ、リンスはノロ線を代表、ソロカバナ線サント・アナスタシオの梅弁はソロ線を代表、サンパウロは青年の二軍が参加、三つ巴となったが、サ軍に楽勝した梅弁とリンスの優勝戦にも四対二で勝ち優勝した。リンス青年会主催で、少年大会が同じ三十四年の二月十一日より三日間、ゲナジオアメリカカーノで開催され、参加リンス、アリアンサ、大和、バストスの四チーム、優勝戦はリンス対バストス、熱戦の末三点差、リ軍バストス

を敗り優勝した。

リンスの栄冠は二度目である。一九三五年三月十日、時報紙と富士屋運動具店の斡旋で、リンス管内の少年野球が行われた。サン・ジョン、セントラル、第一アリアンサ、リンス学園の四チーム。リンス惜敗してアリアンサ・セントラルが優勝。この年の六月十五日より五日間、バストスで第三回全伯少年大会が開催され、バストスはプログレソ、文化、ボンフィンを敗り、リンスはアルト、エスペランサ、サウデを敗って決勝はバストス対リンス。上田、竹田の投手戦となったが、三回リ軍の竹田三塁打、次打者の安打で一点先取。六回までバ軍の得点なく七回最後の攻撃。大森死球、水本中堅に安打、竹内二葡で一死走者二、三塁。六番上田投葡は強く、投手竹田はよく止めたが三塁に暴投し二点入る。その裏得点出来ず二対一、バストスの優勝に終る。

この後のリンス少年軍は、一九三六年のビリダイのニッポランジアで開催された第四回全伯に出場したが、第二戦にチエテに敗れ、後年は大きな大会に出ることもなくなった。青年野球も、戦後の華しい復興まで休戦状態となったのである。

## アラサツバ球史

一九二八、九年ごろから、アラサツバ管内の植民地の青年会で、ぼつぼつ野球が始ったというが、中でアグア・リンパが一足先のように、青年たちの楽しみに、日曜日に時々練習試合をする程度であった。一九三一年、レジストロからア市に移転開業した菊地円平医師が中心となり、野球活動を始

めてから、急速に同市の実力が高まった。同医師は昔、レジストロの主戦投手として、聖市のミカドを降し、初の鮫島旗を握っただけに、その熱の入れようも大したもの。

丁度その頃同家に寄寓していた小栗（海軍大将の息）や、佐々といった日本の大学出の若手など、それにニッポランジアから中嶋鷗郎も参加したりして、その力が大きく認められて来た。しかし、同市の野球が本格化したのは一九三七年からで、アラサツバ学園が完成され、立派な運動場も出来、ノロ線スポーツの中心的な位置を占めることになり、菊池医師、朝倉正徳、飯野七郎、久保要、小坂武人、黒木常彦などが技術の向上に結束、一方学園寄宿に、アリアンサ、チエテなどで少年から可なり訓練された本田剛爲、高津セルジオ、下村記、高橋誠、岡本友美、榛葉レーニンなど、後年コロニア二世の中心選手となった名手が排出、一時は管内に二十支部の大小チームが結成された。だが一般にはレベルも低く、予選大会に出場するだけで、アリアンサ、チエテなどの古豪には歯がたたなかつた。安瀬、大原二財閥を筆頭に、田口実、山崎憲夫、黒場兄弟、岡本兄弟、岡田兄弟、野作助、梶本智、佐藤忠四郎、政岡福美、小松竹治、松本晃、斎藤馨、黒木兄弟、高橋麟太郎、久保勝、森国弘、森勲、宇江優、一ノ瀬兄弟、小方正などの当時から不変の熱意が、今日のアラサツバの隆盛に、大きな陰の力となったことは見逃すわけにはいかない。

一九二八年頃だったか、銀谷（プラツタ）植民地の山本爲吉先生の提唱で、広瀬兄弟、江川、石橋兄弟、古川、清水、三宮兄弟などを引きつれて、アグア・リンパまで十二キロの山路を歩いて、遠征したことが想い出される。今日貸切りバスで手軽に遠征している選手たちには、とても想像出来ないだろう。

一九三一年ごろ、アラサツーバの菊池ドクターの率いるチームと、一戦したことがあったが、その時のメンバーは、浜川、渡辺のバッテリー、ショートに三宮直己、外野に梅林、林田など。成績の記憶はないが、試合中に球が一見物人に当たって、昏倒させ大騒ぎしたのが忘れられない。

一九三四年ごろからグアララペス革新チームが他を押し、着々技術が向上したので、ピリグイからジャンガーダ・チームを招いて一戦した。このチームはニツポランジア大会の優勝チーム、とても歯もたたないだろうと予想されたが、革新大奮闘、五回二対二の大接戦、熱気溢れ予断を許さず。その時突然グラウンドを一伯人娘が横切った……。そこは丁度道路になっていた。観衆が野次って大騒ぎ、処がその娘は警察署長の娘さんだった。さあ大変、署長が乗込んで来て試合の中止を命ぜられ、ピリグイ・チームの優勝旗など没収されてしまった、という事件もあった。

南部忠平の第一回来訪当時のことだから一九三九年と思うが、グアラサイから弓場勇が南部さんに会いに来た。丁度

吾々が練習しているところへ来たので、時の青年会長河本忠夫が「ノックしてやって呉れ」と頼んだところ、野球の神様、物凄いノックで、カンポもフットボール用のデコボコ、選手一同惨々の有様、「お前たちは、アリアンサの少年より弱い」と冷かされた。ところが皮肉にも予選でアリアンサと対戦、四回まで吾が軍二対一とリード。弓場はカンカンになり自軍をした、大山、望月、山岸などを頭からどなり、四対二、やつと逆転した。試合後弓場は、点数では勝ったが君等にやられた、といった。その時のメンバーは、投手は城間と三宮、捕手内村と三宮（良）、一塁米本、二塁山田、三塁浜田、遊撃三宮（直）、左翼三宮（政）と内村、中堅安田、右翼坂口などだった。

## グアララペス野球の思い出

根布谷 泰

グアララペスの野球の起源は、まだフルタール町といわれていた一九三一年頃、山形県人渡部兵吉が、手製のグローブでチームを編成したのが始まりだと思いが、或いは他にもっと早くからやっていた者があったかも知れない。その翌年、青年会が発足、一夜シネマの夕で儲けた五百円で、リンスの竹田商会（フジヤ）から野球用具一揃いを購入、八月に第一回管内大会を開催した。参加チームはグアララペス、フルタール、銀谷（プラッタ）とアラサツーパーの四チーム。プラッタが優勝した。その場所は現在の中央公園で、当時は一面の雑

草生い繁る野原、捕手の後方に手綱のネットを張り、観衆もファル線まで群がって喚声をあげる。慰安娯楽の乏しいうちに、唯一の楽しみが日曜毎の野球となった。優勝こそ逸したが、フルタールには広島商業出の浜川豊、広陵中学の津村耕作、軍隊野球出の猛者木原唯一など、広島出身者で固めたもので、なかなか強かったことが印象に残っている。

バストス野球の功労者たち

山中三郎

畑中 仙次郎

兵庫県人、一八八八年生れ、一九二二年厳島丸にて渡伯、バストス移住地支配人、七男三女、長男忠雄を聖州義塾に学ばせ、義塾野球チームで活躍させる。男児七名みな野球選手となる。開植当時の財政困難時代に、野球王国の礎を築いた。

樋口 謙三

横須賀生れ、慶応大学時代よりの野球人、渡伯後、日伯新聞社に勤務、三浦聖の奨めでバストス入りし、畑中支配人を援け、野球部の創設に尽し、むずかしい会計をやりくりした。在植三年、聖市に戻り銀行マンとなる。ものわかりのよい好人物で、誰からも好かれた。ミカド、バストス、日伯、サンパウロクラブ等、いつもよい相談相手だった。

本田 正雄

和歌山県海南市出身、一九〇八年生れ。大阪電気技術校卒、一九二九年伯父・本田彦三門構成家族でバストスに入植、彼ほど野球好きな男も少い。世話好き、議論好き、説明好き、意が通らねばすぐ怒る、善人短気もの、バストス野球部創立からマネージャ、自身では野球しない理論家。五十九才で長逝、いまだに惜まれている。

#### 有村 光雄

鹿児島県出身、一九〇六年生れ、一九二九年、野元又雄農学士の構成で入植、一八〇米の長身、球を投げる時の形相物凄いい、気一本で清潔な感じ、試合に負けたら黙り込む。パラグアスーで棉作十八年の後、聖市近郊サント・アマール奥で養鶏、一女を得て婿をとり、恵まれた半生とも、帰日したとも聞く。

#### 山下 寛人

熊本県人吉市城本町出身、一九一〇年生れ。一九二九年らぶらた丸で单身渡伯、バストスに直入植、ブラ拓製材所、売店、事務所などに働く、明朗で誰からも好かれる。グラウンドでは人一倍の努力家、おもに捕手だが、投手では球が速く、弓場に食わしたDBは凄かった。また弓場から二塁打をとりサンパウロを優勝させたのは有名。一九三〇年バ軍聖市遠征のおり、宿泊した小川旅館の娘とねんごろになり、後結婚、一男三女の父となる。出聖後は聖州新報の記者を永く勤め、野球部の主将で活躍した。一九五九年、進藤憲吉と邦人々名録を編纂、苦心の未完

成、尊い文献の一つとなっている。

渡部 孝

兵庫県神戸市出身、一九〇五年生れ、商業学校卒、在校中からの野球マン、一九二九年、義兄古川誠三の構成家族でバストスに直入植、バストス野球部の創設前に、彼が持参したボールとグローブで、キャッチボールしたのが始まりという。三年間百姓の後、聖市のブラスコット社に入り、マルチノポリス工場を経てア・マシヤードの徳田精綿の事務主任になったが、欧州戦争の余波でバストスに戻り、養蚕、養鶏を二十五年、良妻を得て一女五男の親となる。晩年はアラサツバ市で大学教授の次男一誠宅に楽隠居、七十五才で永眠。

渋谷 四郎

北海道小樽市出身、一九一二年生、中学卒、長兄渋谷千五の家族として一九二九年入植、バストス野球チームの創立から二墨手で活躍、四年程で球友に惜まれつつ出聖、良妻を得て一女二男に恵まれ、特に二男児は共に秀才、晩年の彼の楽しみであった。ピング酒をこよなく愛し、昇天を早めたようである。一九七七年五月四日六十五才亡。

園田 新

兵庫県篠山町出身、一九〇五年生れ、予備陸軍少尉、大阪外語学校卒、一九二九年畑中仙次郎の呼び寄せで渡伯、平野植民地を経て入植、ブラ拓事務所に働く。球団の創立に尽



第百回全伯少年野球大會  
優勝紀念



一九三六年六月二十一日、ニッポランジヤ(ピラツキ)球場、全伯、ノロエステテ予選。



一九三六年六月二十八日、イニユーマ小学校庭にて。(チエテ移住地) 第四回全伯少年大會優勝チエテチーム。



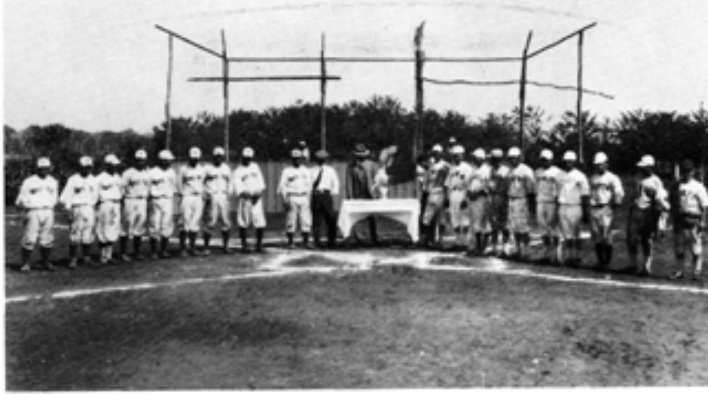
一九三七年、チエテ野球部選手、合宿中。前列中央が横沢太一コーチ。



一九三二年四月三十日のチエテ対アリアンサの試合。



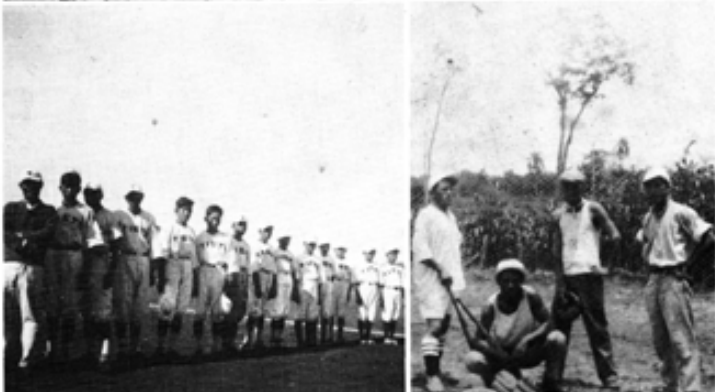
一九三二年六月十七日、チエテA区小学校庭にて、第三アリアンサと試合、三點差で敗る。



一九三二年八月九日、チエテ球場にて、バストス対チエテ試合前。



一九三一年のチエテチーム。



一九三三年一月三日、チエテ移住地の左より榎本、松本、船、辻川。一九三七年、第二回優勝のチエテ少年野球チーム。



一九三八年八月、汎ノロエステ第一回大会記念、チエテ野球部員。

し、投手、三塁手で活躍、建築業高尾鹿太郎の息女さつき（当時十六才）と結婚、美貌の妻を得て友人達をうらやましながら。性格は大まかでオボツチャン的、スポーツ、遊びごと凡てに万能、又能筆で出聖してから聖州新報社の編集長を永く勤め、戦後南米時事社、パウリスタ新聞社日伯毎日新聞社でも健筆を振ったが、飲酒が災いして病に篤く、一九七〇年、六十四才で病死した。

### 齋藤 太郎

北海道旭川市出身、一九〇四年生れ、京都同志社中学卒、愛媛県人の元代議士清水伴三郎と二児を連れて家族構成で入植、性格は温厚篤実、北海道にて学校教師の経験あり、一九三〇年よりバストス第一日語小学校の教師として就職、彼ほ

ど教え児に永久に慕われる人は珍しい。野球ではショートを守り、常に中心人物、ものごとを平和裏に解決する力量を持っていた。バストス少年野球の育ての親であり、後年伯国野球界で活躍した数多くの名選手は、彼の愛のムチの下に生れたのである。一九三九年、パラグアスー市の学舎に舎監として迎えられ、一九四九年サンパウロ市に移り、自前の寄宿舎を経営したが、一九六六年病を得て不帰の人となる。行年六十一才。

#### 小金沢

一九〇七年生れ、中学卒、一九二八年着伯、静岡県人榛葉式部の姉と結婚、のち聖市に出て二年、日本へ帰ったというが、その後の消息を聞かず。性格は正直一途、率直な実行型、他人の悩みごとを、身替りになって引受けるといったような人だった。

#### 千田 留五郎

北海道釧路市出身、中学卒、一九一一年生れ、一九二七年渡伯、同三〇年バストス入植、実兄市三郎の家族として渡伯、性格冷静、友情に厚く、堅実な一生を送ってこられたのも、老後を思い保健に留意したからと見られる。恵まれた後半世は、夫人の厚い心づかいからとも思われる。

#### 山中 三郎

北海道常呂郡訓子府出身、一九〇九年生れ、一九二四年三月着伯、一九二九年父母兄弟五人で入植。ブラ拓事業に従

事、学閥とてないが、正鵠を得た理論家、常にバストス植民地の発展に心を尽した。

### 斎藤 龍雄

東京都出身、生年月日、渡伯年など不詳。元日伯新聞社社員、聖市にて一九二〇年頃から二十五、六年頃まで、タクシーの運転士などとしていた。ミカド・クラブの投手、捕手、遊撃、三塁手など、どこでもよくこなし、フロントンの選手もした。何年の頃か、ニッポランジア町で日語教師をしていた西村英一宅に居候中、偶々バストス野球チームが、アリアンサ遠征の帰途、ニッポランジアと一戦、その時彼が審判をし、そのまま、バストス軍のカミニヨンに滑り込みバストス入りをした。五、六年バストスに住む間、いつも野球には出てきて、アドバイスもした。後年プ・プルデンテ市の内田ドクター診療所に勤めていたが、何か食当りとかで急逝したという。プ市でも捕手として活躍、行年不明だが四十才位이었다と。

### 末 広 邦 夫

広島県広島市出身、一九一二年生。一九二九年入植、聖市にて永眠。

### 田 口 発

岩手県盛岡市出身。工藤麟一郎の甥、性格はボツちゃん型、大兵で立腹せず、現在ガルサ市にて、マッサージ、整骨、柔道場を経営盛業中。

丹後 勝治

福岡県小倉市出身、一八九八年生れ。一九二四年渡伯、六男二女の父。製材所主任、樋口会計の補佐役で、何くれと心配してくれた。

佐藤 福太郎

岩手県花巻町出身、一八九八年生れ。一九二二年渡伯、大家族で家中野球好き。建築、土木、運搬、請負業で、職人、人夫多く、応援団長で実力発揮した。

山下 明良

滋賀県甲賀郡出身。一九〇五年生れ、中学中退、一九二一年渡伯、棉の産地アバレーで青年団長を務めた。丹後会計を補佐して難しい会計をやりくりし、面倒を見てくれた。後年元の巣アバレーに帰り、牧畜に打ち込み、六十域、牧牛数百頭を息子に残し、聖市にて老後を楽しんでいる。

小倉 清

島根県三隅町出身、中学卒。一九〇八年生れ、一九二八年渡伯、応援団員、急進派、小粒だが、意気と雄弁、四男一女の親、クリチーバ市にてホテル業盛業中。

西村 英一

岡山県高屋町出身、京都同志社中学卒。一九〇二年生れ、一九二二年渡伯、力行会員、着聖後、日語新聞に働いて、ミ

カド俱樂部に入り、笹原憲次や横溝一男、長谷川兄弟、斎藤龍雄などとコンデ坂下で野球を楽しんだ。三道を守りプレーが垢抜けしていたと記録にある。一九二四年、伊藤八十二牧師の奨めでビラツキの浅野直吉の処の日語学校の教師として赴任、約半年後、菅野寅吉耕地で六年、この地で結婚した。又このコロニア区で、和歌山中学出の南部五郎、中島鶏郎などと野球を始めた。用具はボール、ミットその他全部手製である。時に一九二五年であるが、同じ頃始められたアリアンサの野球とは、別に関連はなかった。ニッポランジアからビラツキに町の名が替り、アリアンサ、リンス、バストスなど諸球団が出来て、試合の数もふえて来た一九三二年、バストスに移転、自後二十九年間、バストス球界の長老として球界の発展に尽した。天狗クラブの結成、一九四九年の第一回選抜大会には、パウリスタ軍の監督で出場した。一九六〇年商



1941年チエテにて行われたノロ大会に出場したアラサツバのメンバー。  
後列左から下村認、山田勝一、丸山、中列内村、江川孝、廣瀬亘、岡田俊春、前列高橋誠、岡田昇、帆崎(監督)、久保要、石橋利夫。

パラナのマテランジアに再移住、新地方の開拓に力戦、この地でも野球の新興発展に尽力している。一九七九年病いを得て七十七年の生涯を終る。ユーモアに豊み、誰からも愛された野球人であった。

ポンペイア球史 渡一男 太郎田利談

一九三七年ごろから、当地の野球が発祥したらしいが、正しい記録もない。この時分から日本語学校の横井先生が主導して、大阪関西大学出の中川某が、KANDAIの白いユニフォームを着用してカンポに現れた。狩股など野球狂などもこれに参加し、一九三八年全伯大会が、地方予選制になっての第一回予選大会にも、バストスまで遠征した。その時のメンバーは、監督横井。

メンバー

投高木  
捕山本  
一中川  
二中家  
三岡村  
遊貝藤  
左太郎田  
中渡  
右岡田  
補武田

〃 中 田  
〃 山 下

その後、一九四〇年頃から、岸、本田、太郎田弟、浅井、加藤や木下正夫、高木弟などの加入で、段々力を加え、遂に一九四一年、マリリア市での第四回予選大会で優勝したが、その帰途輪禍に会い、僚友梶尾選手を失うという悲劇に偶発した。現在俳界で活躍される星野明先生の名も、この当時のメンバーの一員として記録に残っているのは、もう思い出す人も少くないと思う。



戦時中のこと。

マリリア青年会では、太平洋戦たけなわの、一九四三年



に、沈滞しきつたコロニアの空気を一新すべく、マリリアで全伯野球を決行すべく、特に当局の黙許を得て、準備を進め、全伯各地でも大いに歓迎され、それぞれ予選も行われ、ノロ線の代表となったグアララペスチームなど遠征の途について、汽車に乗ったほどだったが、どんな経緯か急に大会開催禁止の命が出て、この企ては日の目を見ずに終わった。

たまたまポンペイアでは、或いは小規模なものだったなら、開催の可能性もなきにしもあらずとのことで、市当局と折衝の結果、カンポ中に限り、日本語を使つてもよろしい、野球も大いにやつていいと許可が出たので、サンパウロから混成チームと、マリリア青年会チーム間で、一九四三年十一月十四、十五の二日間、寺院のケルメッセという名目で、三つ巴戦が展開された。久しぶりに日本語全開とあって、山から繰り出した応援団で、球場は活気に溢れ、戦時中も忘れた二日間で、大へん意義深いものだった。

#### パウリスタ線球人録

#### 加 来 晋 一

福岡県出身、一八九九年生れ、一九一八年はわい丸で渡伯。パウルー地方野球の発祥に奔走。払った犠牲に報いられたのは僅かだった。

#### 西 川 武 夫

大阪出身、一九〇三年生れ、一九二六年七月さんとす丸で渡伯。

マリリア野球の元祖。弟小野圭三や一門こぞって野球狂。や

かましい野球として知られていた。

### 阿 鷹 富 夫

広島県出身、一九〇六年生れ、一九二四年渡伯。マリリアの日本人街サン・ルイスに対抗して、コロネル街で町内チームを結成。進藤憲吉のコーチを受けたりして、一九四〇年常勝バストスを破って、パウリスタ代表権を勝ちとる放れ業をやった。

### 井 原 日 吉

山口県出身、一九一五年生れ、一九二九年渡伯、マリリア市コロネル・チームの外野手をした。現在「生長の家」の理事長として縦横にそ切俊腕を振っている。球人の変り種。

### 狩 股 仁 平

一九二八年ごろのリンズ野球発祥にも参加したが、その後ポンペイアに移り、ここでも露払いの役割を演じた。

### 岡 村 久 親

北海道札幌市出身、一八九九年生れ、一九二九年りお丸にて渡伯。

一九三八年ごろカフエランジアからキンターナ植民地に日語教師として赴任。持ち前の野球好きで同地青年たちに指導普及した。弟・忠親は後年ポンペイアにて活躍。一九四一年パウリスタ予選にポンペイアで優勝したが、その帰途交通事故で戦友多数と共に大負傷した、彼はこの時の投手であった。

ソロカバナ線の野球の発祥は、サント・アナスタシオからで、一九三三年頃、梅弁植民地の丹俊男先生指導で、既に立派な少年チームが出来ていて、一九三四年サンパウロに遠征し、リンスの少年と好試合をやるだけの力になっていた。

これが刺激剤となり、プルデンデでも吉村軍次が中心となってチームを作り、三浦賢二、金城、肥田などの好選手を集め、青年会長だった尾形義雄の指揮で活発な運動を展開した。これを見て近接のア・マシヤード、プ・ベルナルデス、サント・アナスタシオ、プ・ヴェンセスラウなど、次々とチームが結成され、一九三五年には第一回奥ソロ大会がプルデンテで開催され、年毎に隆盛に向つた。この地方の特色ともいふべきものは、各都市チームには熱狂的なファンがあつて、大会ごとに色々悶着が絶えず、選手の引上げ、退場は毎回のこと、その都度主催者が奔走して、やっと大会を終らす有様、それだけ各地元ファンの力の入れようが、異状とも見えるほどのものだった。

この地方の中心勢力を誇るプルデンテは、一九三八年、聖市から今井義光投手を手に入れて、一層その力を充実したが、この今井の参加が、奥ソロ連盟の規約違反であるとしてオミットされ、一時大問題になったりした。隣り街のア・マシヤードでも、横尾盛行が中心となり、グアララペスから二宮という投手を連れて来て、プ市に対抗出来る力を貯え、覇を競い、この間除を縫ってベルナルデス、サント・アナスタ

シオ、ヴェンセスラウ等、群雄割拠、天下大いに乱れの觀があつた。この様相は、各都市日系コロニア同志の競争意識のあらわれとでもいうべきか、或いは開拓精神に燃えての若き意気の発露か、免も角、すさまじいものであつた。

一方、パラグアスー駅の文化植民地に始められた野球も、一九三〇年、渡部重、松山兄弟などを中心に、近隣のコロニアに生れたチームと試合をしたが、いつも文化が主導権を保持していた。この文化チームがバストスに挑戦したのは一九三二年で、一九三六年聖市に開催された第一回全伯大会にも参加しているし、一九四一年の汎ソロ予選にも出場、決勝でプルデンテ軍に、七回で三対二、不運の降雨でコールド・ゲームに敗れている。

#### ソロカバナ地方の野球人

川 口 土美三

故人、愛知県人らしく野球好き。男ッ気を發揮、プ・プルデンテの野球育成に情熱を燃やした。

三 宅 仁 蔵

愛知県人、川口土美三の同志的人物。プ・プルデンテの野球向上に、陰の人として大きな存在だった。

尾 形 義 雄

プ・プルデンテ青年会長として、一九三四年頃からの重

鎮。一種の親分。サンパウロ中学校の創立や、同校の運動場の入手、野球場の整備など、陣頭に立って尽力した人物。佐賀の人。

栗津 幾太郎

日本人会々長として、青年指導の大きな理解者。プ・プルデンテ野球の恩人。

島之江 次郎

自分では全然やったことのない野球人。奥ソロ地方の青年運動の推進者。一九三四、五年から現在まで、約五十年近く、一貫した熱意は、他の比を見ない存在。

横尾 盛行

広島大らしい野球狂。ア・マシヤードの野球のため、大きな犠牲を払って、二宮や、初村など後年の名選手を育てた。

高松 等

電信技師としてサントス領事館に勤務、当初のサントス球界の立役者。一時リンスに招かれて二年ほど過したが、後プ・ウエンセスラウ、バンディランテスの野村農場などを転々と、放浪生活を続け、戦後プ・プルデンテに定住したが、病を得て一九八三年六月十日死亡。

稲毛 熊次郎

プ・プルデンテの重鎮、福岡県出身、同地野球の発展に物

心の後援を惜まず、時に眞頂の引き倒しの場面を展開などもあつたが、物凄い野球狂だつた。

橋 富士男

オウリニヨスのブラ拓支店長として、俊才を發揮するかたわら、青年たちの希望を入れて、難しいコロニア事情を屈服し野球場を建設。また中ソロに適当な相手もないこととて、一九三八年北パ大会に特別参加したり、円満な人柄を買われて審判も勤めたりした。中ソロの先覚者、現在商銀のトツプ。

菊池 全

サント・アナスタシオの第一人者。常に冷静を持し、味方がエキサイトして混乱する時でも、中庸を守り大乗的に処置の出来た大人。明治三十九年生れ。今日も第一線にあつてスポーツに情熱を燃している。

二宮 義人

熊本県の出。ノロエステ大会が、リンスで催された時、プロミソン・チームから参加、弓場アリアンサに對等の勝負を挑んだ好手。後グアララペスを経て、ソロ線ア・マシヤードに腰を据え、ソロ線一流の名投手。

今井 義光

進藤先輩の好指導を得て、一九三四年頃から頭角を顕し、リンスからコチア産組に入り、聖市実業リーグの優勝投手と

なる。プ・プルデンテに引抜かれ、ソロカバナの第一線投手として活躍。

## 砥 上

サント・アナスタシオで、その強打と駿足で鳴らした名手。後サンパウロに移り、日伯新聞に入社。オール・サンパウロの一員として一時期を画し活躍をした。

## 吉 本

バット作りの名人。自分の気に入らなければ、どんなに頼んでも売らないという一風変ったバット屋さん。ベルナルデスで審判としても永年活躍。ソロカバナでは、なくてはならない人だった。

## 吉 村 軍 次

プ・プルデンテ野球の産みの親。よい後援者を得て縦横に奮闘、今日のプルデンテの野球の基礎を築いたといってもよい人。

## 金 城

一九二九年ごろ、自分でボールやグローブを作って、野球をやり出した男。プルデンテ球界の創立者第一号。

## 辻 市 十

プ・ウエンセスラウの日語教師として、子弟教育に野球をとり入れたのが病みつき。その後マシヤードに移ったが、不

自由な脚をもいとわず、グラウンドを馳り回った野球狂。

初村 子之吉

福岡県出身、子供たちが成長するに比例して野球熱も高くなり、長男繁登、ルイス、オスカルなど、ア・マシヤードの中心選手として活躍した。女婿に二宮義人がある。

肥田 善治

善ちゃんとして親しまれた。マシヤード野球の生みの親。後ミランテに移ったが、相変らず情熱を燃し続けた。彼の没後ミランテに出来た野球場に、この人の名を冠して『肥田善治球場』と命名。その遺業を称えている。

徳田 八十八

ア・マシヤードの応援団長。相手方には憎れた存在。こんな人があつてこそ昔の野球はやれたもんだという見本的人物。

岡田

プ・ウエンセスラウの草創期から、野球の創始者の一人として、今日まで変らない人。永年の努力と犠牲が、約五十年ぶりで開花し、近来全伯を制する名選手が輩出。やっと永年の苦勞が報いられた。

北山 正

園田、北山の名コンビ。昔の野球への理解者だった。



前川 栄 蔵

滋賀県出身。一九三九年頃渡伯。まだ余り普及されていないかったマルチノポリスで野球を始めたが、手薄だった後援を一人でカバーし、野球をやれることに大きな喜びを持った好漢。

斎藤 善四郎

パラグアスの草分け。渡部重などと提携。中ソロ野球の一端を担った人。

パラナの野球人

西村 市 助

故人、一九三三年以降トレス・バラス移住地の野球向上のために尽力、持ち前の男気を押し出して、青年たちに根性を入れた、山口県出身。

久 万 浩

東京都出身、一九一〇年生れ、一九二九年アパニヤダーバの野村農場に入り、一九三〇年頃プロミソンでチームメンバーとして野球をやったこともあったが、その後北パに入り、ピリアニットに本拠を置いて、北パ運動連盟の結成に尽力。北パ・スポーツ界発展の源動力となる。

沼 田 吉太郎

ロンドリーナ球界の草分け。中央植民地開拓以来、青年指導者としての重鎮。

曾我部 昭一

パナナ野球界で活躍した。特に審判員として同球界の先覚者。

高木 清

戦後マリンガ地方の球界開拓に尽した、現北パ運連理事長の要職にある。

矢部一郎

一九三〇年ごろから、カンバラで草創期の野球に投手として活躍、一九三八年ビラ・ジャポネーザの主戦投手として全伯大会に出場。

只野 文児

熱血漢、精神的野球を主唱し、時に球界に入れられない面などもあつたが、一九四〇年に北パを制覇、全伯大会に駒を進めた。コルネリオの耕地主、後南麻州ドウラードスに進出、兇弾に斃れたという。

菅田 武

菅田が球界に名を現わしたのは戦後だが、持ち前の意地張りで息子五人を伯国一流の選手に仕上げた。一九六三年第四回汎米オリンピック聖市大会に、監督として活躍、大豪北米とヴェネズエラ軍に土をつけたので有名。

佐藤 早苗

北パ審判員として、永年審判技術の向上に尽した。

林 圭三

佐藤早首などと共に、審判員として活躍、後クリチーバ方面の野球発展に尽力。

### 聖市近郊の野球

レジストロが一九二三年から一九三七年まで、盛んであったのは別の稿に書いたが、サントスは、高松等のいた二、三年だけで、そのほかは、外国船が寄港した時、交歓試合をした程度で、定着したといえる程のものはない。セントラル線その他でも、戦前は殆んど行われず、コチア産組のチームが、聖市の実業リーグで活躍したり、聖西と名乗って、時々出たことのほか、活発に行われたことはない。中央線に鐘紡、豊和などの強大チームが出来たのは、すべて戦後である。

1941

◎田川、松井両氏に、餞の紅白試合

(時、一月十七日)

名残り惜む、聖市野球倶楽部員

揃って帰国する東綿の田川氏と、海興の松井両氏は、サンパウロ野球ク並びに伯国球界の振興に多大の功績あった人。

感謝の意味でサ俱部員は総動員で来る十九日午後二時より力球場に於て紅白試合を行い、両氏への餞とする。

◎ノロ線の門都バウルーに

(時、一月二十四日)

球熱愈々旺ん

最近バウルー地方に野球熱が旺んだが、去る五日同地富士植民地グラウンドで、バウルー富士、希望の三チームが初試合をした。この日バ軍竹田投手完投して富士を十七対一、希望を八対三で破り、これを契機に練習試合を行うと、又バウルー軍は同線の雄リンスに挑戦、来る二月九日頃遠征の予定だと。

◎プロミソン球場開き (時、一月三十日)

プロミソン青年会新設球場開きは去る二十六日午前十時よりピリグイ、リンス参加で盛大に挙行された。

第一回プ軍対ビ軍戦は間崎氏始球の後行われ、ビ軍の追撃を退けプ軍十五対十一で快勝。審判武藤、佐藤、灰田。第二回リ軍対プ軍戦はこれで第三回目の顔合せ。先に二回共リ軍に敗れているプ軍は、雪辱の意気物凄く、又リ軍この日森部、藤倉、森本など不出場で結局十四対二でプ軍の報復成った。審判木村、志村。

◎第三国汎パウリスタ野球大会

(ブ朝、一月三十一日)

去る二十五、六の両日、第三回汎パウリスタ野球大会がバ

ストス青年連盟球場に開催された。先ず松本会長、溝部審判長挨拶の後、第一試合ベラ・クルス対バストスが午前九時から開始された。参加チームはバストス、ベラ・クルス、マリリア、ポンペイアの四チーム。戦績は次の通り。

〔第一日〕

バストス 26 — 0 ベラ・クルス

ポンペイア 7 — 5 マリリア

バストス 9 — 6 マリリア

〔第二日〕

ポンペイア 12 — 0 ベラ・クルス

バストス 9 — 7 ポンペイア

マリリア 21 — 6 ベラ・クルス

バストスは三戦全勝で三年連覇した。

◎野球試合三つ

(ブ朝、二月十一日)

八日カシンギー球場にて親善試合と、今年度実業リーグ前の小手調べ試合があつた。

農事協会 11 — 12 産組中央

小西 6 — 2 ブラスコット

カナカオ 30 — 2 日伯

◎実業リーグ前奏曲 (ブ朝、二月十八日)

小西対時報、一昨(日)十時より力球場で十四対一、時報惨敗、小田投手十五の被安打。

海興対聖報、六対五で海興辛勝。

コチア対ブラ拓、カシンギー球場で午後二時より行われ、八対一でコチア快勝。

ブラスコット対西谷、土曜二時よりサンカヘターの球場で、十三対三コールド、西谷復讐成る。



ア・マツシヤード市の少年チーム (1938年)。

### ◎プ・プルデンテ野球大会

(ブ朝、二月二十二日)

プ・プルデンテ連合青年会では、同市球場で去る二月九日と十六日の両日支部対抗野球大会を催した。参加はプ市青年会、ニコニコクラブ、ピアソン、アニューマス、曙の五チーム、九日午後一時より川口日会長の始球で第一試合アニューマス対ニコニコ戦から開始。アニューマス2ー7ニコニコ、ア軍の投手は今井、ニコニコの投手は町田。

プ青年10―0曙、新鋭のプ軍投手宮原好投。

ニコニコ8―2ピアソン、雨の為七回コールドで中止。

ニコニコ対プ青年の優勝戦は十六日行われたが、猛烈な応援合戦となり、大接戦の末ニコニコクラブが優勝した。

P 001002110―5

N 01100222A―8A

### ◎三都市対抗戦 (ブ朝、二月十六日)

去る九日リンス青年会では新興のバウルーとプロミソンを迎えて三都市対抗をした。午前十時竹田氏の始球で、斎藤(主)、木村、宇賀山、北原四審判、リ軍先攻で開始、新興バ軍及ばず十八対三でリ軍の勝。プロミソン対バウルーは、木村(主)、鈴木、佐藤、鈴木の四審判、プ軍先攻で十六対五、プ軍の勝。ビラジュサラ駅の日の出とリンスOBは、雨で二回中止。

### ◎再び三都市対抗戦 (ブ朝、三月四日)

先にバウルーに勝ったリンスは、二十三日午前十時からピリグイの日伯学園と対戦した。

B 051100000―7

― 00800111A―11A

午後三時からピリグイ対プロミソンは、

P 020110000―4

B 21142010A―11A

プ軍の斎藤投手をピリグイは打ちまくった。

◎聖市実業リーグ日程表

(ブ朝、二月二十三日)

西谷、羽瀬新加入。

- 3月 9日 目伯―時報、コチア―小西  
16日 羽瀬―西谷、蜂谷―カナカオ  
23日 聖報―海興、東棉―ブラ拓  
30日 コチア―羽瀬、日伯―蜂谷  
4月 13日 時報―カナカオ、小西―西谷  
20日 コチア―東棉、日伯―聖報  
27日 蜂谷―海興、羽瀬―ブラ拓  
5月 11日 西谷―東柿、カナカオ―聖報  
18日 目伯―海興、コチア―ブラ拓  
25日 小西―羽瀬、時報―蜂谷  
6月 8日 目伯―カナカオ、コチア―西谷  
15日 小西―ブラ拓、時報―海興  
22日 蜂谷―聖報、羽瀬―東棉  
7月 6日 西谷―ブラ拓、カナカオ―海興  
13日 時報―聖報、小西―東棉  
20日 優勝戦

◎新人軍の殊勲 (時、二月二十五日)

王者蜂谷を降す

蜂谷球場に於て午後二時半より新人対蜂谷の興味ある一戦を展開した。昨年のリーグの王者を向うに廻し、新人軍は覇気を以って対戦、佐藤投手を四回でKO、代った天野投手をも打ち砕いて一方的に快勝した。この日蜂谷は新人投手渋谷の速球が打てず、ノーヒット0敗を喫した。



蜂谷 00000000010  
新人 000332002-10

新人軍のメンバーは、投・渋谷、捕・藤村、一・竹田金、二・小田、三・木下、遊・上條、左・佐藤恵、中・本田、右・中林昌夫。新人軍第六回の二点は右翼手中林が、走者一塁で左越大ホームーで得たもの。彼一生の思い出となった。

### ◎第五回聖市実業野球リーグ戦開く

(時、三月十一日)

邦人体協主催、聖市実業リーグは、一昨九日力中尾球場で開幕、参加十二チーム、蜂谷を先頭に入場、優勝旗返還、会長挨拶、総領事代理成瀬領事祝辞、選手宣誓の後、日伯対時報、小西対コチアの二戦が行われた。劈頭！日伯に凱歌、山岸(球)、吉田、谷垣、中野塁審。

十一対7、時報小田投手の不振、日伯は砥上(三回)、竹田仙替り敵を制した。

コチア先づ楽勝！十七対四で小西敗る。

### ◎賑った力中尾球場 (時、三月四日)

海興十四対ブラ拓二、土曜、海興は渋谷の好投と本田、中林の活躍でブラ拓に楽勝。

日曜の蜂谷対コチア戦は、コチア失策多く十一対一で蜂谷が勝つ。

ブラ拓対サン・カエターノは、三回三点ブラ拓リードの時、沛然大雨来り中止。

◎チエテ楽勝対アリアンサ

(ブ朝、三月六日)

先日ルサンピーラ駅アリアンサ植民地のグラウンドで行われたチエテ対アリアンサ戦は、ア軍先攻で行われたが、十一対二でチが楽勝。

A 110000000-2

T 30001016A-11A

チ軍は八回に一番の伊木三葡強打、前田ライトゴロ、三番石井中堅越三塁打などで一挙六点を入れ楽勝した。

◎パラグアスーの少年野球

(ブ朝、三月十三日)

二月二十三日パラグアスー奨学舎グラウンドでリベイロ、太陽、パラグアスーの三少年チームが対戦した。

パラグアスー7A-6リベイロン

パラグアスー12A-2太陽

太陽7-0リベイロン

◎聖市実業リーグ開幕(ブ朝、三月十二日)

三月九日今年実業リーグがカナカオ球場で開幕され、初日は日伯対時報、コチア対小西の二試合が行われた。

時 003011011-7

日 60120011A-11A

日伯||安13、振5、失2

時報||安11、振9、失14

寸評 時報の小田投手、立上り悪く上條に替ったが、失策に敗れた。

4 6 9 9 7 5 1 2 8 3  
 岸道小鈴川笹苧白阿中  
 本田川木南原屋石部野  
 3 9 5 1 4 2 6 8 7  
 坂西中相鈴吉桑石和  
 倉野尾部木武原丸田

小メン  
 西バー  
 コチア

第二試合、  
 コチア  
 17  
 |  
 4  
 小西

9 3 4 7 8 1 5 2 6  
 中上西高木小相上  
 村村原橋下田部條  
 6 4 7 8 5 5 1 3 9  
 | | |  
 1 1 2  
 | | |  
 2 2 2  
 砥 瀬 田  
 上 戸  
 樋口

時メン  
 報バー  
 日  
 伯

2 安 7  
6 振 0  
1 5 失 6

◎マリリアの野球戦（ブ朝、三月十四日）

海興（K）、ブラ拓（B）、東山（T）、三銀行の面々、合  
同でカブトチームを編成、OBに挑戦したが、二十三対十五  
で兜をぬいだ。投手はOB村田、カブトは渋谷。

◎聖市実業リーグ（ブ朝、三月十九日）

十六日の成績、羽瀬12A—6西谷

メンバー

西谷 羽瀬

2 木 下 1 佐藤  
5 岡村 2 谷中  
1 三角 5 岡本武  
3 坂本 6 岡本保  
6 村山 3 森  
7 北野 7 木村  
8 春野 4 沖土居  
9 小林 9 田辺  
4 石見 8 求田

5 安 4  
1 1 振 7  
1 4 失 8

蜂谷8A—0カナカオ

K 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0  
 H 0 0 0 1 5 1 1 0 A - 8 A

メンバー  
 カナカオ 蜂谷

2	大坪	3	谷垣
9	桜井	5	笹原弟
1   6	山岸	2	竹田富
3	桜井弟	6	笹原兄
4	江藤弟	1	佐藤
8	江藤	4	天野
7	森田	9	高橋
6   5	吉本	9	天野弟
5   1	吉田	7	奥田
PH	中尾	8	池

1 安 8  
 8 振 9  
 5 失 3

寸評 期待された一戦だったが、力軍の投手山岸、中盤に乱打され、吉田に替ったが及ばず、意外な一方的試合となった。

◎サン・カエターノ勝つ対ブラスコット

(ブ朝、三月十三日)

去る九日聖市郊外のサン・カエターノでは、ブラスコットチームを迎えて初の交歓試合を行ったが、新人川村投手の好

投で勝った。

サ 110001100-4  
ブ 100000101-3

◎日曜のリーグ (時、十二月二十三日)

去る日曜のリーグ第二日、蜂谷対力中尾は八A対〇で蜂谷大勝、西谷対羽瀬は十二対六で羽瀬快勝す。

三月二十五日 去る日曜の海興対聖報、ブラ拓対束棉の二戦は雨で中止、来る四月六日行われる。

四月一日 実業リーグ第四日は、去る日曜、コチア対羽瀬は前者十六対十で勝、蜂谷対日伯は、前者が十四対一でコールド勝。

◎新体制となったチエテの野球

(ブ朝、三月二十九日)

チエテ青年連盟は、この程邦人体育協会に登録し、体協チエテ支部となったので、これを記念して第七回全チエテ青年野球大会を各バイロ七チーム参加で二日間開催したが、田口、村田のいる中央青年団が優勝した。

尚体協支部の総裁に郡長のカステリヨ氏、委員長にジヤイメ・ピント氏、審判長阿部彌門、元老川崎亡く、先輩辻川、菊池、中島が去ったが、田口、広田、村田など健在だ。

◎マジノ線突破さる (ブ朝、四月四日)

「野球王国」バストスの老童が都市交歓にプルデンテの青年、ニコニコ、学生の三チームを招いて現役、予備、後備の

三段構えで迎え撃ったが、プ軍は応援も一緒にカミニヨンで  
来征、午前十時から午後五時まで賑やかに交歓した。

ニコニコ28―7バストスOB

プ中学6―11バストス天狗

プ青年13―11バストス青年

◎日曜リーグ

(時、四月八日)

去る日曜行われた海興対聖報は十五A対〇五回コールドで  
聖報惨敗、東棉対ブラ拓は十回延長で十二対十一東棉の勝。

四月十五日

実業リーグ第五日目、時報、カ・ナカオを降す、七対五、  
時報小田、上條弟、カ軍山岸、吉田、吉本、両軍の投手。小  
西対西谷は十三対〇で前者勝、投手は小西・松野、西谷・三  
角。

◎ア・マシヤード支部対抗

(ブ朝、四月十二二日)

去る五日、六日の二日間、ソロ線のアルバレス・マシヤ―  
ドでは中央、第二、第三、第四と太平洋の五チームで支部対  
抗戦を行った。

戦績は次の通り、

中央19―8第四、第三16―3第二

太平洋12―5第三、第四17―第二

優勝戦 中央8―7太平洋

さすがに中央軍は強く、太平洋に逆転勝ちした。

◎聖市実業リーグ (ブ朝、四月十六日)

番狂わせ、時報、カナカオを喰う。

十三日の第一試合に、時報が大物カナカオを敗つてファンを驚かせた。時報は投手小田―上條の継投、力軍は山岸不調で吉本、吉田と替る。時報7―5カナカオ。

第二試合は小西の松野好投で西谷大敗。

小西13A―0西谷

◎今度は日軍の負け (時、四月二十三日)

サントスで日米野球、米船ブラジル号乗組員チームは、サントス邦人チームと去る日曜(二十日)、サントス球場で一戦、聖市から小田敏、竹田金の二選手参加、前半自軍二対一でリード、五回から米軍物凄く十八対八で米大勝した。

◎日米野球戦 (ブ朝、四月二十四日)

残念乍ら負けました

今迄何回か米国の貨客船がサントス港に寄泊する度に、サントスや聖市のチームに挑戦して敗れているので、今回のブラジル号の乗組員チームは雪辱の意気に燃えて一戦を申込んで来たので、邦人サントス・クラブではこれを受け、去る二十日同俱球場に見えたが、米軍は物凄い打撃を振り、十八対八で完勝した。尚次回は聖市に挑戦と意気まいていた。

◎日伯、聖報に七A―六で勝 (時、五月一日)

東棉、コチアに十二A対七で敗る。二十

七日の蜂谷、海輿戦は五A―四で蜂谷勝つ。羽瀨対ブラ拓



は、羽瀬が十九対九でコールド勝ち。

体協主催 四回全伯少年野球大会

(ブ朝、六月二十七日)

児団

開く至純の熱球譜 郷土の誉れ双肩に、相持つ七つの球

前年度優勝者Ⅱアリアンサ、準優勝・聖市代表Ⅱサンパウロ、オウリンニヨス地方代表  
Ⅱオウリンニヨス、奥ソロカバナ地方代表Ⅱプ・プルデンテ、パウリスタ延長線代表Ⅱ  
バストス、ノロエステ代表Ⅱピリグイ、聖西代表Ⅱ聖西

チーム名 アリアンサ サンパウロ 聖 西 オウリンニヨス  
プ・プルデンテ バストス ビリグイ

投手 羽田寅男 樋樫外治 馬場哲男 藤井春雄

靱井 実 嶋原竹重 矢島精八郎

捕手 山崎栄顯 荒川ペードロ 宮崎 学 志田パウロ

郡山重徳 八木暫彦 鬼塚 悟

一塁手 中尾喜博 酒井国正 松村昌之 稗田 進

佐藤二郎 崎田良平 斎藤千代松

二塁手 吉川ペードロ 石原輝明 池田光三 北川忠重

北條儀広 中原 昭 坂本 猛

三塁手 上野 直 渡辺高知男 大利 清 小林徳雄

高橋昭二 山岡 勇 田中信義

遊撃手 中村文雄 笹原武男 下元満里男 林田 カ

池田耕作 戸田 宰 山団保男

左翼手	実村文一	村井徹次郎	上岡文次	吉瀬万里男
吉田久郎	安東虎雄	犬丸末男		
中堅手	梅川 浩	吉雄アルツール	向井輝夫	長尾 幸
清水繁鷹	松村理次郎	松隈正実		
右翼手	林 利夫	藤井磯男	平田栄作	渡辺忠雄
菅野 誠	田地 昭	鐘ヶ江昭一		
補 欠	蓮沼 裕	石井英雄	竹田 茂	高橋 進
道浦繁春	安斉成夫	遠藤 栄		
〃	岡林 武	吉本知雄	西野俊一	小田譲二
西 祐弘	池田瑞穂	三保幸男		
〃	日高善弘	田所 競	田中政視	
〃	時川眞雄	八尋昭男		
〃	片山 勇	加藤		
	富田良介			
監 督	竹内 冠	坂田忠雄	北村米松	山田正雄
西 謙次郎	吉住 善	中島鶏郎		

◎第四回全伯少年野球開幕

ブ朝、六月二十八日)

昨二十七日待望の第四回全伯少年野球大会がピニエイロス区分カナカオ球場に全伯から選ばれた七つの珠玉球団を集めて開幕したが、二日前からの雨で練習も出来ず、この日も暗い空模様の下で始められた。

第一日第一試合は、成瀬総領事代理の始球で午前十時十五分、オウリンニヨス対聖西の一戦が開始、球審大坪、塁審桜井、谷垣、矢萩、聖西の先攻。

聖 西 3 4 0 2 0 2 1 1 2  
 オウリン 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0

メンバー  
 聖 西 オウリン

6 下元 2 志田  
 9 西野 3 稗田  
 8 加藤 5 小林  
 3 村松 1 藤井  
 7 上岡 6 林田  
 5 大 利 4 北月  
 4 池田 7 吉瀬  
 1 馬場 8 長尾  
 2 宮崎 9 渡辺

6 安 1  
 7 振 1 0  
 2 失 1 1

寸法 力量の差大きく、一方的となる。

◎第二試合 (ブ朝、六月二十八日)

午後零時十五分、一時間三十五分。

球審竹田仙、吉田、本郷、谷垣

サンパウロ 2 0 0 1 1 0 3 1 7

バストス 0 1 0 0 0 2 0 1 3

メンバー

サンパウロ バストス

8	7	7	3	6	2	1	5	4	9
吉雄	渡辺	村井	酒井	笹原	日高	樋櫛	吉本	石原	荒川
	9	8	7	6	5	4	3	2	1
	9	7	4	2	1	5	8	3	6
	村松	円治	中宗	八木	島原	山岡	安齊	安東	戸田

6 1 6  
失 振 安  
4 8 1

寸評 サの打撃と樋櫛の曲球が勝る。

◎第二日(二十八日) (ブ朝、六月二十九日)

午前九時二十分開始。

球審桜井、塁竹田富、吉田、矢萩

プルデンテ 1 0 0 0 0 0 0 1

ブリグイ 4 1 0 0 0 1 A 6 A

メンバー

プルデンテ  
ブリグイ

5	9	1	8
高松	菅野	初井	清水
4	3	2	1
2	6	5	3
鬼塚	犬丸	田中	松隈

6	池田	5	1	矢島
3	佐藤	6	7	斎藤
4	北條	7	4	坂本
2	郡山	8	9	鐘ヶ江
9	吉田	9	8	山田
		9	9	遠藤

寸評 プの初井乱調に引きかえ、矢島の豪速球実に十八の三振をとる。

◎最終日(二十九日) (ブ朝、七月一日)

準決勝＝午前九時二十分より一時間四十分。球審竹田

富、墨谷垣、園田、矢萩

聖西 002001-3

サンパウロ 130000A-4A

メンバー

聖西 サンパウロ

6	下元	1	9	荒月
9	西野	2	5	吉本
8	加藤	3	1	樋櫛
3	松村	4	2	日高
7	上岡	5	6	笹原
5	大田	6	4	石原
4	池田	7	7	渡辺

1 竹田 8 酒井  
 2 馬場 8 井  
 3 宮崎 9 8 吉雄

5 安 2  
 3 振 1 1  
 6 失 6

寸評 聖西は投手起用を誤る。

準決勝出 午前十一時三十分より、一時間二十五分。

球審大坪、墨吉田、本郷、桜井

アリアンサ 0 0 0 1 0 0 0 1  
 ピリグイ 1 1 2 4 0 0 A-8 A

メンバー  
 アリアンサ ビリグイ

			9	5	8	3	4	7	6	2	1
			林	上野	梅川	中尾	橋爪	実相	羽田	山崎	中村
6	1	3	9	8	7	6	5	4	3	2	1
失	振	安	8	9	5	4	2	1	7	6	3
0	2	7	山田	鐘ヶ江	田中	阪本	鬼塚	矢島	斎藤	犬丸	松限

寸評 全く実力の差。

◇特記 ビ軍の矢島投手は対プルデンテに18対アリアンサに18、三振奪取。

◎決勝戦

(ブ朝、七月一日)

二十九日午後三時より一時間三十五分。

球審竹田仙、塁園田、中野、矢萩

ピリグイ 0 1 2 0 3 0 0 1 6

サンパウロ 0 0 1 0 0 0 2 1 3

サンパウロは一塁側、坂田監督両角校長など。ピリグイは中島監督、松隈、佐々木、中西、梶家諸氏。五百kmの奥から二十数名の応援団。

試合経過

一国は両軍無為。

二回ピ軍は鬼塚、矢島、山田、田中の四安打で一点先取。

三国にも石場の四球、斎藤、鬼塚の安打で二点追加。この裏サ軍は二死後、荒川捕手の打撃妨害で出塁、二、三盗に成功、吉本の安打で還り一点、三対一とする。

五回は樋櫛の疲労はげしく、吉本救援したが、一塁手失後、鬼塚三本目の安打で坂本還り、矢島四球に続く犬丸遊葡一塁へ高投で鬼塚ホームイン、山田の遊葡も一塁手矢で矢島還り一挙三点、六対一試合を決定的にした。

七回蓑サ軍最後の攻撃、トップ日高の飛球は野手落球に生き、続く笹原右中間に痛打で日高還り、投手の牽制悪く笹原も還って二点、六対三と追いつがる。両軍の応援は総立ち球場は興奮の絶頂に達する。二死後酒井四球を選び望みはラストの吉雄、二球を強打したが左翼フライで斎藤好捕して終

る。

記、サ軍は健闘したが、剛速球と曲球シュートなど完璧の矢島に押えられた。

メンバー  
ピリグイ

サンパウロ

3	松	隈	1	9	5	荒	川
4	坂	本	2	5	1	吉	本
7	斎	藤	3	1	3	樋	樫
2	鬼	塚	4	2		日	高
1	矢	島	5	6		笹	原
6	犬	丸	6	4		石	原
8	山	田	7	7		渡	辺
5	田	中	8	3	9	酒	井
9	石	場	9	8		吉	雄
9	三	保	〃				
7		安	〃	4			
2		振	1	6			
3		失	6				

### 閉会式

野村大会副委員長より大優勝旗はピリグイに。

打撃賞 聖西松村一塁手 ○・五七一

美技賞 サンパウロの吉本三塁手

成瀬領事の閉会の辞、追記、ピ軍矢島投手で“鉄腕”という言葉が生れた。

◎聖市実業リーグ

(ブ朝、七月九日)



去る六日の二試合の成績（カ球場）。

ブラ拓 1 3 | 2 西谷

メンバー

ブラ拓

西谷

6 佐藤 恵 1 岡村 上

5 佐藤 久 3 藤村 倉

4 高津 4 木下 角

3 横溝 6 三木 角

2 加藤 8 石見 野

1 竹内 9 阪本 見

5 安 2 失 1 2

寸評 四戦全敗同志の対戦、ブラ拓大勝に終る。

海興 1 2 | 1 カナカオ

メンバー

カナカオ

1 | 5 | 6 吉本

2 大坪 4 竹中 部

1 山岸 3 中林

3 桜井 弟 6 本田 林

8 江藤 5 1 渋谷

9	桜井兄	6	8	赤川
9	中尾	7	9	赤尾
5	1吉田	8	7	鳥賀陽
4	江藤	9	3	熊谷
7	森田			

2	安	7
10	矢	3

寸評 好試合を予想されたが、海興の溝部、竹中、本田などの好打と、渋谷の速球で一方的となる。

◎球信二つ

(ブ朝、七月九日)

蜂谷对小西の練習試合は、六日午前九時から蜂谷球場で行われた。小西の松野、蜂谷の佐藤の好投で好試合を展開、四対三で蜂谷が辛勝した。一時間と二十分。

ブラザース対吉井茶店チームの試合は十一対三でブ軍が大勝した。

◎北巴カンパラ支部予選 (ブ朝、七月十五日)

カンバラ支部予選は六月二十九日カンバラ球場で行われた。参加は前年度の優勝チームアグア・デ・コケイロと、カンバラ、ビラ・ジャポネーザの三チーム。午前十時より、カンパラ対ビラ・ジャポネーザは、ピ軍の川畑好投したが、八回勝野の三点ホームーに敗れた。十三対六。アグア・デ・コケイロ対カンパラは力軍の大勝、三チームの選抜で北巴大会に出場する。

◎聖市実業リーグ

(ブ朝、七月十六日)

去る十三日は聖報が棄権で時報は不戦勝。午後三時より小西対東棉戦が行われた。

K 1 0 2 0 0 0 1 1 0 ー 5  
 T 0 5 0 0 0 2 0 1 A ー 8 A

メンバ―  
 小西 東棉

3	1	苧	谷	6	吉	田
4	6	道	田	1	山	下
3	1	中	野	5	藤	原
2		白	石	2	前	山
5		笹	原	3	上	田
1	3	松	野	9	木	伊
9		阿	部	4	田	上
9	4	岸	本	8	綱	島
8		鈴	木	7	山	本
	1		2	失	1	0
	3		安	5		

寸評 小西の松野病気で東棉有終の美を飾る。

◎聖市実業リーグ成績（ブ朝、七月十六日）

A組	蜂谷	全勝	B組	コチア	全勝
	海興	四勝一敗		小西	三勝二敗
	日伯	二勝三敗		羽瀬	三勝二敗
	カナカオ	二勝三敗		東棉	三勝二敗

時報 二勝三敗  
聖報 全敗  
ブラ拓 一勝四敗  
西谷 全敗

打撃五位まで

1	竹田(蜂)	23	11	四七八
2	本田(海)	22	8	三六四
2	中林(海)	22	8	三六四
4	中尾(コ)	23	8	三四八
5	森(羽)	21	7	三三二

◎全伯野球、南聖地方予選終る

(ブ朝、七月十一日)

サントスに凱歌、新進レジストロ潰ゆ。

第六回全伯野球南聖地方予選は、去る六日レジストロ青年会主催でレ市球場に於いて行われたが、参加はサントスとレジストロの二チームだけであった。

R 210010304-11

S 302010000A-19A

メンバー

レジストロ

サントス

8	山崎	1	6	3	柳沢
2	隅田	4			梅木見
9	村上	5			平田
4	吉岡	3	1	3	小田
3	出利葉	4			梅木
7	小川	7			石木
5	6玉田	8			青木

1—5 小松 9 高橋  
6—1 隅田 6—1 久米

寸評 中盤までは大乱戦、八回サ軍の猛攻で十点が決定的となる。

◎聖市リーグ決勝戦 (ブ朝、七月二十三日)

第五回聖市リーグの決勝戦はA組の首位蜂谷とB組の首位コチアで闘われたが、五対三で蜂谷勝ち、三連覇した。二十日午後二時十五分より。桜井(球)、本郷、中野、矢萩、蜂谷先攻。

H 220001000—5  
C 101000010—3

コは桑原先発、相部救援、蜂谷は佐藤完投。九回裏、コ軍石丸三塁打、吉武四球で逆転の好機、中尾、木下三振、代打西野一塁に強打、谷垣ジャンプで救う。

◎グアララペス球界 (ブ朝、七月二十日)

ノロエステ線は名にし負う激戦地、各チームが猛練習中だが、新興のグアララペスは来る八月三日中央グラウンドで管内支部対抗を行うよう決定した。

尚去る十三日のプロレスタ対フィゲイラ戦は、大接戦の末五対二でフ軍が快勝、フアンの血を沸かした。

◎汎パラナ、バンデイランテ区予選

(ブ朝、七月二十三日)

北パ、ハンデイランテ地区予選は、去る

十三日同市球場で野村、アルト、ハンディランデの三チームで行われたが、アルト対バンディランテは十対〇でアルトの勝、野村対アルトは、大接戦の末、十三対十でアルトが勝ち、来る八月八、九日の全パラナ大会にアルトチームの出場が決った。

◎聖市で野球戦二つ (ブ朝、七月二十五日)

二十日午後、日伯カンポでの勤労対吉井戦は勤労大活躍で十九対九、吉井チームを降した。

カーザ東京大勝

新生のカーザ東京チームは、去る二十日カーザ・ベルデの球場で笹岡商店を中心とする読菜市場チームと一戦を交え、堂々十六対四で勝ち、結成旬日ならずで輝く初白星をあげた。

◎奥ソロの球熱 (ブ朝、七月二十九日)

全伯大会のソロ線予選の前哨戦、パラグアスー、プ・プルデンテ、ア・マシヤードの三雄が去る十六日プルデンテ市球場で相会した。

第一試合 パラグアスー11―8プルデンテ

第二試合 プルデンテ5―1マシヤード

第三試合 マシヤード17―8パラグアスー

◎オラトリオ、十六対五でカナカオを破る

(ブ朝、七月三十日)

昨年の全伯で大敵チエテを死地に追い込んだオラトリオ

は、最近ビリグイ出身の剛球投手勝間田を加え、小沢の曲球とで八月九日の聖市予選に乗り込むことになった。

汎ポンペイア予選、中央軍が全勝

全伯パウリスタ予選の汎ポンペイア予選が去る四日から三日間行われ、一位中央、二位植民地、三位希望、四位サンタ・イーリヤとジャトバ。

### ◎汎ソロ予選

(ブ朝、八月十四日)

去る十日午前八時よりプ・プルデンテ球場にて今年度の汎ソロカバナ予選が行われた。参加は前年度の覇者ア・マシヤード、プ・プルデンテ、サ・アナスタシオ、マルチノポリス、パラグアスー、オウリンニヨスの六チーム。川口総裁の始球の後、第一試合プ・プルデンテ対ア・マシヤード、プ軍先攻。

P 20000211-6  
M 102000020-5

寸評 プ軍は比嘉投手、マ軍は二宮の先発、投打の応酬で八回同点、九回表プ軍三浦の安打で決勝点をあげる。

A組熱闘を展開、三球団一勝一敗

プ・プルデンテ6-5ア・マシヤード

ア・マシヤード10-7サ・アナスタシオ

サ・アナスタシオ4-3プ・プルデンテ

第二日パラグアスー対マルチノポリス戦は

パ軍21、マ軍5。パは世評に違わず松山兄、小島の二本塁打でマ軍に圧勝した。

◎汎ソロ予選A組は再び三者同率

(ブ朝、八月十五日)

第三日(十二日)

ア・マシヤード8―5プ・プルデンテ

サ・アナスタシオ11―4ア・マシヤード

プルデンテ対サ・アナスタシオ戦は十三日午前、全観衆注目裡に俄然物凄い激戦を展開し、プ軍が5―4で辛勝、再試合へ持越す。

S 111000010000―4

P 010001020001A―5A

プ軍は三浦投手、サ軍は西投手。十二回表サ軍の攻撃は無死満塁となったが、不運得点ならず、その裏プの最後の攻撃に二死走者三塁に、打者池田は投葡、これを投手本塁に投げ走者を挟むも三塁手捕手に低投し決勝点を与える。三時間の激闘、再同率となる。

◎汎ソロ予選(最終)(ブ朝、八月十七日)

息づまるシーソーゲームを展開、二度まで同率のA組リーグは、協議の結果抽籤によるトーナメント決定、十三日アナスタシオ対マシヤード、十四日プルデンテ対一次勝者、その後パラグアスー(B組勝者)対A組勝者。

サ・アナスタシオ対ア・マシヤード戦。

S 000000203―5

M 040000002A―6A

サ軍は山崎、マ軍は池田投手先発。



寸評 両軍共に疲労で攻撃ままならず、最終回サ軍渡辺の安打で堂々の三点を入れ五対四と逆転したが、その裏マ軍も見事に二点を加えて快勝した。

◎ソロ予選（最終）（ブ朝、八月十九日）

十四日午前九時十分、プ軍先攻。

P 103101500-11

M 102000010-4

マ軍は極度に疲労の二宮を、プ軍は三浦をプレートに送る。七回にプ軍は門谷、池田、三浦が三連安打で五点を入れ大勢を決した。

決勝、パラグアス―不運降雨コールド。

パ 0001001-2

プ 0001110-3

プルデンテ輝く制覇、全伯へ出場を決める。

◎全伯野球、サンパウロ地方予選

（ブ朝、八月十二日）

全伯野球サンパウロ予選は九、十の二日間、東山球場で行われ、セントラル二勝、オラトリオ一勝一敗、聖西（コチア）二敗で、セントラルが代表権を握った。

第一日（九日）

セントラル9―3オラトリオ

オラトリオ6―5聖西

第二日（十日）

セントラル13―10聖西

一轟

寸評 何れも好試合だったが、セ軍攻守に一日の長あり、今年度の近郊代表となる。

三球団のメンバーは、

聖西 オラトリオ セントラル

6	鈴木	6	木村弟	2	土肥
9	和田	4	高坂	6	木下
4	桑原	2	木村兄	7	桑原弟
2	吉武	8	一色	8	誉田
8	石丸	7	勝間田	1	大久保兄
5	中尾	1	小沢兄	4	山脇
7	木下	9	中熊	9	高松
7	西野	7	高田	5	桑原兄
1	相部	3	小沢弟	3	北原
3	坂倉				

◎一瞬阿鼻叫喚、野球大会帰途の奇禍

(ブ朝、八月十五日)

今年の全伯、パウリスタ予選がマリリア市で行われ、ポニア軍が優勝、そのポ軍選手満載しての帰途、カミニヨンと衝突、惨！重傷者六名、軽傷十名(速報と大書されている)。

◎全伯野球、北パラナ予選

(ブ朝、八月十六日)

今年度の北パ予選は、好天の八、九日ロンドリーナ球場に前年度の覇者サンタ・マリアナ、カンパラ、ピリアニト、トレス・バラス、ロンドリーナの五球団で行われ、熱戦の末カンプラが凱歌を挙げた。ロンドリーナ不戦一勝。トレス・バラス対サンタマリアナ。

S 201010001-5

T 21000131A-8A

寸評 新興のト軍必死の攻撃で一勝。

カンパラ対ピリアニト。

P 100102000-4

C 11611110A-12A

ロンドリーナ対トレス・バラス。

001002043-10

T 201120001-7

寸評 五回までト軍リードしたが、高橋投手疲れ、林の救援もコントロールなく、ロ軍に打ちまくられた。

北パ予選第二日。

三位決定戦トレス・バラス対ピリアニト、五回コールドゲーム。

T 54321-25

P 10000-1

優勝戦カンバラ対ロンドリーナ

001101100-4

C 01000386A-18A

寸評 口軍は大沼兄弟、カ軍は勝野、西のバッテリー、前

半は手に汗を握ったが、大沼疲れ菅田救援も猛打された。

第六回全伯のパウリスタ予選は、十四日マリリア市に於いて行われたが、八月十五日付のブ朝日紙に、速報として報ぜられた通り、ポンペイア軍が決勝で宿敵バストスを敗り、歓喜に沸いての帰途輪禍に会い、一瞬のうちに選手応援団に十数名の死傷者を出し、第二位のバストスが代理として大会に出場したが、

その時のパ軍のメンバーは

投 高 木  
捕 山 本  
一 中 川  
二 滝 石  
三 岡 村  
違 工 藤  
左 太郎田  
中 渡  
右 加 藤  
監督 横 井  
主将 太郎田（衛）  
なお死亡は梶尾、  
重傷は岡村、渡。

◎全伯野球、パウリスタ代表

（ブ朝、八月二十日）

輪禍のポンペイア棄権、二位のバストスが出馬、不運の球

友のため必死の覚悟 既報全伯パウリスタ予選に輝く優勝の  
ポンペイアチームは、その帰途カミニヨンの事故で選手七名  
重傷の悲惨事を起し、喜びは一瞬不幸のどん底、出場不可能  
と体協に棄権を申出て、その結果二位のバストスが代って出  
場、不運の僚友の為に力闘することになった。

◎ノロエステ予選 (ブ朝、八月二十一日)

第一日第一試合、九時三十分、カスチーリヨ市長の始球式  
後、アリアンサ先攻、チエテは田口、ア軍は弓場の対立、凄  
絶の気満ちた。

A 1000020100-4

T 0001000301A-5A

メンバー

アリアンサ チエテ

2 大山 4 藤川

5 清 7 斎藤

8 佐藤 8 広田

3 望月 6 北出

1 弓場兄 1 田口

7 花岡 9 東

9 馬場 3 山本

6 弓場弟 5 石井

4 箕輪 2 村田

寸評 八回表に四対一としたア軍、その裏同点とされ、十  
回の裏当り屋の北出にサヨナラ安打されて敗れた。

第二日第三試合、チエテ対ビリグイ。

ビ軍はチエテを抑えるかと思われたが、

B 0100000001

T 00000002A-2A

寸評 ビ軍二回に捕手の後逸で一点を得たが、その後、両軍とも点にならず、九回裏、一死後、斎藤の二葡を野手トネル、二盗し広田の三葡一塁手離塁で二、三進、北出の二葡で斎藤還り広田も本塁へ殺到、一塁手からの送球を捕手落球で、ウツチャリとなる。

◎体協主催、第六回全伯野球の組織

(ブ朝、八月二十三日)

名誉会長 パジリヤ大尉

会長 山本喜誉司

副会長 矢崎節夫、野村忠三郎

委員長 蜂谷専一

委員 石原桂造、藤平正義、法華茂、

山崎貞二、桜田松麿、溝部義雄

審判員 大坪愛児、竹田仙造、谷垣正己、

山下寛人、園田新、桜井熊三、

江刺家勝、笹原盛雄、仲野栄三

郎、矢萩富士男

記録員 竹田富蔵、多田栄一郎

進行係 樋口謙三

整備員 実業リーグ各チームより二名宛

大会プログラム 開会式陽二十九日午前九

時、第一日 十時

第一試合 カンパラ対プルデンテ

第二試合 サントス対バストス

第三試合 チエテ対セントラル

第二日 九時第一準決、十四時第二準決勝

第三日 十時三位決定戦、十四時決勝戦

◎第六回全伯大会（一九四一年）メンバー表

サンパウロ

投手 佐藤、渋谷、

小田

捕手 本郷、溝部、

相部

一塁 中林

二塁 武藤

三塁 本田

遊撃 上條、山岸

左翼 竹田金吾

中堅 竹田富男

右翼 木下正夫

監督 吉田光雄

チエテ

投手 広田、田口

捕手 村田

一塁 山本

二塁 藤川

三塁 石井

遊撃 北出

左翼 斎藤

中堅 広田、田口

右翼 東

補欠 坂本、前田、

土屋、今野、

本田

監督 斎藤

主将 東徳助

バスターズ

投手 北谷、古川

捕手 山内、石井

一塁 板垣

二塁 田地、伊藤、

久藤

三塁 高柳、渡部

遊撃 小野

左翼 茂庭

中堅 西、若野

右翼 茂庭、加藤

補欠 竹内、吉住、

高柳

監督 上田

セントラル

投手 大久保（兄）、

大久保（弟）

捕手 土井

一塁 北原



二塁 山脇

三塁 川原(兄)

遊撃 木下

左翼 川原(弟)

中堅 本田

右翼 高松

補欠 岩根、小林

監督 北原

コーチ 大久保、岡田

主将 川原良一

プ・プルデンテ

投手 今井、三浦、

比嘉

捕手 岩村、森谷

一塁 野本

二塁 池田

三塁 檜作

遊撃 伊東

左翼 門谷

中堅 森谷

右翼 大城

監督 吉村

コーチ 松田、島之江

主将 岩村

サントス

投手 久米、小田

捕手 梅木（弟）

一塁 藤倉

二塁 梅木（兄）

三塁 平田

遊撃 広田

中堅 柳沢

右翼 石木

左翼 一色

監督 千田

主将 石木

カンパラ

投手 川端、勝野、

今津

捕手 松岡、西

一塁 山口

二塁 サラト、小原

三塁 勝野

遊撃 鍋島

左翼 片山

中堅 古郷

右翼 坂田

監督 山縣次郎

コーチ 矢野六郎

主将 川端

◎晴れの日に償う（ブ朝、八月二十九日）

全伯一の球場へ、サント・アマロ電車線

十四トンの地均しローラ出陣

だが途端にエンコ、引出しに汗だく

大会場の東山球場は、去る二十二日より十四トンの地均し大ローラ出陣し大活躍だが、二十三日午後一時ごろ地盤の弱い処にはまりこみ、二十五日サンパウロ市に只一つのジャッキでやっと引出した。地均し工事は二十六日に完了した。

◎第六回全伯野球大会開幕

(ブ朝、八月三十日)

第一日(二十九日) (午前十時開始)

第一次試合 カンパラ対プ・プルデンテ

プ軍先攻、大坪(球)、谷垣、山下、矢萩

P	0	0	0	0	0	3	0	0	—	3	1	1	0	1
C	0	0	0	0	0	0	0	0	—	0	5	2	8	8
											安	振		失

メンバー

カンパラ プルデンテ

2	西	7	大	域	
5	今	津	8	柳	木
9	光	岡	6	伊	東
1	勝	野	3	門	谷
6	鍋	島	5	檜	作
4	実	藤	1	三	浦
8	小	野	4	池	田
7	川	畑	2	森	谷
3	山	口	9	岩	村
4	—	6	桑	原	



チ軍先攻、竹田仙(球)、園田、山下、矢萩

T 5 0 1 0 0 0 1 0 1 - 8 6 4 7

— 安振失

C 0 0 0 2 0 0 1 0 0 - 3 6 5 7

メンバー

セントラル

チエテ

6	土居	5	石井
8	誉田	1	田口
5	木下	8	広田
7	桑原弟	6	北出
4	山脇	7	斎藤
1	大久保	4	藤川
9	高松	9	東
9	大久保弟	2	村田
2	桑原弟	3	山本
3	北原		

寸評 チ軍田口、セ軍大久保、投手力が勝負の差であった。

(編注 時局の影響を受けて、日本字紙は日本語の使用を禁止され、一九四一年八月三十一日版から全面葡語となり、第六回全伯野球大会の記事も、第一日の二十九日行われた三試合まで、ブラジル朝日紙に日本語で報道されたが、第二日から後は葡語のみで記載されていた。)

◎第二日(三十日) (ブ朝、八月三十一日)

プ・プルデンテ対サンパウロ

正午より、サ軍先攻。

(注、これより後は竹田彰介の記録による。)

S 1 4 1 3 0 0 1 2 0 1 2 1 4 2 3

— 安 振 失

P 0 0 0 1 0 0 0 0 0 1 1 5 6 1

大坪(球)、開田、谷垣、笹原。

メンバー

プ・プルデンテ サンパウロ

7—9 大 城 3 中 林

8 柳 木 7 竹 田 金

6 伊 東 8 竹 田 富

3 門 谷 9 佐 藤

5 檜 作 PH 相 部

1—7 三 浦 5 木 下

4 池 田 5 本 田

2 森 谷 6 上 條

9 岩 村 1 渋 谷

1 比 嘉 2 溝 部

1 今 井

寸評 プ軍は善闘したが、力の差大きく完敗した。

第五次試合 バストス対チエテ

バ軍先攻(午後三時より)

竹田仙(球)、笹原、山下、矢萩

B 0 0 0 0 3 0 0 0 1 0 0 0 0 1 4

T 0 0 1 0 2 0 1 0 0 0 0 0 0 1 4

メンバー  
チエテ  
バストス

5	石	井	8	西	
8	田	口	4	田	地
1	広	田	3	板	垣
6	北	出	5	高	柳
7	齋	藤	7	茂	庭
9	東		1	北	谷
4	藤	川	6	小	野
2	村	田	2	山	田
3	山	本	9	吉	川

0 6 6  
失 振 安  
0 4 1 0

寸評 交通事故で棄権したポンペイアの代理バ軍は、北谷投手を中心に全軍火となり、九回一点を入れて四対四、延長十三回、暗黒にて続行出来ず、審判及び大会委員協議の結果、翌三十一日午前八時より新たに再試合とした。

第三日(三十一日)

B 1 0 1 1 0 1 0 0 0 1 4 4 2 2

— 安振失

T 0 0 0 0 0 0 0 0 0 1 0 1 2 7

寸評 前日の十三回延長ドラゴンゲームの疲れも見せぬバ軍の北谷投手は、この試合でも力投、ナインの好打もあって四対〇でチ軍を降し、勝ち残った。

7	6	3	9	5	8	プルデンテ	メンバー	P	0	0	0	0	0	9	7	0	A	—	1	6	A	9	6	3
三	伊	門	大	檜	柳																			
浦	東	谷	城	作	木																			
3	1	6	8	9	5	チエテ																		
村	田	北	広	山	石																			
田	口	出	田	本	井																			

安振失

T 0000000213 319  
 三十一日第三位決定戦、チエテ対プルデンテ、十一時四十五分より、桜井(球)、園田、中野、谷垣。



1941年8月マリリアで行われたパウリスタ予選大会で宿敵バストスを破って、全伯大会の出場権を握ったが帰途交通事故に会った。



1941年優勝旗を受けるボンベア軍主将。



2 岩 村 7 坂 本  
 4 野 本 4 土 屋  
 1 今 井 2 藤 川

寸評 チ軍は疲労、プ軍の一方的に終わった。

決勝戦、サンパウロ対バストス

午後一時二十分より四時五分まで、二時間四十五分。

大坪（球）、谷垣、笹原、矢萩、サ軍先攻。

S 0 0 0 0 1 2 1 1 1 1 6 8 3 3

— 安振失

B 0 0 0 3 0 0 0 0 0 0 3 4 2 4

メンバー

バストス サンパウロ

8	西	3	中	林
4	田 地	7	竹 田	金
3	板 垣	5	本 田	田
5	高 柳	8	竹 田	富
7	茂 庭	4	武 藤	藤
2	石 井	9	木 下	下
6	小 野	6	上 條	條
1	北 谷	1	佐 藤	藤
9	古 川	2	本 郷	郷
		2	溝 部	部

寸評 昨日の十三回延長戦と、又今朝の九回戦を投げきつたバ軍の北谷投手は、この決勝戦でも力投、四回には三点先取して五千の観衆を沸かせたが、強打好守揃いのサ軍に、六

対三で敗れた。だがこの北谷の健斗には、敵味方なく大拍手を惜しまなかつた。四回のバ軍三点は、二死後三番板垣三遊間安打二盗、高柳四球の後、茂庭三葡矢で満塁、続く六番石井の一打は、右翼に上り、風の為か名手木下右翼手安打とし、この間走者一掃三点を先取、サ軍の応援心胆冷える。五回表一点を返したサ軍は、六回中林、本田、竹田富の三安打二点で同点とし、七、八、九回にも各一点を加えて勝利を確実にした。昨年引き続き二連覇、大優勝旗は主将中林の手に握られた。

(編注、この年の十二月七日、日米開戦、第二次世界戦争となり、一九四五年まで公式戦は中止された。)

#### 鈴木威小伝

三重県宇治山田の産、同市中学を卒業。単独で渡伯、アリアンサに十アルケレスを購入、一九二六年入植した。同じ年に弓場勇も入植し聖市に遠征したが、この時は同行せず翌二十七年に捕手で上、聖、ミカド、アニューマス、レジストロ、ラツパ等と対戦して優勝し、鮫島大優勝旗を、ノロ線奥に持ち帰ったのである。この時の監督は伊藤徳正、メンバーは手塚、望月、鎌田、手島、大山、瀬戸などであった。

然しその翌年には聖市に移り、ミカドクラブに入部したが、弓場三連勝でミカドは衰退し、彼はマツケンジー大学に入学、学内にチームを作り、工学を修めるかたわら、幾分下火になった聖市球界に活を入れ活躍した。米国人をコーチに

雇ったのも、その頃だという。この時代の勉学が、今日工芸家として一家をなしている礎を作ったのである。

彼は多芸で、特に日本古芸能の、深奥を極めているのを知る人も多い。一九〇八年生れ、健在である。

### 蜂谷榮の小歴

一九〇八年五月一日愛媛県松山市に産る。一九二六年十一月、呼寄せ単独で渡伯、同二十七年聖市蜂谷専一商会に入り、その温厚と勤勉を見込まれ、蜂谷の養子となり（旧姓・越智）今日に至る。一九二八年にはミカドチームの左翼を守ったが、一九三七年蜂谷チーム結成で総監督となり、聖市実業リーグで三十九年、四十年、四十一年と三連覇した。

### 西 功小歴

父の静一は三重県の出身。一九二九年バストスに入植、植民地草分けの一人である。五男一女に恵れ、彼功はその次男。長男の徹は一番野球に優れ、名外野手として鳴らしたが後審判員となり、彼の球審振りを好む者が多かった。バストス市の市長となったが、誠実と円満で好評を受けた。弟の礼三、澄司、登など皆野球をやったが、功は余り上達しなかった。一九四六年聖州野球連盟が正式に登録され、一九四七年の一月第一回から初代会長オリンピオ・ダ・シルバ氏が就任、九期を勤めた一九六五年、改選に西功は第十期会長に選出され、現在まで十期を勤めている。

一九七六年に、球連創立三十周年を記念して、"ブラジル

野球史」の編纂を思い立ち、竹田仙造と横田守正に委嘱して、その執筆に当らせたことは、他の稿にもある通りである。

### 高柳清小伝

高柳は群馬県伊勢崎境の産、一九三二年八月父豊五郎、母つると兄弟四人で叔父の武七郎に呼び寄せられて、バストスに入植した。

彼は次男で十一才。早速当時の少年野球監督斎藤太郎の許で野球を始め、強肩と好打、素質のよさを見せ、一九四一年の第六回全伯にポンペイアチーム輪禍の代理で、東山大会にバ軍三塁手として参施した。当時十六才の若年である。この大会対チエテ戦は、十数回同点日没で翌日やり直し、四対〇で勝ち決勝にサンパウロと対し六対三で準優勝となった。もうこの年にはコチア産組に職員となり勉学を続け、戦後球連が正式組織され、西功二代会長となるや技術部長の要職で活躍をしている数少い戦前派である。

### おわりに

さて、いよいよ巻末になったので、いくつかの言葉を加えて、締めくくりとしたい。

何故この事を上巻としたか

野球は当国で実際には一九何年からか、在伯米国人の間に行われていたのであったが、ブラジルの野球として歴史の上に書き留めるとなると、どうしても一九一六年に日系コロニア人の始めたのが、当時の新聞その他にも書き残されていて、試合の形をなしていたし、その後の発展や変遷からも、そのまま伯国野球と言えるのであるが、一九四一年に日本が大戦に参加した余波をうけて、コロニア人の集合が禁止された関係で、同年行われた第六回全伯大会を最後に、実質的な野球活動は中止され、休眠状態となり、或る地方では特殊な事情で、非公式試合が少しばかりあったけれども、それは野球として書き残す程のものではなかったもので、この空白時代を一区切りと考えて、それ以前のを纏めて上巻と名付けたのである。従って、その後のいわゆる戦中に行われたものや、終戦と同時に結成された聖州野球連盟、引続いての華々しい発展などは、凡て何れの日か、適当な仁の筆によって、中巻或いは下巻として、書き次がれる筈である。

### 「千代女の場合」

この書の中に「千代女の場合」というのがある。これは実話なのだが、当人の希望で一挿話とした。

当国の野球は、事実日系コロニアの中に生れ育った為に、このような話が数限りなくあって、それがこの国の野球の特質とも思うが、そうした家庭の犠牲、蔭の力に感謝したい気持ちで、特に書き入れたのである。

又この書が書き始めてから丸九年もかかったのは何故か。

色々事情はあったにせよ結局は編者の非力からで、この点深くお詫する。特にこの間、多くの先輩を冥府に送り、折角の御協力に報いられなかったのは、何んとも申訳ないことであつた。次にその主な方々のお名前を書き留めて、謝罪の意を含め、御冥福を祈りたい。

(順不同)

弓場 勇	西村 榮一	木村 俐	谷垣 正己
大坪 愛児	中島 正	本郷 孝	木村 伯男
北原ネルソン	江刺家 勝	久万 浩	竹田 富男
蜂谷 専一	横溝 一男	望月数太郎	吉田 光男
進藤 満			

(合掌)

下手な編集で、お恥しいものしか出来なかつた。読者の中には、御自分のことが載っていないなどという御不満の方もあろうかと思うが、あれこれ文献を換り、少しでも真実に近いものをと努力した。

## 編集後記

◎此のブラジル野球史・上巻発刊に当り日本野球連盟・(財)日本高等学校野球連盟・全日本大学軟式野球連盟・(社)少年軟式野球国際交流協会・株式会社東芝の諸連盟・協会・会社には特別の御協力、御援助を賜り厚くお礼申し上げます。

◎題字は渡部 重画伯にお願い致しました。

◎カットは各スポーツ誌・各雑誌より選び使用しました。

◎此の製本・作成・校正については、全日本大学軟式野球連盟・木村 昭氏（関西学院大学）には色々とお世話に成りました。

◎ブラジル野球史・上巻発刊・印刷には特に尼崎印刷株式会社に御協力賜り感謝します。

◎永年にわたって、蓄積された記録・記事等の整理などで九年以上、発刊に手間取りましたが、

横田守正氏を中心とする編集委員の努力が実ってここに本書を世に送る事が出来、大きな喜こびとするものです。

本書執筆に当って参照した資料は次の通りである。

#### 参考文献

◎伯刺西爾時報、日伯新聞、聖州新報、この三新聞は、聖州義塾という学生寮を経営していた小林美登利氏が保存していた。

◎香山六郎回想録、著者・香山六郎

◎ブラジル移住と随想録、著者・横溝一男

◎バストス二十五年史、著者・水野昌之

◎第三アリアンサ創設五十年史

編集発行者・第三アリアンサ区長会

◎チエテ十年史、刊行者・チエテ自治会

◎ブラジル邦人名録

編集発行人・進藤憲吉、山下寛人

ブラジル野球史 上巻

発行 CONFEDERACAO BRASILEIRA DE DESPORTOS

TERRESTRES

DEPARTAMENTO DE BASE-BALL E SOFT-BALL

Rua da Gloria, 332 2. o, conj. 24/26 - Telefone:  
278-2800 - CEP 01510 - Sao Paulo

Filiados:

Federacao Paulista de Base-ball e Soft-ball

Faderacao Paranaense de Base-ball e Soft-  
ball

伯国体育連盟

野球担当理事 西 功

監修 FEDERACAO PAULISTA DE BASE-BALL E SOFT-BALL

聖州野球連盟

印刷 尼崎印刷株式会社

兵庫県尼崎市北大物町25

発行日 1985年9月18日